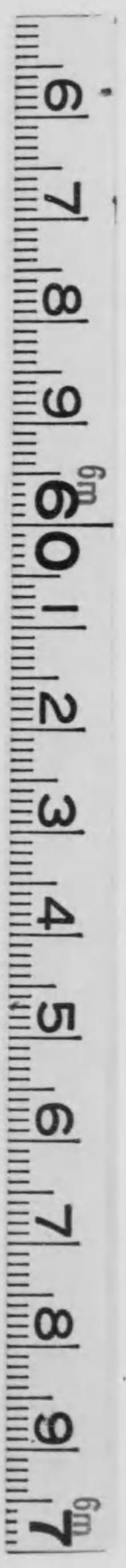


31
598



始



31-598



生田長江
加藤朝鳥
森田草平
共編

新文
學辭典

(附) 藝術家人名辭典

東京 新潮社藏版

大正
7. 3. 29
内交

序

文藝思潮の方面には常に新しい提唱が起つて止まない。日に新にして、新又新を追ふてやまないのが新人無窮の欲求である。此の辭書には最近四五十年間ひろく世界の文藝思潮に波紋を點じた思潮の標目を網羅することを努めた。だがもとより簡単な一小辭典である。完璧は期し難いが一冊を座右にして新潮の自らにして漣寄し來たるを覺えしめむことを希つて居る。一般辭書の客觀的なるに比較するときは、凡そ本辭書ほど主觀の氣が漲つて居るものはあるまい。一唱萬感相干繋して、一隅觸るれば全圓搖ぐ底の思潮の提題を、僅か數行のうちにもめやうとするのである。主觀的ならざらむとするも世にこれほど主觀的を強ひきたるものは無いではないか。

本辭書もと地方初學の人の爲めにとの婆心より出たもの、一面から見て、~~初~~初雅な外來語辭典の如き體をそなへて居るのはその爲めである。

朝・鳥・生・識

新文辭學字典

ア	一
カ	二
サ	三
タ	四
ナ	五
ハ	六
マ	七
ヤ	八
ラ	九
ワ	一〇
イ	一一
キ	一二
ク	一三
ケ	一四
コ	一五
カ	一六
サ	一七
タ	一八
ナ	一九
ハ	二〇
マ	二一
ヤ	二二
ラ	二三
ワ	二四
イ	二五
キ	二六
ク	二七
ケ	二八
コ	二九
カ	三〇
サ	三一
タ	三二
ナ	三三
ハ	三四
マ	三五
ヤ	三六
ラ	三七
ワ	三八
イ	三九
キ	四〇
ク	四一
ケ	四二
コ	四三
カ	四四
サ	四五
タ	四六
ナ	四七
ハ	四八
マ	四九
ヤ	五〇
ラ	五一
ワ	五二
イ	五三
キ	五四
ク	五五
ケ	五六
コ	五七
カ	五八
サ	五九
タ	六〇
ナ	六一
ハ	六二
マ	六三
ヤ	六四
ラ	六五
ワ	六六
イ	六七
キ	六八
ク	六九
ケ	七〇
コ	七一
カ	七二
サ	七三
タ	七四
ナ	七五
ハ	七六
マ	七七
ヤ	七八
ラ	七九
ワ	八〇
イ	八一
キ	八二
ク	八三
ケ	八四
コ	八五
カ	八六
サ	八七
タ	八八
ナ	八九
ハ	九〇
マ	九一
ヤ	九二
ラ	九三
ワ	九四
イ	九五
キ	九六
ク	九七
ケ	九八
コ	九九
カ	一〇〇

新文學辭典

ア

アーサー [Arthur] 傳奇的に有名なる、昔のブリテン民族の王。今尙死せずして山嶺に横はり時機を待ちて再び世に出で、人民を支配すべしとの傳説を始め此に關する物語・詩歌の類極めて多し。アーサー王物語は英國の最大古典となされて居る。

アーティスト [Artist] 藝術家、美術家。狹義には畫家と譯す。所謂技術に非ず。技術家はアーティスト Artisan と云ふ。

アーティフィシアル [Artificial] 人爲的、若くは人工的と譯す。自然的の反對、即ち自然の儘、ありの儘にあらずして、人の智と力とを以て自然の有様に變化を與へたるさまをいふ。

アート [Art] 藝術又は技巧と譯す。各其項を見よ。

アートのタイプ [Artotype] 寫眞版印刷の一種。濃淡色澤等寫眞に酷似し、美術印刷に適す。

アーティ

アート・フォア・アート [Art for art's sake] 「藝術の爲めの藝術」と譯す。藝術は夫れ自身に獨立せり、即ち藝術は藝術其物の爲に存するものにして、人生の爲に存するものに非すと云ふ説。(「人生の爲の藝術」の對)。藝術至上主義・唯美主義・就美主義等は此派に屬す。

アイアンバス [Iambus] 前短後長音格、前抑後揚音格の詩形。

アイオニア範 [Ionic order] キリシヤ建築三範の一。アゼンヌ全盛時代から約一世紀を経てマセドニアに征服せらるゝ頃まで用ゐられたものでトリアン範に比すれば優美輕快である此範の好模範はアゼンヌに於けるエレキテム殿堂 (The Erechtheum at Athens) である。

愛國詩 國を愛する歌で、叙情詩中に數へらる佛のメランシエや英のキヤムメルなどは殆ど之を専門に作つた。

アイコノクラズム [Iconoclasm] または Breaking images] 即ち偶像破壊、偶像とは木や土や石でこしらへた像で、何の靈も籠つて

ぬないものだ。夫を昔の人は崇拜してゐた。夫と同じやうに、實は何の權威もないものを、權威として昔の人は崇拜してゐた。近代、科學が盛になると共に、又人々の自覺が強くなると共に、その偶像崇拜の馬鹿々々しいといふ事がわかつて来た。而して從來思想や生活を支配してゐた偶像を破壊して了つた。宗教の上にも哲學の上にも、此偶像破壊は盛に行はれた。こゝで偶像といふのは、コンヴェンションの上から無意味に崇拜してゐた權威といふ意味である。

愛し得ざる悲哀

萬腔の心をあげて愛し得ざるればそれで満足なのだ。近代個人主義思潮の眼ざめは現實的にそれをゆるさぬ。近代主義者は必ず此の悲哀を経験するものとされて居る。稲毛詛風氏之れについて論ずることあり。

アイダ[Aida]

エジプトの副王(ケツイブ)よりの囁きによりカイロのオペラ劇場の爲に其の國の事に材をとつて特に新作したもので一八七一年初めてカイロで演奏された。曲本は元さる有名なエジプト學者の手記に基いてカミール・ド・ロークル(Camille de Roquer)がフランスの韻語で書いたものを後にギスランツォン(Signor Ghislanzoni)がイタリア語に譯した。此の作

はエルデイが作曲の工夫の上に一大轉歩を示したものでイタリアオペラの因襲的形式を脱して著しくワグネルの感化を傳へ殊に全曲の取材感想全くエジプトを離れず音樂の上に巧みに東洋的なローカルカラアを發揮したことは作曲者の大なる手柄である。到る處に清新な寫眞の工夫を試みてゐる事や種々の點に於て「アイダ」の一曲は作者エルデイの天才を最も好く代表するもの。

アイデアリズム[Idealism]

理想主義と譯す。

アイデアル[Ideal]

理想と譯す。

愛の説 ダゴールの愛の説はヘルグソンの直觀の説に似通うてゐる。林檎が木から落ちる、雨が空から降る。これ等の無數の事實、無限の事實も、一つの重力の法則によつて把握し得る。事實は多いが眞理は一つだ。この一つを發見する事により我等は凡てを所有し得る。眞理は我を無限に導く。眞理は總ての事實を含むが、單なる事實の集合ではない、それは事實を超越して無限の實在を指す。この事は知識界に於ての如く、意識界に於ても然りだ。我等はあらゆる意識界の事實を統一する意識界の眞理、あら

ゆる意識を含み、而して意識を超越して無限の實在に越くところの中心眞理を悟らねばならない、中心眞理とは？「ウパニシャッド」に「汝自身の靈魂を知れ」とあるその汝自身の靈魂だ。而して、その汝自身の靈魂、梵と相抱くところの靈魂、宇宙の大靈と融合するところの靈魂は唯愛によつてのみ知られる。知識界の事實は理解によつて知られる。知識といひ理解と云ふ、いづれも部分的だ。意識は全體的である、愛の關係は全體的關係である。理解はよるこびである。愛は更に大なる喜びでなければならぬ——斯うタゴールは説く。タゴールの愛は、ヘルグソンの所謂直觀と相通ふものでは無いか。(大村泰純)

愛欲

愛する、とを昔は道德の様に説いたのであるが最近になつては愛はたゞ食欲などと同じく人間の欲であつて必然の要求であるとする様になつた。バーナードショウなども大に之れを説く。

感情移入説[Empirung]

吾々が地平線上に一つの山が高く聳つて居ると感じたとき假定する。そしてその場合山が高くそば立つてゐると

いふ觀念は、吾々に、常に人生の種々の向上的連想を喚起すると假定する。この場合山が高くそびへてゐるといふことがいかにして吾々の感情であつて同時に山そのもの、特質となるのであるが、これは外でもない。吾々は、山の如き高い物體を統覺する場合に、吾々は、吾々の眼をあげ、頭や頸を上に向けなければならぬ。當然の結果として、吾々は高く昂るといふことの努力感を自身に感じ、同時にこの高昂の感情は、種々の連想作用を喚起して、吾々は遂に統覺の對象となつた山といふ物象にも、その統覺作用そのもの、同じ特質を與へるやうになるのである。つまり、吾々が常に當の物體殊に線、形等から出來上つてゐる物體を觀照する場合、その線乃至形體の特殊の形式に連關して、同じ形式の肉體的緊張乃至衝動を経験する。そしてかくの如き經驗はとりも直さず、吾々が、それらの對象形式を認識する場合の、吾々の身心の活動に待つより外はない。従つて、以上の意を換言すれば、吾々が當の對象に連結する形式の法則は、徹頭徹尾、吾々自身の身心の活動に依るものであり、そしてそれら身心の活動である。その場合の吾々の感情及連想は、吾々に恰かも、對象そのものゝ感情、乃至は具體化された感情

としての対象といふ如き感を與へるものであると。(本間久雄)

擧揚 [Aufheben] 吾々が自己の生活、人格の一部を否定するのは、永久に其を全部から切斷することでも排除することでもない。其部分が全體の統一を害するが故に暫らく保留することに外ならない。新要素の加はつた更に復雜となつた全體の一部として其部分を生かす爲めの否定に外ならない。凡べての否定は肯定の爲めの否定であり、生命人格の完全なる統一態に達する爲の永遠の連續を有する否定であるが故に否定にはヘーゲルの所謂「擧揚」なる意味が伴ふ筈である。(石坂養平)

青い塔 瑞典の批評家オスカア・レフエルチンは、伊太利の諺を以てストリンドベルグが一切の面目を總括して「押身靈、揮身膽汁、揮身火」と云つた。此の靈と膽汁と火との結晶とも云ふべき彼が、永い間其の故國と國人とに背いて大陸の諸國を放浪して、最後に瑞典に歸つて、首都ストックホルムに定住した家を彼は自ら稱して「青い塔」と呼んだ。生活の上からも、精神的に云つても彼は此の「青い塔」に行きついてから始めて其處に落ち着くことを得て、而してそこで

死んだ。此の「青い塔」まで達した時には、大におちついて來た。生涯の思想を統一して、其の總括りをしたものとして見るべきは、千九百七年其處で書かれた「青い本」"Das Blaue Buch" (英譯 "Zones of the Spirit")である。彼が青年時代の悲慘なる煩悶苦惱を描いた自叙小説の一なる「赤い室」に對して、「青い本」は、その書名が示すが如く、赤と青とのコントラストを示して居る。「青い本」には、あらゆる苦痛、困迷を経て、それらからすつかり淨化せられた大思想家の清々とした、すがすがしい心境を覗うことが出来る。

青い鳥 「青い鳥」はベルギーの作家メテリリシクの名である。即ち一九〇八年に書いた童話劇で、一八一一年、ノーベル賞金を贈られたるも此の作に據るところが多かつたといふ。此の童話劇の内容を云へば、幼い兄妹が夢の間に光明に伴はれて、夜の宮殿、思ひ出の國、幸福の宮殿、未來の王國と幸福の象徴である青い鳥を探して歩くといふので、彼の作品中、おそらく斯くも巧に科學的觀察と、詩人の夢幻術を混和させて描いたものはないと云はれて居る。眞に空想と劇場と看客とを一時に掌握する天才

の作である。

青い花 [Die blaue Blume] 十九世紀頃の獨逸ロマンチック派詩人ノワリスは最高の存在と最高の戀愛とを青い花に擬へて崇仰した。かゝる譬喩や象徴を除いてもロマンチック派は植物界をあくまで人間界に擬へてゐる。即ち植物は人間の如くもの言ひ、思ひ、夢み、感じ、戀することが出来る。ロマンチック派の詩人が森の中に入ると、樹は緑の手を差し出し、異形の頭を揮動かし愛を帯びた柳は緑色の長い腕を差しのばす杉の黒髪は風に吹かれてさらさらくと鳴り花は唇を開いて笑ひ、美しい眼をしばた、く、やがて不思議な話が始まる古い木は何事か呟き遅しい解は吠え、或は嚴かな聲で話をすると若い木立は耳を澄まして一心に聴いてゐる。河邊の蘆は低い聲で齒ざしりをし、花の或るものは竊笑をし、或るものは歌をうたつてゐる。化粧をしてゐる鬱金香の花は尊大なやうな卑下するやうな一種奇妙な態で挨拶をし、神經衰弱に罹つてゐる百合の花は哀れにやさしく黙頭き酔ふて顔を紅くしてゐる薔薇の花は早くも遠方から詩人を見て笑ひ夜菫は悲しげに溜息をついてゐる。(片山孤村)

尙ほブランドスの説くところは次のことし。

『青い花 Die blaue Blume』と云ふ名稱は勿論文字通りに理解されてはならない。青い花は神秘的象徴である。一つの略符であり一つの短縮された壓搾された言葉である其の中には渴えたる心情のあこがれの對象たる一切の無限なるものが包括されてゐる。完全なる満足或は全心靈に充滿する幸福の表徴である。かくして青い花はそれが發見されないうちから吾等の眼にはのめいてゐる。かくして吾等はそれを認めないうちからそれを夢想してゐる。斯くしてそれは此處にあるかと思へば彼處へある。斯くして吾等は常に欺かれる。それは他の花のあはひに句つてゐるかと思へば一瞬間の後には最早そこから消え失せてゐる。さばれその芳香は常に吾等の鼻を打つ。ある時は強烈にある時は幽かに、斯くて吾等は其の匂ひに酔はされる。斯くの如くそれを求める人は胡蝶の如く花より花へ飛び行き或は葦の花のもとに或は熱帯の植物の上に止るのであるが、要するに彼は一つのもの、即ち完全なる理想的なる幸福を追求し憧憬してゐるのである。■植物教を見よ。

アカデミー [Academy] 古昔希臘の哲學者

プラトンが子弟を教へしアゼンス府内の遊園の所有者アカデマスの名に因みて、後世西洋諸國にて、高等なる學校又は學士會院等の稱に用ふるアカデミーガクハ【Academy學派】プラトンの學說を繼承し又は繼承すと稱する學位の稱。

アカデミー式建築

ルイ十六世の初めに至り一七六〇年頃から起つた反動が即ちアカデミー式の復活である之を帝國式といふのはナポレオン一世時に至つて其の頂點に達したからであるが實は不適當な言葉である其の特質は如何にもキチンとしてゐるが創意とか情操とかいふものは少しもない。

アガメムノン【Agamemnon】

希臘神話にミセネーの國王にして智勇に富む。トロイ戦争にギリシア聯合軍の總大將たりしが凱旋の後、其妻と姦夫アキレスとの陰謀に死す。ホーマーのイリヤッド詩篇はこの確執を題材とせるものなり。

アゲノスチシズム【Agnosticism】不可知論

神とか未來とかは勿論信ぜないがさりとか否定もせぬといふ不可知不可解説、即ち不可知論がある一派の人々の間に唱へられた。此の語は

ハクスレイが聖書の使徒行傳第十七章、二十三節「知られざる神」といふ語から思ひ付いたのである。

惡の華【Les Fleurs du Mal】

ボドレールは浪漫主義者の最後の人で又神秘象徴派の始祖である、先づエルレイスを始め佛蘭西はいふまでもなく現代のエルハレン等に至る迄歐洲の近代詩人にして直接或は間接に、彼の流を汲まなものは殆ど一人もないのである。彼の詩集「惡の華」には彼が「こゝろに不健全にして醜穢な方面に詩美を求めたおどか至る處に見えぬ」(恐怖の美の部参照)

惡魔主義【Diabolism】

フニヤンの言葉を藉りて言へばスウインバーンは「高級變質者」にしてロセツテイはソリエーの所謂「精神虛弱者」(Infecile)の中に數へらるべきものなり、スウインバーンはロセツテイの如くに感情的にあらす然れども彼は其精神上に於てはロセツテイよりも遙かに高級に位せり。彼の思想は眞ならず且屢々囁語に類すれども兎も角も彼は思想を有し其思想は明瞭にして互に聯絡せり彼は神秘的なれども而も其の神秘的傾向は宗教的なるよりも寧ろ敗徳者犯罪者の傾向を帶ぶ。彼は英國

憧憬の對象

佛蘭西の浪漫主義は明確なる形像を作り出してゐるが獨逸の浪漫主義の理想は形像ではなくして旋律である。一定の形式ではなくして無限の憧憬である。而して獨逸の浪漫派がその憧憬の對象に命名すべく強められる時は「アインゲハイムスワルト」(青い花)「森林静寂の唯一の深秘な言葉」「青い花」「森林静寂のザイハカイト」の如き言葉を選ぶに過ぎない。尤もこれらの名稱は精調の表現である。而して各々の情調はそれに相應する一定の心理的狀態を持つてゐる。(ランデス)

アジャクス【Ajax】

希臘神話に、トロイ戦争の勇士の一人。アキレスの死後ユリシスと其冑を争ひて得ず憤りて自殺し其血迸りて紫の花を生じ其葉面にアジャクスの名頭にて兼れて希臘人が歎息の聲なる「ア」の二字を衣はせりと傳ふ。

母音合せ【Assonance】

韻法の部参照
あそび 森嶋外氏が自己の文學上の立ち場を自ら云つたもの、夏目漱石氏の低徊趣味、などと同じく、自然主義のセツパ詰つた人生觀に對して反動的にとまへられたもの生田長江氏曰く

アダム【Adam】

アダムは赤土の義。ユダヤ神話に於ける人類の祖先。其妻イブとエデンの樂園に住む。

新しい女

「新しい女」に成るといふことは、女の有らゆる屬性を擺脫して、男に成る。いや、何でも女でもない中性に成るのだと云ふ風に考へられたことも有つた。これは從來女の屬性として考へられて居たものが、多くは女の本然から出發しないで、男に依つて強ひられたもの、強制的に馴致せられたもので有つたために、それに反抗して立つと云ふことが、即ち有らゆる女の屬性を抛つ、振落すことに有ると考へられるやうに成つたので有らう。例へば、「女らしい女」の屬性として、所謂男に都合の好い「自己犠牲性」を女に迫つたとする。そして、それを拒ん

だ時、其女は最早『女らしい女』でないとして排斥するが如きは、明かに誤まれる思想で有る。が、左様いふもの以外に、なほ女性の本来から出た女の自分、『若い女』が『新しい女』に成つても消滅する患いのない女の自分が有るべき筈で有る。で、それは何だ？ 自分は今早速それに答へることが出来ない。が、只かう云ふ事だけは解つて居る。それは他から強ひられ、若しくは教へられたものでは不可ない、當然女自ら考ふべきもので有る、發明すべきもので有る。『新しい女』に成ると云ふことは、女が男に成ると云ふことではない、矢張文字通りに『新しい女』に成ることである。それと共に、『若い女』といふ類型を脱しながら、更に『新しい女』といふ類型に墮することではないことは言ふ迄も有るまい。そんな事は個性を有する『新しい女』の斷じて耐え得ることではなからう。事實として、既に『新しい女』目醒めた女』自覺した女』の類型は生じつゝ有るかの如くで有る。(森田草平)

新しやShiver (身震ひ) 佛國作家は常に New Shiver を追及して居る。だが、米の批評家ウヰンチエスターは之れを以つて佛國小説壇の失敗原因に數へ『かるゝものを渴望すること

は長くは續くまい。病的にして活氣のない情緒は決して大文學の特長たることは出来ぬ」と云つて居る。

アタランタ [Atalanta] 希臘神話に於けるアルカザヤ王イアシウスの女。容姿美なるもヘナスの神の宣託を畏み、男を避けて狩獵を事とし、カリドンの卷狩に於て巨猪を射殺す。求婚者ある毎に、競走に於て予に勝ちし者なれば諾せんといふ。ミラニオン謀りて競走の途に三個の黄金製の林檎を落し、アタランタ之を拾ふ間に勝ちて遂に妻とせしむ。二人新婚の快樂に耽りて神に奉仕を怠り、神の怒に觸れて牡牝一對の獅子に化せしといふ。この譯はスインバーンが長詩の題材たり。

アツシリヤ式 起源は下カルデア地方に在つて其年代は紀元前三〇〇年頃と大體推定され其重なる特色は迫持(arch)の發明及び材料として煉瓦を重に用ひてゐることである且つアツシリヤ國民の好戰殘虐を代表すべく大等の建築は城塞的性質を帯び裝飾的浮彫にも戰爭の紀念を描くものが多い全體の構造からいふと當時の重要な建築は凡て高き地壇上に作られ階段に依つて之に登る其面は東西南北に向ひ周圍には堅固

なる壁を繞らし入口は人面獸身の巨像あり壇上に殿堂あり其屋上には露臺を設けて天體の觀測をする。之が爲めに壇の各階は各天體に相應する色彩にて塗らるゝ事ありパピロン府に近きピルス、ニムロッドの宮殿の如き是である。(パペルの塔と想像せられるもの)

アツシンの聖者 セント・フランシスの事、フランシスは一八二二年に伊太利のアツシンの町の富める織物商の長子として生れた。温順で慈悲深く、而して樂しく當時を送つたが、三十二歳の時熱病にかゝつてから神を信するやうになつて宗教的使命を信じ、父の怒をうけて只管神のみの奴となつた、聖フランシスの名をうるに至つた。

アテネ [Athene] 希臘の一都市。古代藝術の榮えたる所、古典主義の藝術の本源地なり。

アテネ [Athene] 希臘神話に、ゼウスの頭部より甲冑を著け凱歌を奏しつゝ躍り出でたりと傳ふる女神。知識・戰略・農工の事を掌り殊に紡織の業を能くす。アゼンス市の守護神として市民の歸依を受く。一にペラスとも、又、羅馬名にてミネルバとも云ふ。

アドニス [Adonis] 希臘神話中の美男。愛の

神ペナスニ愛せられしが其誠めを肯かず、終に野猪の牙に懸りて死す。神これを悲み傷口より流るゝ血に神酒を注げば、血化して紅色の花となる。風吹きて開き、風吹きて散るを以てアネモネ(風の花の意)と名づく。

アトミズム [Atomism] 原子説、個立主義

アトモスフィア [Atmosphere] 雰圍氣フンと譯す、氣分、情調など云ふと同義。

アトラクト [Attract] ひきつけること、誘惑すること。

アトラス [Atlas] 希臘神話中の巨人。天柱を双肩に擔ふ。モリータニヤの王となり神に對して挑戰し、神罰によりてアトラス山脈に化せりといふ。すべて重き荷物を荷へるものを云ふ。大甲蟲に此の名あり。

アトリエ [Atelier] 畫室を意味する佛蘭西語。工場と云ふ意にも用ゐらる。

アドレッセンス [Adolescence] 青春時代。

アナキズム [Anarchism] 無政府主義。

アナクロニズム [Anachronism] 時代錯誤と譯す。

アナテマ [Anathema] 露國の神秘的象徴主

義の藝術家であるアンドレーエフの戯曲である
悪魔アナマはキリストの象徴である主人公ダ
グ井ツド・レイセルを自由自在に翻弄して平々
凡々たる一個の人間として了ふ筋と描いた—
深刻、凄絶である。

アニマリズム [Animalism] 獸慾主義

アヒレス [Achilles] 希臘神話に、トロイ戰
争希臘方第一の勇士。總大将アガメムノンと美
女を争ひ怒りて出陣せざりしが、親友ヘフィス
タスが敵將ヘクトルに殺さるゝに及び出で、戰
て之を瘡す。後パリスにて踵を傷つけられて死
す。

アブサント [Absinthe] 強烈な酒である。

此の酒を飲めば一種特別なハルシネーションを
起させるので名高い。佛蘭西の軍隊では飲用を
嚴禁してあるほどである。緑色の強烈なる酒。
佛國アカタン派の詩人等盛に之を飲みしとい
ふ。佛蘭西の頌詩人ベルレイン之れを飲んで
人生を陶醉す。五色の酒の一つ。
自己放擲 自暴自棄と同義である。だが之れを
天才的に解すれば、天才に硬派と軟派とあつて
硬派はベトメンの様に自己に何處までも執着す

るが軟派はミケル・アンジエロの様の自己の天
才の奔放のあまりにはがしき爲めに逆に自己の
天才に驅使されてしまふ。Abdication
アブノーマル [Abnormal] 普通・尋常にあ
らざる義にて、病的又は變則などと譯す。

油繪 [Oil-Painting] 亞麻仁油を混和したる顔
料にて畫布又は板上に描きたる繪畫。今日西洋
畫の主位を占むるものにして、其優處は明暗の
廣大なる變化を表し得ること、種々描法の困難
に束縛せらるゝ場合少きこと、大作小作何れに
も適し且耐久力を有すること等なり。

アプリーシエート [Appreciate] 鑑賞するこ
と、味にすること。

アフロジテ [Aphrodite] 希臘神話のセウ
大神の女にて、戀愛及び女人の美を司る女神。
迫られて醜惡なるバルカン神の妻となりしが神
にも人にも幾多の情郎あり。鳩・燕・白鳥等は其
使者なりといふ。彫像には多く其子イロスを伴
ふ。羅馬名はヴェニス。英語にてはグイーナス。
アポロ [Apollo] 希臘神話中の主なる神の名。
太陽の神としては金車眩く大空を驅り又眞と美
とを現して精神の光明となり、詩歌・音楽の神と
しては詩人の保護者ミューズ神の歌唱の指揮者

たり、豫言の神としてはデルフアイの神殿に鎮
座して、其神託は希臘人信仰の中心なり。鳩・鴉
鷹・狼等は其使者なりといふ。

アポロ的 [Apollonisch] 悲劇の發生を見よ。

アマゾン [Amazons] 女壯士。—希臘神話

中の女族の名。コーカサス近傍に住みて性甚だ
勇武、女王統率の下に出で、四方を剽略し、又
毎年一回隣國なるガリガリヤの男族と交り、男
子生まるれば之を殺し或はガリガリヤに遣し、
女子のみは止めて右の乳房を截り取り、弓矢の
使用に便するの俗ありしといふ。

アマチユア [Amateur] 素人藝術家(専門なら
ざる藝術家)、又は好事者など、譯す。

アラチンのランプ [Aladdin's Lamp] ア
ラビアンナイトに出て来る魔法のランプで、ア
ラチンは此の魔術ランプの徳によつて大宮殿を
建てたが、後ランプを錆びかしてしまつたので
一切が駄目になつた。すべて幸福の無盡蔵に湧
き出づる源を云ふ。

アラブスケ [Arabesque] あらびや風のかざ
り。唐艸模様。

アリストートルが悲劇に對する要求

アホ アル

[Aristotle's requirement for tragedy] は
悲劇は必ず悲哀と恐怖とを以つて感情を洗ひ清
むるものでなくてはならぬと云ふことである。

アルカチアン [Arcadian] 桃源郷、仙郷、
昔ギリシヤにあつた極樂地。仙客、田園趣味の
人。

アルカナム [Arcanum] 蘊奥、奧密、奧秘

アルゴノー [Argonaut] 希臘神話に、ヤ
ソンに従ひて金羊毛奪還に赴きし一行の名。其
乗船の名によりて名づく Apollonians of Rhod-
desが之の物語を題材にして史詩を書いて居る。

アルセスチス [Alcestis] 希臘神話中のセツ
サリー王の妻の名。其夫アドメタスに代りて冥
途に赴くこととなり、死神戸口に迫りしも勇士
ヘラクレス之を追ひ退けしより、再び現世の人
となる。ユーリピデスの戯曲アルセスチスは其
貞操を頌せるものなり。

アルテミス [Artemis] 希臘神話中の獵神。
アポロの妹にして、或は月神セレオと混同せら
る。羅馬にてはダイアナといひ全く月神として
尊崇せらる。

アルツルイスム [Altruism] 愛他主義又は
利他主義とも云ふ。自己の幸福、利益は他人の

幸福利盛のなかに見出さず得べしと云ふ説、コン
ト等先づ之れを唱ふ。(エウイヅムの對)

アルファ・オメガ [Alpha and Omega]

聖書に神がわれは、始なり終なりと云つてあるが如く「始と終」の意味——最近の新浪漫派的傾向に至つては即ち此現實的な自然主義がまた其本流たる情緒主觀に向つて復歸せんとするものと見てよからう。要するに情緒主觀は文藝のアルファ・オメガであつて、これ以外の現智とか科學とか經驗とかいふものに支配された文藝は、寧ろ一時的なる變態の現象と見なすべきものでそれは到底いつも永續さばしない。

あれか、これか [Either-or]

ソレン・キェーケガルド (Soren Kierkegaard) テンヤルクの詩人的哲學者一八一三—一八五五)の哲學の主要點は矢張スチルナーなと、同じく人間生活に關するあらゆる抽象的固定觀念に對して極力否定的な態度に出るところから始まる。從來の哲學者や宗教家が人生を以て一つの確然たる體系の下に置き之が普通の統一乃至調和を計らうとした事に對して、彼は先づ極力反抗の刃を向けた。そして人生の事實は決してある抽象的

觀念を以て統一の出来るものでもなければ調和の出来るものでもなく、現前始實の紛糾錯雜が人生其のもの、如何ともしがたい實相と觀た。隨て彼は又人生や宇宙を一貫する理法など、云ふものゝ存在を極力否定した、彼の所謂「あれか、これか」の主張はそこから出て來るのである。即ち人生の事實は凡て一貫した理法の下に合理的に整頓されるものでなくして、此の我が紛糾せる生活に面して「あれか」然らずんば「これか」と選び進むところに始めて生活の道が開けるのである。これを自他の關係について見ると、他の爲めと自分の爲めとを觀和統一する理法など云ふものゝあると思ふのは淺薄な空想で、その何れかを徹底的に押し進める事その事の外には道がないのである。そして其の一を選ぶ方法は古い、冒險的飛躍である。理窟でなくして直覺的飛躍が人生の徹底境である。そこから始めて我みづからの生活の天地が開けるのであるとこれが即ちキェールチがアルドの Either or であつた。(相馬御風)

アレゴリー [Allegory]

寓話又は寓意。比喻

アレクサンドリン [Alexandrine]

自由詩といふことは米國の詩人ホイットマン Whitman

の韻も何もない詩、即ち unrhymed, loose rhythmic prose の及ぼした影響が非常に著るし、このので獨り佛蘭西のみならず獨逸の Holz schlof それから paul Ernst などの諸詩人も皆其感化を受けて同じ試みをやつてゐる。

たゞ、最近に至つてはまた此反動が現れて却つて古典風の詩形が用ゐられるに至つた。たとへば白耳義のエルアレンなども以前は勿論この自由詩をやつてゐた人であるが、その最近の詩集『至上律』 Les rythmens Souverains に至つてまた正式な Alexandrine 即ち十二綴音詩の古格に近い詩形を用ゐてゐる。(厨川白村)

暗黒時代 [Darkage]

世態の混亂せる時代。文物・道徳の墮落腐敗せる時代。罪惡または戦争の多き時代。特に、西洋にては、西暦四百七十六年西羅馬帝國滅亡後より十一世紀迄の稱。

暗示 [Suggestion]

俗に云ふほのめかすこと。理由又は意味を明かに擧げず、容貌・舉動其他によりて遠廻しにほのめかし、他人の思想上に何等かの注意を喚び起さしめ、夫となく領かしむること。

暗示と象徴

アン

象徴主義は全く暗示 Suggestion

を以て根本とし生命とする藝術である。暗示とは十のものを三だけ言つてあとの七を讀者の感するに任せるのだ。讀者は自分の鋭敏な感受性を働かして恰もなれば創作するが如き態度で此の種の作に對しなければならぬ。(厨川白村)

アンソロポモルフィズム [Anthropomor phism]

神又は自然力が人間の如き形状性行を有すと做す説、即ち神人同形同性説——つまり現實感のあまり盛なるが爲めに宗教的生活に對する人々の深い要求が無くなつて其の結果はやがて宗教を一種の幻覺と見、アンソロポモルフィズムに過ぎないと觀するに至つた。

アンダアマン (没人)

フランシス・グリーヤス erman の生活を説いて居る。彼は「超人」なるものは智力と直覺との結合したものと見てゐる。従つて超人には意識したる組織立つたる哲學がある。成形の藝術がある。其の説くことにはモオラル、シグニフィカンスがある。人間的な點がある。而して其の超人の持つてゐるユウモアは元的で自我的で、皮肉で諷刺的で、時には冷笑的であると見てゐる。然るに彼の説く Under man は意識した組織立つた哲學を持つてゐな

い。成形藝術を持つて居ない。所謂學問に囚へられず、智力の拘束をうけず、通俗道德の原則に支配せられず、自然性と單純性とを生命としてゐる。言ひ換へれば、本然生活、本能の生活をしてゐる。本能とそしてその本能の一層純化せられたる直覺の生活——人間の活力全體が最も均一したる状態に於て閃めき出づる直覺の生活をしてゐる。(吉江孤雁)

アンダライン [Under-line] 書中の肝要なる個所に注意の爲め、横文なれば下、縦文なれば傍に線をひくこと。

アンチオネ [Antigone] 希臘神話中の高潔なる烈女の名。其父なるエデポス王位を逐はれて盲目となるや、助けて共に漂泊し、次で兄ポリネセスのシープスの王位を争ひ、闘ひ死して葬られざるを歎き、禁を犯して埋葬し生埋の刑に處せらる。ソフォクレスこれを脚色せし劇あり、アンチゴネといふ。

アンチクライマックス [Anti Climax] (英)西洋の修辭學にはクライマックスに對してアンチ、クライマックスといふものあり。即ち漸層法の順序を倒にして強きものを初に置き、又は大なるものを初めにおき、次第に弱きもの

又は小なるものに降つて來る方法なり。例へば「天も酔へり、山も酔へり、客と我れも又酔へり」などの類なり。

アンニユイ [Annui] (退屈) 人は其の人の周圍の状況によつて或は厭世悲觀となり、或は宇宙人生すべてに對する恐怖となる。平生困憊倦怠と云つたやうなアンニユイの心持になやみ、人の影さへ見れば同じやうな愚痴ばかり並べる萬事に觸れて自己を淺間しく思ふ。これは文明より來る一種の病的特徴である。

暗面描寫 [Description on dark-side] 人生の暗黒面に起れる悲惨なる事實を描寫する事にて、自然主義文學の一特色なり。

イ・キ

イージー・ゴイング [Easy going]

英語本來の意味とは異りて用ひらる。即ち處世上に於て一時をこまかしてなりとも、困難なる事は避け安樂なる道を行かんとする態度。

イーバークルツル [Uberkultur] 獨逸語にて教養過度と云ふこと。

イグノランス [Ignorance] 無智又は愚昧等の義に譯す。

異國情調 [Exotic mood] 外國の目新き風物を作品の上に取り入れ、新氣分を起さしむること。

意志 [Will] 思慮し撰擇し決行する心の働きにして、知(解釋・判斷する働き)・情(感ずる働き)・意(行ひを促す働き)などと並び用ゐらるる語。

衣服哲學 [Sartar resartus] カアライルは「衣服哲學」の終に近い一章に自然なる超自然主義といふことを説いたが之は自然の事物中に伏在してゐる超自然または神祕を指したのである。自然派は明るい光の力で此幻影を追ひ拂つて、さて神祕もロマンスも消え失せたとひとたびは力むても見たがそれは畢竟また觀察が到らなかつたからだ實は此の白日の中に底氣味のわるい或物が潜んで常に吾等を威赫し壓迫してゐるのであると云つてゐる。(厨川白村)

意識 [Consciousness] 睡眠等の状態即ち無意識に對して、心の覺め居りて何事をなしたるあるかを自ら識れる状態をいふ。心的作用の一

切の稱にして、知覺・情意等即ち心の事實は意識の現象なり。

意志の不可抗的權力 [Ought to be Unw-erten] ニイチエは所謂厭世觀の奥底まで沈んで而して倒に樂世觀を取つて反撥し來たつた者

苦痛の極に達して正に反對の方向に反撥し來たつた者吾人は其の間に人類の微妙な精神活動の閃めきを認める。そは他にあらざる高義に所謂意志の不可抗的權力其のものである。本來意志は事物の抵抗を破つて進む所に其特質がある。(金子馬治)

意志薄弱 變質及びヒステリーは常に疲勞の犠牲なり従つて意志の力を缺く、或は全然缺如し或は低き度合に於て殘存す、意志の薄弱若しくは缺如は注意の不可能を來す。健全なる人間と雖も長時間に亘りて歩行したる後甚だしき疲勞を覺えたるときは注意を働かすこと不可能となるなり。變質及びヒステリーは慢性の疲勞なり従つて注意力の缺如は其の一の特徴なり。(マクソルドウ)

意志力 [Volitional power] 人間の肉體及び精神的の個性は全く此の周圍によつて造り出されたものだ。そして又之と同時に他方に於ては

生殖細胞の關係から遺傳といふ事があつて親から子へとその個性が傳つて行く。即ち人間は決して自己の Volitional power による事なくして、全く之等の extrinsic force に動かされて、必然的機械的に出来上つたものである。かのゾラが「實檢小説」論にいつた語を借りていふと「人間を決定し完成する周圍」といふものを寫し出すのが即ち自然派作家の任務である。(厨川白村)

イスメエル

舊約聖書上アブラハムの子。天下皆敵の孤立家、かくのことき氣質を Ishmaelism と云ふ。ニイチエ一流の誇大妄想狂的の個人主義者は多く是れだ。

イズリエルの槍 [Ithurieispear]

イズリエルは悪魔を探すべく下された天使で、槍を持つて居る。此の槍は一觸される時は必ず真相をあらわされる。

イソルデ [Isolde]

ホルンウオル國マルク王の王妃にて美人なりしが王の甥ツリスタンに道ならぬ熱愛を單めたる女。ツリスタンイソルデ物語として名高し。

伊太利の四聖

ダンテ・ペトラルカ・アリオスト・タッソの四人を云ふ。

別が認められて来る。この精神と物質との二大別を認めるのは、所謂二元である。すべての現象は、この精神と物質との二元が、互に相結合し、相綜錯するその結果として生じ来るのだとかう二元論は考へる。が、斯く二元を認める時は、二元の異なる所以を究めると共に、更にすすんで、兩者の生ずるところの最高原理を求めずには居られなくなる。はじめから斯く二元であるのか、但しは一方から一方を派生したのではないか、若し然りとすればどちらが本元であるか、即ち物質が本元で、それから精神が派生したのか、精神が本元でそれから物質が派生したのかその何れにせよ、何れかを本元なりとするのが一元論の考へ方である。古代ギリシヤの哲學者タアレスは水を以て萬物の元となした。これは、稍々一元論の體を備へたものであるが、しかし當時は思想の發達がなほ幼稚であつて未だ精神と物質とを別ちて論ずるまでには至つてゐなかつたのである。後にプラトンを経てアリストテレスに至り、精神と物質との兩者を對立して唱へ、而して、其精神を以て、すなはち唯心的の實在を以てその根本的な最高原理となした。こゝにはじめて一元論を見る。近世に至つ

異端 [Heathen]

自己の信する宗教以外の教義をいふ。儒教に於ては聖人の道にあらずして別に一端をなす楊子・墨子の如きをいひ、又釋氏の佛書を内典とし儒書を外典とし、佛道の外はすべて之を外道といふの類。

イチオシンクラーシイ [Idiosyncrasy]

精神の特性、性癖、天性の特殊傾向、特質。

一元論 [Monism]

宇宙の現象の本體は唯一なりとする哲學說にして、スピノザ之が開祖たり(二元論・多元論に對する稱)。

一元論とは哲學上の言葉で、萬有の本體を唯一であるとなし、この一元からすべての殊別が出て來ると爲す説、これを一元論といふのである。凡て知識といふものは経験を俟つてはじめて成立つものである。而して經驗とは、經驗の主たる「我」と、「我」に對する事物即ち經驗の對象とがあつてはじめて成立つ、換言すれば、經驗する自分と、經驗せらるる事物とがあつて經驗が出来るのである。物を見るといふことは、經驗といふものの一つの内容であるが、観る自分と観らるるものとがあつて物を見るといふ一つの經驗が出来る。この故に、自ら我と物、即ち内界と外界との區別が生じ、精神と物質との二大

て一元論となへたのはスピノザである。スピノザは神を以て唯一の實體となし、萬有みな此の神の一元より出づと説いてゐる。又、ヘーゲルが理性を以て最高原理なりとなし萬有の變化を一理性の發展となせるが如きも、一元論である。スピノザやヘーゲルは、根本原理を精神的の實在と見なしてゐる。かゝる一元論を唯心論と云ふ。これに反し、物質的の實在を以て根本原理なりとなす一派がある。唯物論といふ。一切の現象を唯物質の動きと見る。一切を物質と及びその運動との結果として見る自然主義的思想は、この唯物論である。唯心論も唯物論も、心即ち精神、物即ち物質のいづれかを以て最高原理となすところの一元論である。最近に至り唯心、唯物の二論共に萬有の變化を包括するに足らずとなし、最高の一勢力を認め、物心兩者は共に一勢力の兩方面に表現したるものに外ならぬと説く人が多い。最近の新哲學の唱道するところは、かくの如き一元論である。ベルグソンの如きもこれである。(昇曙夢)

一人稱

もと文法上の語なれど、近來小説等を書くに自己の經驗せる事、思へる事、感じたる事等を、主觀的に描寫するを一人稱の描き方と

ふぶ。

一切か無か イブセンの作中最も徹底的個人主義な生活を主張した作であるとせられた「ブランド」(一八六六)について見たらどうであらう。此の戯曲の主人公である牧師ブランドは、現在のキリスト教に反抗して強大なる意志の力を以て神の道を自己の生活に體現する宗教的生活を營もうとして、あらゆるものと戦ひ、自分の妻や子すらも甘んじて犠牲に供しつゝまつしぐらに自己の要求する道程を疾驅した。強大なる意志の権化である。ブランドは群集に向つて叫んだ、「眞實、私はお前等が、靈魂と眞理とを愛する神に多少とも仕へて居ると考へて居た時にはさう思つて居た。さうだ。私はお前等が、すこしでも神に繋がり得ると知つた居た時には然う思つて居たのだ。古い教會は小さいとして私は臆病であつたのだ——斯う考へて居た、二倍——それで充分だらう。五倍——ア！然うしなければならぬと、私は唯此の一事「一切か無か」が必要なのだと！私は唯此の一事「一切か無か」が必要なのだといふ事に氣が附かなかつた。私は妥協の道を踏み迷うてゐたのだ——併し今日神は語り給ふた。今は審判の怖ろしい喇

叭は家の上に鳴響いて居る——そして私は恐怖の旋風の中に耳を欲てゐる——私はサタンの前に立てるダビテのやうに打挫かれた——今やあらゆる疑は過ぎ去つた。人々よ、妥協の精神は悪魔である！と此の「妥協の精神は悪魔である」と云ひ、又は「一切か無か」(All or Nothing)と叫ぶブランドの心持、さては彼があらゆる人々に反抗し、あらゆる世上の因習を破壊し、あらゆる權威を斥けて、たゞ一層自我の強烈なる要求のまゝに越えがたいギャップを飛躍した彼の行き方は、矢張りかのキヤールケガアルドによつて主張せられた「これかあれか」の人生觀乃至はかの飛躍によらなければ此の生活からかの生活へ入る事が出来ないといふ考へと一致するところのものである。(相馬御風)

一足飛び [Spring 又は Jump] 十九世紀末のシヨマンソワ、ニイチェ、トルストイ等の諸家と脈を同じくしたデンマークの詩人的哲學者キヤールケガアルドによれば現代文明と眞の宗教的生活との間には無底のギャップ (Gap) 溝渠がある所詮は一足飛びの筆法で眞の宗教的生活に入るべきだと論じてゐる。(金子馬治)

一體兩面論 スピーノザ等の唱導せる、物質

と精神とは同一體の兩面にして、同一實在を内面より見れば心意にして、外面より見れば物質なりとの説。

イデオム [Idiom] 地方特有の言葉又種類の意味をなす句などの義にて、方言又は訛り等と譯す。尙ほ慣用語、慣用語などの意あり。

遺傳 イブセンの戯曲は好んで遺傳を用ふ。彼の人物が有する性格特徴、疾病は皆遺傳の賜物とせらる「人形の家」に於けるドクトル・ラングの憫むべき背骨は彼の父が軍隊に在りし頃の遊樂に就ての考へに對する刑罰たりしなりとせられヘルマーはノラに對つて家庭内に於て母又父か虚言を談ることが子供等に惡の種を吸ひ込ますべきことを語り又彼女が宗教も有せず道徳も有せず義務の觀念も有せざるは皆彼女の父よりの遺傳なりと説き聞かす。イブセンは遺傳に關するリユカー (Rucas) の書を読みて之を無批判的に信じたるなり。彼若しグイスマンを読み又ゴールトンを読みしならんには遺傳の徑路ほど不明にして捉へ難きものあらざることを知るならん。(マクスノルドウ)

イネアス [Aeneas] 希臘神話中の英雄の名。ヘクトルに次ぎて武勇の譽高し。父はアンキセ

ス、母はヘナス。トロイ戦争落城の時に助かりてエヒルス、シシリよりカルセウツに漂遊し其地の女王ゲトと契りて後之を捨て、ラチウム國王ラチヌス其女ラベニヤを與へて妻となさしめんとせしが、豫て此ラベニヤに言ひ寄れるタルツスに妨害せられしも、之と闘ひて勝ちラベニヤを妻とし、アルパロンかに王國を建て、幾許もなく其地の土兵と戦ひ傷死す。ビルツルの長詩エネードは其漂遊の物語を題材とせり。

イヴ [Eve] ユダヤ神話に於ける人類の始祖アダムの妻。イヴとは生命の義なり。イヴは惡魔サタンにそゝのかされて禁より禁せられし智慧の實を食ひしたためエデンの花園を追はれて人間世界に墮ち夫れ以來人間には種々苦みを生ぜしといふ。

イブセニズム [Ibsenism] 劇作家ヘンリツク、イブセンの作劇上の主義思想である。その一要素たる信條は絶対自由なる自我人格の高上完成と云ふことである。

イフィゼニヤ [Iphigenia] 希臘神話中のアガメムノン(前掲)の女。トロイ戦争に、希臘聯合軍の兵船アカリス港に艦装し將に發せんとする時其父出獵し誤つて月神ダイアナの愛獸たる

牡鹿を殺せしより、神怒りて悪疫を送り出陣を妨ぐるや、豫言者カルカスが父への勧めにより謝罪の犠牲として祭壇に上りしを、月神深く其志を憐み、雲に包みて伴ひ歸り尼として傍に侍せしむ。ユリヒピデス、ラシイヌ、ゲーテ等此の神を題材とせる劇多し。

イフヒゲニー イフヒゲニーは獨乙のゲーテの傑作の一つに數へらる。同氏傑作「フワウスト」は男子の最高理想を描寫され、「イフヒゲニー」は婦人の最高理想を描き出されたと云はる。イフヒゲニーは純潔無垢、靜平安樂、一切の弱點と欠乏とを離れたる女子を描寫されたり。

イマジネーション [Imagination] 想像、又は想像力と譯す。

イマジネーティブ [Imaginative] 想像的、虚想的と譯す。

イミテーション [Imitation] 他の眞似をすること、模倣と譯す。

移民文學 丁抹のゲオルグ・ブランデスが「十九世紀文學主潮」六巻の中の第一篇である。彼のルツツォに依つて鼓吹せられた佛蘭西移民文學を主としてウエルテルなどに説き及ぼして居る。

意譯 [Free translation] 翻譯の項を見よ。

イラショナル [Irrational] 不合理の、又愚妄の、と譯す。

イリュージョン [Illusion] 幻影。

イル・ペンセルソ [Il Penseroso] 沈思の人。(伊太利語)

イワノヴチ [Ivanovitch] 英國でジョン・ブルと云へば、お仁よしの好人物を云ふが如く露國の好人物をかく云ふ。

韻 [Rhyme] 文章の中に同一若しくは類似の音を句尾にて隨意又は一定の間隔毎に響きあはすもの。又、音の末尾のひびき。

漢字にては其韻の類似により、韻を百六(昔は二百七)に分ち各字其何れかに屬せしめ、其調によりて更にこれを平・上・去・入の四聲に分つ。平聲に屬するもの三十韻、上聲二十九韻、去聲三十韻、入聲十九韻なり。

因果 [Cause and effect] 原因と結果とを連結したる關係、即ち一が他に對して變化の基因となり一が他に對して變化の成果となる状態をいふ。

因果律 [Causality] 因果の法則、即ち原因・結果の關係に於ける自然の規定にして、一現象

起るには必ず其原因あり、又同じ原因よりは同じ結果を生じ、其關係は必然的に無限なりといふ法則。

因習 [Convention] ありきたりの習慣。

因習道德 [Conventional morality] 近頃道德が人々の本能的生活を羈束する力が薄くなり勢ひ人は昔から因習となつて傳へられた道德、即ち Conventional morality といふものに對して疑惑を抱くやうになつた。極端に云へば、近代に於ては本能的若くは自然的な生活と社會的生活との調和が一層むづかしくなつた結果として、人は遂に因習的道德の埒外に飛び出されれば自己の生存其のものすら危くされるかの如くに感ずる場合を生じたのである。

印象 [Impression] 現在又は直接に感覺又は知覺し感じ欲求する等の心の状態、即ち現在又は直接に見聞せる事が心にしるされ、又其しるされたものをいふ。記憶又は想像によりて再現せらるゝ觀念と異なる。例へば眼前に花を視るは印象にして、眼を閉じて再び之を思ひ浮ぶるは觀念なり。

印象主義 [Impressionism] 自然主義が純

客觀描寫、即心持を重んぜず唯事象其ものを有の儘に描かんとするに對して、純主觀描寫即ち自己の心持を主とし其心に印したる事象の影、換言すれば其印象のみを描く文學上の一主張をいふ。

印象的 [Impressive] 印象を與ふこと強く、又は印象深きといふ程の意。

印象統一 [Unit of impressions] ボオの論文「創作の哲理」のうちに詩が印象の統一から來る効果を收めんと欲せば長きに失すべからず約百行を以て適宜とすと云ふてある。此の意味は又短篇小説にもあてはまる、即ち長篇の小説からうける印象はまことに漠たるもので、部分的印象の方が明瞭に浮ぶが短篇の方であると鋭く強い印象を統一的に深く腦裏に印する事が出来る。

印象派自然主義 イギリスの外交官文學者ベアリング氏が第九版の「エンサイクロピデア」に「アラタニカ」に述べた所によると、自然派に二派あつて、一は印象派といふ、自然を説明するを目的とし、自然から受けた印象を以て自家の人格を現はす手段とする、他は本來自然主義といふ、絶対に客觀的なる現實を得るを目的と

する。ゴンクール兄弟の作は前者に屬し、ゾラ
モーパッサン等の作は後者に屬すると。(抱月)

印象批評 [Impressive criticism] 或作品を

批評するに、理由等によらずして只自己が其作
品より得たる感じ、即ち其作品の印象其儘によ
りてなす文藝批評の様式を云ふ。

インスピライヤ [Inspire] インスピレイショ

ンによりて人を感動せしむるといふ事。又、ひ
きつける、鼓吹する等の意にも用ふ。

インスピレーション [Inspiration] 神來、

又は靈感等と譯す。人の精神に神の靈を吹込ま
れたるかの如くに感ずる、普通の理論にては判
断し能はざる、靈妙なる力といふ程の意。

インタープレット [Interpret] 解釋する、

通釋すると譯す。

インダクション [Induction] 歸納、又歸納

法と譯す。其項を見よ。

インタレスト [Interest] 興味と譯す。

インタローゲーション・マーク [Interro-
gation mark] 文章の疑問の記號「?」。

インディヴィチュアリズム [Individualism]

個性主義と譯す。差別觀上の主義。

インディヴィチュアリティ [Individuality]

個性、又は個的存在と譯す。

インディヴィチュアル [Individual] 各自の

個々の、個性的と譯す。

インテレクチュアル [Intellectual] 知的、

理智的知力的と譯す。

印度教 古い印度民種は國はたとへ屬國であつ

ても歐洲の新思想は朝夕船とともに入つて來て
もそれに心酔せず、寧ろそれ等の新思想に太古
の印度思想を調和し、それを利用して印度太古
の文明を再現しようと務めて居る。だから文學
でも詩歌でも宗教でも時代々々に従つて新しい
形式を用ゐて、古い文明を飾り、花らしい光彩
を放たしめようとしてゐる。

基督教やユニテリア思想に相對し、之れに等し
い組織の下に印度教を表はして居る。新しい宗
教運動も初まつてゐる。かのブランマーシヤマ
シ (Brahma shamaji) や、アルツヤシヤマシ
(Araga shamaji) の如きは實にその好適例であ
る。自分が文學の師であつて、今我が國に來朝
中の大詩人ラビンドロナート・タゴールの如き

は詩人ではあるが、同時に新宗教運動として起

つたアラマンダヤンの一員である。(木村龍寛)

イントロダクション [Introduction] 緒言

緒論、總論。

インナー・ライフ [Inner life] 内的生活、

精神生活。

インノセント [Innocent] 無邪氣なる、罪

よき、潔白なる等と譯す。

インヴィタ・ミネルワ [Invita minerva]

ラテン語にてミネルワ神の意に反してと云ふこ
と、即ち神來の感興起らずして筆とる場合にな
ど用ふ。

インフルエンス [Influence] 感化、影響、

又は勢力などと譯す。

インプレッシヴ [Impressive] 印象的と

譯す。

インプレッショナルリスト [Impressionist]

一八六三年の Salon に此派の繪畫が悉く陳列
の榮を拒絶せられたるの際時の主權者其の窮を
憐んで之に特別室を與へ之を New Salon des
Refuses と號す。此時 Cloude Monet の出品や
る日没の景色に題して Impression と云ふ。觀

者堵の如く Salon des Refuses に集つて嘲笑を
逞ふす Impressionist の名是より起る。而して
其の實冷評の意を含むのみ。(夏目漱石)

インプレッショニズム [Impressionism]

印象主義。

韻文 [Poetry] 一定の韻律又は句法により律

格を調へたる文章、即ち詩歌の類をいふ。(散文

の對)。

韻法 韻法に就いて西洋には古くアソツナンス

Asonance 即ち「母韻會せ」といふのがあつて、

同一母音を含んだ綴音を一行にいくつも並べて

一種の整調を加味したが近代では餘りつまらな

いので行はれなくなつた。

インポッシブル [Impossible] 不可能、行ひ

難し、爲すを得ず等と譯す。

院本 淨瑠璃本を云ふ。

インモータリティー [Immortality] 不死、

不滅、不朽等と譯す。

インモータル [Immortal] 不死の、不滅の、

不朽の等と譯す。神の「と」を云ふ。只モータル
と云へば人間なり。

隱喩 [Metaphor] (英) 表面上譬喩の形式を没

して譬ふるものと譬へられる物とを二つにした文飾である。形式から云へば「如く」「似たり」の關係を「なり」にしたので「煎じつめた直喩」ともそはれる。例へば「艱難汝を玉にす」「世は海なり、身は船なり、志は楫なり」の類である。

引用 [Allusion] (英) 故事古語などを引いて己が文に重みをつけ、文章の内容を富まし、趣致を豊かにするもの、例へば「飛龍直下三千尺疑是銀河九天落」といふ李白の瀑布の詩を底に踏まへて蕪村の句に「心太逆まに銀河三千尺」というた類ひである。(五十嵐力)

ウ

ウイット [Wit] 機智、頓才と譯す。

ウィル [Will] 意志と譯す。

ウーマン [Woman] 女、婦人、又女性と譯す。

ウエルツシユメルツ [Weltschmerz] 獨逸語なり。世界的悲哀。世界苦。

浮世繪の恩人 浮世繪の恩人として、我々の忘るべからざるは、故アーネスト・フェノロサ氏である。氏の日本文明に對する貢獻は頗る偉大

であるが、浮世繪についても最も多く日本人の内部を理解し、外國人らしくない解釋を下して其處に一々正鵠を得て、これを極力外國に紹介して居るのは敬服と感謝の他はない。氏は明治の初年に、浮世繪所藏の代表と目せらるゝボストン博物館で初めて浮世繪を整理し、其の目錄を作る時にこれが主任に當つた人であつて、蓋し研究者中の元老と目してもよい。日本へ來て後も小林文七氏の展覽會、即ち明治十七年最初の浮世繪展覽會に際して、これが目錄を作り、和英兩文の序文を添へた。これは有名なものであつて、日本に於ける覺醒の先聲と言つてよい。その外氏の著書は多ひが、「日本及支那の美術」の末段に平民美術と題して叙した浮世繪史は、類史中最も完備したものであつて日本に於ける浮世繪研究の典據となつて居る。殊に氏の日本畫觀は我國現代の畫界を覺醒し、指導して居るものがある。日本美術院があつた新しい傾向を持つて來たのも、それを率ゐた岡倉覺三氏がフェノロサ氏と最も親しく氏より種々の暗示を受けたからに違ひない。(永井荷風)

浮世草紙 元祿時代に行はれし一種の小説、當時の人情風俗を書き綴りしもの。西鶴の一代男。

歌 代女を始めとし、自笑一流の八文字屋本をも併せていふ。

うたふやうに語調を整へて讀み綴りたる韻文。總稱。廣狹種々の義に用ふ。長歌・短歌・旋頭歌・今様・神樂歌・淨瑠璃・琵琶歌・新體詩・俳諧俗謡等みな歌といふべし。狹義にては和歌を指す、和歌は五・七・五・七・七の五句即ち三十一字を正格とす。詩を「からうた」といふに對して「やまとうた」ともいふ。明治に入りて新派を生ぜり。

宇宙 [Universe] 空中及び世界をいふ。從て世界よりは一層範圍廣し。

宇宙の市民 ケンブリッヂの若き哲學者ベル

トランド、ラッセルは「私的幸福の煩悶を棄て一時的慾望の熱を冷まし、永遠の事物に向つて情を燃やすと、これが解放である、これが自由の人の信仰である」と云つてゐる。彼の理想は「宇宙の市民」たることにあつた。(中澤臨川)

宇宙論 [Cosmology] 宇宙即ち天地萬物の根本的原理を論ずる哲學。此に對する解答は原子論・超絶神論・汎神論に分る。

宇宙論的證明 [Cosmological proof] 哲學

上に於て、宇宙の巧みに合一して正しく進歩するは、神の目的に従ふものなりとして神の存在を説くこと。

ウパニシヤット [優波尼沙土] 印度哲學の精髓を示せる古聖典にて「梵」の眞意義を説けるもの、タゴールを生めるは此の書にして『生の實現』はウパニシヤットの近代的註釋に外ならずと稱せらる。印度思想の寶庫なり。シヨームンハワー此の書に心酔して曰く『生前の安慰、死後の慰藉』。

運座 各俳人の相集まらて句作をなすこと。

ウンテルリンデン街 伯林の最も立派なる市街の名、菩提樹下街 Unter den Linden の義なり。

雲霧 [Nebular] メイストフェレンスがフアツストの書齋で睥いた恐ろしい「創造」の歴史を記憶されるであらう。彼の詞によれば混沌たる雲霧の昔から斯の宇宙には何の目的もない。一小星上の人間といふ生物がさかしげに考へてゐる頃を圖り、神は微笑しながら地の星を空間に送つて私等の太陽と衝突せしめる。そして再び舊の雲霧に覆へすといふ意味が言つてある。流石

のゲーテもこの説を破るだけの積極的光明觀を得ずして死んだのである。(中澤臨川)

運命 [Fatalit] 人が身にめぐり来る善惡・吉凶の事情。

運命を愛すること [Amor fati] 觀照の唯一の道は廣く運命を愛することである。(中澤臨川)

運命論 [Fatalism] 一に宿命論といひ、自由意志論の反對にて、人生の賢愚又は浮沈等はすべて先天的に定まれるものにして、人力の如何ともすべからずと説く哲學上の説。

エ

永遠女性 [Die Ewigkeitweiblich] ゲーテ

の生涯即ちフアウストの二巻は最もよき順生涯の説明である。若きエルテルの悲哀は年老ひてフアウストの勸喜に歸らねばならぬ、吾等は前半の生涯を個人の充實に志し、かくて後半の生涯を社會に貢獻せねばならぬ、肉體と精神との健康は順生涯に於て常にゲーテの一生の如く依たれたるのである、かくて愛は人生を活かし、

年老いて尙そがプラトニツクの形に於て人の事業を鼓舞するのである、かくてかのフアウストは完全なる順生涯を終へて百の齡を保ちつゝ幸ある自然死の本能に、人生最後の榮光を見出し得たのである。かくて天上には神秘の唱朗らにかく響くのである。

言ひしらぬ一とことは

こゝに現じぬ
永遠の女性こそ
われ等を翼け上ぐるなれ(宗柳悦)

永遠 [Eternity] 限り無く永くつゞく歲月。不死不滅等の觀念を示す語。

詠草 歌の草稿。豎詠草と横詠草との二種なり。豎詠草は多く小奉書又は杉原紙を用ひ、横詠草は杉原紙又は美濃紙を用ふ。

映像 光線の屈折又は反射によりて物像の現出すること、又は其の物像。

叡智 [Wisdom] 宇宙の本體たる理性。時間・空間の制限を受けず、又因果律に支配せられざる自由なるものにして、吾人認識の形式に獨立し、思惟すべけれども認識すべからず、それ自身にして眞の實在即ち本體なり。

エキジステンス [Existence] 生存、存在、

又は實在物と譯す。

エクスプレッションニズム [Expressionism] 表現主義。後印象派の諸作は表現を重んじて居る。前の印象派はたゞ眼に映つた印象と云ふオプティカリズムであつたがセザンヌやカウガンなどにいたつて内から心持を發表しやうと云ふ表現派になつた。

エクスタシー [Ecstasy] うつとりして我を忘るゝ意にて、忘我・恍惚・法悦なり。

エクストリミズム [Extremism] 極端主義。過激的傾向。

エクスプレッション [Expression] 表白、又は表情と譯す。

エクレジヤスチズム [Eclisasticism] 教會愛重心、教會主義。教會の儀式習慣等を固守すること。教會最氣の意味にもなる。

エゴイズム [Egoism] 愛己主義、利己主義、自己中心主義、自我主義などとも云ふ。個人的快樂主義にてして始めホップス等唱ふ。(アルツルイヰム参照)

エコー [Echo] 希臘神話中の山に住める女神の名。性多辯なるによと女神シユノーに他より

エコー [Ego] 我、又は自我と譯する羅句語。自我を見よ。

自我狂 或人はニイチエを以て自我狂に數へた。そして思想界に於ける彼に相當する者は文藝界に於てイブセンであると云つた。イブセンの戯曲にあらはれた人物に意志の強い自由な、全我的の人間があるのを指したのである。

エジプト建築 エジプトが世界最古の國たることは言説を要せず従つて西洋建築の歴史は端を此所に發せねばならぬのである。年代に依つてエジプト建築を區別すれば大體四期に別れる。第一メンフヒス(Menphis)時代紀元前四〇〇〇乃至六〇〇〇年の間第二シイパン時代紀元前三〇〇〇より一〇〇〇年頃第三サイト第四トレミツク時代、特色は以上の四代を通じて觀念の崇高色彩の華麗容積の宏大なる諸點である。塔、壁、柱、長押、入口等の様式は質實にして威嚴あり重に石材等の耐久的のものを選んだ。

エジプス [Edipus] 希臘神話に、シイプス王ライアスが、デルファイの神託に後其子エジボ

スに殺さるべしとあるにより、恐れて之を殺さんとして牧者に託せしも、牧者之を殺すに忍びず山に捨て、歸りしかば農夫に養はる。數年の後アルプアイへの途次ライアスに逢ひ、父と知らず争ひて之を殺す。後シーブス市の女怪スフィンクスを退治せる功により王となり、知らずして己の母なるショカスタと婚して后となす。然るに同市惡疫・饑饉に苦められ、神託に諱るに及びて其罪業露はれ、后は自殺しエジボスは發狂して自ら眼球を扶り出し、娘等に幫けられて乞食の姿となりて漂浪すること數年、遂にデゼンス近傍コロナスに窮死す。ソフオクレスが之を題材とせる劇二種あり。

エスカトロロジー [Eschatology] 世末學。未後論——死、復活、靈魂不滅、世界の終極、最後審判及び來世に就いて論ずる神學の一部。

エス・ペラント [Esperanto] 一種の萬國共通語。各國語に代ふるに非ず補助語として各國交通の便に供するを旨とす巧みにセルマン語及びローマンズ語を組合せ、文法極めて簡單にて西洋語の一を知れば學者容易なり。西曆千八百八十七年ポーランドの醫師ザイメンホーフの創意に出で、佛蘭西國人ポーロン之を修正せり

西洋諸國には此にて書ける雜誌・書籍頗る多く、我邦にも亦行はる。エス・ペラントとは「希望ある人」の義にて、其創意者が始めて雜誌に之を發表せし時の匿名に出づ。

エロス [Eros] キリヤ語にて不朽性と云ふこと。Permanent Character なり。

エターニティー [Eternity] 永劫。

エックス [X] 數學上の未知數の符號なるも轉じて未知數若くは未知の物事に用ふ。

エツクセ・ホモ [Ecce homo] 着よ此人と云ふ拉丁語。荊冠を戴ける基督の像。ニイチエに此の題目の著書あり。

エッセイ [Essay] 論文と譯す。

エッセンス [Essence] 其中の最も肝要なる部分といふ意にて、要素、または精髓、精英と譯す。

エディター [Editor] 主筆、又は記者と譯す。

エデン [Eden] ユダヤ傳説に、人類の祖先たるアダム、イブが住みし樂園にて浮世の苦みの少しも通はざる天上の極樂境なり。波斯灣の北方古代バビロニアの平原ならんといふ。

エニグマ [Enigma] 了解し難きものといふ

意にて、謎語、隠し言葉等と譯す。

エネルギー [Energy] 獨逸語にては [Iner gie] 勢力と譯す。もと物理学上、或物體が有する、或は物體に宿れる仕事をなし得るむたらきをいふの意より轉じて、人生の勢力、事を爲す元氣の意。

エネルギズム [Energism] 勢力主義。

エバンゼリズム [Evangelism] 福音傳道。

エピキュリアニズム [Epicureanism] 快樂說。エピクロスが唱導せるが故に名づく。

エピキュリアン [Epicurean] (英) 古ギリシヤの哲學者エピクロスが唱へし至上善は快樂なりといふ説を奉ずる人。轉じて快樂追求者、食

道樂に耽ける人などといふ意ともなる。

エピック [Epic] 敘事詩、史詩。

エピソード [Episode] 挿話

エフェクト [Effect] 効果、きりめ、又影響等と譯す。

エポード [Epode] 古代の頌歌の末尾。長短句隔行に相次ぐ體の抒情詩。

エポック・メーカーキング [Epoch-making]

新時代を開くとか、新時期を劃するとかいふ意國木田獨歩の如きは近代の日本小説界のエポックメーカーキングな作者であつた。

エホバ [Jehova] ヘブリエー人がモゼスの啓示によりて造物者即ち神を指したる名稱。

エミール エミールは佛蘭西のルウソオの作の名である。十八世紀文學のグロテスクな傾向に反抗して、人間生活を本然自然の姿に立ち歸らしめ、その本然の姿をもつて自然現象と間はしめ、そしてその直接な本來な關係に於て人間の純なる生命を發展せしめやうとして此の「エミール」を書いたのである。森の中で清新な純潔な目をもつて彼エミールが見やつた日の出の鮮かさ。木の葉の爽かなゆらめき、それはみな人間の純なる心に響き映する汚れなき自然であつた。(吉江孤雁)

エメラルド [Emerald] 綠柱石(略して綠玉)と譯す。綠玉髓。

エメラルド・グリーン [Emerald green] エメラルドの如き光澤ある明るさ、餘り濃からざる綠色。

エメリー [Emery] 鋼玉石の一種。青灰又は藍青色をなせり。

エラト [Erato] ミューズの女神の一にして

戀愛の司宰神たり。其像は七絃琴を携ふ。

エラボレート [Elaborate] 念を入れる、苦

心する、推敲する、又は精緻巧妙なる意。

エリクセル [Elixir] 昔のアルケミストが不

老不死の靈液と信じたもの。醫學上では酒精に

浸せる混合剤にて甘くして香氣あるものなり。

仙丹。

エリコの城 [Jericho] 何處にあるかわから

ないところ。西班牙にあるとも云はれて居る。

エリコの城に行くと云へば何處かに出てしま

へ」と云ふ意味。又一種の秘密なところと云ふ

意味にもなる。屋敷樓とか空中樓廓とか云ふ意

味にもなる。——マックス・スチルナの言葉は陣

太鼓の響の様なものである。そして多くのエリ

コの城は此の響の前に仆れるのである。(御風)

エリジウム [Elysiuum] 希臘詩人の想像した

極樂境。エリジアンとは幸福を意味して居る。

淨土、樂園。希臘神話にいふ常夏の極樂郷。或

は地下にありとし又は地上に連るとなし、或は

アメリカ大陸の片影を仰見せし漂流水夫の傳へ

しものとなし、或は全くの理想郷となす。

エリス [Eris] 希臘神話中にある争闘の女神。

ペリウスとセチスとの婚姻の宴席に諸神皆招か

れしも、己れ一人漏れたるを憤り、最も美しき

者へ」と刻める黄金の林檎を其宴席に投ぜしか

ば、ミネルバ、ジュノー、ペナス等之を得んと

して争ひ、之より諸神の不和を生じ、遂にトロ

イ戦争を惹起せり。(パリス参照)

エルゴ・ビバマス [Ergo bibamus] ラテ

ン語に「『かゝるが故にや飲まむ』」There-

orelet us drink.

エルジイビル家 [Elzevir] は和蘭の出版業

者にして古典の美麗なる出版を示して世界に名

高し。その活字など綺麗で細かい。その出版に

かゝるはヴァジルの詩集など世界に不滅と稱せ

らる。

エルドラドウ [Eldorado] 黄金郷、往時西

班牙の勇將ピザロにしたがひて南米を征せし際

オレルラナなる一將校が発見したと傳へらる。

その位置はオリノエ河とアマゾン河との間にあ

るさえたが、もとより幻影郷にすぎない一種の

地上極樂である。黄金珠玉に充ちて居るさうだ

エレガント [Elegant] 當世男と云ふ佛語。女性

はエレガント Elegante

エレクチシズム [Electicism] 折衷主義。

エレクトラ [Electra] 臘希神話に、其父ア

ガメムノンの弑せらるゝや、弟を扶けて本國に

歸り共に復讐す。希臘の詩人ソホクレス、ユー

ピテス、エスキロス等何れも之を題材とせる作

多し。(アガメムノン参照)

エレジー [Elegy] 元は挽歌と云へば葬式

の歌であつた、が後悲哀の題材を以て作られた

冥想詩、又は挽歌調を以て出来た古典詩に名け

る様になつた。

エレウシス [Eleusis] 古代の希臘の都府。

有名なるデメラルの神殿ありし地にして、近年

其遺物發掘せらる。アセンスの西北十四哩許り、

現時のレウシナ、エレウシス灣に臨む。

エレメント [Element] 元素、要素、成分

エロー・ペーパー [Yellow paper] 下等新

聞といふ意。亞米利加にては下等の新聞は多く

黄色の紙に刷らるゝよりいふ。

エロス [Eros] 希臘語にて愛の義。希臘神話

に、天地開闢の初め混沌の上に漂ひし「夜」の卵

の中より生まれし神。其矢と炬火とは萬物を照

射して「生」と「歡喜」とを生ずと。轉じて愛の神

の名とす。

エロチック [Erotic] 戀愛的。又は戀愛文學等

と譯す。

エロトメニア [Eliotomania] 色情狂、官能

的生活が極度に達してそれが或る限度を越へる

と「色情狂」と名のつくやうなものも出来て來

る。

遠近法 [Perspective] 古代の繪畫例へば昔

の人ナ畫にはまるで背景といふものが無かつた

勿論未だ遠近法もないのだから、畫面は極めて

簡單なものである。チャルス、ラム Charles

Lamb オールドチャイナ

「古代陶器」の事を書いた名文に此の事

を Figuringet in the air と云つてあるが、如

何にも昔の茶碗などの繪にある人物は空中にほ

こりと飛び出してゐるので周圍には何一つ畫い

てない。またたとひ多少の背景がある場合でも

それが畫の主題たる人物と殆ど何の關係もない

無意味なものである事が多い。

演劇意志説 マシウスやアレンチェルヤによ

ると、劇か他の文學藝術と異なる第一の所以は、

其の主人公は必ず大なる意志を貫徹する爲めに

苦戰奮闘するものでなければならぬさうだ。此

れは恐らくシヨッペンハワーやヘーゲルあたりの哲學から來た所説であらうが、兎も角主人公の大なる意志の貫徹如何にあつて喜悲兩劇を分つての目安とするのには新味ある見解であると同時に、シヨウの所謂人生力の説も之と脈を同じくして來る。之を要するに劇の主人公がかく必ず意志の發動強襲を以て要件とする以上、國民的意力の旺盛な國には劇が發達し、國民的意力の無い現在の埃及や印度の様な國には秋毫も劇の發達がなかつたと實證もある位なのを、さて日本の現劇壇と日本國民的意力とは……(加藤朝鳥)

エンサイクロペディア【Encyclopedia】

百科全書と譯す。

厭人家【Misanthrope】 頹廢文明の特産の彼等の態度は消極的であつて怯懦である。冷笑的であつて輕躁である。また怠惰な悲觀者である。(中澤臨川)

演繹法【Deductive method】 論理學上の語。

物の理を考ふるに既知の原理より漸次論下して現前の事實に到達し其の理由を説明する方法。(歸納法の對)。例へば「人は死すべきものなり」といふ既知の原理より「某は人なり」故に某は

死すべきものなり」と斷定するが如し。

厭世觀【Pessimistic view】 此の世をつまらぬものと悲觀すること(樂觀の對)。哲學的に厭世觀を唱へたる好代表者はシヨッペンハウエルなり。其説に曰く、世界の根源は意欲なり、意欲は念々に發現して煩惱常に絶えず、故に此の世界は畢竟不満足・苦痛の世界なり。

厭世主義【Pessimism】 此の世界は、苦痛を以て満たされ、決して満足に到達するものにあらずとし、現世を脱離して以て満足を得べしとなす主義。又悲觀主義ともいふ。

厭世的宿命論【Pessimistic fatalism】

アテルリクは初め矢張り一種の厭世的宿命論の人であつた。固よりそれはかの物質的世界觀から來た自然派の厭世觀とは異つて最初から心靈とか神秘の力とかいふ事に基礎を置いた宿命論であつた。即ち宇宙間には絶対無限の不可抗力があつて、あらゆる人類、あらゆる生物を支配してゐて、何者も此力を脱するわけには行かない、が此力は決して科學者が説く物質的法則といふが如き類のものではなく全く一種の神秘的な力であると渠は考へた。(孤雁)

厭世的人工論【Pessimistic artificiality】

假作せる神と人との間の一階級。神意を人間に傳達するものと稱す。普通に翼を生じたる少年を以て表示せらる。

オ (ヲ)

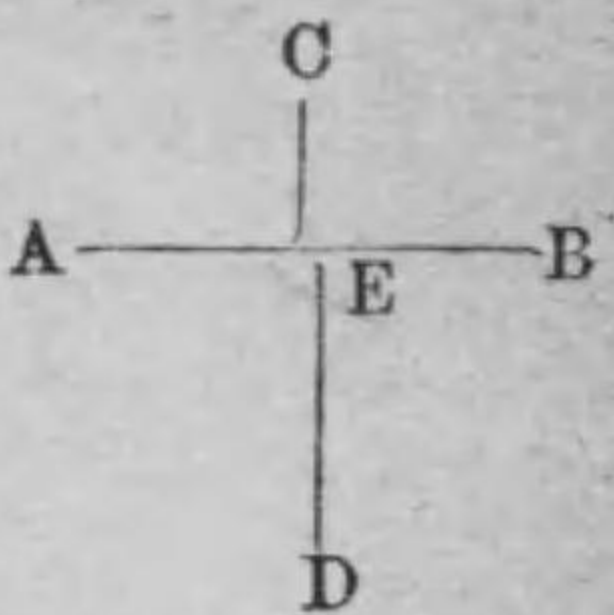
押韻 韻を踏むこと。英語にては普通平聲韻によりて句脚の一字に同韻の文字を用ふ。たとへば西詩にては *Pride, side* 等の如し。

黃玉 寶石の名。一に黃寶石。又トッパーズ(Topaz)。色は無色・黃・赤・紫青・綠・瑠璃等にて透明又は半透明なり。

黃金切【Golden cut】 本來美の形式を統ぶる法則につきては既に Plato, Pythagoras の昔時より異説紛々學者の常に意をそぐところにして、或人は「量」を以て表現し得べき數理原則に基づくもの」とも云ひ、又或人は所謂「黃金切斷法」(Golden Cut)を以て美の比例なりと主張せり。Golden Cut とは一個のものを二分したる時、その短かき部分が長き部分に於ける比、その長き部分が全部に於ける比に同じきを名づけたるにて論者は「人體、高等動物の形狀、植物の構造、結晶體の形、星界の配列、建築、彫刻、繪畫の傑作にあらはれたる比例、音樂上最

ポドレルは道德から獨立した美學の本領を發揮する爲めに想像力のない俗象共に最も深い印象を與へるには誇張に限ると云ふ考から「僕は斯くて身のまわりの裝飾を以て人間靈魂の原始的高貴を示めす一つのものだとするに至つた。」と云うた。もと／＼非物質的靈魂を厭ふべき天然と現實との俗裏から離脱させるのは、優れた人工の權威で、化粧は、野蠻時代の冠の毛や輝く杖を初めとして、高尚な靈性を備へてゐた。だから結論として女で云へば最も美人とはその天然の美をかくして紅白粉の人工的魅力を欲しいまゝにした者だ。「人工は不始の役目を與へて天然を模倣せしめやうとするのは誰れだ？」赤と黒とは「法外超自然の生活」の表象であつて、眉墨は「眼にもつとはつきりした様子を與へて、無限に臨む窓の如くならしめ」紅は「美女の顔に巫子のやうな神秘的感情を加へる」渠は斯く矢張無感動説を容れないで、最も感情あり、慾情ある女をも彫像化して「神聖優越の存在物」と見た。これには、實に、渠としては最も悲惨な、厭世主義が裏付けられないではあらなかつた(岩野泡鳴)

エンゼル【Angel】 天使と譯す。神學上にて



DE:EC = DC:AB

巧の調和、更に大にしては宇宙を總括する自然界の比較科學の組織の如きも全て此の切斷法に適合するものなりと主張す。(Fechnerの云ふところに據れば此の比例はその價值重きを置くにたらず、其の比時により適中するが如き觀あれどもこれを以つて充分の證據となすこと難し。(夏目漱石)

黄金時代 [Golden age]

社會又は文藝の進歩が最高度に達し、百般の事物足りとのひて缺陷なしと想像せらるゝ時代。又は、其一生涯の中最も光榮ある時期。

横死 [Violent death]

凡ての生物の死は殆んど横死で自然死は非常に稀である(メチニコフ)尙ほ自然死を参照すべし。

オアシス [Oasis]

沙漠中にて樹木茂り多少の泉水の湧出せる地。沙漠を横斷する隊商等は此處を休息場とす。又オアシスともいふ。

オーディン [Odin]

北歐神話中に、智慧及び勇氣を動物に賦與すといふ最上神。

オーソリティー [Authority]

權威と譯す。即ち他を支配する力の意なり。又信じ頼む事を得るものをも指す。

オード (高情曲)

感情の高揚、題材の莊重、組織の複雑を以つて特色とし、その例を擧げて見ると、ミルトンの「基督誕生のあした」Morning of Christ's Nativity、シラーの「西風曲」Ode to the West Wind 等である。

オーフ [Oaf]

古語には Ough 妖魔の取換へ置きたる畸形兒。その取り去るや佳兒の代りに遣しおく不具の幼兒。取換兒。愚人。痴漢

ラム・カラー [Warm colour]

温色と譯す(コールド、カラー)冷色の對)赤・黄・橙の如く温き感じのする色をいふ。

鸚鵡石

俳優のせりふを書き抜きたるもの。

オモフエーニア [Omophagia]

生物を生きたまゝ食物にすること、かくの如き生食者を Omophagus と云ふ。文藝愛好者は作物を讀むにあつて殺して讀むではならぬ。生きたまゝの生血を吸る濃濁とした生の要求がほしひ

オーロラ [Aurora]

極光と譯す。南北兩極に近き地方、殊に極附近に於て、夜中(冬夜殊に

多し)極の方に當れる空に莊麗なる虹の如き或一種の光輝を認むることあり、暫時輝きて後次第に減ず。これ極光なり。原因不明なれども此磁氣に關係するものなりといふ。

又、希臘神話にては曉の女神をいふ。毎曉起き出で、常に莊麗なる白馬の車を急がせ、下界に太陽の出現を知らすといふ。

牛津運動

中世羅馬教の復興を主張したのが即ち牛津運動である。要するに近代の大勢から逃避し或は之に反抗せむとする一種の奮闘である。(厨川白村)

恐ろしき夜の都 [City dreadful night]

吉利のホオだと云はれるほど風變りの詩人セーアス・トムソン(James Thomson)の傑作で近代英文學で厭世思想といへば誰でも思ひ付くほどの名作である。(厨川白村)

オッカルチズム [Occultism]

神秘學。幽玄秘密の説、千里眼のごときは矢張オッカルチズムの一種なり。

オデュッセウス [Odysseus]

希臘神話中の英雄の名。勇武才智にして殊に頓才に富み辯舌流るゝが如く、凡べて古代希臘人の理想の英雄の

オニオ・マニア [Onio mania]

蒐集慾即ち居宅の内に譯もなき雜物を積み重ねる傾向の如きは變質の一特徴として之をオニオ・マニア或は購買狂と名附く購買狂患者は一時に同じきものを多數に買込むことなく又麻痺狂患者の如き物の代價に對して無頓着なることもなし唯何とはなしに一の物品の儘を通る時には必ず自己の所有となさんとする慾望を感じるなり。(マクスノルドウ)

面目 (體面)

といふことは「近代劇の種々相」の著者チャンドラー氏も論じてゐる通り、十九世紀以前に於ては歐洲劇の最も主要な題目の一つであつた。殊に佛蘭西の劇の如きは、最近代までも、多少體面問題に職關してゐない作は稀だと云つてよい位である。我が國でも、武士道成立以後の大概の社會的波瀾は主として此の「面目」と云ふことが原因になつてゐる。(坪内逍遙)

體面問題と一班に作劇上に云のは此事である。
オバチ Opera **[Overture]** 前奏とか序曲とか云ふ。音楽上の言葉である。

オビイヌム [Obism] 蛇崇拜。エジプトにて聖蛇を拜したことから始まる。

オブゼクティヴ [Objective] 文法上にては目的格をいふ。又、廣く客觀的の意に用ふ、客觀的の項を見よ。

オブスキュランチズム [Obscurantism] 文明の普及に反對する主義。曖昧主義。非教化主義。文明の弊に堪えず現状のままに止まることを主張する主義。

オブソレチズム [Obsolescism] 廢頽のまゝに甘んずる傾向。何等進歩をねがはず、埋木となりて舊慣にしたがつて満足して居る主義。

オブレビオン [Oblevion] 世に忘れられること。埋没。煙滅。

オブロモニズム [Obломovism] 一八五八年に出た露國のエンチャロフの小説の主人公にて世のなかを浮か浮と夢のやうに送りたいと云ふ主義。(中村綠夢)
オペラ [Opera] 歌劇、又は樂劇と譯す。

オヘリスク [Obelisk] 太古、埃及にて神社の門前に左右對をなして建てたる四角の石柱。大なるは長さ十丈餘あり。石面には之を神に捧ぐる爲の畫文字を彫刻せり。

オベロン [Oberon] 妖精界の雄王、沙翁「眞夏の夜の夢」で仙女チタニアと美少年をうばいあふ。

オマア・カイアム [Omar Khayyam] 八

ルシヤの昔の詩人で天文學者、その詩集は永久性の古典として廣く世界に讀まる。

オムニツセンス [Omniscience] 全智全能

オリーフ [Olive] 橄欖ランと譯す。

オリエンタル [Oriental] 東の、東方の、東洋の、又東洋的等と譯す。西洋人にとつて東洋は最も異國情調のあるものだ。

オリオン [Orion] 希臘神話中の巨人の名。容貌美にして獵を能くし、又父ネプチューン神より水中潜行の術を得たり。暴力を以てチノス王イノピオンの女を得んとして盲目とせられ、目を仰ぐに及びて快復す。後デヤナに愛せられしが、過りて其矢に中りて死し、女神之を憐み昇天せしめて星となせしといふ。

オリジナリティー [Originality] 創造、獨創等と譯す。

オリフランム [Oriflammé] 佛國古昔の王旗。金色三個の百合花にて飾りたる藍色の旗、光榮の表彰なり。

オリンピヤ [Olympia] 昔、希臘のエリスにゼウス(ジュピター)神の爲に宏壯なる神殿を建て、四年毎に祭を行ひ餘興として諸種の競技あり、其競技をいふ。此祭典は希臘第一の大祭典と稱せられしが、紀元三百九十四年に廢せり。其後千八百九十四年歐洲各國の同意にて、此名目の演技再興せられたり。

オルガニスム [Organism] 有機體、機械論

オルソドックス [Orthodox] 正統派と譯す。

學問上または宗教上等に於て、教義即ち其原の統を正しく受けつぎ來れりと認めらるゝ派。俗にいふ本家筋。

ワルツ [Waltz] 男女二人づゝ戀心にて踊る高尚なる舞踏。又、夫れに伴ふ舞曲をもいふ。

オルフェウス [Orpheus] 希臘神話にミューズ・カリオーペの子。アポロ之に琴を教へミューズ其奏法を傳ふ、故に禽獸草木に至るまで其歌

に動かされざるはなし。其妻死するや黄泉に赴きて之を還さんことを乞ひ、黄泉の神其妻を還へせしも、禁に反きて頭を回らすや其妻の姿忽焉として消えしと傳ふ。歌劇に有名なる題材となる歌劇。

「オルフォイス」(イタリー名) オルフエオ [Orfeo] の曲章はイタリアの詩人カルツァビシ (Calzabene) の手に成り初めて一七六二年十月ウイennaで演奏された。グルツクが歌劇革新の理想を掲げて従來専ら抒情詩的歌唱に限られてゐたイタリアオペラの形式を脱して劇詩と音樂の接合を計つた最初の試作として兼てまた近代劇の立點としての此の作の位置は其實際の出來榮を外にして歌劇史上頗る重大なるものになつてゐる。

オルレアンの少女 オルレアンの少女はジャンダークである。ジャンダークは佛國に生れたが、一朝英國と戦ひ起つた時に、ジャンダーク野や森で自然の聲を聴いた。其の自然の聲——神は彼に劍を與へて故國を救ふ爲めにオルレアン城に走れと教へた。少女は直に馬を走らして神の命を全ふしたが、道に敵軍の爲めに捕へられて殺されてしまつた。

オレンジの白花 橘樹の白花即ちOrange-blossom

sonは新婦の清珠を表するに用ゐる。

音韻 人の音聲の一氣に出づる音、此の音の末のひびきを韻といふ。例へば我日本の五十圖音の各個は皆其各音末のひびきの悉くア・イ・ウ・エ・オの何れかにかへるが如きこれなり。

音畫 [Klangmalerei] 新藝術の上に官能交錯の現象があらはれた時に、エルレイメー派の象徴詩人の詩歌と音楽との接近になつた。渠等は音を以てるべき、色を以て歌ふ者である。言ひかへれば文字を以てあらはされた言葉も以て音楽や或は繪畫と同じ効果を収めやうと努めるもので所謂「音畫」の技巧を極度まで持つて行つたものである。が此の各種藝術の境界が混亂して詩も音楽も繪畫も彫刻も皆ごつちやになつたといふ事は一般近代藝術の特色であるといふ迄に特に注目せねばならぬ。佛蘭西のゴッテは之を呼んで「藝術の轉換」[Transposition of art]と稱した。

音樂極致論

あらゆる藝術は常に音樂の調和状態にあつて居る。何となればすべての他の藝術では内容を形式から引離することが出来て、いやしくも其藝術を了解するには此差別をする

ことは出来るが此區別を無くするは藝術の當然の努力であるからである。例へば詩の内容即ち其の題目其の興へられたる出来事又は其の情勢或は繪畫の單なる内容、即ち出来事の實際の事情ある景色の實際の地理は是等を取扱ふ精神と形式がなければ何等の藝術品を構成せぬと云ふこと此形式此取扱の様式がそれ自身目的たるべきこと内容のあらゆる部分を貫くべしと云ふこと——斯の如きはあらゆる藝術が常にあつてそれ／＼異つた態度で幾らか成功するものである。(ウオーターメーター)

音調 [Tune]

音の高低の程にして、音調の相異は其音を生ずる物體の振動数の遲速により、振動烈き程其音高し。又、詩文の語路または音曲の曲折をいふ。

女食ひ [Soutenens]

獨逸のシュルムドラング當時の新文學者に與へた名前「パレー」は斯の如き人間を想像して自己の理想を實現せりと信ぜるも實は自己を欺きつゝあるに外ならず而してかの自我の培養者フイリツツ若しくは無政府主義者アンドレーの如き人物は何れの大都會にも無数に存在し警察官は彼等を女食ひなる名稱を以て呼びつゝあり。(マクスノルドウ)

女政治 [Gynaecocracy]

ウオードの社會學に關する諸著又は彼のエリスの「男と女」などといふ名著を見ると俗の考の誤つてゐることが分る。腦の大きさも今日ほどにはあがはなんだといふ證據もあり太古未開の頃は男女全く同等であつたところから女が全權を握つて男は寧ろ從屬の位置にあつた時代もあつた Gynaecocracy (女政治)といふのがそれである。腕力とても先天的に劣つてゐるとは斷定しがたい昔は強く逞しい女もあつた現に今日の野蠻社會や或地方の農家の女などにも其の例を見る。(坪内逍遙)

女らしさ [Womanliness]

婦人は先づ Womanliness を捨ててしまつて、今迄の如く種族保存の必要物として單に母として生む代りに、自分自身の爲めに生まう、夫や子供に對する義務は拒絶してしまつて、個人たる自己以外に對する一切の責務を脱しやう、今迄のやうに甘んじて他の犠牲となる事は堪えられない。愛と同情とを唯一の生命として、男子の爲め唯だ「愛すべき者」として生きんには情の力の餘りに弱く、理智の力餘りに強いといつたやうな個人的自覺に達した女性の態度が彼のイブセンの戯曲によく描かれて居る。

カ

カアニバル [Carnibalism]

食人、同類を食む動物。

カアバ [Kaaba]

アラビア語で四角殿の意、メッカにある寺。アラハムが建立したものであつて、その地はアダムがエデンの樂園を追ひだされて後にはじめて神を拜した處。此の寺のなかには七インチの紅石がある。天から落ちたものであつて、今は罪人の接吻を多く受けた爲め色が黒い。

繪畫の印象派

繪畫印象派は、アカデミー派が構圖に重きを置くに反抗して専ら色彩に工夫を凝らす。色彩は圖柄よりも概して肉感的である。色に依つて直ちに感じを傳へんとする。又彼等は好んで卑近な醜惡な畫題を描く。又人間よりも自然物を多く描く凡て彼等が自然派たる所以である。(抱月)

概観

美術上の語。輪廓・明暗・色彩・構圖等の大體の結構をいふ。

懷疑狂

天才の中に吾人は屢々精神病學者が Poile du doute と名づける一種の現象を發見

する。それは憂鬱症の一變態である。この精神錯亂状態に在る患者は一見健全な心的状態にあるかの如く見える。彼は常人の如く推理もあれば、物も書く、談話もする。しかし或一定の制限ある行動をとる時、そこに無数の杞憂が心中に生じて来る。(ロイブソカ)

懐疑派 [Sceptic] 認識を否定して眞理を疑ふ人々。

懐疑論 [Scepticism] 吾人の認識を不確實なるものとし、一切の知識を否認し眞理を疑ふ哲學論。代表者はヒューム等なり。又、研究を始める前必ず一切を疑ふ傾向。此の傾向はデカルトを始め殆んど凡べての大哲學者は現れたり。

外光派 [Peintre en plein air] 或は Freilichtmalerei (Hellmalerei) などと呼はる。—— 繪畫に於ける印象派は色彩を重むる爲めに光線の變化を研究するのであるが、之は單に日光ばかりでなく瓦斯の光、ラムプの光、火山破裂の時の光、或は又黄昏時の街燈といふやうな二つの光線の混合した場合などすべてを精緻に研究したる印象派が一に又外光派などと呼ばれるのは即ちこの爲めで、光線の強い明るい畫をかくからである。「一幅畫中の主要な人物は光であ

る」と云つたのはマネエの有名な言葉である。

回顧兼破裂式 [Retrospect and Catastrophe formula] 過去の事を回顧してゐると同時に事件が起つて来て局面が破裂する。即ち回顧兼破裂式といふ斯ういふ書き方は必ずしもイブセンの發明ではなす二千年前の希臘の樂劇は皆回顧兼破裂式で書いてある即ち大事件の起る直ぐ前の時から幕が開いて其の以前の事は其の幕で段々分つて行き突如として破裂する肝腎の正味だけを演じて見せるといふ仕組。(坪内雄藏)

精神生活 ^{ガイストレーベン} オイケン哲學は、徹頭徹尾「精神生活」の意義を闡明し、其の價値を力説し、且これを獲得する方法を攻究しようとするものである。隨つて彼の思想の眞髓を理解するには、この「精神生活」の眞相を明らかにすることが最も便宜なことでもあり、又最も必要なことでもある。一言にすれば、オイケンの「精神生活」は全實在の本質である。詳しくいへば、個人、全人類全自然に對して各々其の特種の性質を興へると共に、これら一切の實在を統一して渾然たる宇宙を構成する所の原動力である。而して表面上種

々の差異を持つた、一切の存在を統一するものであるから、外面的なものではなくて内面的なものであり、多でなくて一であり、個體的ではなくて普遍的であるし、時間の経過に従つて變化する現象の雑多性を統一して進歩發達を全くせしめるものであるから、現前的なものではなくて永遠的なものであり、有限的なものではなくて無限的なものである云々。(稻毛祖風)

諧調 [Euphony] 耳に快く響くやうに語を選び整ふること。

外的 自己以外に存在せるもの即ち社會と自然とを指す。また内面的と相對して其反對の意味を現すことにも用ふ。

外的記號 [External sign] 露西亞の文豪トルストイは云つた、「藝術とは作者が經驗した或る感情を何等かの外的記號に依つて他の人に傳へ、他の人をして作者と同じ感情を経験させるものである」と例へば或る一人の小兒があつて森の中で不意に二疋の狼にあつて、危く喰はれるところであつたが、漸く逃げ歸つてそれを人々に知らせる爲めに、筆に描いたとする。即ち外的記號によつて人々は其の小兒の經驗した恐怖を同じやうに惹起したとする。これが眞の藝

術である。といふ意味である。

概念 [Conception] 個々事物の觀念より共通の要素を抽象して概括したるもの。例へば松、杉、檜等より抽象して木といふ概念を得るなり。

解剖 文學者の行ふ解剖は常に全局の活動を目的とするものにして各部として各部を吟味するが如きは全く此の目的を助長する効果あつて始めて存在を許すべきのみ：如何に精巧なる解剖たりとも、その全局の印象に交渉なきか、又は之れを妨害する傾向を有するものは到底文學上勞力に相應する効果を收め能はざるべし。(夏目漱石)

解放 [Emancipation] 近代の歴史は解放の歴史である。智慧の解放、宗教の解放、政權の解放、すゝんでは所有の解放すら唱へられんとしてゐる時代である。これ等は人間生活を團體的、社會的に考へた場合の上に及んで來た解放である。個人生活上に及んで來た解放は、智力の解放である。情緒の解放である。官能の解放である。理性の解放である。文藝復興を、ロマンティシズムを、ナチュラリズムを考へて見ると、好い。いづれもそれ等は、この解放の使命を果たさん爲めのムウブメントである。しかして團

體的には所有の解放すら唱へられる時代、個人的には我々の生命の最後の解放を、即ち絶對我の心霊の開放を要求する時代に到達してゐるのである。(吉江孤雁)

開幕劇 歌舞伎劇の序幕に似たるものにて、長篇脚本の前に附けて演ずる一幕物の如き短き脚本をいふ。大正二年九月藝術座がメテリリンクの「モンナ・ワナナ」を上演すると、一幕物の「内部」を前に附して演ぜし際この名稱起りたり。

外面描寫 [Description] 人物等を描くに、其内面生活、即ち心理・氣分の如きを寫すを内面描寫といふに對し、容貌・態度・動作等の如き外面を描くをいふ。

快樂説 [Epicureanism] 人生の目的は感情の幸福即ち快樂にありとし、快樂を増進し苦痛を減退する傾向の多少によりて、道徳上の價値を定むる論理學上の一派の説。古代の主唱者はキレーネ派、エピクロス派なり。而して自己の快樂を増進することを主とする自己の快樂説と、公衆の快樂を増進することを主とする公衆の快樂説との二派に分る。

科學的 [Scientific] 個々の事實に就き、秩

序なき想像又は意見にあらすして、概括して系統を立て、論述し説明するさまにいふ。

科學的 人生觀 (メチニコフ) 人生は完全なるものにせよ、汚濁せられしものとするにせよ凡ての問題は人性を中心としてそこに合理の道徳宗教を立て様としたのである。而して人性より起る主な問題は嘗つて佛陀が疑を懐いた老病死の問題に外ならない、宗教と云ひ哲學と云ひ一切の人生觀は此の苦悶に對する解釋である、然し彼等の信仰哲學は果して人生の問題を解いたであらうか。抑も人性とは既に完全なものにして、そこに確固たる道徳の基礎を建て得べきであらうか、果不淨煩惱を以つて満ち、そこに何等の價値をも見出し得ないであらうか、科學はかゝる人生の根本問題に觸れる力が無いと云はれて居る、然し在來の超自然的な教理を打破し去つた科學は此の問題に對しても新なる解釋を下さればならない。程遠からずして科學が人生問題に密接に觸れ來る可き時期は來らねばならない、古くより人の悩むだ老病死の問題に對して、如何なる程度迄科學が解答を與へ得べきかを試みそれによりて人生を解釋し、その理想を明らかにすることが此の性の研究に基ける科學

的 人生觀の目的である。(柳宗悦)

科學の破産 通常文學的方面を代表する人々は漠然たる唯心論に赴く傾向がある。ルナン等は正にその一例である。又通常學者と稱せられる人々は、實務論を極めて狹義に解釋して之に凭らうとして居る。リットン^{リットン}は確かに其の一例である。「科學の破産」といふ言葉は文學者藝術家が好んで用うる言葉であるが、これ等の論者は甚しく狡猾な論法を用ひてゐるのである。即ち特殊なる事例好都合のみを準備して駁して居るのが常に見受けられる。所謂學者はまた之に反對して自己に都合なる結果のみを誇張して應じて居る。實際に於ては、哲學と云ひ、道徳といふものが決して外的に存在して居るものではない、神學・神話・數學・物理・生理學等と雖も同様である。唯これ等の内容と定義とを能く考へずして隨意に便宜の内容を含ませしめて甲により乙を伐つといふ滑稽を行つて居るのである。

(廣瀬哲士)

科學批評 [Scientific criticism] 或作品の批評に、恰も科學者が一個の生物を研究するが如くに、科學的に研究してなす文藝批評の一樣式をいふ。即ち文藝の作品をも、物質的に考ふ

るより生れたる様式なり。

科學萬能主義 すべて宇宙間の現象は科學(自然科學)によりて解釋することを得、換言すれば、一切の眞理を教ふるものは科學にして、吾人の信じ得るものは科學の教ふるところより外になしとする説にして此説は十九世紀の後半より學界を支配せしが、現今は漸く衰へたり。

カカデモン [Cacodemon] 惡魔・惡靈・惡魔に憑かれたる人、惡魔、古星では天の十二宿(禍の宮)

鏡 [Mirror] ニイチエが呼んで近代文藝史上の秘鍵であると褒めた佛蘭西のスタンダール Stendhal は嘗て「小説とは道に沿ふて歩いて行く鏡である」と云つた。この名高い言葉はまさしく自然派の作品に當つてゐるので、作家はさながら、人生といふ道路を動いて行く明鏡のやうに其の面に色々の印象をうけてはそれを再現する一個の機械に過ぎないのだ。實景そのものよりは更に一層分明した縮圖を鏡面に映し出す物である。(厨川白村)

假感 [Hypothetic] 哲學上の語。美の所立の感情、實在體より遊離せる假感に關して生ずるもの、實在體に關して生ずる實感に對して假感

といふ。實感の如く好悪愛情を伴はずして且つ把持力薄し。假感を感じる能力なきものに對しては美は存在せず。

牡蠣の饗應 [Anster diner]

獨逸の浪漫派の事業にして不滅なる價值を有せる者は餘り多くない。彼等の宗教的態度は何うかと云ふに文學に於ては大いに革命的なる浪漫家も羈絆を認めざるや否やおとなしくもそれに頭を下げてしまつた。而して政治上に於ては何うかと云ふに維也納會議を主導し聖シユテファン寺院の盛儀と Funny Fists (維也納の舞踏女) 一八一〇—一八八四) の家に於ける牡蠣の饗應との間に思想の自由を撤回すべき同會議の宣言書を草した者は彼等浪漫派であつた。(ゲオルクブランテス) **客我** 吾人が自己に關して考察するときの對象、即ち客觀派に見たる自己。**樂劇** 歌劇と同じ。音樂と演劇術と舞臺裝飾術と戲曲との綜合藝術なり。即ち歌唱及び表情動作を中心として背景衣裳等の力を籍り、樂坐の伴奏に連れて歌ひ且つ演ずる一種の演劇。ワグネルの「ロオエングリーン」坪内博士の「新曲浦島」などはこの類なり。十六世紀の頃伊太利に於ては興りたり。

假相 實在にあらざる物象、即ち假りの現象。感覺若くは空想の作用により實在より遊離したる現象をいふ。

カサンドラ [Cassandra]

希臘神話にトロイ王の女。アポロ神に愛せられて豫言の力を賦與せられしが、後其の不興を蒙りて其豫言人に信ぜられず、トロイ落城の後アガメムノンに囚へられ、其の弑逆の難を豫言して用ひられず、其身も亦其難に坐して死す。

果樹園の大風

メレヂスの小説ポージヤンヌキアリア Beauchamps's Career の中にカアライルの文體が並削りて「果樹園の大風」のやうに亂暴狼藉であるが其の中に甘さうな果物が落ちてゐるといふやうな事を云つた——岩野泡鳴君の論文なども少々此氣味で讀むて行くと思ひも依らぬあたりと思ひも寄らぬ獲物がころがつてゐる、時とすると泥の間に砂金が光つて居るやうな心地のすることがあるが、カライイルの論文もこれに似通つて居る。メレヂスが、これを「果樹園の大風」に譬へたのは面白い。(栗原古城)**カスタリヤ** [Castalia] 希臘デルファイ附近なるバルナサス山中にある、アポロ、ミモズ二神の神泉にして、古來神託を乞ふものは此

カセドラル [Cathedral]

本山、又は中央會堂と譯す。

雅俗折衷體

(甲) 稗史體は地の文を綴るには雅言七八分の雅俗折衷の文を用ゐ、詞を綴るには雅言五六分の雅俗折衷文を用ふ、さるからに地と詞と直齟齬するが如き患もなし……且つ漢土の語をさへ其の折々にまじへ用ひて國語の不足を補ふ故富麗幽婉の狀にいたれば倭文の嫺雅なるものをもて之を彩飾り宏壯激越の模様を叙するには漢語の雄健なるものを選択してその足らざる所を補ふ……(乙) 草冊子體はその稗史體と異る所以は單に俗語を用ふることの多きと漢語を用ふることの少きとにあり。(坪内逍遙)

硬い心、軟い心 [Tuff mind: Tendert mind]

——シエナスが言つた硬い心と軟い心との縫れ合ひ、換言すれば強い心と冷い心と弱い心との重なり合ひ、人間性の智の流と情意の流との渦まき、唯物的現實的科學的面側の唯心的理想的宗教的側面との葛藤——(山田檳榔)**畫題の平凡** 浪漫派以前の文藝では、とゞかく

カタストロフ [Catastrophe]

大破綻——

舊派の小説ではみな閉結 Exposition にはじまり最頂點 Climax へ行つて最後の大破綻 Catastrophe でみな人物事件のかた付くといふことになつて居る。

客觀 [Objective]

自己以外の他物または意識の目的物、即ち主たるもの對象にして自己または意識に觀察せらるゝ一切の外物をいふ。(主觀の對) 言ひ換ゆれば、知るもの(即ち主觀)に對して其知るものをいふ。知るものは自己にして、知らるゝものは自己以外のものなり。即ち自己以外のものは凡べて客觀なりといひ得べし又自己と雖も、其一部を離し自己以外のものとして觀るときは客觀なり。

客觀的 [Objective]

或物事を自己又は意識の對象として觀察するにいふ。即ち客觀を主とす

活動嫌悪 [Abhorrence of activity]

者には心意虚弱の傾向あり。こは境遇の如何に因つて或は厭世的傾向となり或は總ての人間に對する漠然たる恐怖となり或は自己に對する嫌惡となる。是等種々なる變質の特徴と關聯して活動に對する嫌惡あり。こは腦に於ける遺傳的缺點より生ずるものなれども當人はそれには氣付かず、自己の自由意志に由りて活動を卑しむものゝ如く考へ又其の考へを道理あるものと見せかけんとして或は出世間の哲學を作り世間と人に對する侮蔑を言ひ表す。涅槃は人心の到達すべき最も價値ある状態なりなど論ずるに至るなり。(マクスノルドウ)

家庭小説

明治三十五年頃の文壇に頭角を表はせし小説の一種。その代表的作家は徳富蘆花中村春雨、菊池幽芳、田口掬江の諸氏にして、その作品は何れも道徳的觀念を基礎として婦女子の同情を惹くべき如き葛藤を寫せるものにして、一般家庭に入るゝも差支なしといふ意味にて家庭小説の稱を得たり。その代表作たる「不如婦」黒潮「蘆花」己が罪「乳姉妹」幽芳「無

花果(春雨)「女夫波」伯爵夫人「片男波」(掬江)等は、孰れも上中流の社會を描寫し、清き變愛、悔悟、友情など、所謂家庭道徳の美を發揮せんとせしものなり。

過渡 [Transition]

物事が或状態より他の状態に移り變り行く途中の状態をいふ。

カドマス [Cadmus]

希臘神話に、フイシニヤ王アッソルの子にしてシープスを創設し、埃及より字母十六字を輸入し又眞鍮を發明すと稱せらる。

悲を経て喜 [Durch Leiden Freude]

ランのヒロイズムは一面行爲に於ての努力主義となつて現はれた彼は人生を一個の戰場と見てゐる。運命の意地悪い様々な試験に打克つて自分の手で自分の運命を創造して行くのが人間の進むべき唯一の途である。でローランの努力主義の蔭には必然に忍苦が附き纏つてゐる。彼の崇拜するベートーベンの箴言なる「悲を経て喜べ」は彼の努力主義の秘訣である。(中澤臨川) 無節操 イブセンが興味を感じたのは單に個々の人格の發展、只それのみである。此點から云ふと渠と現代の社會との間にはどうしても其處に橋渡しの出来ない溝渠がある。社會は彼にと

可能性 [Possibility]

現在は巧みならずも行へば巧みになる性質をいふ。

カノーパス [Canopus]

アレキサンドリヤ府の東北十五哩。埃及古代の都府にして諸種の古蹟存す。

カバリズム [Cabalism]

希伯來の神秘哲學にしてカバリ教或は神秘説と謂ふ。

カバレッツ [Cabaret]

酒店。

雅文體

優柔にして閑雅なれば、婉曲富麗の文をなすには自ら適ひたりといへども惜いかな活潑豪宕の氣なし。…跌宕(サブリティ)と富麗(ビウチ)と哀情(ペリス)と滑稽(リヂクラスネツス)とは小説の文章には離るべからざる者なるから此の四個の唯一をだに缺乏なしたるものならむにはよしや其の場合に於て如何なる妙用ありとも完全なる文體とは云ひがたし。(坪内逍遙)

神の死

「神の死」を叫ぶだニイチェの言葉は、現實を回避した生活にこそ神人融交の境があるかの如く思ひ込むのである人々、たゞ神の觀察を

カメオ [Cameo]

浮彫を施せる寶石。多くは暗赤色の地に白き浮彫を施す。

カメロットの城

一九〇三年に出でたる第二のアール王傳説戯曲「ランパール」Lanvalは「ガワーン」曲の總ての長所を有するのみならずシユトウツケンが作中最優秀なるものとされて居る。カメロット城は此の作に出て來るのである——アール王の王女リオイルスは圓卓の一騎士ランポールを戀する、騎士も亦た波女を愛

築き上げる事にのみ心を腐らしてみづからの心臓の鼓動を披しようとしなない人々にとつては、たしかに恐るべき一撃の雷火であつた。しかしながら、私たちがツアラトウストラをして叫ばしめたニイチェの此の言葉を一團に胃液の罪に問はるべき表白としてのみ取扱ふやうな暴を敢てしてはならない。そして此の表白の背景には強い眞實味に貫かれた新らしき世界の曙を喚ばうとする眞實な心の躍動があつたことを忘れてはならない。功利主義に毒された基督教的假面を剥ぎとつて個人としての生存欲乃至權力欲の核心に無限に新なる神の力を認めやうとするだけの自覺が伴つて居た事を忘れてはならない。(内藤濯)

するものゝ、一夜カメロット城に近き處女湖は白鳥處女フイングラの來り浴するを見て其美しさに魅せられていたく彼女を慕ふ。云々

假面喜劇 [Comedy of masks] リレエグー派の歎賞する伊太利中世の假面喜劇、これは田舎祭の滑稽から始つたものと云はれる。脚本といふものは一言一句も書かれなくて只一座の長が座中の役者に大體の筋を話すのである。一座の喜劇役者は其の筋に依つて芝居を演じながら、各々自分の臺詞を即興で拵へて行くといふ仕組である。しかも、モリエールの最初の長い喜劇、「輕卒家」は實にこの假面喜劇から生れ出て居ると云はれる。

カモラリズム [Camorralism] 伊太利の山中における惡漢の秘密結社にて一八六〇年の如き内務大臣リポリオロマノは此の秘密結社の勢を利用して政策を進行した。ことさへある。
カリオペー [Calliope] ミューズの女神の隨一。叙事詩を司る。通常其像は書冊・筆等を手にせり。

カリカチュア [Caricature] 戯畫、諷刺畫、ボリツト畫と譯す。
迦利陀沙 の梵文學は印度の沙翁なり、獨のダ

ーテをして驚嘆せしめたる程の印度の大文學にして、實に印度の古典として優波尼沙士につぐものなり。

カリフ [Calif] 回々教祖マホメットの代々の繼承者、回教國の教主兼國王。
カルチュア [Culture] 教化、文化、又は修養と譯す。
カルヴィニズム [Calvinism] カルヴィン教、即ち佛國神學者ジョンカルヴィンの開きし宗流なり。

カルメン [Carmen] メリメエの小説カルメンに基いたものである。一八七五年作者歿年始めてボリーのオペラコミック (Opera Comique) で演奏された。ピゼエは始めてフランスのオペラにワグネルの感化を傳へた人である。此の作は作者ヒゼエの天才を最も能く代表する作として近代フランスオペラの傑作の一つになつてゐる。(ピゼエ)

萬花鏡 [Kaleidoscope] 又は錦眼鏡、五色眼鏡ともいふ。
カレドニアン [Caledonian] 舞踏の一種。
間韻 一行のうちに対応する脚韻の様なものがある。これは毎韻合はせと同一になることもあ

るが、二句切れの調で、その句切に來るなら、はつきりした効がある。即ち

婆さん齒かけ、爺さん腰抜けのやうなものである。(泡鳴)

感覺 [Sensation] 感覺器により外界の刺激を神經に傳へて、これを感受する精神作用。即ち耳目・口・鼻・肌の五の官能によりて、外部よりの刺激に感ずる心の働きにして、見る・聽く・味ふ・嗅ぐ・觸れる等は皆感覺なり。

感覺主義 [Sensualism] 擬古主義は自然主義と同様に冷靜な主智的傾向の文藝ではあるが前者ほど、Reasonを中心とし、Rationalisticな傾向をもつてゐるところに其の特色がある。しかるに經驗と觀察とを重むる自然科學の方では、元來が感覺と知覺とに重きを置くのだから之に影響せられた自然派文藝の特色もこのつから又此點にあるのは云ふまでもない。しかし之は當時勃興した科學の力によるばかりではなく、十八世紀のCandillacの感覺主義の哲學なども有力な影響を與へたのである。即ち經驗を感覺と同一視し、感覺を以て認識の大本と見なして、すべての智識は皆感覺の結合であると見る説だ。現にフロオベールの作品などには、

此の哲學説が尠からず感化を及ぼして居る。(厨川白村)

間隔説 ショルツはエルンストが範を希臘劇に取つた如く劇曲の間隔説を提起して居る。則ち看客は自己及其煩瑣なる社會を想起しない爲に大なる格調の劇曲は遠隔なる若くは空想的時代に材を取る方が利益であると言ふのである。

感覺的描寫 感覺を主として描寫すること。又官能描寫ともいふ。

感覺論 [Sensualism] 一切の知識は感覺より來るとなす説にして、外界の刺激、腦に傳はりて感覺となり、此感覺蓄積して諸種の高尙なる智識を生ずとなす認識論上の見解。代表者はモック、コンデイヤック等。

感覺的衝動及び感情の満足は道德的活動の究竟目的なりとの倫理説。エビクロス等唱導す。
眼球顫動 [Nystagmus] 近頃の畫家の間に見受けらる、異様な畫風も亦變質及びヒステリーの研究に依つて了解せらる。眼球が顫動する所の變質畫家に取つては自然界のあらゆる事物が悉く顫動するが如く見え總てのものに落着きがなく確然たる輪廓を有せざるが如くに見ゆるなり。斯る畫家が自己は眞面目にして自然を

見るがまゝに描きつゝありと言はゞそは儘かに眞實なり唯彼等の眼球が傾へるが爲め固定せるものも動搖せるが如くに表さるゝのみ。(マクスノルドウ)

換骨脱胎 骨をとりかへ胎をとるの義にて、詩文などを作るに、他の人の作の主意をとり其組立を異にするにいふ。

観察 [Observation] 物事によく注意してみまきらむること。事物の現象につき自然の状態のままに研究し観察すること。

鑑識 [Appreciation] 物事を見分くるちから趣味を見得るちから。俗にめきといふ。

鑑賞 [Appreciation] 其善き所・悪き所を見分け、其物の味ひを噛みしめて見るといふこと。其意味を味ふといふことにて、鑑賞・観察等の語より意味更に深し。

感受 [Reception] 感覺神經によりて外界の刺激を知得する。直觀的に對象を受容すること。

感受性 [Receptivity] 又は [Susceptibility] 感覺の能または直觀の力。天性・生育・癡鈍・平均等の事情によりて組織せらるゝものとす。

感情 [Feeling] 快とか不快とか、或は好きとか嫌ひとか、憎しとか可愛しとか、又喜・怒・哀・樂といふが如き心の働きをいふ。常に感覺又は觀念に伴ふものにして、自身獨立に起ることなし。概し感覺または觀念の度の中庸を得る時は快感を生じ、甚しく強きか又甚しく弱き時は不快感を生ず。

感傷主義 [Sentimentalism] 又、主情主義といふ。十九世紀の初頃よりロマンチズムに伴ふて流行したるもの。感傷的の心持にて、空想的・厭世的なる傾向。

感傷的 [Sentimental] 物に感じ易く涙もろき傾向にて、十六・七歳より二十歳頃までの人々の心持は多くこの傾向を有す。

感情的證明 自個の意見を述ぶるに或る感情を以て對者の心を包圍することを要す。對者の信用を博する原因が三つある。第一は知識第二は徳第三は聽者に對する善意即ち(爲めを思ふ心)である。之を倫理的證明とも云ふ。

鑑賞批評 鑑賞を主とする文藝批評の一種にして從來の缺點を探し出して批評するに對し其長所を味ひ、其味ひを説明するをいふ。**慣性** [Inertia] 又、惰性ともいふ。物體が外

物の力の作用を受けざる間は、静止若くは運動の状態を變ぜざること。

勸懲主義 [Didacticism] 善をすゝめ惡をこらしむる目的となす主義。

勸懲小説 勸懲小説は英語にては「ダイダクチックノベル」と稱して専ら獎誡を主眼として人物を作り脚色を構へて世を諷諷せんとつとむるものなり。曲亭以後の著作は概し此の種の者と思はる。勸懲小説におのづから二種の別あり。一を褒響といひ、一を誹刺といふ。褒響は仁義體智等の入行を本として將に全稱の列傳を設け其行爲の尊すべく仰ぐべきを示して讀者をしておのづからこれを敬慕するの念を起さしめて眼々裡に良道に導かんことを期す。馬琴が仁義入行を列傳として八犬士傳を綴り、智人勇を人に擬して朝夷奈巡島記をあめる皆此の主意に外ならざるべし。誹刺は全く之に反して暴虐非道を行爲をのべ若くは不義不孝の狀をあらはし、あるは痴愚の笑ふべきを寫しあるは醜行の恥べきを描きつゝつて順誠せんとつとむるものなり、曲亭翁の夢想兵衛の物語式亭三馬の浮世床浮世風呂をはじめとして福内鬼外の戯作類は總じて此の類の物と思はる。さはあれ馬琴の著作の如

きは概し褒響と誹刺とを兼たり。殊に晩年の作に於ては褒貶自在にものせしものある美少年録の如きは其例なり。また誹刺法にも二様ありて嚴正なる事馬琴の美少年録の如きものあり。或は滑稽洒落にして一讀人を笑はしむる鬼外の戯作に類するものあり。(坪内雄藏)

カンチンスキイの藝術 [Kandinsky] 露國人にて新繪畫藝術の天才。——カンチンスキイの作畫を以て全然對象を缺きたるものと思惟するものあらば誤りに候。彼の畫には物的モチーフを缺き居候得共精神的モチーフに満ち居るものに候。これはカンチンスキイが音樂に對して並ならぬ感能を有し居ることに思ひ合はせる必要の有之候。彼の描けるもの決して世の人の思ふが如く抽象は無之、その、ちには測るべからざる精神的感受情態を現はし居り候。それを現はす爲めに或一定の強さ、廣さ、高さをもてる色の聯合によつてなしたるものに候。それ故彼の畫は意味深き配合秩序をもつてみだされたる表出に外ならず候。(澤木精)

感動 [Emotion] 深く心にしみ感ずること。物事に感じて起る急激にして倏忽なる精神の興奮。

感動本位

前田夕暮氏の和歌における主張、和歌は感動を本位にして詠ぜざるべからずと云ふ白日社の歌風はこれなり。

観念 [Idea]

また表象、寫象ともいふ。意識の内にて把持せられたる寫象、即ち俗に感ず・思ふなどいふ是なり。又感覺・知覺等と區別して現在の刺戟なしに起る記憶心像、例へば眼前に花を見ざるも、嘗て花を見たる記憶より、花の形・花の匂の心のうちに浮び來るが如きをいふ。即ち想像とか概念とかいふものも皆觀念の一種なり。

以上は心理學上の説明なれど、更に哲學上に於ては、プラトンに、概念の内容をなす事物の常住不變なる本質にして、彼に従へば是のみが眞在にして個々の物は其影響に過ぎずと説述せり。

観念小説 [Idea novel]

題材を結構するに當り豫め罪惡・義務等道德上の觀念又は理想を寓するを目的とする小説。理想小説といふも稍同じ。

その主觀的傾向からして描寫が矢張抽象となり論文めいて居た。泉鏡花・川上眉山等の小説に此の種のものが多い。或る觀念によつて作者が結

構をなしたるもの、明三十五六年頃の小説界の風潮なり。

観念論 [Idealism]

吾人の認識する外物は、主觀的觀察に止まりて必ずしも正當のものにあらず、吾人の認識する世界は單に吾人の觀念に外ならずといふ哲學上の認識論の一派（實在論の對）。

官能 [Senses]

動物が生活の爲めにする種々の機官のはたらき、例へば肺臟にて空氣を呼吸する等の如し又機能ともいふ。

キ

キー・ノート [Key note]

音樂に於て或調子の土臺の音をいひ、主調音又は基調と譯す。此義より轉じてすべて思想の根柢をなす思想を、其思想のキー・ノートといふ。

記憶術 [Memories]

或物事に聯結して器械的に記憶を便ならしむる方法。

機械的 [Mechanical]

機械が物理的に動力の爲に動くが如き動作。

機械的感覚

感覺神經を刺戟せらるゝにより

て起る直接の感覺・即ち視覺・感覺などの如き是れなり。

機械的世界觀

世界を機械のやうに觀察するといふことにて、世界の現象は皆物理學の方則に支配せられ居り、夫れ以上の力、生命力若くは靈魂の力とか云ふ如きものなしと考ふることなり。唯物論者又は自然主義者の多くは、この機械的世界觀を有す。

機械論 [Mechanism]

スピノザ、デモクリタス、ホップス其他唯物論者の唱ふる、萬有或は其一部を原因結果の關係によりて機械的に説明し、宇宙人生には別に意義・目的あるにあらずとなす説。(目的論の對)

器樂派 [Instrumentalists]

各聲音に對し一定の色彩感情を結合せしめ言葉は單に音樂的情情を喚起するのみならず同時に色彩の調和をも生ぜざるべからず、此狂的觀念はアルチュエールランボアの母音 (les voyelles) と題する詩に其の源を發せり其の最初の一行は

機關紙

A 黒、E 白、I 赤、O 藍 (マクスノルドウ) 其もの、機關となり、其のものに利益ある報告又は言論を力むる新聞紙・雜誌等ないふ。

戯曲 [Drama]

又、劇詩ともいふ。劇に演ずるを本念とする長篇の詩にして、叙事詩・抒情詩と共に詩の三大部門をなす。人物及び事件を客觀的に描出するは叙事詩に似たれども、著者一作中の人物に同化し、其肚裏に入りて物言ふが如きより見れば、全篇主觀的なる抒情詩の連續とも見らる。叙事に抒情を兼ね、客觀的にして且つ主觀的なるを本領とす。社會劇・靜劇・樂劇・喜劇・悲劇等あり。

菊五郎式

團十郎は極めて天才肌であつたから彼れは舞臺に上る時に、自分の舞臺上の位置と見物席から之れを望む時の具合とを想像して、白粉を塗り、眉を描き紅を捺るにも一々筆を以てせず無雜作に指で捺りつけて出場して居た。またそれで舞臺姿は立派であつたと傳へられることら、團十郎の天才的などころであらう菊五郎となると、あれ丈け年をとつてからも、三浦之助をしたり、辨天小僧をしたりして居た程だから、化粧の如き極めて念入りで菊五郎一人の爲め幕合が延びる位の事があつた。天才を除いては、文を作るに菊五郎式であつた方がよからうかと思ふ。紅葉山人が菊五郎式であつた。(高田早苗)

喜劇 [Comedy] 戯曲の一種。看客に歡笑の

感を催さしむる脚色の演劇にして、滑稽趣味ありて輕快洒脱、多くは幸福に終る。(悲劇の對)

喜見城 印度神話に帝釋天^{クティンヤ}の居所。須彌山^{シュミ}の頂上なる初利天^{チウリ}の中央にあり、鈍金にて作り珍寶珠玉を飾るといふ。

危険なる年齢 カリン・ミアエリス女史の作

で「エルツエ・リントネル」の姉妹篇である、女の一番道徳的に危険なる中年を描いたものである。女の中年三十歳四十歳頃のことを云ふ。

技巧 [Art] 藝術上の形式、即ち文章又は構圖等に費されたる苦心をいふ。

技巧歌 [Art-song] 民謡の發達したもの。(民謡の部参照)

技巧詩 修辭上の巧みを生命とする詩人の作を技巧詩といふ。其の主張者ともいふべきは佛のホードレイルである。

擬古主義 [Classicism] 又、尙古主義、古典主義ともいふ。内容よりも形式を重んじ、感情よりも智識を重んじ、形式を整へて事を主とし前人の遺し置ける標準即ち古典の型を重んずる主義。従つて模倣に陥り個性とか獨創とかいふ

ものなく、且つ活き／＼とせる趣に乏し。十八世紀の佛蘭西の藝術を中心とせる藝術は概れこの傾向なり。

擬人 [Personification] 擬人は或は活喻、生

化(Animation)と云つてもよい。生命の無い物に生命を與へ、動かぬものを動かさしめ、言葉なきものに物いはしむる文飾、言ひ換へれば無生物を生化し、無生物、下等動物、或は精神作用等を人間化する修飾である。例へば「月は雲井に寝しづまり、松は嵐に射して」白露や無分別なるおきどころ」の類をいふ。

貴人族の理想 イブセンが懷抱して居た第二

の最愛の思想は貴人族の理想である。イブセンは千八百八十五年六月十四日ドントハイムに於ける労働者の集會に於て國家的生活、政府、代議政治及新聞界に貴族的要素が生じなくてはならぬ、余の所謂貴族とは門地又は金錢の貴族ではなく科學の貴族、天才天賦の貴族でもなく、性格意思及心術の貴族である。たゞかゝる貴族のみ吾々スカンヂナビア人を自由にすることもであると説いた。(片山孤村)

擬人法 擬人法を活喻法とも云つて居ります。英語のパーソニフィケーションといふのはパー

ギター [Guitar] 六絃琴と譯す。

規定命題 [Categorical proposition] 論理學上の語。特殊の概念に從屬せしめ、これによりて断定したる命題。例へば「火は熱きものなり」といふ命題の如し。

機智 [Wit] よく活動する才智をいふ。

ギツシグ型 ゴツとギツシグ型の性格の特色をあげて見るならば、第一に排妥協的である。非常な學究的純性がある。しかも社會から何等信用をうけぬ。甚だしく貧乏である。彼は第二意義的な仕事は一切手にせぬ。昔のストイシズムに似た處があるが、彼は一切に對して

him Admirai であるから苦行そのものに信賴して居らぬ。彼は遂に物質的華美な生活を不斷に憧憬しながら、加之もポドレエル一派の惡魔詩人の如くに刹那の爛醉に無我の境に達することとも出来ればその無我恍惚を尊重もしない。一面で三十年勤續の小學校老教師の如く不景氣な忍耐の寂寞に我慢して居る。(加藤朝鳥)

歸納法 [Induction] 演繹法と相對して論理

の二大法をなす。許多の事實を集めて一致の點を求め、其中に存する原理を案出し、更に之よ

機制論 宇宙の現象を因果律の行動により生じ

たる偶然の結果となす哲學上の説(目的論の對)

(鳥村抱月)

とあるなるども最もよいこの例であります。夏草のおもひ萎えて忍ばれん妹が門見ん靡けこの山。

り最高理に論及する法。即ち特殊の事實より普遍的立言に論じ到る法。例へば「甲は死せり」「乙は死せり」「丙丁も亦死せり」といふ特殊の事實より推理して、「故に凡べての人は皆死すべし」といふ普遍的なる立言に論じ到るを得るが如し。

規範學 又規範科學ともいふ。規範となるべき學術を指す。例せば倫理學は行為の規範を、論理學は思想の規範を、美學は感情の規範を示すが如し。

羈絆藝術 實用に束縛される藝術。自由藝術に對した言葉。工藝藝術、應用美術は之れに屬する。

擬物詩 どの叙情詩體を以つてしても事物を擬して之に作者の感想をよせてするのを擬物詩といふ。英のキイツの作品、我が國ではキイツをまねて盛んに作つた泣菫の作とかさうである。(泡鳴)

氣分[Mood] 心持ちといふことにて、情調といふに同じ。物には皆夫々特殊の氣分あり、文章を書くには此氣分を書き出すこと最も大切なリ。

詭辯 理を非に曲げ、好みて奇怪なる説をなす

こと、又は其議論をいふ。**詭辯學派[Sophism]** 紀元前五世紀頃、希臘にてプロタゴラス、ゴルギアス等によりて唱へられし一派の哲學。不易の眞理なるもの存することなく、眞理はたゞ吾人の觀念に對して存するのみといふ説。

キミレーラ[Chimera] ホーマーが歌つた荒誕無稽の怪物、マリのノトルダム寺院の屋根に澤山ある。その視線のあつまる處に幸福がかくれて居ると噂されて居る。

脚本[Drarna] 戯曲の仕組又は舞臺の模様、役者のせりふ等を記載せる臺帳。文學の形式よりいへば西洋のドラマに該當す。

脚色[Plot] 戯曲又は小説等に於て、人物や事件を種々に仕組む、其仕組みをいふ。

キャプチン[Capuchin] フランシス派の托鉢僧即ちキャプチン僧徒、又往時婦人用の頭巾附外衣とか或は頭巾の意味にも用ひらる。

究竟原理 普通の科學の或事實を假定して説明せる特殊の原理の上に立ち、すべて普遍的にして且つ假定にあらざる第一原理の稱。即ち哲學にて説明するところの原理これなり。

泣菫調 泣菫調なるものは、如何なる點に其の

重なる特徴を持つて居たかといふに、先づ第一には古語の復活、時には故らに耳遠いものを選んで來たかと思はれるやうな古語、廢語を採用することであつた。「ありきの枝に」「嚴の噴」などは其の極端なるもので、また、最もよく其傾向を表はして居る。泣菫調第二の著しい特徴は、本來抽象的な概念に、具體的な形を與へるといふ事であつた。「努力の濕ひ」「思慧の影」「沈黙の樹」「宿世の脚の忍びありき」「追憶の落葉」などは其例である。(生田長江)

キュービズム 三角派立方體法[Cubism]

最近巴里に起つた一畫派、その主張は彼の印象派新印象派の光線本位色彩本位に反抗し動學說的思想から物象の體積を研究し、畫面上立體の感じを表はさうとするにある。立體の單位が正四面體即ちピラミッド型なるより三角を以つて畫の單位として居る。自然の内面的眞を洞察したセザンヌの繪畫は即ちキュービズムの芽芽があつた。此の派の頭領はパブロ・ピカソと目されて居るが、ジャン・メッソンガー・アンドレ・ラタン、ジョーシブ・ラーク、アルベール・グレース等も此の運動に加はつて、特にグレースメッソンガー

等は理論を公けにした。同じキュービズムに屬するなかにも自然の再現の程度に於て多少の差異がある。最近のピカソの諸作の如きに至つては最早再現の分子を缺くに至る。

キューピット[Cupid] 希臘神話にいふ戀愛の神。マーキュリとベナスとの間の子。其像は普通裸體に翼を負へる盲目の小兒が弓に矢を番へたる姿。一たび其矢に心を射られたる者は、切なる戀愛の情に胸を灼かるゝといふ。羅馬にてはエロスと稱す。

キューリオシティ[Curiosity] 好奇心、又は奇觀、精巧等と譯す。

虚榮[Vanity] 實際の價値もなき外見上のさかえ、又は空虚なるほまれ。

教訓詩[Didactic] 教訓的な詩。

聖き乞食 物質と富とは断じて藝術の友ではない。富たる者富を念ふ者富の世界に癡痺した者の偉大な文學を作らずまた之を味ふ能力のないは河の海に朝すると一般例のない眞理である。藝術家をして「聖き乞食」たらしめよ。(中澤臨川)

共産主義[Communism] 個人の私有を禁じ社會の總財産を社會を組織する各人の共有とし

消費または労働を平等ならしめんとする説。社會共產主義ともいふ。——マルクス曰く社會共有の生産及分配の外別に政治といふもの有るの理なし。一度社會共產制度實現せられて今日の如き資本家と労働者との闘争一朝にして已まらんか。在來のあらゆる社會上の罪惡は消滅して各個人は悉く歡樂幸福の生活を味ふに得べしと。

(金子馬治)

京傳鼻

山東京傳が「江戸生浮氣樺燒」のなかに艶次郎といふ自惚男の主人公がある。この艶次郎の鼻が、梅の花形に三つの輪で、挿繪に描かれたのが非常に流行し、遂に京傳鼻と云ふ名が出来た。(藤村作)

郷土藝術

後藤宙外が田園文學を主張してから十年おかれて(片山孤村が唱へたのは此の郷土藝術である。此の前に田山花袋、島崎藤村などが、頻りにローカルカラー(地方色)の事を説いたが、理論の上から云つて孤村が一番よく纏つて居る。彼の議論は我が小説壇とは遠く飛び離れた獨逸における郷土藝術運動の紹介であつて、リエンハルトの主張や郷土詩人グスターフ・フレンセンの文學を祖述し、世紀末的な文藝、デカダンの文藝が淺薄な物質主義から脱胎され

た廢頹の藝術に過ぎないと説き、最後に自然主義、寫實主義、象徵主義などは寧ろ技巧の變化に過ぎぬ。例へば予古の詩聖ホメーロは寫實的技巧に於ては或は小新聞の三面記者に劣つて居るかも知れぬが、ホメーロは不朽の生命を受け、三面記者は一日にして忘れて了ふ——けれども主として都會文學たるに過ぎぬ。氣宇狭小にして俗臭に満ちて居るのは勿論である。此の俗臭紛々たる市井の氣に代ふるに清新なる「土臭」[Erdbrauch]に富むだ郷土の野趣を以てするものが郷土藝術の目的である。郷土藝術は即ち「田園文學」では無いかと反問する人もあるだらうが、郷土藝術は歴史及び國土なる偉大なる根本感念に基いて居る點で、所謂「田園文學」よりも遙に進歩して居る。遂に實質である。又遙に廣大な目的を有つて居る。

即ち餘程藝術論の根柢に突進んだものであつて單に描寫上の問題たるローカルカラーの如きはその一部として包容の内にとゞまつて居る位である。單にローカルカラーと云ふ努力の上から云つて見れば、『浮雲』の長谷川二葉亭、『たけくらべ』

の樋口一葉の如きは無意識であつて。後藤宙外は田園趣味の鼓吹に過ぎ、その居を態々猪苗湖畔に卜したりなどした點で世間の注目を惹いたけれども、要するに取扱ふ材料を都會から田舎に擴張したのである。是を水平的努力と見るなら、孤村の郷土藝術論は意義の上から垂直的に高上を計つたものである。(朝鳥)

強迫觀念 [The predominance of obsessions]

殺人をなせし者が、始終・對手のむごたらしき死態が目先にちらつき其觀念の一刻も去らざる、又は酒を好む者が酒を見れば、飲まずには居られずといふが如き觀念をいふ。黨派を組む人々の間に於て其首領となる者には強迫觀念が著しく現はれ之に隨從する人々に於ては意志の薄弱病的暗示性の著しく現はれるを見る。此兩者に於ける兩種の現象が結黨的傾向の根柢をなす強迫觀念の所有者は最も教説の宣傳者に適す。知性の健全なる作用によりて到達する確信は其強さに於ては到底強迫觀念に及ばず。(マクス・ノルドウ)

恐怖の美 [Beau dans l'horrible]

ポトリエルは死、頹廢と又腐肉と燐火と耻とはいつても渠の詩境であつた。彼は恐怖の美を歌ふ詩人で

あつた。其の詩集「惡の華」といふ名が既に内容を語つて居る。人呼んでこれを地獄の書といひ罪惡の聖書といふに至つた。(惡の華参照)

興味 [Interest]

俗にいふ面白みにて、別に自己の意志を働かすことなく、心にひきつけられて樂みを感じるをいふ。

享樂主義

享樂即ち樂みを享くるを以て人生の目的となす主義。倫理學にては快樂主義、藝術上にては唯美主義といふ。各項参照。

學隅 [Synecdoche]

一部分を舉げて全體を察せしめ、文章に餘韻あらしめるもの、例へば「高襟をつけた男」をハイカラといひ「廂髪を結うた女」をヒサシといひ、或は簀を着た男と笠をかぶつた男とが並び行くことを「五月雨や物語り行く簀と笠」といふ類である。

ギョツツ

獨逸のゲーテの名作「ギョツツ」の中の主人公ギョツツは實に勇壯な率直な正しい武士道の典型とも見るべき立派な人格で副主人公たるワイスリンゲンの武士らしからざる態度と全然反對の感じを與へる。

虛無主義 [Nihilism]

神をも信ぜず道徳の權威をも認めず、政治・宗教其他社會上の一切の制度を否認し、之を打破せんとする心持より出で

たる主義にして、政治上に現はれては共產主義となり、無政府主義となり、人生觀上に現はれては自然主義的思想となれり。

虚無の郷 [Where there is Nothing]

エーッの作つた戯曲の名である。そのなかに極端な宗教信仰破壊者たる Paul Ruledge といふ虚無思想の権化ともいふべき奇人を描き、その結末の一例に「何物もなきところこそ神はあれ Where is Nothing there is god」と云はせて居る。シヨウにも此の思想がある。シヨウが道徳に關して「最上の法則とは法則なきをいふ」と云つて居ると同じく、愛蘭文學にはみな此の思想が共通して居る。(白村)

虚無没我

其物自身に何等の把持する所なく、たゞ對象を其儘受用すること。

希臘教 [Grecian Christianity]

基督教の舊教の一。希臘・露國等廣く東歐に行はる。

ギリシヤ建築

ギリシヤは理想的の國土である。空氣の透明な日光の常に輝々たる明い、山は紫に野は綠に參差たる港灣は地中海の碧波を湛へて常に靜かなる理想の國土である、此處にはユーフラテスもナイルもない代りに地中海の

水が直に東方アツタ諸國の文明を齎らし又數多の山岳に依つて分裂せしめられた國內の地方的關係は都市の發達並びに之に伴ふ其地方々々の殿堂建設を促がしながら一方には外敵に對する防備と著名なオリンピア祭に依つて國家統一を保つを得た。ギリシヤ建築の最大特色は調和と單純と統一にある。構造に三種の別がある即ち(一)ドリアン範(Doric order) (二)アイオニア範(Ionic order) (三)コリントス範(Corinthian)而して此の三範の交替は同時にギリシヤ建築の歴史的發展を語るものである。各項參照

希臘に歸れ

希臘のあらゆる藝術を支配したところの藝術に歸るやうにアングロサクソン人の心を用意することは英國詩壇數百年の要求であつた。西歐を取り圍むべきオプイマンの音楽に向つて三千年の昔に歸る事を求めた。希臘人に向つては音楽はあらゆる大思想、あらゆる藝術的靈感の根底であつた。彼等に向つて、音楽は秘奥の意義を持つて居た、蟄伏の能力を呼び醒まし思道を奮起せしめる力を持つて居た。(フランシスグリアスン)

希臘美術

一切の人生の問題は人間の性に萌して居る、時代々々の宗教も哲學も凡て之れを中

たものである。

ギロチン [Guillotine]

斷頭臺、又は截斷機と譯す。

實際主義 [Spectacular theory of art]

たゞ賣れることばかりをあてこんで藝術になつてはること。

金屬化

メタライズ

詩想の金屬化——ポドレルの魔的な自我崇拜と厭世觀と反語的無感動とは、渠をして天然自然並に社會に對して最も無愛と冷淡とにならしめた、その結果は人間の熱した情慾にもうす寒い燐火を燃えしめ、自分の愛する女をも地獄の寒烈に凍死せしめないではおかなかつた、苦痛を見るもたゞこれを冷靜に色と音とにほびとの印象に刻み、涙が自分の前に流れても、これが爲めに呼び起したのは水の流れる一風景ばかりであつた。「巴里つ兒の夢」は渠の理想の世界だ。草木もなく、太陽も星もなく、動作も騒音もなく、有るものは金屬とガラスとばかりだ。渠の知性的詩想は遂に所謂「錫の風景」を塑造しても、そこに一句毎に氣分を呼び起して、最も深刻な情緒を攫むことが出来た。(岩野泡鳴)

近代人

近代思想に浴したる人々をいふ。

近代神秘主義

神秘的靈感は、詩歌、藝術、

キリスト教式建築

三世紀間の迫害を経て

次第に強大な勢力を得たキリスト教時代の新興藝術として現はれた建築である。假令はサン、マテロ、サン、ヨハネ、ラテラン等の教會堂、構造はローマ時代の裁判所の構造から轉化して來

音楽哲學のいづれの製作をも、不朽のものとする必須の要素である。

靈感思想がとるところのあらゆる形式のうちで、藝術品と合致するところのものは、最も神秘的であるから、最も生氣があつて、最も美しい、最高の靈感は、藝術と智識の合一を要求する。そして、近代神秘主義は、中世に現れたところのものより廣く深い。過去の智識は、屢々、ドグマによつて弱められ行ひ難い理想によつて力を失つたのである。併し、古代に於てすら、最も優しい感情と最も高尚な思想とが藝術品に現れて居た。ヨブは散文的詩人であつた。プラトンは詩的哲學者であつた。ヨブの書いたものゝ永遠の魅力は、感情と言語とを一つのと考へるところに存するのだ。智識は深くある事が出来る。併し、曖昧な思想は最高の智識を有することが出来ない。故に最上の藝術は象徴的であり譬喩的であり得るけれども、思想は明晰で、形式は明確であらねばならぬ。そして神秘的法則は、内容と形式の一致を要求すると共に、新しい藝術家に缺く可らざるものは獨創であるとして居る。彼等が互に借り合ふのはよいけれども、模倣してはならぬ。靈感の劣つた

ものには、屢々、斯る例を見るのである。

(小澤愛園)

近代癖 [The Charlatanism of modernity]

近代癖のこと——ノルドウ博士曰く「ハウプトマンにして佛蘭西寫實主義派の人々より極端に無用なる『周圍』の描寫を借用したりとせば彼は又イブセンより『近代癖』と『問題熱』とを輸入したり。

欽定詩宗 [Poet laureat]

英國皇帝が詩人に授くる榮號。西曆千五百九十一年スパンサー此榮號を受けしより、始る號。爾後之を得し者十四人現代の欽定詩宗はアウスチン氏。

禁欲 [Ascet]

禁欲主義に依つて全くの ascet となり生活意志を絶滅し否定したる解脱の境に入らねばならぬ。この意志慾望の否定によつてこゝに初めて人界の苦境を脱し、絶對無の域に到達するので、之が佛教の所謂涅槃である、そして能くこの域に達し得るものは獨り大なる天才釋迦牟尼の如きあるのみ(シヨハンハウエル) マクスノルドウ曰く「トルストイの思想に於て著しき一つの點は彼は彼が其の思想の淺薄なることに思ひ及らざりしにあり。若し彼が自己を了解したらんに彼は唯一箇の點にのみ止まりし

ならん。即ちそれは禁慾といふ一點是れなり。何となれば若し人間が禁慾を實行することに依つて現在の人間を以て人間の終りとし人類全體が滅亡すべきものならば頭腦を悩まして人生の意義と價值とに就て考ふる必要もあらざるべければなり。

禁欲主義 [Stoicism; Asceticism]

制慾主義ともいふ。物質的・肉體的の一切の慾望若くは名譽・利益・富貴等を得んとする念慮を禁止するを以て、道徳に進む手段となす倫理學上の主義。

ク

クアイエチヌス [Quietism]

獨逸ロマンチストは植物教とも云つて居る。『青い花』を見よ。活動にももうき状態となす、腦力の缺乏と意志の薄弱なるが爲めにひたすら安逸無爲を貪る、然かも自分は獨り超然として Quietism の哲學われに有と云つた氣がする。(ノルダウ氏近代變質者の病的特徴論の中より)

寓意詩 [Allegory]

物に寓して自分の感想を述べ、一篇の本意が篇外に浮かんで居る様なもの

をいふ。寓意小説 [Allegorical novel] 言葉の外に或意味を含めて書きたる小説をさふ。

空間的藝術

繪畫・彫刻・建築等の如く空間を占領して成り立つ藝術を、音樂等の如き時間的藝術に對していふ。

空間美

繪畫・彫刻・建築等の稱(時間美の對)。猶、前項を参照せよ。

空氣の共有者 [The Commoner of air]

一定不斷の修練を要し連續せる集中力を要する職業に従事すること能はざる無能薄弱なる精神に美しき名稱を附し「藝術家氣質」「漂浪的天才」「脱俗超凡」などいふ言へり彼等は遲鈍なる俗物が機械的職業に従事するを嘲り社會上有力なる地位を占め繁文縟禮の渦中に小心翼翼たる凡人を蔑視す。彼等の理想とする所は所謂「空氣の共有者」にして朝露に浴し花下に眠り福音書中に於ける野の百合を身に纏ひ時に或は吟じ時に或は食を乞ふ輩なり斯くの如き生活の原理を模範的に歌へるものをリシユバインの『乞食の歌』とす。獨逸文學に現はれたるバウムバッハの『漂浪團の歌』『遊人の歌』の如き又此種の代表的作品である。(マクスノルドウ)

偶性 其ものゝ本來の性質にあらすして偶然に生じたる状態をいふ。

空想 [Fancy] 事實及び法則等に關係なく、其目的に達する手段も甚だ漠然とし、實用的よりも寧ろ快樂的若くは苦痛的にして、現實よりかけ隔りたる思想をいふ。其多くは偶然的に發作す。理想も空想も共に想像の一種なれど、理想には可能性あるも、空想には可能性なし。

偶像 [Idol] 木・石又は金屬等に作りたる像。

偶像教 偶像を宗教的客體として崇拜信仰し、之によりて苦痛を免れ慰安を得んと欲する宗教。佛教の如きは之に従屬す。

空想史詩 純正史詩のうち全く空想的考案であるが人生の要素を具體して居るのを空想史詩といふ。ダンテの「神喜曲」Divina Comedia並びにミルトンの「失樂園」Paradise Lostである。

偶像破壊 [Iconoclasm] 基督教にて傳導の必要上、三世紀頃より聖母・使徒・殉教者の畫像を用ひ、遂に像像禮拜の風を生ぜり。依て西曆七百二十六年東羅馬帝レオ三世は偶像禁止令を出して、從來慣習の上より無意味に崇拜し、思想や生活を支配せし偶像を破壊せしめ、其次帝又之を勵行せり。この偶像破壊は宗教上にも亦

贈つた傑作品の多くは自慰器である」と云ひ、又かく丸みのある長いものは人間の糞だといふ所から「ホルテックスは精力である。昔千五百年の間形圓の難渾な排泄物を出し、十七世紀まで流動物を出し、今や瓦斯のさゝやきを放射しつゝある。之れ歐洲に於て印象主義に墮落するまでの形式藝術の歴史である」と喝破して居るかくしてホルテックスは糞と生殖器とをこれ合はしたものだ」と云ふことは彼等自身も醉狂まぐれに云ふし、彼等の敵者も罵倒の辭句として居るのである。

具體的無限 物理学や心理学のやうな經驗科學ばかりでなく範疇科學即ち數學や論理學も最近に到つて一大革命を遂げた。ポアンカレが「古い論理は死んだ」と驚嘆したのは合理なことである。で、かやうな革命の最初の聲は現存する獨逸の數學者ゲオルグ・カントルに由つて擧げられた希臘の昔から思想家を惱ました大きな問題の「無限」に關する解釋であつた。それがいろ／＼な難問題を惹き起した。エレア學派のツェインが提出した有名な逆題（パラドックス）の如きはその一つである。それがカントルに到つて漸く正しい解釋を得た。今ま

哲學上にも盛んに行はれたり。

クー・デター [Coup d'etat] 斷行政略、非常政略等と譯する佛蘭西語。猛烈なる政略を斷行し又は暴斷を行ふこと。大老井伊直弼が安政の大獄を起して天下の志士を殺し、又近くは支那の袁世凱が己の政綱に反對する國會議員を捕縛せしが如きこれなり。

具現 [Embodiment] 具體的にあらはすと云ふこと。

草雙紙 徳川時代に行はれし一種の短篇小説。多くは平假名のみにて書き文少く挿繪多し。寶曆の頃より流行し始む。

具象 形象を具有すること。心理學上に於ては個體其まゝを寫象する心の作用をいふ。感覺・知覺・記憶等之に屬す。

具象美 個體に關する美をいふ。

具象名詞 形相を具有するものを表はす名詞。人・木・石・水等これなり。

糞と生殖器との藝術 ホルテックスの藝術の要がまるみのある突起物といふところから、男性の生殖器となり、曰く「丸みのある長物を曳つばつてシリンドラーを製した。之れは生殖多産のホルテックスである。彼等が吾々の爲めに

での考では無限とは唯だあらゆる極限を超過する空想的な或る量のやうに思はれてゐたものが、彼の證明に由れば無限は他の無限の數の如く明らかに存在する。換言すれば我等の想像上で Would passするばかりでなく事實 Has passedした所の「具體的無限」がある。此の發見が何れだけ科學や哲學に影響を及ぼしたか分らない。

(中澤臨川)

苦悶詩 [Struggle] 即ち心の苦悶を歌つた詩である。小説ではバンキンの「苦悶」があつてもこれは宗教的解決を待つて居る、淺薄な苦悶に過ぎなかつた。(泡鳴)

クライマックス [Climax] 修辭學上の漸層法をいふ。又最高點の意に用ふ。漸層法の項参照。

クラシシズム (古典派)——ギリシヤ藝術の風格、從つて凡そ其餘派を追ふところのクラシシズムの藝術は一言以て掩ふれば端麗完全といふことに盡きる。形式に微塵も滯滞のあとなく圓なるものは優麗、方なるものは端嚴、二つながら相調和して美しい中に威嚴あり、温い中に寒涼あるが如き感を入に與へる。端麗とは之れをいふのである。又完全とは其の作品の全部相

クウ

クテ

六五

諧應して一となり、屑々の未に至る迄凡そ彫琢せられ整頓せられて、部分としても、全體としても皆美しく、一毫も未完成、不徹底、無統一といふが如きを遺さざらんとするをいふ。此等クラシズムの特徴は、他語を以て言へば智性的形式であると共に、動的に對する靜的、心的に對する物的内面的に對する外面的、時間的に對する空間的である従つて其の表現する所は、凝固して平かな面となる。中にあるたけのものは悉く外に流れ出で、そこに結晶してしまふ。名目と意味とが一つになりて、名目だけの意味、意味だけの名目になる。之れを譬へば外形の奥に分け入つて、そこに隠れたる内容を認めるといふが如き縦の關係が無くなる。ヘーゲルがクラシズムを解して内容と外形との過不及なき美術といつたのは斯やうな範圍に於いて眞實であらう。(島村抱月)

クラシック【Classic】 古典と譯す。其項を見よ。

クラシック派【Classic】 昔の希臘美術の理想殊に彫刻に現れたる、理想を唯一の模範とする藝術家の一派。又近世佛蘭西のクラシック派は十九世紀の始めダビッド、アングル等の唱へし

古希臘美術理想を主義とせる畫派をいふ。**グラデーション** 美學上の形式法則の一、空間的度形及び色にあり、時間的には音にあり又内容上からもある、故に建築繪畫をはじめ工藝美術、音楽、詩文等にも用ひらる。

グラフストリート【Grub-street】 ロンドンの街の名前にて千八百三十年にはミルトン街と云ふ名前になる。貧乏文士の多く往める處、貧乏文士の、ツマラナキ、ヘボの貧乏文士連。

クリオー【Olio】 ミューズの女神の一にして歴史の司宰神。其像は巻物又は書冊を携ふ。

クリエーター【Creator】 創作者、創造者、又は造物主(即ち世界を作れる神)と譯す。

クリエート【Create】 創造する、創作すると譯す。

クリスマス・カロール【Christmas carol】 クリスマスの時、基督を褒めたゝへて歌ふ歌。チャルズサツケンスの小説に右を表題とせるものあり。

クリティーク【Critique】 批評、又は批評的と譯する佛蘭西語。其項を見よ。

クリムゾン【Crimson】 深紅色と譯す。

グロウミー【Gloomy】 陰氣なる、陰鬱なる慘愴なる、暗黒なる、暗き等と譯す。

グレース クレースは美と無邪氣な快樂と娛樂との三人の女神で希臘人から崇拜されて居た。彼等はあらゆる時代に畫家及び彫刻家の好大目になつて、一般に薔薇を冠にして踊つて居る處女として表現されて居る。

大作作家 グロウミーズウダアマン氏の技巧といふのは物に考へて見ると餘りに手の込み過ぎた技巧であつて藝術家の技巧といふよりも寧ろ職工の技巧である。荒けづりの木彫に見らるゝ落ついた趣きのある技巧にあらずしてモザイククに見らるゝ徒らに美しいコセ／＼とした技巧である。思想そのものを始めとして、人物も性格も凡てモザイククの美しさをもつたものに過ぎないものである。獨逸のある批評家が彼を稱して「大なる作家」であると云つたといふのも之が爲である。彼は作る人であつて、創る人ではないのである。彼はむしろコムパイラアである。非常に熟練なる編纂的モザイククの技巧をもつた天才であると思ふ。(若月紫蘭)

グローリー【Glory】 榮譽、光榮、高名、又は光輝、偉大等と譯す。

グロテスク【Grotesque】(英) グロテスクとは如何なるものを意味するかといふに、人間が自分の生命力を正當の道に向けずして、力はあるながら、それを歪めたまがつた方向へ轉せしめ、そして奇怪な厭ふべき生活の姿をしてゐることである。しかも其の態度には遊戯的なふざけた分子が多大に加はつてゐるのである。眞面目な構み、中心からの要求の充たされざる苦しみなどのあるのではなく、自分にある力を弄んでゐる醜さである。即ち墮落した姿である。我々の生活に於て、唯好奇心の爲めに動かされ、或は正當の、本來の道に向はずして、歪める道に向つて歩調を進める時、いつも其の姿が見えて來るのである。この態度を以て自然に向ひ、自然を寫し出したのが英國、佛蘭西などに見られる所謂十八世紀文學の自然である。フランスの所謂「グロテスク」派の詩人等が現はした自然の一二の例を此處に擧げて見ると「水道」のことを言ふのに「液體の蛇、その骨も髓も共にとろけて流れる」といひ、「一本の樹」のことをいふのに「倒まに立つ一匹の蜥蜴、それは大空を足もて蹴り「大地をば齒で噛んでゐる」といひ「獨身者」のことをいふのに「啞の妻を持つ人」と

いひ、「春」を現はすに、「木の葉といふ木の葉の形を備へ、ナインティンゲールの節を奏する」と云ひ、「鳥は歌をうたふ木の葉である」といふ。「月登る」といへば足りるものを「女神はその銀の角笛をさし上げる」といふ。――要するに自然に對して古代の人々の如く中心から感じた神秘的な感情を抱くのもなく、また真に山河草木が生氣あり生動するものであると感ずるのもなく、先人の言つた言葉について、それを他に面白可笑しくひねつて見たいといふ遊戯的な駄洒落的な気分から一層誇張したまがひものを作り出して來るのである。言葉の上の洒落に過ぎない。ボンチ世の、しかもその効力なき、愚なるボンチ世の如きものである。(吉江孤雁)

クロナス [Kronos]

希臘神話に、ゼウス前の神にて農業を司る。天ウラナス・地ゲエとの間に生まれ、父を逐ひて宇宙を統治せしも、己亦其子ピウナスに逐はるといふ。羅馬にてはサターインと稱す。其像は普通に鎌と砂漏とを携ふ。

クローラル [Chloral]

無色有香の油状化合物、一種の催眠にて刺戟性あり――彼の畫家詩人口セツテ Rossetti が最愛の妻に死に別れ其悲痛の爲めに起つた不眠症の苦みを逃れんが爲めに

クローラルを飲むだけ、後には段々その量をまして遂には是なくては全く眠れなくなつたといふ。

軍歌

軍の歌、テニソンの「輕騎隊進撃」Charge of the Light Brigade の様な類がさうである。

軍國主義

思想上に於て軍國主義の鼓吹者となつた者はトライチエケ(一八三四―九六)でありました。彼はカントからフイヒテへ、フイヒテからヘーゲルへと傳はつた理想主義に眞向から反對しました。またヘーゲルの思想の反動として生れたフオイエルバウハ、マルクス等の功利主義、社會主義にも強硬に反抗しました。

ヘーゲルが國家は人の總和であると云つたのに對して、トライチエケは國家は力であると説いてゐます。ヘーゲルが國家の外に且つ上に世界精神即ち神の精神なるものを認めてゐるに對して、トライチエケは唯だ Realpolitik の權威のみを力説して居ります。戦争を要求するのは政治的理想主義である。戦争を非難するのは實利主義である。と斯う云つてトライチエケは更にマルクス、エンゲルス等の傾向をも否定してゐます。(野上白川)

群婚 [Consanguine]

人間社會は、最初、性交

無制限の漠然たる動物群であつたらしく思はれるが、其間に種々の制限が加はつて、自然に血族群婚と名くべき家族制度を生じた。モルガンに從へば、此の血族群婚の家族こそ、人類最初の家族組織であつて、是に依つて人間の社會組織が頗る密接となり、鞏固となつた。無制限の性交は久しい年月の間に、漸次に種々なる制限を加へられたものであるが、先づ第一番に生じた制限は、代を異にする男女間の性交制限であつた。即ち親の代と子の代との性交が禁ぜられた。祖父母の代と孫の代との間にも性交が禁ぜられた。そして多數の兄弟と姉妹とが自然に一群の夫婦を成すに至つた。血族群婚の家族とは、即ち性交の制限が右の程度まで進んだ場合であつて、多數の兄弟の一群と姉妹の一群とが團體的に夫婦となつたのである。故に之を血族群婚の家族と云ふ。(堺利彦)

群集孤獨 [Crowded Solitudes]

都會生活の状態を群集孤獨と云ふのは面白い形容である。アンドレーフの小説の中にも群集に於ける寂寞感を描いた「都會」と題する短篇があるが、隨に都會は「群集せる孤獨」と見るが、深山幽谷に居るよりも更に痛切な情ないやうな狂氣を誘

はれるやうな淋しさを強ひられて來る。しかしながら此の孤獨感に意義ある近代人が正當な感ずべき孤獨感であるか、云ひかへればかゝる孤獨感を抱くことが眞の近代生活者が當然に近代生活の要件であるかの如くに眼前に正視し、胸を擴げてしみくその孤獨感を經驗味にして其處に一種の徹底した解決を持つべきであらうか。或はかくの如き畢竟狂的な一現象に過ぎざるべきものと觀すべきであらうか。此の間の事に就いては是非都會生活者の熟考せればならぬ重大な問題が所藏されて居る。(加藤朝鳥)

ケ

桂冠詩人

欽定詩宗に同じ。猶ほ月桂冠を見よ。

經驗 [Experience]

試み又はためしによりて得たる知識若くは技術。又感覺を通じて得たる知識。或は知識によりて結合せられたる智識。

經驗論 [Empiricism]

經驗以外に智識の根源なく、智識は悉く經驗によりて收得せざるべからずとなす哲學上認識論の一派(唯理論の對)ベーコンの創唱に係る。英國の哲學は概れ此傾向なり。又、經驗上より立てたる議論をいふ。

傾向小説 [Tendency novel] 作者が或主張

又は意見を抱き居て之を具體的に現したる小説。即ち自己の意見・主義を其作品中に書き、之によりて其意見・主張を世に廣めんとする目的にて書かれたる小説をさふ。

經濟界 [Economic circles] 人類社會の經濟活動の範圍、即ち交換・賣買等の行はるゝ社會をいふ。

經濟學 [Economics] 人類及び國家の財貨に對する關係を研究する科學にして、經濟學源理・經濟政策學及び財政學の三大部門に分つ。最近百數十年の發達に係る。

經濟史觀 [Oekonomische geschichtsauffassung] 人類の歴史を其の物質的方面、即ち經濟的關係、生産の現象によつてのみ闡明しやうとする見方の一つである。

經濟生活 獨逸社會共和主義の中堅マルクスは一切生活の基礎は經濟生活にして他の政治道徳・文藝・宗教の如きは要するに經濟生活の如何によりて後に發達せるものに過ぎず人類生活の中心又は基礎は物質生活なり。故に社會の進歩は經濟生活即ち物質生活の進歩に外ならず。物

質生活だに進歩せば他の精神生活の進歩の如きは期して俟つべしと。(金子馬治)

警察化 [Policees] 十九世紀の佛國の多くの社會學者は文明になることを「警察制度化したる民族」 Nations policees と云つて。文明が進むに従つて罪惡が多くなるからである。(禮儀正しい北アメリカ・インデアンに向つて、若しお前達を取締る爲めに警官が必要だと云つて見よ。彼等の憤怒の如何ばかりであるかを想像せよ。)

啓示 [Revelation] あらはし示す。教へ示す。

繫辭 [Exposition] 或物事又は言語に關する説明のことば。又論理學上に於ては、命題の主辭と賓辭とを結びつけて、吾定又は肯定をいひあらはすもの。例へば「人は動物なり」といふ命題に於ける「なり」の如き是れなり。

形而下 [Concrete] 形體を具有すること、即ち有形。又知覺せらるゝ現象の境界。(形而上の對)。

形而下學 [Concrete science] 有形のものに關する學問、即ち理化學、動植物學の類(形而上學の對)。

形式法則 [Formal Law] 藝術上の形式法則の一大原則は「多様の統一」である。それから

内延的形式に關する法則として統調・漸層調和・對照があり、外延的形式に關しては繰返・均齊・權衡等の法則がある。それをすべて形式法則と云ふ。

形而上 [Metaphysical] 形體の知覺すべからざるもの、即ち非物質。知覺せらるゝ現象を超越する境界。即ち精神・靈魂・實在・神等を指す。(形而下の對)。

形而上學 [Metaphysics] 有形を超越したる境界に關する學問、即ち哲學などの稱(形而下學の對)。

藝術 [Art] 廣き意味に解すれば、自然物又は科學に對し、人間の技巧・工夫に成り審美上の價値を有する一切の製作即ち技術の義にて、詩歌・小説・音樂・演劇・繪畫・彫刻・建築等の總稱となり、又狭き意義にては、美を形象に表現する、即ち専ら視官にかゝる藝術即ち美術の義にて、専ら繪畫・彫刻・建築等をいふ。

藝術家 [Artist] 藝術を業とする人。又は藝術に巧みなる人をいふ。

藝術活動 藝術活動が人間に全的活動、全人格的活動であるかないかと云ふ問題は、換言すれば人間の活動中には特に藝術的と稱すべき動力

があるかないかといふ問題に外ならない。自分は特殊なる藝術活動の存在を呪詛する。藝術即實生活即全人格的活動説を排否しない寧ろその急激なる勇敢なる直營現主張に對して多大の同感を抱いてゐる。藝術活動が個性の奥底より流れ出る生命力の發現であることは拒まれないからである。藝術品が藝術家人格の光被感應を蒙るべきものであることは熾焉たる事實であるからである。けれども自分は沒理解的に若しくは沒批判に藝術活動と一般人格活動とを等式化する根柢の淺い直感論に同意することは出来ない。人間の活動を心理的に見る時は、この種の無差別觀に執著する思想に關聯して幾多の疑ひを起さざるを得ない。藝術家の心的活動には宗教家や哲學者の心的活動と異なる特殊の分野の横はつてゐる事實を認めざるを得ないのである。(石坂養平)

藝術詩 「藝術の爲めの藝術」主義から、こと更に藝術そのものを目的として作つたものである。

藝術至上主義 藝術至上主義の母體である藝術の爲めの藝術主義が、一番鮮かに驕されたるは前世期末の英國文壇であつた。之れは佛蘭西

の藝術、獨逸の哲學がその所縁をなして居て、例へばボドレエルの「詩歌：：それ自身以外無目的である。詩歌は唯詩歌なるが故に眞に偉大で眞に崇敬で眞にその價値を存する。たゞ詩歌を綴るの快樂の爲めに詩歌は尊貴なるものである」と云ふことは藝術至上主義の根據をなして居る。後にワイルドが「總て藝術は人生の用をなさず、文學書に道德的とか、不道德的とかいふものは無い。問題は常に描かれたか、悪く描かれたかの吟味である。此吟味が全部である」と云ふに至つては惡魔主義傾向はワイルドを止めとして、英國の文學社會は遂に其の弊に堪へ得ず、文壇の中心興味は俄然として問題のなかり、極めて露骨な人生の爲め主義に移つてしまつた。當時の畫壇に於ける藝術至上主義者ホイストラーの藝術的努力を最近になつて英國の新進批評家アサプ・ランソム氏が「彼ホイストラーは舞文の蝶々である。此の蝶が熊蜂(惡魔主義)の針を藉りて華かな絶望でもつて英國社會の花岡岩の壁をバタ／＼羽ばたいた」と云つたのはテニズンのかの「シャロット妖姫」の歌と共に英國における藝術至上主義の末路を描き得て妙を極めて居る。(加藤朝鳥)

藝術對實人生

藝術と實人生とは丸で別のやうに考へる人もあれば、藝術と實人生とは同一のものだといふ風に考へる人もある。それからまた藝術と實人生との關係は則不則、離不離の間にあつて、即いていけず離れていけずといふ風に考へる人もある。

藝術的

「人生の爲の藝術」を人生的といふに對して、「藝術の爲の藝術」を藝術的といふことあり。一般には實用的即ち功利的に對していふ言葉なり。

藝術的法則 [Artistic canons]

絕對美

藝術殿 [The Palace of Art] 浪漫派文學の一面には藝術至上主義とも云ふべき傾があつ

た。即ちすべての藝術は藝術それ自分の爲めに獨立存在するもので決して他の問題に關係しない。世智辛い苦しい現在の生活に對して全く超然高踏の態度を取るべき者と唱へた。醜穢悲惨な此浮世をよそにして別に清く高く又樂しき「藝術の營」——詩人テニズンの歌つたやうな。The Palace of Art 或はサント・ブサヴ Sainte Beuve がギニーを評した時に云つた「象牙の塔」の中に獨り立ち籠らうといふ所謂「藝術の爲めの藝術」が其の主張の一面であつた。

藝術の革命

これは最近の繪畫革命運動を批評したもので、所謂立方派、未來派、後期印象派と云つて空騒ぎをやつて、ライフとリアルチイとのエッセンスを把握する事が出來ずに淺はかな概念の遊戲に狂奔して居る雜沓藝術家を罵倒して顔色なからしめて居る。

藝術の起源

オランダのヘルンの名著——近代歐洲に於ける數多き美學書中で其の研究法の最も新らしく、立論の材料の極めて豊富である點で有名である。即ち一切の美現象を心理學的論據と社會的事實とに徴してあく迄美を社會的現象の一として居る。従つて藝術對人生、藝

藝術對實生活の間

が熱心に論じられてある。

藝術の三資格

露のトルストイが佛のモーパッサンを批評して此の藝術の三資格を以てした。(1)表現の明美、(2)材料に對する公平無私即ち眞(3)材料に對する道德的誠實即ち廣義の善此の三つを列擧してモーパッサンは(1)と(2)とは立派に具へて居るが最も重要な第三の資格即ち純正なる道德的誠實を缺いて居るのは惜しい事だと云つて居る。即ち取扱つて居る材料に對して善と惡とを鑒識する重要な資格を缺いて居ると指摘して居る。

藝術の轉換 [Transposition of Art]

音畫

藝術の獨立性

藝術に獨立性と言ふことがあつて、つまり、作品がそれを作つた作者の手から離れて、立派に宇宙間に小天地をなして獨立してゐられるといふことを言ふのである。その獨立性といふことは尤も大切なことである。作者の解説とか、作者の傳記とかを併せ見なければその作品がわからないといふやうな點がなくつて、作品そのものだけで、立派にこの存在を主張することの出来るやうな作品を言ふのである。その獨立性は、多くこの自然に近い構圖と

いふ處から生れて來るのである。(田山花袋)
藝術派 「藝術の爲の藝術」を奉ずる人々を云ふ。「人生の爲の藝術」の人生派といふのに相對する。

藝術美 [Art beauty] 藝術によりて表現せられたる美。模倣する實體を離れ、美を唯一の目的となすもの。

藝術本能説 文學發生の動機には外部的な實用的なものゝある事は勿論であるが、一層主要なのは内部的の働き、即ち藝術本能である、更に此の藝術本能とは何ぞやと云へば(イ)遊戯本能説、(ロ)興樂本能説、(ハ)自我表現本能説のそれである。遊戯本能説とは、人間には自己保存及び生殖即ち衣食住や生殖作用の實用的精力以外に餘計な精力がある。それが遊戯本能である。藝術は此の遊戯本能だと説くのである。興樂本能説と云ふのは、人間には他を樂しませうといふ本能を以て居る、他を樂しませる事に依つて自分の周囲の者を引きつけやうとする本能的慾望を持つて居て、これから藝術が生れるといふのである。自我表現説とは人間には先天的に自分の本體を外へ表はしたいと云ふ本能的慾望を持つて居るので、そこから藝術が生れるの

だといふのだといふのである。
形體化 幾本かのマツチを無秩序に列べても之には何の意味も興味もない。しかし其れで一ツの八角形を作ると幾等か興味湧く、それは形體化する事に目的、計畫が含まれてあるからで今度は其マツチを又不完全乍らも一個の家或は動物を形作るとすれば、また八角形よりも一段と興味を引くものがある。街路から漏れ響いて來る噪音にしても同一である。最初耳に達するのは只意味も無い騒音の集合であるが、一ツの音響例へば馬蹄のリズミツクな響を隔離して見るに、丁度先例の八角形に類した程度の興味をそよる獨立した規則様された音律を得る事になる。今度は號外賣りが窓外に何事かを報ずるとすれば吾々は聴覚ばかりでなく理性をも働かす様になる。これはつまり此の音聲には表示的な意味が含まれてあるからである。
詩歌、繪畫、彫刻等は之の表示的の力量を取扱ふのであつて、即ち其の作品等は實に不完全な寫生や含意的音聲の擴張され、複雑化されたものである、つまり不完全なスケッチや含意的音聲と同じ様な使命を表示するもので只その齎し方が詳細に渉り使命がより念の入つたものであ

る丈である。(紀平正美)

系統 [System] 次第に順序を追ひつゞきつながら統一しあること。(Lineage) 一の原理或は法則の下に、個々の事物の間に存する一般の關係を順序をたてゝ列ねること。

系統全 [Organic whole] 例せば沙翁の諸作のこゝとく藝術品の完璧なものになると前後の脈路や照應が少しも亂れて居ない。有機的にまとまつて居る。之れを系統全と名づける。建築で所謂 Archi tectonic beauty = 統一美とも云ふべきものだ。

系統的發生 單純なる原始の状態より順序を追ふて、次第に複雑なる状態に進化すること(個體發生の對)。

輕文學 [Light literature] 吾人は小説を以つて輕文學といふを憚らぬ。輕文學にして大文學をなすものは尠い。時節といふ事を目的に出版せらるゝ新しい小説の生命の短さは夏の蟬同様である。然し之の論は又一般に何れも然りといふ理にも行かぬ。十九世紀中の大作は疑もない散文にある。善良なる文學特性といふものは、皆スコット、サツカレー、ジョー、エリオット又はホーゾンの作のなかにある。(ウヰンチエス)

形容詞 [Adjective] 文法上の語。品詞の一、事物の状態・性質・情意等を形容していふ語。美し・大なり・喜はし等の類。

痙攣派 [Spasmodic] もとカプティルがパイロンを評するのに用ひた言葉を借りて來て詩人エイトゥンが嘲弄的に厭生的神經過敏な一派を諷刺した名である——痙攣派の詩人の作にも懷疑厭生の悲調は屢々あらはれて居るが、之等とも皆矢張さきの浪漫的時代のパイロン或はハイン、シヨマン、ハウエル等の影響から來たものに他ならぬので(大陸北部の作家が直接現代の社會生活其のものに對する不満や苦痛を叫びだやうな現實的な痛切なものではなかつた。(厨川白村) スパスモチック派を見よ)

ケース [Case] 文法上に於ては格といふこと、即ち名詞・代名詞・形容詞の文に於ける他の語詞との關係を表はす言葉をいふ。

又、活字を入れ置くべき、中に數多の小區劃を設け、區劃毎に同種の活字を入るるやうになしある木製の箱をいふ。

劇 [Play] 文學上に於ては、詩或は戯曲の稱略に用ふ、其項を見よ。又一般には俳優が戯曲中の人に扮装して一定の

脚色に関する所作をなすこと、即ち演劇をいふ
劇界 演劇の範圍、又は俳優の社會。

戯作者 [Novelist] 稗史・小説・戯曲の作者を
いふ。徳川時代には此等の書は士君子の排斥す
るものなりし故、作者自ら貶して斯くいへり。

劇詩 [Drama] 戯曲に同じ其項を見よ。他の
叙事詩・抒情詩と相雙びて特に此語を用ふ。

外題 [Title] 書物の表紙に記する名目(内題
の對)。又は標題、題號。

結果 [Result] 或原因が或所縁に催されて、發
生若くは到達したる状態或は終極。又倫理學上
に於ては、吾人が動作によりて來たしたる外界
の變動をいふ。(原因の對)

桂冠 [Laurel crown] 今は名譽を表彰す
る語義、又最も名譽ある地位の稱に用ひらる。
古代希臘に於て月桂樹をアポロ神の靈樹とし其
技業を以て冠をつくり、ピシヤに於て行はれた
る競技の優勝者に與へ其名稱を表彰したる故事
に出づ。又英國大學にては、古代修辭學・詩學の
卒業生に月桂冠を贈る風習あり、依て桂冠詩人
の名を今日に存せり。

目目評 人物の批評又しなすため。後漢の時、

汝南の許劭が毎月品題を定めて郷黨の人物を評
論せし故事に出づ。

決定論 [Determinism] 自由意志論の反對で
あるわれわれの意志は、決して自由をもつてお
ない、機械が蒸氣の力で動かされるやうに、あ
る一つの力の爲に支配されて餘儀なく動かされ
るに過ぎない。我々がどんな事をしやうと、夫
は豫め定められてゐるので、自分の思ひ通りに
出来るものではないといふのである。

ゾラ曰く……物理學化學が今や既に精密なる科
學である如く、又生理學心理學も同様に一定の
法則で説明されてゐるではないか。路傍の石も
人間の頭腦も共に同じ決定論に支配されてゐ
る。従つて人の智的情的活動にも此精密な科
學的方法を適用して其真相を究めるのがそれ、
そ眞に小説家の任務である云々。

結論 [Conclusion] 論じつめたる結局。結局
の議論。又論理學上にては三段論法の結末の命
題、即ち前提又は大前提と、後提又は小前提と
によりて得たる判断をいふ。

ケルト文學運動 [Celtic Renaissance]
Celtic Renaissance は初め詩の方面から進んで
劇の方へ移つて來てゐた。 W. B. Yeats

(1865)が愛蘭國民文學會を起したのが一八九
一年で、七年後にそれが愛蘭文藝劇場となり、
一九〇四年には愛蘭國民劇場となつて倫敦のコ
ートシアターに乗り出したのであります。イエ
ーツの詩才を最初に發見して力を添へたのはワ
イルドでありました。その頃英國の詩壇はもう
久しく行き詰つて身動きが出来なくなつてしま
した。イエーツは此の機會を捉らへて彼れの清
新な純真な詩を以つて殆ど詩の上空を獨占した
のであります。昔から英文學に新しい生氣を與
へたものは大概ケルト人の産物であつたこと
が、イエーツに依つてまた實證されたのであり
ます。イエーツ等の群は自分たちの新しい運動
の爲に一八九三年に Celtic Twilight を出版し
た。此名前は實によく彼等の運動の性質を説明
してゐます。此の仲間にはイエーツの外に Dr.
Douglas Hyde, Lady Gregory, A. E. (George
Russel), Nora Chesson, Todhunter, Fiona
Macleod などがあります。その中でもドクト
ル・ハイドの如きはイエーツや A. E. の如く英
語を用ひずに、生得の愛蘭語を以つて強烈に主
義を主張して居ります。レディ・グレゴリーはイ
エーツ等の補助者としてまた愛蘭劇作家として

我國にもよく知られてゐます。フィオナ、マクロ
ド女史といふのは假名で、それが有名な小説家
批評家の William Sharp の別名であつたこと
は彼の死後に於て初めて世間に知られました。
此の運動に關係してゐる今二人の有力者があり
ます。それは前に述べたムーアと、それから
M. Synge (1861-1900)とであります。ムーアは
年から云つてもまた經驗から云つても幾らか、
イエーツ等の先輩であります。彼は自分でも脚
本を書いて上場したりして助力してゐます。シ
ングはイエーツよりも或はより多く才能を與へ
られてゐた青年であつたと思はれますが、十分
に其の才能を完成せずして早世しました。けれ
ども彼れの残した五六種の戯曲は皆立派な香氣
の高いものばかりであります。同じ愛蘭の生れ
であるけれども G. B. Shaw は以上の群からは
全く離れてゐます。(野上白川)

検印 [Official of approval] 検査のしるしと
して捺す印。又著者が其著作物に對する印税を
受取りたるしるしとして、其書冊の奥附に捺し
たる印。

幻影 [Illusion] 思想又は感覺の錯誤によりて
見誤まりたる實際ならぬ現象。

現化

思想又は想像を實際のものとして事實にあらはすこと、若くは事實となりて現れしことをいふ。又、現實化。

幻覺

【Hallucinations】一の表象が如何程力強く特別に活動するやと云ふことは其表象に關係せる部分が如何程病的に興奮し易きかに依りて決定せらる。其成合の餘りに過度ならざる場合には強迫觀念となりて現はれ常人自らも亦之を病的と考ふるに至る。而して他の部分が健全に働きぬる場合には此強迫觀念が病的のものに當人にも認めらるゝが故に普通の判断の際に除外せらる。されど其成合の進むときは此等の強迫觀念は遂に固定觀念となる。斯の如き成合に達するときは腦の病的なる部分が如何にも生々したる觀念を作り出し之を以て意識の全部を蔽ふが爲めに常人自らも感覺的印象と腦の病的產物とを區別すること能はざるに至る斯の如くして幻覺の状態に達す。(マクスノルドウ)

言語學

【Philology】言語の根本・沿革又は規則に關して研究する科學。初め博言學と稱せしも語弊あるを以て近來改稱せり。

原子説

【Atomism】哲學上の語。單一不可分にして獨立自存せる多数のものを以て宇宙の原

理となす説。而して物質的なるものとする物質的原子説と、精神的なりとする精神的原子説との二派に分る。

現實

現在、實際等の意。空想、理想、想像等に對して云ふ。

現實界

實際の事實又は狀態のあらはれてある世界、即ち經驗の範圍。

現實回避派

徳川時代の 中葉以後社會の富力を掌握して、武士を凌ぐ實力を有するに至つた町人の、勃々たる反抗心は、階級制度の階力に壓せられ、強きものは、男達となり、弱きものは横にそれて現實回避派となつたので御座います。通人と云ひ、粹人と云ふのは、實行上の現實回避派で、その情調を描いた作物の讀者は、思想上の現實回避派で御座います。彼等を回避せしめたものは、貧乏にして權力ある武士で御座いました。

下つて明治に至りますと、政權を握つた薩長の武士と、其の壓迫を受けた江戸人との關係が茲に硯友社によつて代表せらるゝ回避的文學を産みました。所が、教育が、殆んど所謂青雲の志を抱いて上京した田舎人の占有に歸するに及んで、茲に山の山人の文學が勃興致しました。

自然主義文學は、其の一種で御座います。是れは、壓迫に慣れ、現實回避を喜ぶ下町人の眼には、擲猛近づく可からざるもので御座いました其所で、下町人は、自分の趣味に合する文學を求めました。久保田萬太郎先生などは、其の要求に應じて現はれた作家で御座います。併し、何しろ、文壇の薩長派たる自然主義文學が勢旭の如くであつたので、回避的情調を旨とする文學は、暗流となつて潜伏して居りました。(安成貞雄)

現實感

【Wirklichkeitsinn】 浪漫派が其の極盛期を過ぎて移々老いとすると、そこに現れたのが即ち當時未だわく／＼しい自然科學の新精神であつた。一代の人心はその影響をうけて忽ち著るしい變調を呈した。即ち現實感が人の心に強くなると共に漸く空想や感情の方面に疎くなつた。夢現の境をさまよい理想の影を追ふよりは、直接經驗を重むじて此地上の现实生活に重きをおかうとする、高い美しい詩の世界にあこがれるよりも先づこの苦しい醜い眼前の現實を忘れまいとする傾向が哲學の方面に於ける浪漫的唯心論の滅亡となり、又唯物論の勃興となり、宗教信仰にはそれが懷疑説となつ

現實味

文を書く人は飽く迄も現實を前に置いて書くやうにしなければならぬ。其處から自然の綾が出て來るのである。人を動かすのも文章で動かすのでなくて、現實味で動かすやうになるのが一番好い傾向である。現實味で深く刻まれた印象は、時日が経過しても忘られるものでない。其處が現實の強味である。(田山花袋)

原始的存在

【Primary Reality】 プラケマチ

ズムの特殊の主張とする所は、即ち實在及び眞理は初めから定着不變な姿に於て存するものではない吾人人類が必要に應じて漸次に創造し改造し建設して行くものである。吾人の祖先は情意生活の興味に基いて先づ何等かの客觀的實在を経験したに相違ない此の際與へられた最初の客觀的實在は極めて混沌として勿論條理不分明な漠然としたものに相違ない假に之れを原始的實在と名づける(シラーの説)此の淵沌たる原始實在を経験してさて吾人の祖先は此の經驗を材料として其の實生活に最も適切なる有用な動力ある統一調和を試みたに相違ない。(金子馬治)

現寫 [Vision] 過去に起こつた事、將來に起るべき事を現在目前の事の如く言ひ做す文飾で、形式上から言へば「き」「けり」「ぬ」「つ」等の過去動詞、「らん」「べし」「まし」等の未來動詞を用ゐるべき場合に、現在動詞を用ゐて、遠きを近くし、薄きを濃くし、隔世或は未現の臚るなる事柄を活躍せしむるものである。例へば「天明けたり、曉氣清し、全軍肅々として敵壘に向ふ、午前五時を報す、進め撃ての命令あり、喇叭の聲起る」の類をいふ。

現象 外界、または内外に現はるゝ一切の事物事件を云ふ。水が流れ、雲が飛び、頭が痛み、腹が立つ、國と國と相争ひ、男と女と相愛し、春花咲き、秋月澄む、これ等は皆現象である。現象に對し、その現象の源をなすサムシングがあると思へ、これを本體といふのである。

現象界 感知の世界。形而下の世界。經驗の世界。
現象論 [Phenomenalism] 吾人の智識は現象に限られ、本體其もの、真相を知る能はずといふ説。又智識にあらはれたる現象は即ち本體にして、智識を離れたる本體は存在せずといふ説。

原人時代 [Primitive ages] 又、原始時代といふ。人類未だ蒙昧にして事を記す文字なく生を養ふに業なく、たゞ木實を食ひて棲息せし太古の時代。

原生説 地球上に於ける千萬の生物は皆其本源を一にすれども、進化發達を異にせしより、幾千萬年の間に漸々變遷して今日の狀態となりたりといふ説。
現世的 説く所の主旨の範圍がおもに現世を主とし、現世を超越したる境に及ばざるさまにいふ。

幻想 [Illusion] 幻覺に同じ。其項を見よ。
幻想意志 感傷意志はまた一面から言へば「幻想意志」である人は如何にかして自ら詐かうとする、フローベルがあつた恐ろしい幻滅の目で見た世上一切の出来事は虚偽と幻想の外なかつた。彼の眼には「人間とは彼が在るよりも他の者と自分自身を考へる動物である」如く映つた。批評家ゴールチエは彼の斯様な人生觀に名づけて Bovaryism (幻想主義) と云つた。(中澤臨川)

現代思想 現代に於て最も勢力ある人生觀、又は社會觀の傾向。

見地 [Stand point] ある事物の真相を確める爲には、どうしてもしつかりした立場を定めなくてはならぬ。自分の立場、即ち見地がぐらついて居ては、とても事物をたしかに知る事は出来なす。

原著 [Original] 翻譯書又は注釋書若くは改作書等に對して、もとの著作物を云ふ。
言文一致 [Unification of the written and spoken languages] 普通言語にて話す儘を綴りて文章となしたるもの、即ち口語文。明治二十年頃より行はる。口語を見よ。

ゲロコノイ [Gerokomy] 自己保存の念の強い吾々は古くから生命の延長に對する方法を求めて居つた、ダビド王が年老いた時、その使臣が彼に處女を伴ふ可き事を勧めたのも若い心を甦らす爲であつた、後世此の事を Gerokomy (老養) と呼んで希臘羅馬人には多く信じられて居つたのである。コハウセンの傳ふる處によればヘルミプスが百五十歳の齡を保つたのは全く彼が長い間少女の學校の先生だつたからだといふ。(メチニコフ柳宗悦解)

健忘性 物忘れをすると云ふことは天才の特徴である。ニウトンは嘗て彼の姪の指をパイプの

幻滅 [Disillusion] 科學の智識により幻覺の消滅したる状態をいふ。

原理 [Principles] 通俗に、すべて物の基となり根本となり、其秩序・發生を規定するものといひ、哲學上にては、説明又は判斷の根據となる道理、他の眞理の基となる根本の眞理をいひ倫理學上にては、正しき行爲の法則、人間動作の根本の規範をいふ。

權利 [Right] 普通には物をなし得る資格又は範圍をいひ、法律上にては、法律によりて保護せられたる行爲の範圍をいふ。而して之を公權と私權とに分ち、私權を財産權・身分權・名譽權等に分ち、財産權は更に物權・債權及び特別法によりて保護せられたる其他の權利に分たる。

權力説 [Authenticism] 道徳上の規定は權力を有する者の命令に基くとし、命令を以て是非・善惡の究極的根據となす一派の倫理説。
元祿時代 元祿時代は熾んな生の放散時代であつた。「堅い寶石の様な焔を擧げて燃える」ことであるならば、此の時代程 Attraction の有る時代は少い。元和僱武以來六十年續いた太平と物

質文明の進歩とに乗じて、彼等は有らゆる方面に欲動の開放を行ふた——太陽の様に燃えた。國學に長流・茂睡・契沖、漢學に仁齋・徂徠、繪畫に光琳・一蝶、詩繪に山本春正・青海勘七、歌舞伎に傾城の眞似で聞えた坂田藤十郎・荒行師の開山市川團十郎『猿蓑』で大人氣の中村傳九郎を出した時代。竹本義太夫や宗因芭蕉・近松西鶴を出して時代は活氣横溢したすべてが襲套を脱した自由な創造の時代であつた。五十年下つて文金風の流行つた明和安永の時代の頹廢した、だるさに比べて見れば分る。川柳や狂歌に隠れて世を茶化す程、まだ此時代の人は不眞面目ではなかつた、西鶴の人が西鶴から生れたのは、此慶時代であつた。(富田流葉)

戀【Love】 の男性の神はローマ神話ではキニヤムス Cupid キリシヤ神話ではエロス Eros 印度神話ではカムデナ Camdeo ヌルシヤ神話ではカムテマ Camadeva 佛教ではカマ Kama or kama と云はれて居る。女性では希臘ではアフロヂテー Aphrodite 羅馬ではヴェヌス Venus

ケルト民族の間ではフレヤ Freya 星では金星。金曜日(木村鷹太郎)

攻圍精神病【Siege madness】 奈翁二十年間の戦争に於て多量の血を失ひ更に一八七〇年の恐ろしき激變起り佛蘭西國民は自ら世界の一等國民と信じたるにも拘はらず俄かに侮られ辱められ踏み躪られ總ての確信は此の一撃によりて粉碎せられた。あらゆる佛蘭西人は皆運命の急轉に遭遇し己が家族の中に何人かを失ひ自己は其自尊と名譽とを奪はれた、全國民は其運命地位、名譽、自尊心の上に尙又愛する家族等の上に此の上なき打撃を受けしなり。幾千の人々は全く理性を失ひ巴里の城中には一種の精神病の流行を見るに至つた。それは攻圍精神病と名づけられたるものにて直に發狂せざりしも其神經系統に永續的損傷を蒙りぬ。佛蘭西に於てヒステリーと神經衰弱とが特別に多く種々なる形に於て現れ他の何れの國よりもよく研究せられ來りしは右の如き事情のあるが故である。(マクスノルドウ)

黃禍【Yellow peril】 黄色人種が他人種を侵害したる歴史を顧みて將來もまた爾あらんと想像したる議論、即ち黄色人種の勢力に對する恐

怖心より起りたる想像説。一に黃人禍ともいふ。**梗概【Epitome】** 要點を撮みて全體の意味を示すもの。縮圖。

ゴオガン 彼の後期印象主義 Postimpressionism は一八八〇年の頃から倫敦に起つたので技巧だけはさきの自然派印象派にとつたのであるが而も唯だ見たまゝの印象を再現するのではなく寫實を避け主として思想や情緒を表現し主観客觀をうまく融合調和する新主義を標榜してゐる。殊に宇宙自然に具はつてゐるリズムをうまく畫面に現はさうと云ふのが其主張である。佛蘭西の方では故 Gauguin と Cezanne の畫風も、もとは極端な寫實から出たものであるが又矢張此方の後期印象派に屬するものとなつてしまつた。(厨川白村)

好奇的【Curiosity hunting】 ロマンチズムの一面の特色として數へらる。

高級象徴【Das Hoch-Symbolische】 高級象徴といふ、この名稱は獨逸の學者フイシヤア Vischer の付けたものだ。之は外形のうち既に或る意味内容を示してゐるもので詳しく云へば外形だけでも既に意味をなして居るが、それよりも尙ほ一層深く人生一般の問題哲學宗教道

徳などに關した眞理を示すのに刺戟的性質を有する外形を用ひたのである。古今の文學に象徴的といふのは多く此の部門に屬するものでダンテの「神曲」Divina Comedia が中世の基督教思想を表はし、沙翁の「ハムレット」が懷疑苦悶を「リアア王」が感情一途の人と運命との關係を「マクベース」が大野心をあらはし、又ゲーテの「ファウスト」Faust が煩悶から解脱に到るまでの行路を示したるなどは、皆此類の高級象徴であつて、藝術上最も重要なものは此の種のものである。(厨川白村)

高級變質者【A Higher degenerate】 ロセツチの外にはスウインバーンとモリスとをラファエル前派の詩人の中に數ふるを常とすさりながら此等二人とロセツチとの間に於ける類似は微かなり。マニアンの言葉を藉りて言へばスウインバーンは「高級變質者」にしてロセツチは「ソリローの所謂『精神虛弱者』(Imbecile)の中に數へらるべきものなり。(マクスノルドウ)

工業時代【Industrial age】 經濟上の時期を五分したるもの、第五分業・協力盛んに行はれ信用ますます利用せられ、各種の機械大に發明せられ、大生産法行はるゝ今日の時代。

交響樂 [Symphony] 十六世紀末葉に於てイタリヤに行はれたが管絃合奏樂の名に用ゐらるゝに至つたのはハイドンを以て嚆矢とす形式はソナタの形式と略ぼ同一であるがソナタは或一個の樂器に向つて作られシンフォニーは多くの樂器を合せて演奏する様に作られてゐる。

口語 [Spoken language] 文章上の語を文語といふに對して談話に用ふる語をいふに對して談話に用ふる語をいふ。近來之を以て文を綴ること行はれ、言文一致體と稱す。

高光 繪畫上に於て、畫中最も光輝ある點をいふ。例へば人物の眼睛等の如し。

考古學 [Archaeology] 古代の遺物によりて古代の物事を研究する學問。

行國史 游牧人種が水草を逐ふて移轉するやうに古代に在つては國其ものが動いて居る事がある。或時代には或地方に國を成して居るも幾年月かの後には其他の地方に移つて國を成して居て後代歴史家が地圖上明瞭に其國の一定の位置を認め得ぬ事がある。之れは行く國で、之を行國と謂ひ、其移り行く歴史を行國史と稱する。古代の中央亞細亞の諸國には此行國が甚だ多かつたが、世界諸國の古代の部は其年月の長短は

有るが多くは行國を行ふて居る。其行國の源因は其國の土地の狀況利害、四圍人種の關係、國家滅亡、移動が國家に利益ある場合等で、或は民人は其まゝに從來の國土に残し置き、其王室或は政府の其他の地方へ移動することもあり、或は其民人も共に全體移る事もある。歐羅巴中世紀の民族大移動の如きは例令國家移動と稱するに足らぬも一種の行國である。支那太古の歴史なども何時とはなしに土地が移つて西部亞細亞から東に來たのである。周が東周となり、西漢が後漢即ち東漢となつた事などは明瞭な場合である。國が變動して移り行いて居る。又其移動の時には舊來の國名、地名、名所、舊跡等を新土に移して、舊國と同じやふな名を付ける事にあつて、従つて後代から見ると新國が依然舊國の觀を有つて居ることがある。然し地名等は發音其まゝの事もあり同意義の別語に譯し變へられて居る事も少くない。日本の如きは非常の長久の年月の間に長遠の行國を行ふたもので、始めは小亞細亞から出て、地中海方面に關し、歴史東漸して希臘、埃及、波斯、印度等に移り、尙ほ行國して終に此極東島國日本に定國となつたのであるが、何時も同民族が先づ植民して居

る土地に移つたやふである。又た何時も舊居の國名地名を移植して行くから其歴史は一見定國の觀があるが、厳格な地理研究をすると地理が異うて居て行國した事が歴々知られる。此島國日本は太古以來民族が經歷して來た大世界の國名、地名、名所、舊跡等を此島國に箱庭的に寫したもので、現日本は大世界に對してミクロコスモスと謂ふてもよい。其行國は天皇の御代變り、年號の變改、都の變移、或は大事變の有つた節等に察せられる。されば歴史研究家は常に行國と云ふことを念頭に置かぬと、時にとんだ間違をすることがある。日本歴史の如きは特にそうである。(木村鷹太郎)

講座 [Chair] 講義の座位。又は講義すべき學科に就て特に定めたる教授事務の受持。

向上 [Aspiration] 上位に向つてのぼりずむ。即ち進歩。又高き所へ心をつくる、即ち上へ〜と理想を進むること。

考證學 古書を説くに證據の詮索を要とする學

向上主義 [Progressionalism] 人生を現實神聖なるものと觀じ、進歩を以て人生の道徳となす主義。

構圖 [Composition] 製作中の物體を巧みに

按配して、各部の統一調和を得たるものを作り出すこと。

ゴースト [Ghost] 化け物、幽霊、精靈、魂魄、又は陰影と譯す。

剛體 如何なる強力にても其形狀體積を變ぜざる物體。但し假想的の物。

肯定命題 [Affirmative proposition] 論理學上に於て、主辭と賓辭との一致を許容する命題。例へば「人は動物なり」「雪は白し」の如き命題是れなり。

高等變質者 [Degeneres Superieurs] 「世紀末」に著しく現れた都會病と同じやうなもので、殊に文學者の方面に此の高等變質者が多い即ち神經の働きが pathological になつてしまつて恰もそれは常人と狂人との中間に位する者と見做してゐる。ニイチエやモーパーッサンのやうに癡狂院へはいつたものもある。

硬派 すべて敵に對して、手強き處置に出でんことを主張する派をいふ。又新聞社或は雜誌社にて、文學及び種稱記事の擔當に對して、政治方面の擔當にいふ。(軟派の對)

硬文學 軟文學に對して云ふ。評論其他の割合に硬い感じのする文學を指す。一體、軟文學と

いひ硬文學といふ皆昔の分け方で、今の文學には通用しない。昔は文學(廣い意味での)を分けて、天下國家を益するものと、人々の娛樂となるものと、かう二つに分けた。而して前者の方のものを硬文學と云ひ、後の方のものを軟文學と云うたのである。

光明 慈愛・博愛其他すべて心上又は世上の煩惱愚昧等の暗黒を照して、信仰・道徳又は智識の力を與ふるもの(稱。(暗黒の對))

光明時代 [Light age] 文物・道徳の興起せる、又は世態の安寧なる時代。(暗黒時代の對)

光明小説 結末の圓滿にて、普通の道徳性を満足せしむる作風の小説。(深刻小説の對)

コーラス [Chorus] 古、希臘に於て唱歌者と舞踏者と合併の一國の稱。現時は音楽隊即ち合唱の一國隊又合唱、或は合唱の句。

コーラン [Koran] 回々教の教典。教徒はマホメットが直接にアラ(獨一神)より授かりしものと信ぜり。

功利説 [Utilitarianism] 社會の最大多數者の最大幸福を道徳の標準となす倫理説。又公衆的快樂説をいふ。ベンザム、ミル等其代表者なり。

語學 [Linguistics] 言語化等の發達及び變化に就きて研究する學問、即ち言語學。又言語・文章の性質・用法等を研究する學問、即ち文法又は文法學。或は一般に外國語の俗稱。

古學

普通には、古代の事を研究する學問をいふ。儒學にては明及び宋などの性理説に反對し専ら古文に就きて孔・孟の眞意を明かにせんことを主張する爲め起りたる我國の儒學の一派にして、伊藤仁齋・山鹿素行・荻生徂徠等の主張せしもの、總稱、特に伊藤仁齋の主張を指していふ。又國學にては、徳川時代に興りし一派にして、近代の學を捨て神代紀を始め官職・儀式・律令・歌集・物語等の攻究を主とす、本居宣長の學派は是れなり。

五行説

支那哲學の一派にして、木・火・土・金・水の五行常に天地間に運行し、萬事萬物之に基きて發生進化すとなす説。漢以後盛んに俗間に行はれ、我國にても早くより傳へられ、陰陽道と稱して九星術と合し、天文・人事を豫測する極要の占法となり居たり。

國際版權 [International copyright] 國家と國家の間に條約を締結して保護する彼我國民の版權。

國字改良論

一國通有の文字が時代を経るに隨ひ、當時の言語・聲音と不調和・不備の點を生ずるに至るより、其缺陷を補ひ改良せんとする議論。我國にては近來此の論旺なり

國民主義 [Nationalism] 自國民と同一なる民族を合して、自國の權力關係のもとに置かんとする主義。

國民精神 國家の爲めに盡す國民の氣風。國家保護・發達を圖る國民の精神。

國民のたそがれ [The Dusk of nations] 世紀の終らんとする時である。世紀末は傳來的思想習慣よりの解放を意味す。北歐の宗教には『神々のたそがれ』なる恐ろしき教義を含みたりき。今は國民のたそがれの漠然たる惱みが現代の人々の心中に現はれ來りつゝあるなり。(マクソノルドウ)

極樂 [Paradise] 佛教にて、阿彌陀佛の在住して説法する清淨なる國。西方十萬億土の彼方にあり、佛果を得たる亡者は必ず此に生まれて快樂を受け、皆佛となるといふ。

極樂鳥 [Paradisea] 鳳鳥の屬。普通は鳩大にて頭頸の上面は淡黄色、下面は琥珀色總狀の羽毛を以て被はれ、肩以下の兩側には橙黄色の

羽毛總々の如くに垂れて殆ど二尺に達し、尾の中央の二羽は線狀をなし約三尺に達す。馬來半島及び濠洲等に産す。

五千人座 [Des theatre der 5000]

獨逸座の有名な舞臺監督にして名優マックス・ラインハルトが大仕掛けに多人數の俳優をつかつてホフマンスタールが希臘古劇を改作せる『エザボス王』の演出をなし大好評を博したるより、かれて懐抱せるサーカス的大劇場を樹て、五千人を容るゝに足る大建築を敢てした。世界第一の大劇場である。

ゴシック・アーキテクチュア [Gothic architecure]

尖りて險はしき屋根・圓天井及び大なる窓等の特徴とせる建築風。西曆千二百年頃より千四百七八十年頃に互りて西歐に流行せり。

ゴシック建築

ゴシック建築の原則は第一に天井の高さを増すこと第二に窓及び間隔を廣めること、第三に鏡樓並に小大塔閣の數を増すこととに進んだ十五世紀のゴシック式の寺院には二様の形式を用ゐた其細長にすぐることに於て戰慄するものがある。尖頭迫持はゴシック建築の特長ともいふべきである。

ゴシップ [Gossip] 無駄話と譯す。

個人 [Individual] 國家又は社會に對して個々別々の人の稱。一個人といふも同じ。

個人經濟 [Individual economy] 國家に關する經濟を國家經濟などいふに對して、一個人に關する經濟をいふ。

個人主義 [Individualism] 一般には個人のための利益のみを圖りて、國家又は社會を顧みぬ傾向、即ち個人的生活を主として立てたる主義をいふ。倫理學上に於ては、個人の獨立自由を重んじ、自家を基礎として一切の行動を規定せんとする主義をいふ。教育學上に於ては、國家又は社會に關係なく、たゞ個性を發達せしむることを以て教育の目的となす主義をいふ。又經濟學上には、一に個人放任主義といふ。其項を參照せよ。

個人制度 [Individual system] 個人を法律上の權利義務の主體となす制度。方今文明諸國の制度は概れ是れなり。(家族制度の對)

個人的 [Individual] 言論又は行爲などに個人を主とするに在る語。即ち國家的・社會的・共同的・集合的等の正反對の意。

個人の解放 文藝復興時代に出た思想家のうちで、懷疑論の立場から個人の解放を唱へた最もよい代表的の人物は、フランスのモンテーニュ (Michael Montaigne, 1533—1592) である。

一體個人の解放を求める精神の物與といふことは、人間がめい／＼自分の力に自信希望とを懷いて來たことであると共に、隨つてまた自分の力によつてどこまでも自分の生活を十分に享樂して行かうといふ欲望の動いて來たことを意味する。(片上伸)

個人放任主義 又個人主義といふ。經濟上個人の隨意の行動は最も有効なるが故に、國家は成るべく其自由に放任して行動を容易ならしむべしといふ主義。

コスモポリタニズム [Cosmopolitanism] 世界主義と譯す。其項を見よ。

コスモポリテ [Cosmopolite] 世界主義者と譯す。

個性的 [Individuality] 個體の性質。又個々の人の特有の性質、即ち各個人の他人より區別し得らるゝ精神上の特殊性。

悟性 [Apprehensibility] 直覺によりて理解

し、又は其理解を結合する意識の作用をいふ。
個性心理學 [Individual-psychology] 天才又は罪囚等、一般より差別ありとせらるゝ個性の心理を研究する學。

古生物 現代の地層の形成以前に生殖せる生物即ち前世界に生存せし動植物の、其當時堆積成生せし地層中に埋没せられて現今猶形態を存するものないふ。而して通常石質に變じ固くなれるもの多けれど、必ずしも然る物のみないふに非ず。

個性 [Individual idea] 類想或は般想に對する語、詳しく云へば個人の理想或は觀念。

個體 個々に分け一つ／＼になりて存在するもの。

誇大狂 [Megalomania] ヴェイヤルト、ワグネルは吾人が已に熟知せる變質者の特徴以外更に數倍の變質の性格を具備せり。彼の精神組織中には迫害狂と誇大狂と神秘主義とが隠れ其の本能中には慈善と無政府主義と反逆的慾求とを藏したり。彼の誇大狂は彼の著書を通じて一般に知られたる所なり。混亂せるワグネルの思想は絶えず矛盾せる瞬間的興奮に依りて表現せらる。(マクスノルドウ)

個體發生 個體が卵より發生して次第に生育すること。(系統的發生の對)

誇張 [Hyperbole(英)] 事物を實際より誇張して過度に大きく、或は過度に小さく言ひ做すもの観る者、聞く者、思ふ者の感じを主とし、主觀的自然を根據として情の眼に映つた事をそのまゝに言ひ現はす文飾である。例へば「血は流れて海を成し、屍は積んで山を成す」の類をいふ

國歌 [National song] 國家の歌、即ち「君ヶ代」などがそれである。又岩野泡鳴氏の「眠りは醒めたり」も此の部である。(泡鳴)

國家學 [Political science] 國家の性質・組織及び其發達・變遷等に關して研究する科學をいふ。

國家社會主義 [State socialism] 國家が國家萬能主義をも採らず個人放任主義をも採らず、放任を得策とすれば放任し、干渉を得策とすれば干渉し、殊に重きを富の分配に置いて貧弱を保護し、社會の平衡を保持するを以て目的となす主義。

國家主義 [Nationalism] 倫理學上に於ては人生の行爲の目的は其係屬する國家の福利・安寧を保護・増進するにありといふ主義。又經濟上

に於ては國際貿易の政策上、個人を單位とせずして國家を單位とし、國家全般の利害を標準とする主義をいふ。

國歌的史詩 野史詩とは少しく違つて愛國的にして出來たものは、國歌的史詩である。

國家萬能主義 [Collectivism] 經濟上の事業を個人に放任するは、社會の秩序を紊り貧富の懸隔をして益々甚しからしむるものなれば、勢力を富の分配の標準とし、經濟上の事業は國家に於て經營すべしとなす主義。

克己說 [Self-denialism] カント等の唱導にかゝる、快樂を斥け理性に従ふを道德の理想となす哲學說。

國教 [State religion] 國家が認めて國民の信奉すべきとなせる宗教、我國には此制度なし

滑稽詩 [Humour] 諷刺詩から刺戟を抜いたやうなもので、兎に角滑稽的な詩である。

滑稽小説 [Comic novel] 滑稽の快感を生ぜしむることを主としたる小説。

古典 [Classic] 古昔の儀式又は法式をいふも、文藝上にては古代の文藝書をいふ、我國にていへば古事記・源氏物語等は是れなり。

古典主義 [Classicism] 擬古主義に同じ、其項を見よ。

言靈 「コトダマ」に當てし漢字にして、萬葉に事靈と書し、字異にして意同じく、「そらみつやまとの國はすべかみのいつくしきくにコトダマのさきはふしにとかたりつきいひつがひけり」とある如く、日本に於ける一の重要な概念を形づくり、特殊の妙味を備ふると知らる。普通に「コトバ」といふは單に口を開閉して音聲を斷續するに過ぎざるが、一たび其の由りて起れる所を尋ねれば精神の奥底より出で、愈々尋れて愈々測るべからず。多少汎神教を加味すれば、「コトバ」は神の意の現るものなり。希臘語に據りて「ロゴス」と言ひ來れるは正さしく「言靈」に當り、プラトーン派は神の意の現はるものなりとせり。基督教にて舊約全書にメムラといふは之と同じく新約にはロゴスをも使用し皆コトバと譯し神智を意味す。印度は特にコトバに重きをおき、發音にも重きをおき、動もすれば音を以て直ちに理となす。(三宅雪嶺)

琴と劍 獨逸のカルル・テオドオル・キヨルネル(一七九一—一八一三)は愛國詩人中で最も有名であり、又其の生涯も華かであつた。國運危機に

死すに傳へらる。

コリオラヌス [Coriolanus] 羅馬古傳説中の勇者。ホルシのゴルオリを撃ち勇名を轟かせしが、後驕傲なるを以て羅馬市民に嫌惡せられ西曆紀元前四九一年國外に放逐せらる。仍て敵國ホルシに投じ兵を擧げて羅馬に迫りしが其母及び妻子等陣營に來りて切に退軍を請ひしかば、止むを得ず軍を回し、ホルシ人の爲に殺さる。

孤立的 若し我々がリヒャルド、ワグネルの説に従つて俗人の美的注意を天自然的な詩的天分の結果として説明しようとするのにも我々は彼の説のやうにその注意の藝術的價値の根據を、その注意が『集中的』のものであり且つ『孤立的』のものであるといふ事實の上に置くことは出來さうもない。それは何故だと云ふと物を見る有らゆる感情的な見方と云ふのが必ず皆さういふ『集中的』な『孤立的』なものであるからである。(馬場孤蝶)

コリバンチック教 [Corybantie Religion] ハクスレー教授が救世軍一派を名づけてかく云つた。コリバンチックは昔酒の神バツカスの前で群

及んだ時、彼は義勇軍に投じて戦死した。其の死後彼の詩を集めて「琴と劍」と題し一卷にした就中「劍の歌」といふ小篇は、彼が陣歿の前夜露營の火の許で一同に詠じ聞かせて大に感動させた詩である。詩人の葬儀の日に、僚友は生前の作を歌つて其靈を慰めたといふ。

この人を見よ [Ecce homo] ニイチエの四十四歳の時の作である。最も大膽に最も奔放に然も最も端的に最も直接にそして最も自己流に自己を語つてゐる。彼が多くの激語の裏には愛すべき優しき人情のある事を知る。

湖畔詩人 [Lake poets] 十九世紀の初、英國の北部カンバードランドの湖水地方に幽居し、山水自然の中に清新なる詩風を興して詞壇の新聲と仰がれ、ロマンチズムの先驅となりし、ウォルヅウオース、コールリッジ等を中心とせる英國詩人の一派。

コミック [Comic] 喜劇と譯す。

コメディ [Comedy] 喜劇と譯す。其項を見よ。

コライアス [Golyath] 古代フィリスチナの巨人。身長十一呎。向ふところ敵なし。イストラ

九一

九一

をなして躍つた浮れものゝ群であるが、救世軍の隊伍や進軍やがいさゝかそれに似て居るからである。

コリンス範 [C Corinthan order]

ギリシヤ建築三範の一でアイオニア範の變形したもので時代もずつと降つてローマの治下に於けるギリシヤ人に依つて重に用ゐられた他の二範と比べて最も華麗繊細でギリシヤ人に特有なる清楚と純粹の趣味が此の時代に至つて稍煩鎖に過ぎ墮落に近づいた事を示してゐる此の範の最好例はアゼンズ市に於けるリシクラタス (The Chariot monument of Lycistratus) の祭記念碑である。

ゴルゴンズ [Gorgones]

希臘傳説に、西海に棲む三個の女怪。大なる齒牙と眞鍮の爪とを有し、頭髮は蛇となりて蜿蜒すといふ。就中メズサ最も世に知らる。メズサ参照。

ゴルコンダ [Golconda]

古代印度ニザム王國の城市。金剛石細工を以て名あり、西暦千六百三十八年蒙古帝國に合併せらる。現今のハイダラバートの西七哩の所なり。

コロボッケル

アイメの傳説にて、最も古く我國に住したりし人種。即ち石器時代の人民に與

へたりし名。其遺跡としては物捨場たる貝塚、及び住居の跡なる堅穴、古物としては石器・土器等あり。

コンキューバイン [Concupine]

妾又は圖ひ者等と譯す。

コンクリュージョン [Conclusion]

決定、斷定、斷案、結論等と譯す。

權化 [Incarnation]

神佛などが假りに姿を化して斯世に現はるゝこと、又其假に現じたりといふ姿そのもの。或は一の形なき精神・思想を具現したるものを其の權化といふ。

コンスタンス [Constance]

ついでと變らざる意にて、永久貞節等と譯す。

コンセルテナ [Concertina]

一種の手風琴にして其形六角、携帶に便なり。

コンセルト [Concert]

二つ以上の器樂、聲樂。或は此の兩者の混同の演奏會をいふ。

コンストラクシヨウ [Construction]

構造、結立、結構等と譯す。

今日主義 [Todayism]

今日の社會は何を目標として働きつゝあるか、その慌たゞしい活動狂的争奪は何を意味してゐる。即ち今日主義は何處へ吾等を導くものであるか。(中澤臨川)

コンヴェンシヨウ [Convention]

常套、慣習、因襲、踏襲等と譯す。

コンポジシヨウ [Composition]

構圖、作文、作曲と譯す。構圖の項参照。

根本感 [Fundamental feeling]

根本の感じ。即ち其物の與ふるの主調を爲す所の感じ。

根本原理 [Fundamental truth]

究竟原理に同じ其項を見よ。

コンミンニズム [Communism]

共産主義と譯す。其項を見よ。

コンモン・センス [Common sense]

常識と譯す。其項を見よ。

サ

ザー [Zar; Tzar; Tsar]

露國皇帝の稱號。女帝をツァリツァ、又はツァリナ、皇太子をツァレウイツチ、又はツエザレウイツチ、皇女をツァタフナといふ。

サークル [Circle]

圓、圈と譯す。又は一の黨派などをもいふ。

サーチライト [Search light]

探海燈又は

サード・エンクロジヤ [Third enclosure]

探照燈と譯す。強大なる光線を發射する一種の電燈。レンズを用ひて遠距離を照らすに用ふ。

サード・エンクロージヤ [Third enclosure]

軍艦用のものは其光力二萬五千燭以上にして、暗夜にても二海里を隔て、明らかに小舟を認むるを得べしといふ。

サード・エンクロージヤ [Third enclosure]

不思議な未知の力が巧みなる誘惑、巧みなる謀計、それを見破り、寧ろそれに乘じて敵對者を味方として、やがては敵對をも悪戯をもなさしめず黙々の中に運命を自己のものとして行く處に個々人の生の頂點が示されるのである。それが光ある叡智の生活である。イブセンのいふ第三帝國とはマアテルリンクのいふサードエンクローシヤといふのは即ち斯様な個々人の團體的集合の生活をいふのである。其の生活に於ては我々の生命伸張の阻害となり拘束となるべきものだと考へたものが却つて補助となり發展の機會を與ふるものである。

サーニスト [Sanist]

他人の幸福とか社會の福祉とか云ふものは何うでもよい。又共和政治であらうと君主專制であらうとそんなことは無頓着だ人間は唯自由戀愛に活き生理的情慾を飽滿せしめて其中に生活の全意義を發見すべき

ものである。此等の愛の結果が萌芽の中に枯死してしまつても道徳上の批難を受ける謂れはない。即ち墮落も罪悪でないといふのである。サーニストといふ語は露國少壯作家アルツバセフ作(サーニン)の主人公の名から出来たものである。(中村吉蔵)

サーヴァイヴァル・オブ・ゼ・フィットテスト
[Survival of the fittest] 適者生存と譯す。

罪惡讚美 オスカークワイルドは明らかに不道徳と罪惡とを讚嘆せり『愚劣なること以外に罪といふものは存せず』危険ならざる思想は思想と呼ぶべき價値さへもなし』と是れ罪惡讚美の聲なり。(マクスノルドウ)

サイケ [Psyche] 希臘神話に、ペナス神其容姿の美に過ぐるを嫉み、子キュピットに命じて最醜惡なる人間に配して之を辱めしむ。されどキュピット却つて之を戀ひ身を隠して之と契り、命じて決して己の何者たることを訊ぬること無からしめしに、サイケ遂に禁を破り一夜燭を點じて之を伺ひ、過つて燈油を其面に滴し覺られて棄てらる。是より之を尋れて幾多の艱苦を嘗め、後、天に上されて不死の身となり、キ

ユピットと借老を契るを得たりといふ。
再現 [Representation] 一旦經驗したる表象が再び意識中に現はること。もと心理学上の語なれども自然主義文學に於て、事象の再現といふ事が重んぜられしより、此語能く用ゐらる。

最上善 [Highest virtue] 又最高善と云ふ。善惡の差別を超越したる一段高き状態の意。又倫理學上に於ては、人生の最高の目的又は理想をいひ、之を攻究するは倫理學の一部たる理想論にして、快樂説・克己説・自我實現説等に分る各其項を参照せよ。

サイロロギ [Psychology] 心理学と譯す。其項を見よ。
財産平均論 [Average of property] 吾人の財産を平均して貧富の懸隔なからしめんとする主義。

最上實在 [Erg. realissimus] 一度人間が相應な文化に到達して後再び自由を失つた時代に於て最上の實在を絶對又は第一原因に求めようとしたのは決して單に論理上の遊戲ではなかつた。個々の慾望の中に統一の原理を見出す現代にとつて最上の實在は瞬間毎に享樂さるゝ満足

であらねばならぬ。若し此の外に或る程度の實在を有つてゐると考へらるゝものが萬有又は社會中にあるならばそれは只瞬間の満足の方便として纔かにそれより分賦されてゐるのに過ぎない。(田中王堂)

最大多數の最大怠惰 十九世紀の人間は一人残らずフアウストと與に斯う嘆息したであらう『吁二つの魂が私の胸に宿る』と。彼等の或る者は僧侶でありながら同時に近代主義者であつた。或る者は心理學者でありながら同時に幽靈の信者であつた。また或る者は理學者でありながら同時に神秘家であつた。ルナンのテイレンタンチスムでもイアセンの破壊的傲慢でもラグナーの肉体的厭世主義でもトルストイの虚無的憐憫でもニーチェの狂醉でも凡てが斯様を過度文明の犠牲であつたのだ。佛蘭西革命の結果は却つてビスマークを産み出し『最大多數の最大幸福』は却つて『最大多數の最大惰落』の理想と變つた。かやうに多くの努力と犠牲と試みと失敗とのあとで漸く新精神文明の曙が明けかけて來た。世界は今舊き文明から全く新しい文明に入る橋梁の最後のスパンを越さうとしてゐる。(中澤臨川)

サイドドラム [Sidedrum] 一面響絃を張り他側を打ちて一種の震音を起さしむる洋樂器。奏者の腰邊に吊す。

催眠術 [Hypnotism; Mesmerism] 人をして睡眠又は喪心の状態となさしむる方法。或は之によりて時空を超越したる靈の活動を認むべしといふ。已に古代印度にも存せし、十九世紀の中頃スコットランド人ブレイド學理的に之を研究せしより、大に世に流行するに至れり。

作爲 [Plot] 或事を爲すの義にて、廣義に解しては之を積極的行爲即ち作爲と、消極的行爲即ち不作爲との二に分つを得べし。筋。

索引 [Index] さがし出すこと、ひき出すこと又辭書其他其圖書にて其中の事項をさがし出す爲めの案内、即ち見出し、目次。
作者の氣質 [Temperament de l'auteur] セント・ブウグの說に據ると即ち文藝批評家の任とする所は、決して作家の功績缺點地位などに對して判断を下し、良いとか悪いとか旨いとか拙いとか云ふのが主眼ではない。それは寧ろ第二段であつて、文藝上の作物と共に其作者の生涯、境遇、目的、社交、周圍の空氣といふやうなものと一般讀者の限前に提出するのこそ眞

に批評家第一の任務であると唱へた。つまりセント・ブウグはかういふ主張の根底、文藝は作者の氣質である」といふ説が置いてゐるので其の態度が現によほど近代の科學的傾向を帯びて来た證據である。

サクラメント [Sacrament] 聖晚餐といふ。基督が十字架に死せし其前夜・弟子達と晚餐を共にせり、之をいふ。

酒のみ女 [Bacchantes] バツカスから来た言葉で大酒をあほる女

サタイア [Satire] 諷刺、落首、惡口等と譯す。諷刺・落首の項を見よ。

サタン [Satan] 惡魔、惡鬼等と譯す。

サチルス [Satyr] 希臘神話に、森林原野に住む酒を飲み肉慾を樂むといふ半獣の怪物。全身毛生ひ耳尖り二小角ありて脚は山羊に似たり。

錯覺 [Illusion] 錯誤ある知覺をいふ。

作曲 [Composition] 詩歌を音楽にのぼせ歌ふやうに曲を作ること、又は其曲。

雜誌 [Magazine; Journal] 諸種の欄を設けて夫々の事を記載し、號を追ひ期日を定めて發行する冊子。

雜誌派 [Magazine school] 雜誌によつて文壇に勢力を張らうとする派——所謂「雜誌派」と呼ばれる米國文學界の大勢はウキリアム、デボン、ホウエルの統御の下にある。従つて一部の反抗を招いて、非難の聲を耳にすることも屢々ある。近頃、米國の一閥秀作家マザトン夫人が米國小説界の創意の缺乏を説き、これをホウエルの勢力下に同一歩調を取つて居る雜誌派の無氣力、無能の罪に歸し、この派は狭い平凡瑣細な事ばかり描寫し、瑕瑾のない御目出度いやうな模型に陥つたもの許り書く、人生の悲壯、雄大な劇的光景の活畫は探がしても見當らぬ。……と氣焰をあげて居る。此の雜誌派中にはプリンストンの詩人ヘンリー・バンダイクも居る。エダス・ウーントン女史もまたその一人である。(中村吉藏)

雜種説 [Mongrelism] 獨逸の植物學者ケルネル等の主唱せる、生物の新種形成の原因は異なる種の間に雜種を生ずるにありと説く學説。

擦筆 擦筆畫などを描くに用ふる、吸取紙又は鹿革を巻きて筆の如く作れるもの。

擦筆畫 コントといふ墨の粉を擦筆にこすりつ

けて描ける畫。多く肖像畫などを寫眞の如く仕上ぐ。

サッポース [Suppose] 想像す、假定す、付度す等と譯す。

サテイリスト [Satirist] 諷刺家、諷語作者、落首作者等と譯す。

サデイスム [Sadism] フグネルにとりては色情的興奮は狂的譎妄の形を取れる彼の作物中に現はるゝ愛人は悉く痙攣的に身を悶へ狂亂せる猫の如く轉々す。詩人の精神状態は専門家の熟知する所にして所謂「サデイスム」と名づくるものなり。言ふまでもなく、こは變質者の戀愛にして其情的興奮に際しては恰も野獸の如き状態を呈すフグネルも亦明らかに斯の如き色情狂患者なりき。(マクスノルドウ)(英)

サデイスムス [Sadismus] 凡そサデイスムなる慘虐の本能は其の根柢に二の點を持つ即ち其の一は自己保存の激烈なる優勝慾であつて、その二は性慾の本能に基づく快感である。その一は醇化のない精神を持った少年少女若くは豪慢暴戾なる君主等に能く見る處であつて、自己以外の者を征服し壓抑して之に慘虐を加ふる本能である。其の二は特殊なる異性間に起るも

のであつて異性に加ふる殘酷なる行爲によつて初めて性的興奮と情慾の満足とを覺えるのである。谷崎潤一郎氏の小説には此のサデイスムスを描く事を以て知らる。(獨)

悟 [Apprehension] 迷妄解け去りて眞如に入ること。俗にいふ、まよひ去りて理に入ること

サニ 露國のアルツバセフの作自由戀愛と無拘束生活が全體の基調であり、散々馬鹿をやらして置いて「馬鹿者が一人減つた」と捨臺詞を言つてすまして居る程極端な虛無思想が終始一貫して此の作の中を流れて居る。

サファイア [Sapphire] 又「サツファア」とも讀む。青玉と譯す。網玉石の一種にして色奇し裝飾品とす。

サフスタンス [Substance] 實體、又は本體と譯す。其項を見よ。

サフエージ [Savage] 野蠻人、又は野蠻なる殘酷なる、殘忍なる等と譯す。

サフセクティブ [Subjective] 主觀的と譯す、其項を見よ。

サフライム [Sublime] 雄大、莊嚴、崇高、又は巍然たる等と譯す。

泊夫藍 [Saffran] 鳶尾、ハツに似たり。初冬の頃

六辨淡紫色の花を開く。雌蕊の頭を採集し乾燥して薬用とす、香氣峻烈なり。もと和蘭より渡來せりといふ。

醒めた女

所謂新しい女を更に深く徹底させたもの。ハンキン作「最後のドムラン家」を翻譯の際坪内博士が此の字を用いた。その主人公の名をジャネットと云ふ。ノラ、マダ、ヘツダなどに比較すると常識家で實行家である。坪内氏曰く「ジャネットはずつと分つた女で、手強く常識家で實行家な所は、多少ギ、一に似てゐるが、現實の苦い經驗を通して豁然と自覺した點はノラに似てをり、しかも其の自覺がたつた一夜の二三時間に起つたといふやうな奇蹟沙汰ではなく、八年間といふ年數を開し、大分苦勞をした後だといふ處に自然味と現實性とが具つてゐる。勿論、智的な、意志の強い、きつぱりした性格である。随つて冷靜で熱するといふことはない、けれども情のない女では決してなく、同情もあり、なつかしみもある普通の女性として寫されてゐる。」

サロンのSalon

毎春佛國巴里に開催する新作美術展覧會をいふ。もとは一なりしが近頃は新舊二派に分れ、其開催の所に因みてシャンセ

リゼ (Champs Elysees) のサロン、及びシャン
ドアルス (Champs de Mars) のサロンといふ。
サロンのラトウール
接客室的文學史 —— ジョザ・アランドスは
自著「十九世紀文學思潮」の中に自負して曰く、
文學と人生との關係に對する予の解釋からして
當然に生ずる結果は予の文學史は決して所謂接
客室的文學史ではないといふことである。予は
深く實人生に立ち入つて文學に表現せられたる
感情はいかにして人間の心情に生起するかを闡
明する。而して人間の心情は決して靜かなる池
でもなければ閑寂なる山上の湖でもない。それは
一つの太洋でその底には種々の植物や怪奇なる
動物やが住んでゐる。接客室的文學史は接客室
的の文學の如く人生をば光澤ある家具が並べられ
た文雅な人々の集まれる接客室裝飾されたる舞
踏室——そこには燈光燦として暗き隅々をも照
らしてゐる——と考へる事物をかゝる方面から
觀察せむとする人々をして爾くならしめよ、そ
れは斷じて予の見地ではない。

三位一體

西曆紀元三八一年コンスタンチノー
ブルの宗教會議に於て成立せる父即ち天帝と、
子即ち基督と聖靈との三位を一體の神と見たる
教義。

又、三人組とか三傑とか云ふ意にも用ゐらる。
彼の有名なる滑稽作家マーク・トエンとヘ
ンリ・セムス及びウヰリアム・デブリン、ホウエ
ルは近時米國文藝界の三位一體である。(中村吉
藏)

サンクタ・シムプリシタス

神聖なる質朴
と云ふこと、ラテン語にて Sancta Simplicitas
と云ふ、幼兒の如き無邪氣を云ふなり。

懺悔 [Penitence]

過去の罪惡を悟りて後悔す
ること。告白参照。

三原色 [Three printing colours]

黄・赤・
青の三色をいふ。

残酷 [Cruelty]

残酷は人間の根本的本能なり
然るに革命後の道徳にはそれは善となされず。然
れども根本的本能は假令之を惡なりと非難すと
も到底之を取り去ること能はず如何に抑止せら
るゝも尙此本能は其の生命を保ち其權利を主張
す。然れども眞直に現はるゝこと能はざるが爲
めに曲折して現はるゝに至れり。されば斯の如
き本能は外に現はれずして内に向つて働かざる
ゝに至れり。社會の制度は此の根本的本能を抑
壓するが故に此の本能は止むを得、外に向はず

して内に向へり。人間自身に向ふに至れり。他
に對して掠奪虐殺或は虐待を加ふること能はざ
るが故に自から苦しめ悩まし迫害するに至れ
り。以上はニーチエの道徳哲學なり。(マクス
ノルドウ)

三一一致 [Three Unity]

希臘時代の古典劇に
ありては時、處、動作の三つが一致して居なく
てはならぬと云ふのが金科玉條であつた。即ち
芝居では出来るが五年十年の長きにわたつては
いけない。場所も同じ場所でなくてはならぬ。
動作も連續して居なくてはならぬと云ふのであ
つて、古典劇はみなこれを嚴格に守つた。ところが
ロマンチックの大詩人沙翁が出現し、ことごと
くこれを破つてしまつた。沙翁は此の意味で悉
く大破格である。佛蘭西でも例の有名なミルウ
イサントラント即ち千八百三十年代にユゴが
新劇「エルナニ」を上乘してロマンチックの大
勝利を得たので三一一致は破れてしまつた。とこ
ろが奇と云ふべしだ。近代のイブセン劇になる
と又もや三一一致が行はれて居る。之れは作劇上
の問題としてまことに興味あるものである。

三詩聖

ホームー、ダンテ、ミルトンを云ふ。
三時代説 文明は神學時代、形而上學時代、實

驗主義の時代の三段階を経て 進歩するといふ説。(社會學者コントの説)

三色版 原色寫眞版。凡べての色は黄・赤・青の三色の配合によりて生ずといふ理に基き、實物の色を三原色に分解して三個の寫眞銅版を作り、各別に印刷せる其三色の三個相合して原物の色を生ずるもの。

サンスクリット [Sanskrit] 梵語と譯す。其項を見よ。

サンタ・クローズ [Santa Claus] 歐・米の俗説に、兒童を愛護すといふ不思議の老翁。クリスマスの前夜、兒童、靴足袋を其家の煙突の附近にかけ置けば、兒童の睡眠中煙突より降りし、土産物を其靴下袋の中に入れ置き、又惡戯する兒童には鞭を贈ることありといふ。

三多三士の説 作文上の用意に就いて、從來學者の屢々引用するものは、歐陽修の三多説なり。三多とは即ち看夢、做多、商量多是れなり。看多は古今の文を見る事多きを言ふ。做多は自身に文を書くこと多きを言ふ。商量多は其の書きたる文の字句篇章の間に就て、よく吟味をして工夫を著くること多きを言ふ。此の三多の功

を積まざれば、文章に名あるものにはなれぬと言へり。又文章を商量するに三上の訣といふことあり。是れも亦歐陽修の言ひたるものにて、馬上厠上枕上の三是れなり。(内田周平)

三段論法 論理學の語。三段推理ともいふ。三つの命題を大前提、小前提、斷案の三段に排列する論理の方式。例へば「動物は生物なり(大前提)、犬は動物なり、故に犬は生物なり(斷案)」の如し。

三都物語 佛蘭西の小説家、エミール・ゾラは自然主義といふ新藝術の旗色を明にして文壇に立つた人である。彼が「ルウゴン・マツカアル叢書」の完結後筆を起したのは「ルウゴン・ローマ」「パリ」の「三都物語」であつた。

三人稱 作者が第三者の地位に立ちて、客觀的に其人物なり事件なりを描寫する方式にして、複雑せる事件又は多數の人物を描くには此方式最もよく、又古來の長篇は多く此方式によりり

讚美歌 [Hymn] キリスト教にて、神または救世主の徳を讚美する歌。
散文 [Prose] 韻文の對。毫も言語の排列に韻律の制限なき一切の文章の總稱。
散文劇 典劇並びに浪漫劇が韻文にて臺詞を

續れるに對して、散文なるをいふ。十九世紀後半イブセン、ハウプトマン等の自然派の戯曲にはじまる。

散文詩 [Prose poem] 佛國惡魔派のボドレイルが始めたのを表象派のシュールフロアルグが踏襲し、同派のマラルメも亦なかなか面白いのを作つた。露國のツルゲネフも此の散文詩を作つた。

散文的 詩的の對。普通詩的といへば美はしき空想的の事を指すに對して、實際的、幻滅的のことをいふ。

三妄想 ハルトマンは(一)現世に幸福あり(二)來世に幸福あり(三)人世の目的は幸福にありと考へることを人間の三妄想と考へ、シヨッペンハウエルの後を追ふて厭世哲學を樹てた。

三面記事 [News] 所謂三面記事を好奇心で讀むと云ふことは空想的である處の偶發事件とか冒險とか又は奇怪に富む記事とかを悦んで讀むのである。かくのごとき讀者は作中の人物の如何を解せず又自己の全く異なる所の人生の變化などいふことを解せずして只奇怪な方面に開展する人生の極端な事件を直接想像するだけである。小説家であつてこの好奇心が一般に存

在する事を知り如何にして之れと接觸すべきかといふ事を知つて居る人はいつもその作は一般に好奇心に訴へんとする傾向のあるものである。であるから單純なる冒險談などは永久の價値がない。(ウヰンチエスター)

シ

詩 韻文の事である。其特色は、歌へるやうな調子のある事、夫から形式がひきしまつてゐる事、文句の並べ方が、普通の文章と較べるとひっきりかへしになつてゐる事等で、以上の三つの性質の中、何れか一つをもつてゐるものは詩である。俳句、和歌は日本に昔からあつた詩で新體詩は明治になつてから出來た詩である。漢詩は支那の詩である。

自愛説

自利説、自我説、利己説、爲我説等すべての行爲の目的を、「自己の爲め」といふところに置くのが正當であるとする倫理上の學説である。他愛説若くは愛他説が、自己を措いて先づ他の爲につくせと説くのは全然反對の説である

ジークフリート

ジークフリート(Siegfried) ヲグネル作中の人物の名、ジークリンドは森の中に入り一兒を生んで死ぬ。其の子は即ちジークフリートで嫉妬ミメ(wine)は之れを育て、人にした上毒龍を退治する。

シークロプス

シークロプス(Cecrops) 希臘傳説中にいふアツチカ第一の王。其の像は半人半龍體を以て表示せらる。アセン府を創設し、又婚姻・禮拜の制度を定むと傳へらる。

シーザリズム

シーザリズム(Caesarism) 有名な羅馬皇帝シーザーより來る詞にて武斷政治、專制主義大帝國政治、帝國主義、大國主義など云ふ意味。

自意識

自意識(Self-consciousness) 意識に判別力加はりて、自我の念、これに伴ふときに起る状態をいふ。人は此の意識あるが故に、精神状態に幾多の變遷あるにも關らず、常に自己を同一なりと意識することを得るなり。即ち内に省みて自己は何を意識するかを知り、又は自己自身

を知る意識なり。

寺院生活

寺院生活(Cathedral life) 神秘的な中世教の精神をあらはすべくロウイス・マンズは先づ最も精緻に最も巧妙に其寺院生活を寫した。既に一方に於ては復雜なる思想に疲れて、他方には剃刀の刃よりも鋭くなつた神經を持つてゐる現代の人に取つては中世教の教儀そのものよりは神秘の空氣に満ちた寺院生活こそ最も多く渠等の心を動かすものであつた。

ディオニソス

ディオニソス(Dionysos) 希臘神話の酒の神。葡萄樹の栽培を奨励せしより苦患を擯ひ快樂を興ふる神とし、又文明的平和事業の保護者として崇めらる。セウストとセメレとの子なりといふ羅馬にてはバカスと稱す。「悲劇の發生」を見よ。

ジオメデス

ジオメデス(Dionides) 希臘神話にあるトロイ戦争の時の希臘方の勇士の名。ユリシスと共にトロイ城中に忍び入り、城の守護神たるパライアの神像を奪ひ去りしより、城竟に陥れりと傳ふ。

ジオラマ

ジオラマ(Diorama) 長大なる麻布に連續せる光景を畫き、暗室内にありて觀せしむる裝置にして、實物に接するが如き感起さしむる一種の見世物繪。西曆一千八百二十二年ダグエー

自我

自我(Ego) 哲學上に於ては、天地萬物に對して存在する人格をいひ、心理學上に於ては、一切の心理狀態中最も主觀的に感ぜらるるものをいふ。

自我解放

自我解放(Emanicipation of Ego) 佛蘭西の批評家ブリュンチエル Bruntiere 氏は浪漫主義とは即ち自我の解放なりと云つたが以前からの此の傾向がつまり近代に於て一層烈しくされたわけである。幾千年來人類に與へられた道徳や教訓は凡て皆服従をのみ説いて餘りに個人の價値を見くびつて居た。それが此の歐洲近世の自由思想の爲めに一時に反動を起して今度は又極端な個人本位説となつて現はれて來たのである。

視覚主義

視覚主義(Opticalism) 繪畫の印象派は記憶を排してたゞ眼に映つたまゝを描くことを主義として居るから、視覚主義ともなる。

自我實現説

自我實現説(Self realization) また自己實現説ともいふ。自己に具有する諸性能を完全に發達せしむるを行爲の目的とする倫理説にして、古くアリストートルに起り、近代に至りては英國のグリーン及び我が大西操山等之主唱

せり。而して此説は自我主義と混同せざるを要す。自我主義は物質的方面に就て自我を恣にするものにして、俗にいふ我欲に渴く傾向なるも自己實現説は、同く自我を主とするも、其目的は物質的にあらずして精神的方面なり。

自家撞着

自家撞着(Self-contradiction) 論者それ自身の所論を、自家の所論と反對に出で、自家の言を否定する觀を呈すること。

自我表現

自我表現 人間は自己の内部の生活を外部へ表現しようとする本能を持つて居るこれが藝術となるのである。即ち繪畫や彫刻は物の形や色の上の自我表現である、音楽は音の上の自我表現であり、舞踊や演劇は人間の肉體上の動作及び表情に依つての自我表現である。

自我保存

自我保存(Self preservation) 主物が自己の生命を保護存続せんとする状態。

自我禮拜

自我禮拜(The Cult de Moi) パレスは彼固有の皮肉に教へられて眞に自由の人と成る事を知つた。デカルトの如く、彼の内部を考察して、彼は次第々々に彼自身に親しまうと努めた。彼は悲痛な精密さでそれ等を描き出さうが爲めに、器械的に、彼の種々な機關を取り外した。日毎に彼の自我を創造し、選擇された迅速

な諸感覚を産出する事、それこそ彼が自ら提議した理想であつた。彼が「自我禮拜」の名高い二ヶ條の格言を造つたのは其時である。第一條興奮のうちにあるより幸福なるはなし。第二條興奮の歡喜を増すものは分析なり。結論出來うる限り分析して出來うる限り感ぜざるべからず。(マンリ・マレス)

時間的美術

音楽などの如く時間を要素とする藝術を、建築とか、繪畫とかのやうな空間を要素とする藝術に對して云ふのである。つまり時間と共に動いて行く藝術といふ意味である。

時間美

前項に同じ。(空間美の對)

色彩感 [Colour sense]

人は一番多く用ゆる部分が多く發達するのは一般進化の原則であるから、勢ひ他方面の能力を萎縮せしめ之を犠牲にして能力が一方面にばかり限られて偏頗に發達するといふ結果になる。音楽家の耳、畫家の「色彩感」の如きは此の適例で昔、Titian は、人の一色を見るところに五千の色を視たとさへ傳へられて居る。

色彩聽覺 [Audition colour]

色と音との感覺の交錯することを心理學の方で色彩聽覺と云はれて居る。日本でいふ「黄ろい聲」なども此の

類に屬するものだらう。又アンドレエフの戦争の慘劇を描いた「赤い笑」なども其の類であるが、アカダンの天才の神經には特に之が極端になつて味覺も聽覺も視覺も或は觀念感情も皆こちや／＼に混同し錯綜して了ふ。青色の情があれば緑色の音もある、赤い笑があれば紫の匂もあるといふ風だ。ノルダウ一流の説によれば之等は皆大脳の障害 Cerebral lesion に起因するのださうだが、それは兎に角神經が剃刀の刃よりも鋭い近代人の感受性 Sensibility でなくては到底これは見られない現象である。(厨川白村)

色彩の樂人 [Colour-musician]

ホイストラ

アの風景畫は其の色彩を以て音楽の感じを出さうとしたので即ち彼を呼んで「色彩の樂人」と謂ふ、其の畫風は全く象徵詩人の場合と同様である。所謂「目で見る音楽」 Visible music をつくらうとするものである。

性情狂 [The Sexual psychopathy]

女の下着を見る時には特種の興奮を感じたりする變質者。

色盲 [Color-blindness]

或る種の色を限り見えない疾病。

史劇 [Historical play]

社會劇又は世話物劇

に對して、歴史上の事實を仕組みたる劇を史劇といふ。我國の太閤記・勳進帳の如き是れなり。

刺激 [The Stimulus]

神經細胞は其受けたる印象を記憶することを得ざれば今一個の新たな刺激が此細胞に到達するときに其の細胞が已に類似の刺激を受けたることありとすれば新來の刺激が到達する時に嘗て受けたる類似の刺激の記憶が呼び起さる。(マクスノルドウ)

自己暗示 [Autosuggestion]

自ら自己を睡眠又は無意識の状態に變ぜしむる作用をいふ。

自己解剖

イブセンが冷酷な「自己解剖」によつて得たる自己自身の一切の弱點や短所を綜合して作つたものである。「自己解剖」の語はイブセンが最も好んで其の劇作の態度を表現するに用ゐたところの者で、既に千八百七〇年十月廿八日ヘイテルハンセンに與へた書簡に於てこの語を用ひ、ハール・ギント及ステーンスゴール「青年結社」の性格と自己の性格との類似に注意せよと云ひ、ブランドは最も良き瞬間に於ける余自身であると確定した。(石坂養平)

自己觀察 [Self insight]

自己の内部的解剖をなすこと。

自己感情

功名心又は傲慢心等の如き自己の權力又は價値に關して、苦樂を生ずる感情をいふ。

地獄 [Hell; Infernal regions]

天國の反對

自己原因

自己の存在が他のものに制約せられざることを。存在の依據が、自己以外になきこと。

自己實現 [Self-realisation]

自我實現に同じ、其項を見よ。

自己消耗

誘惑と絶望との盃に通れて悪魔的技巧的パラドックスに刹那の生活の閃光を求めたエルレインの生涯にも眞闇の中に閃めく光りの二重性がある神を求めて悪魔に親んだ二重性がある。彼等は自から悪魔的な暗い現實の惱みに居つて神を求めた人々である。彼等が人間としての強烈な苦しみも濃厚な人間らしさも凡てこの二重性の中にある而して此の二重性の多くの作家に於て自己の靈肉の消耗となつてゐる。近代文學の深刻な興味その將來の生活に對する深い暗示は専らこの邊に在ると思ふ。(片上伸)

自己即詩歌

これは勿論作詩上の最進歩した、而かも最尊重すべき傾向であるが、作家側の主張は知らず、之を讀むで解釋する側の人に聞く

と、形のない心霊界の現象を表白せしめんが爲
 其の手段として、道具として、形ある物象界の
 現象を引きあひに出すのであるかのやうに言ふ
 のを耳にした。若し然りとすれば心霊界と物象
 界とは全然相離れた殆ど主従の關係のものであ
 る。又主なる事實を表白せんが爲めに、従たる
 事實を借りて来たのなら、それは純粹なる比喩
 で、象徴とは云ひ得ない。吾人が象徴詩として
 歌ふ場合、心霊界は其の主なるもので、物象界
 は其の従たるものであるかのやうな、區別は全
 々あるべからざる事だ。(森川葵村)

自己中心主義 [Ego-centrism]

自己を中
 心として一切を考ふる主義。

仕事の分量 [The Sum of work]

文明人の
 仕事の分量が過去半世紀間に於て如何に増加し
 來れるかは統計の明らかを示す所なり然るに人
 間の精力はそれに伴ふて發達せざりしが爲めに
 疲勞は自然の結果となりて現はれて來れるもの
 なり此の疲勞は現代人に於ては後天的ヒステリ
 となり其の子孫に於ては先天的遺傳的ヒステリ
 ーとなりて現る。(マクスノルドウ)

自己保存 [Selbsterhaltung]

生理的兼精神
 的存在者なる自己一人即ち我が肉體の保存と同

時に我が精神生活の保存を意味す。而して子孫
 の繁殖は自己保存の擴張を意味す。現實生活の
 主要な内容は第一自己保存及び子孫の繁殖
 (Forpflanzung)と解して好い。(金子馬治)

思索 [Speculation]

思ひもとむる意にて、理
 由又は方法などを發見せんと、思想をめぐらす
 こと。

自座の葛藤

立派な人物が彼の立派である
 いふ事が彼を破滅せしめる動因たる場合に悲劇
 的感情が吾人の胸中に生起する。立派な人間に
 於てのみ大なる生存力の葛藤が可能であつて、
 彼等は之によりて彼等の胸中に如斯生存力や立
 派な價値の存する事を現はしてゐる。則ち彼等
 が大なる葛藤に陥るといふ事が彼等の偉大性
 の自證となるので悲劇上エヒグラムと稱すべき
 である之れを「自座の葛藤」といふ。此悲劇感の
 所有効果はヘツベルによりて認められた「自座
 の葛藤」に基いてゐる。悲劇感の下に結合して
 悲劇の光輝を發揮せしめる相矛盾せる概念及感
 情の間の秘訣的關係の上に存してゐる。(朝鳥)

史詩 [Epic]

歴史上の出來事を題材とせる詩。
 紫色 赤はヒステリー患者に好まるゝ一つの特
 徴を有せり、之が爲めにヒステリー性の畫家は

赤色を好み、同時にヒステリー性の鑑賞家は特
 に赤色を有する繪畫を喜ぶ。赤が運動を促進す
 るに反して紫は運動を阻止す。されば多くの國
 民が悲みを表すときに専ら紫を用ゐたるは偶然
 にあらず。今日のサロンに於て其の他の展覽會
 に於ても屢陳列せられたる畫が一樣に紫を以て
 蔽はるゝを見るは今日の畫家が概して神經衰弱
 に罹り居ることを示すものと謂ふべし。(マクス
 ノルドウ)

詩人 [Poet]

詩を作る人、又詩に巧みなる人。
 作詩家。

[System]

法式、組織、又系統、規律、制度等
 と譯す。

詞姿 [Figure of Speech]

詞態詞品ともい
 ふ。單に思想を傳ふ事だけの平凡普通の言表法
 の上に出で、趣味、光彩、勢力を添ふる言表法
 を云ふ。

詞姿の論

詞姿は英語のフィギュア (Figure
 of Speech) を譯したので
 詞姿、詞品或は詞態ともいふ。單に思想を傳へ
 るだけなる平味普通の言ひ表はし方以上に出で
 て、趣味、光彩、勢力を添ふる言表法を云ふの
 である。詞姿と相並んで轉義的修飾 (Tropes) と

稱せらるゝものがある。轉義とは、言葉が本來
 有つてゐた意味と違つた意味に轉用されること
 で、例へば丹青を繪畫の意に、犬を探偵の意に
 入道を坊主頭の意に、「舟を漕ぐ」を居睡の意に
 用ゐる類ひをいふ。詞姿と轉義とは昔から紛ら
 しいものとされて、或は二つを區別して説く
 者もあり、或は詞姿の中に轉義を含めて説く者
 もある。古代の修辭家は多く二つを區別したも
 ので、ローマの修辭家の泰斗と云はるゝクイン
 チリアンの如きは、隱喩、舉隅、諷諭、擬聲等
 の修飾法を轉義に屬させ、反覆、漸層、對偶等
 の修飾法を詞姿に屬させた。近代の修辭學者に
 は、文章の修飾を語姿即ち一粒々々の言葉に存
 する修飾と想姿即ち思想の上、語を聯れた上に
 存する修飾との二種に分ち、語姿即ち轉義とい
 ふ風に説いて居る人もある。印度の佛典研究
 者が文章の妙味を音莊嚴、義莊嚴の二つに分け
 て説く分類なども、大體語姿、想姿の分類に似
 たものである。しかし近世の修辭學者は多く此
 の分類を無用として詞姿の名目の下に轉義を取
 り入れるやうになつて居る。(五十嵐力)

至善 [Highest good]

また、最高善といふ。
 善惡の差別を超越したる一段高き狀態の意にし

て、倫理學上には、人生の至高の目的、又は理想をいふ。

自然 [Nature]

二つの意味に解釋される。一つは「天然自然」の自然で、一つは山川草木などの總稱として用ゐられ、ありのままの状態を指す、讀んで字の如く自から然り——即ちひとりでにさうなつてゐるの意で、自然主義の自然はこれである。何れにしても、人爲とか人工とかが加はつてゐないといふ意味である。

自然界 [Natural world]

認識の對象となる總べての外、即ち吾人以外に存する外界。又天地萬物の存立する範圍。

自然科学 [Natural sciences]

自然の物質自現象について研究する科學をいふ、即ち博物學・地文學・化學・物理學等是れなり。(精神科學の對)。

自然教 [Natural religion]

自然崇拜の宗教。即ち原始の宗教。其神々はたゞ強力なる活物と思惟せられ、其慈惠を得て幸福を享けんが爲め所有物中最も貴重なるものを神前に捧げ、又は宏壯なる殿堂を築きなどして神意に承順せんとする風あり。猶、多神教を参照せよ。

自然死 [Natural death]

自然死の現象は吾人の最も注意を價する問題である。蜂の死は既に彼等が性慾の満足せられつゝある愛の中に始まると見ていゝ、彼等の死に對する感情の研究は興味あるものと云はればならぬ。第一に著しい事實は、彼等を捕へる事が易々たる事である。他の昆蟲を捕へる事はしかく容易でないが蜂は發達した羽を捉へ鋭い眼を持つてに拘らず捕獲されても何等の抵抗をも試みない、之に反してその幼蟲は甚だ敏活で捕へることは容易でない一言にして云へば幼蟲に於ては自己保存の念が甚だ強いのに成蟲に於ては殆んどこの本能が失はれて居る、此の事實はやがて自然死なるものが必ず自己保存の本能を失ふ事を伴なうのを意味してはいまいか、換言すれば自然死とは死の本能の伴なうものではあるまいか之れは最も重大な事柄である。横死参照。(メチニコフ——柳宗悅解)

自然主義 [Naturalism]

十九世紀の中葉、浪漫主義の反動として起れる近代文藝上の主義。この主義は文藝製作の究竟目的としては、一切の技巧虚飾を脱し直に人生自然の真相を描出せんとするにありて、之れが手段としては、

自然的必然的 [Naturnotwendig]

例へば、犯罪といふ現象がある。それは即ち祖先や父母から血統と共に傳つて來た特質より發した現象で此の遺傳的素質に加ふるに外圍即ちその人間の周圍の境遇、社會自狀態といふやうなものも影響してその自然の變質が然らしめたものである。そして當人自らの自由意志或は目的の考から出來たものでも何でもないと云ふやうなことを、之れを描くのがソラ一派の自然主義であつた。(朝鳥)

自然哲學 [Natural philosophy]

自然の本體・過程及び理想を研究する哲學をいふ。

自然淘汰 [Natural selection]

自然に多數生存する動植物中、其生存する場所の境遇に能く適應せる者は、競争に打ち勝ちて生存繁殖し然らざる者は自然に退歩絶滅して行く状態をいふ。(人爲淘汰の對)

自然の闖入

自然は正面から人間に復讐を加へるか側面から誘惑を試みるか或はまたひそかに忍び入るかして人間生活を攪亂するものゝ如く考へられるのである。イブセン劇の悲劇的要素の一つは確かにこれ等不思議な力と人間生活との關係を如何に見るかによつて生ぜられてゐる。

事實の事相は總べて描寫するを厭はず、從て痛切なる人間本然の肉慾を寫して往々醜猥に亘り、一般道徳と調和せざることあり。猶、寫實主義の項を参照せよ。

自然主義 [Naturalism]

哲學上の自然主義は、宇宙の説明は物質の説明と同様に、形而上的原理によらずしてなし得といふ主義にして、一に、唯物論ともいふ。唯物論参照。

自然人 [Natural man]

ハクスレイは謂つた。人間は一方に於ては自然人として、又他方に於ては倫理人として生活してゐる。反對な調和しにくい此の兩様の生活を營むて居るわけである。だから動もすれば争闘とか姦淫とか、すべての罪惡と名のつくことが此の兩方の不調和から生ずるのである。

自然的宿命

自然即ち大宇宙は自我即ち小宇宙を包んでゐる、自我は廣大無邊の宇宙間にある星の如きものである一種の神秘力を以て動かされ導かれてゐる。即ち人は此の自然的宿命的糸に繰らるゝ傀儡に過ぎない。此の宿命的觀念はロマンチック派の自然觀に一種暗澹たる色彩を與へた。(片山孤村)

るのである。(Intrude of Nature)

自然美 [Natural beauty] 山・水・風・月等の如く自然界にあらはるゝ美。人間美に對す。

自然描寫 [Description of nature] 自然(天然自然の自然)を描くことにて、有の儘の描寫をいふ。但し自然主義的の描寫にあらず。

自然法 [Natural law] 自然を支配する原因・結果の法則。

自然模倣 [Imitation of Nature] すべての藝術は皆「自然の模倣」であるといふはプラトオンの藝術論以來極めて古くから世に行はれた説であるが、さういふ意味から云へば總ての文藝は皆自然主義にぞくする事になつてしまふ、だから此名稱はもつと遂に狭く制限され、解釋されればならぬ。即ち同じく自然を模倣して所謂第二の自然 Second nature をつくりますといふことにて、自ら作者の態度に異同があればこそ、そのうちに色々な流派や主義から來たわけである。

自然力 自然力は或は廣大なるスペースを我々の眼前に開展し、或は紫の空色となつて我々の上を覆ひ、或は遠山の翠微となり、或は枯木の微細なる枝條となつて我々の心を誘ふ。然かも

我々は小鳥が終日我々の周囲で歌つて居ることすら忘れて暮らしてゐることがある。我々の耳もとに忍びより、眼前に迫る幾多の生命を忘れて、我々は手をさし伸べ、笑ひをかけることも取てしないで、活力に限定を付さうとする。然も時あつてはその限定を越えて、無限の活力の手へ進み入り、それと交流して限りなき悦びを感ずるのである。(吉江孤雁)

詞藻 文章に用ゐる言葉である。言葉は文章の細胞である。文章を自由に書くには言葉——詞藻を豊かにする事が先づ最も大切である。

思想 心のはたらきの一つである。人の心には、知、情、意の三の方面がある。思想は、そのうちの知のはたらきを云ふ。考へたり、判断したり、推理したりする事、又は、そして得たものを云ふ。碎いて云へば「かんがへ」である。思想界とは、時代の人々の思想の方面を一くまりにして云つた言葉。

詩想 [Poetical thought] 詩に適せる、或は詩に現はれたる思想。

思想家 [Thinker] 思想にふける人、又思想の豊富なる人。

思想界 思想の活動する範圍。又思想に耽る人

社會劇の部参照

思想の原理 思想の原理として直接に目的なりとせらるゝは下の三則なり、一、**自同律**…事物は己れ自らと同一也。二、**矛盾律**…同一物に就て同一事を同時に肯定及び否定するを得ず。三、**排中律**…同一物に就て同事を肯定するか否定するか二者必ず一ならざるべからず。

時代狂言 古昔の事を仕組みたる芝居狂言(世話狂言の對)

時代思潮 [Current thought] 其時代に於ける一般の思想、即ち或時代の人々に共通したる思想をいふ。如何なる時代にありても、其時代特有の時代思想なるものありて、其時代の文明に特殊なる色調を添ふるものなり。例へば平安朝には平安朝の時代思想あり、大正時代には又大正時代の時代思想あるが如し。而して其時代思想は著しく文學の上に現はる。

時代精神 [Zeitgeist] 獨逸にZeitgeistの語あり。茲に時代精神と譯する一時代の人文の全部に貫通して其活動進歩の動機となる所の根本思想の義なり。一定の歳時及び方處に於ける時代

精神は必ずしも唯一ならず、否多くの場合に於ては種々の傾向互に交貫離合して其の歸向する所同じからざるを常とす。是れ社會的範圍の廣きに隨つておのづから萬人の思想の統一せられ難き事情あればなり。人文發展の上より見る時は、是時代精神の統一は必ずしも希望すべき事に非ず、沈滞固陋なる形式主義の打破せられたる曉には從來の強制的統一に對する反動として社會人心に數多の異なりたる理想を惹き起すべく、斯くして惹き起されたる數多の理想の追求は來らむとする統一時代に到達する準備として極めて必要な事也。(高山林次郎)

時代物 [Historical drama] 古昔の事を脚本としたる院本又は演劇。(世話物の對)

質 [Quality] — 近代に於ける新藝術の目ざすところは近頃頻りに持離されてゐるベルグソンの哲學系統と同じやうに事象の靜かなる姿でなく、動ける命であり。形式でなく、表裏であり、事物の「量」でなく、其の「質」であること云ふことが出來やう。さうして斯かる新らしき藝術は、われわれの内生活に藝術に本質を探らむとする以上、其の手段方法はおのづから分

折でもなく、叙述でもなく、たゞ直覺の一路に向つて其處に活象の間斷なき律動を感じるの外はなし。(内藤濯)

實感 [Sensation] 官能の感覺をいふ。昔は藝術の與ふる感じは實行を離れたるものならざるべからずと云ひしが、今日にては實感をそのもの尙ほ主題たり得るに至れり。

實驗心理學 [Experimental psychology] 人の意識的現象と生理的狀態との關係に就きて、實驗的考察をなす心理學。

實驗智識 [Positive knowledge] 浪漫派理想派の様に唯だ純粹な想像にのみよるの可けくない、また不可思議の儘に描いて分析解剖を試みない空漠たる作物之また云ふに足らぬ。作者はすべて其作品を科學と同様に Positive knowledge の上に築かれねばならぬものと想う云ふのが先づソラの主張の要點であつた。(白村)

實驗的小説 ソラの所謂寫實主義も描寫主義も印象主義も周圍主義も人間の記録も生活の斷面も皆實は誤謬で彼が發明せしものは唯自然主義なる一語と實驗小説なる一語に過ぎず。(マクスノルドウ)

實行論 [Positivism] コントの創唱にかゝる哲學論。吾人は現象の本體を認識すること能はず、たゞ觀察と實驗とによりて其間の關係を知り得るのみ、哲學は是等の知識を統一組織するものなりといへり。

實行的生活 思想的生活とか、藝術的生活とかに對して、實行を旨とした生活を云ふ。(藝術的生活とは、觀照、即ち離れて觀、味ふ事を主とした生活で、觀照的生活といつても差支が無い。)

實在 [Reality] 此語は種々の意義に用ひらる。(一)事物は吾人の觀念たるに止まらず實際に主觀以外に存在して有ること、即ち客觀的存在。(二)常住不變にして生滅變化なき實體。又認識を離れ現象の外に存在する本體。

實在論 認識論上、觀念論と相對するもので、觀念論が、われ／＼が認識する對象は、外界にあるのではなく、唯、主觀の中に生じた觀念たるに過ぎないと説くに對し、われわれが認識し得た事物は、外界に實際にあるのだと説く論である。

實證論 すべて、實際の經驗を以て證明しつゝ積み上げて行かうとする哲學を云ふ。コントの

の、實用に適するものが即ち眞理にして、此以外に眞理なしと説く説。而して學問も實用となりて始めて其價值あるものにして、學問の爲めの學問は何の益もなしと説くものなり。

はじめて唱へ出したものである。

實踐的理性 [Practical reason] 理性が善と認むるところを行為・動作に表現せんとする道德的意思の力。

實踐哲學 [Practical philosophy] 倫理學又は審美學等の稱。其實踐を主とするによりいふ。

ジintai [Substance] 形式に對して、内容又は本質の稱。哲學上にては、(一)事物中の常住變化なき性質若くは作用、即ち其性質若くは作用なければ其事物の成立せざるもの。(二)事物の性質若くは作用の基本。(三)他のものに依らずして其物自身にて存在することを得るもの、又他のものを待たずして者へ得らるるもの。

實體論 (一)(Ontology)吾人に認識し又は思考せらるる實在の終極の本性を研究する哲學説。

實念論 [Realism] 概念は實在にして個物は其模寫に過ぎず一時の假現なりとの哲學説。この説は中世スコラ哲學に於て名目論と對して論争せらる。代表者はアンセルム。

實用主義 [Pragmatism] 近頃起りたる哲學上の一説にして、眞理は絶對的のものにあらずして相對的のものなり、吾人の實用に功あるも

また現實主義といふ。

詩的 詩的とは何うしても無味と同意義ではあり得なかつた。人々は感溺し陶醉し興奮せむことを欲した。人々は再び小兒の如く信仰せむことを欲した。人々は騎士の情熱と僧侶の法悦とを感ぜむことを欲した。人々は詩的に狂亂・旋律的に夢みむことを欲した。人々は月光に浴し銀河の中の精靈と神秘的に交換し草の生える音を聞き分け鳥の言葉を理解しテイークの謂はゆる『月光に照らされた幻のやうな夜』(Mond beglante-gzubernacht)、『森の静寂』(Waldesim sankeit) とに深く親しまむことを欲したのである。(ゲオルクブランデス)

史的唯物觀 [Historischer Materialismus] 社會的變化、政治的變遷それらのすべてを皆物質的原因に依つて説明した見かたなのである。

使徒 [Apostle] 耶蘇基督の弟子中、福音宣傳

に派出せられし、シモン・ペテロ、アンデレ、ゼ
ームス、ヨハネ、フィリッポ、バルトロメ、ト
マス、マタイ、小ゼームス、ジユード、シモン
ユタス・イスカリオットの十二人の稱。

自動 [Self-activity] 其もの自らにて活動す
ること。又、他の事物に關係なく或事物の現は
す動作の稱。(他動の對)

自動的 [Intransitive; Active; Automatic] 他動的の反對他より促さるゝ事なくして動くといふ意味に解すれば、殆ど自發的と同意味なれど、自ら動く即ち自然に動くといふが如く解すれば稍異りて、無意識的に、無意に、又は本能的に或作用をなすといふ義となる。

支那文學 [Chinese Literature] 上古以來支那國土に行はれたる文學の總稱。年代は四千年に跨り、概れ各時代に就て詩文の總集あり。書經・詩經・易經を三大古典として、經書・史傳・子類・論策・序記・辭賦・詩歌・戯曲・小説・隨筆・語錄・辭書等を網羅し、書籍數は數億萬卷に達す。其體裁は象形文字の配列に成り措辭歐文の如く、我國にては之を逆讀し且つ訓讀す。其特色は異邦文學の影響を蒙らざることなり。而して

我國には上古既に輸入せられて著き發達をなせしと共に、國文學を鼓舞せしこと亦多大なり。

死の如く強 [Strong as death] 佛蘭西のモーパッサンの作。此の作はビエエルとジャソに次いで出た書で、それから間もなく發狂して癡狂院で死んだので、此の作が謂はゞ晩年の作とも云つていい。獨身者で通した一人の藝術家が、伯爵夫人を戀し、又其の娘をも戀したが、娘が愈々嫁入りに行く事になつて非常に失望し、獨身生活の寂寥と、老ひゆく年齢の悲しさとなげき入る心持が、獨身で發狂して終つた作者の晩年の實感其のまゝを告白して居るらしい。

自發自生 [Spontaneous creation] 美術的製作は全然自由なるべきであるとか美術は作らるべきにあらず成り出づべきなりとか摸擬に成るべからずして神來に成るべきなりとか詩人の氣隨には法度無し詩人は須らく己れを法度すべしとか天才の無上の試験は創力(カリゲナリター)の有無に在りとか類りに天才の神聖を稱揚した言葉と共に美術の極致は自發自生に在りといふ。此の種の氣焰がだん／＼猛烈になるにつれ荒唐無稽な無法の空想に耽る詩人も現はれ

頭から解らないやうな亂脈の作が相踵して溢出するやうになつて其の是非の問題は一段と複雑になり來らざるを得なかつた。(坪内雄藏)

自發性 [Spontaneity] 生理學者は生物の行為を外界の刺激との間に一定した自動的機械的反應の存在することを知つてゐる。然し彼はまた或る程度以上にはこの法則の行はれないことを承認せねばならない。神經中樞を取り去つた蛙は一つの機械のやうに外部の刺激に反應するが、しかしさうでないものは一種自發的な反應に出る。かやうな自發性は凡らゆる生物の特徴であつて、要するに個性の保存の方へ向ふものである。(中澤臨川)

シバリチズム [Sybaritism] 淫樂主義、淫蕩主義、所謂遊蕩文學之れなり。

ジプシー [Gypsy] 放浪民族の一種。下等の旅稼ぎ等は之に屬す。
時文 [Contemporary writing] 其時代の一般に用ひらるゝ文體の文。
使命 [Mission] 其のものゝ與へられたる役目即ち擔當するところ。例へば「新文學の使命」といへば「新文學の與へられたる役目」といふ意味となる。

社會 [Society] 相互作用又は共同生活をなす組織又は團體、即ち個人が集まりて、其各個人が精神的に結合せるものをいふ。故に個人は社會の一分子にして、個人なければ社會なし。而して從來は社會は個人の機械的集合なりと考へられしが、近時は社會有機體說一般に承認せらる。

社會意志 [Collective Will] 社會の多數の人の知識・經驗が、昔より或は衝突し或は融合し或は同化して成立したる結果、個人は之に感化せられ支配せらるゝ、約言すれば統一せられ組織せられたる社會一般の意思をいふ。我國の武士道の如きは此の一例なり。

社會學 [Sociology] 廣義には社會の構造・形式及び發達・變遷等を研究する科學なれども、普通狹義には社會の理法を研究する學とす。佛人オーギュスト・コントの創説に、よる。

社會劇 [Social drama] 劇の一種。社會に生じたる種々の問題或は社會道徳と個人との衝突問題等を題材とせるもの。近代の歐洲の作家殊にイブセンの作は概れ此種なり。一に問題劇ともいふ。

社會教育 [Social education] 社會一般の

人に教育を施すこと、又、社會主義によりて行ふ教育。

社會共產主義 [Social democracy] 社會

の財産は各人の私有に屬すべきものにあらざりし、土地・資本等を社會の共有となさんとする主義。其極端なるものに至つては、革命の手段により今日の社會を打破して、根本的組織を一變せんとするものあり。

社會經濟 [Social economy] 人類が社會を

なし、經濟的活動を營むこと。

社會劇 [Social drama] 近代文藝には社會

劇・思想劇・問題劇・傾向小説・或は問題小説などと稱せられる類の作物が非常に多くなつた。絶えず近代の人々の腦裏を往來してゐる社會問題だの、結婚問題だの、倫理宗教の問題だの、之等小説や劇曲の中心思想になつてゐるのである。たゞの面白い芝居や物語よりも直接さういふ問題に觸れて居る作物の方が一層強い感動を讀者觀客に與へるからである。

社會主義 [Socialism] 現今の經濟組織は、

私有財産制と自由競争制と並び行はれ、隨て貧富の度著く懸隔せるを以て、之を根本より打破し財の分配をして宜きを得せしめんことを目的

とする主義の總稱。其方法は學者の見解一ならざれども、生産の手段を共有となすといふに至つては相一致す。又、普通には社會共產主義の特稱。

社會的感情 [Social feeling] 愛情・同情等

の如き社會を結合する自然の感情をいふ。

社會的決定論 [Social Determinismus]

人生に對する一般の機械的見解は愈々物質的原因から説明しやうとして來た。社會的決定論、これは獨逸での名稱である。

社交的動物 [Social animal] 社交の本能を

有すとする側より觀たる人間の稱。

社會黨 [Socialist] 社會主義を主張する黨派

此主義を唱ふるものは社會を以て共有のものとし、個人を平等にして富の配布を均一ならしめ勞働者などの薄遇を救済せんとするものなり。また特に社會共產主義を執れる黨派の稱。

社會問題 [Social question] 社會の經濟上

に於ける強者と弱者との利害・衝突を和し、貧富の隔絶を救済し、以て貧者・弱者を保護せんとすることに關する問題をいふ。

寫生 寫生といふことは往々作者を不道徳な自

己肯定に陥らしめるものである。見且つ寫してゐる自分を全く勘定に入れてゐないやうな場合が多い。そしてこの度数が多くなつて行けば行くほど、讀者は其の作者の態度に反感を抱くやうになつて行く。修業としての寫生ならばそれも又可なりである。作者が自分を勘定に入れないければ入れないほど、其の寫生が十分に且つ樂に作者の目的を達するやうな傾向を持つてゐるものであるから、初心のうちにはさういふ樂な極端な寫生をやつて見るのもいふ。しかし、苟も藝術としてはそれでは甚だ不十分である。藝術家としては作者と目された客觀物と常に平行をとつて双方共に十分に解剖を加へなければ駄目である。(田山花袋)

寫生文 事物其まゝの状態を客觀的に描寫する

文、即ち粧はず飾らず見たる儘を細かに書くを旨とせる文章にして、正岡子規氏之を主張せり

寫象 [Recollection] 知覺または思考により

て、過去の對象が再現せられたる意識の状態。

寫實主義 [Realism] 文藝上、古來理想主義

と對立せる一主義にして、思想の案出よりも實際の状態を寫し出すことを旨とせり。従てやゝ自然主義に似たれども、自然主義よりは範圍廣

し。自然主義は十九世紀の中葉の科學的精神に影響せられ、擬古主義の反動として生まれたるものにして、科學的・唯物論的特色を有せる一の傾向なるが、寫實主義は理想主義が理想を歌ふを主とせるに對し、現實を寫すことを主とする傾向をいふものにして、必ずしも科學的・唯物論的特色を有するものにあらず。即ち擬古主義にても其現實を寫すといふ點より見れば、寫實主義といふことを妨げざるなり。

寫實小説 [Realistic novel] 理想的の小説

に對して、寫實的の小説をいふ。

ジャンヌ [Janus] 羅馬神話中の神の名。ダイ

ヤナと共に日月に配せられ、門戶の守護神として門の二方に向ふの意に象々たり、二面の像に表さる。

ジャン・クリストフ 「ジャン・クリストフ」

は佛のロマン・ロオランの有名な作の名である。これは「メエトオエン傳」「ミケル・アンジエロ傳」「トルストイ傳」の三篇が基調となつて「力の探求」がいろいろの形式の下に表白され、作者の「力の藝術」が體されて居る。ジャン・クリストフといふのは作中の主人公である。ロマン・ロオランは一九一六年にノベル賞金を貰つた人で

ある。
ジャンル [Genre] 人事畫、風俗畫、浮世繪等と譯す。

主意的 [Liberal; Free] 心の働きを知・情・意の三方面に分つ時、意を心の中の主として考ふるを主意的といふ。(主情的・主知的の對)
醜 [Ugliness] 作者の見方によつて快と不快と。美と醜と苦と樂との同一物も両面いろくとなる。ステイヴンソンの書翰集に「醜とは戦慄の散文的なる一面である」といふ語があるがたとへば人殺してもそれを浪漫的なステイヴンソンが寫したやうに或は沙翁の「マクベス」にあるやうに行けば物凄くない光景が變じて一種の詩美となる、苦痛といふ事も樂天的に考へれば随分快樂となるものでチエスタトンは例の警句で「冒險とは苦痛を素直に考へたるに過ぎず」とも云つて居る。

自由 [Freedom] 障礙又は滯滞なき活動の狀態。又、束縛或は制限なき隨意の行爲。

醜惡なる現實 醜惡なる現實を描くと云ふことは直接に作家の倫理感と交渉はない。題材そのものよりもその描寫の態度如何が作家の倫理感と密接な關係がある。醜陋なる題材が社會道

徳の上から風教維持の上から害毒があると認められた以上それを禁止するのは當局者の自由であるが、吾々は文藝の批評家として單に題材そのものゝ美醜によりて作家の道徳的内容を是非しやうと思はない。(石坂養平)

執意 [Perseverance] 目的の觀念及び其目的を遂行する手段の觀念と、其目的に對する生き生きさせる感情を伴ふ意志活動。

自由意志 [Free will] 普通には、隨意に思慮し決定する意志。又、衝動或は欲望を抑壓し訓練する意思。神學上にては、(一)神は自然法若くは道徳法の範圍に於て、意志の相對的自由を有すといふに對して、神は世界の主にして、世界は神の意志によりて創設せられ自然法といひ道徳法といふも神の意志の規定せらるゝものに外ならず、神の意志は之等に對して絕對的自由を有し、奇蹟も亦可能なりといふこと。(二)人類は罪惡に繋縛せられ毫も自由意志を有せずといふ說に對して、人類は聖靈のたすけなくとも能く自己の自由によりて自己の救済をなし得べしといふこと。
倫理學上にては、意志の活動は一定の原因に規定せらるゝ必然的のものといふに對して、意志

の活動は任意的にして必然的にあらず、自然界に於ける因果律の規定を受けざるものといふこと。

自由意志説 [Liberalism] 吾人の意志は遺傳・教育其他内外界の事情如何に拘らず、行爲選擇の自由を有すとの説。

ジューカリオン [Deukalion] 希臘神話に

いふ、ジューカリオンはプロメシウスの子にして、ゼウス神、人間の墮落を怒り大洪水を起して之を亡ぼせし時、妻と共に小舟に乗りて難をマルナサス山に避く。時に神託あり、覆面して母の骨を後方に投げよと、ジューカリオン思へらく、地はこれ萬物の母なれば、其骨は石ならんと、即ち石を取りて背後に投げしに、其石は男、妻の投げし石は女と化せり。かくて勞働に耐ふべき強健なる人間の種族新に發生せりと。

宗教 [Religion] 吾人が人生に超越せる高崇偉大なる或ものを畏敬する感情に起因し、之を人格化して崇拜し信仰し、憑りて慰藉・安心・幸福を得て以て人生の缺陷を補はんとするもの。従て一面には禮拜の儀或を生じ、一面には命令の權威を生ず。今日に於て最も勢力あるものは

宗教詩

佛教にして、基督敎、ファイイ教之に亞ぐ、之を世界の三大宗教と稱す。佛教以下各項參照。
宗教詩 Psalm エスレーの讚美歌 Hymn 佛家の偈などは宗教詩と云つてもいゝが、さういふ詩を作る人々に限つて詩そのものを手段視するものが多いのであるから、殆ど此の部類に入れる必要がないことあらう。わが國近世の和讃、現代の讚美歌等はその缺點の最も甚しい例だ。(泡鳴)

宗教的生活 (印度)

印度の僧侶貴族等が如何に宗教的生活を重んずるかと言ふ事を説明すると、古代から人の生涯を四期に區別して第一期は修養時代(Brahmachari)で、僧侶階級の子弟は八歳から十六歳までの間、王士族の子弟は十一歳から二十二歳までの間、平民族の子弟は十二歳から二十四歳までの間を此の修養時代としてゐる。この時代は各子弟はその貧富を問はず、美食を避け、奢侈に遠ざかり、髻髮麻服一杖一帶を着け、一切の情慾を離れ、順從謙抑にして吠陀の經典等を修學するのである。第二期は家居期(Yashtha)で、子弟が修學時代を過ぎると婚姻し、家業に従つて世事に働く

ので、内地で言ふ家庭の人となり社會の人となるのと同じことである。

第三期は森居時代 (Vaupraetha) と云つて、老いて五十頃になると、家業財産萬事を子孫に譲つて、自分は世間と離れ、俗務を絶つて専ら宗教的生涯に入るのである。

第四期を遊歴時代 (Sanyasi) と稱して、第三期で宗教生活に入つた人が進んで各地に遊歴し梵の眞理を説示するのである。

こんな四つの區別は猶ほ今日までも存して居て、古い印度國民に堅く守られて居る。斯うして五十以上に年を老ると萬事を捨て、宗教的生活に入り、常に梵の大眞理を求め、進んで他の人々に對して自分の信仰を説いて、それを以て生の目的とするのである。之れは確に歐洲文明國の國民とその理想と目的を異にして居る點で、吾々が今日も尙ほ印度に習ふ可きは斯う云ふ風習である。今一と稱賛すべき古い印度の美點は、彼等の來客を丁寧に取り扱ふ事で、來客は賓客でも、食客でも、何の隔てもつけず、一家が打揃つて優遇する事に心を盡す。これは印度太古からの風習で「來客を神の如く取扱ふべし」と云ふ教を固く守つて居るのである。そし

てその守り方がたゞ習慣的でなく心から守つて居る。

宗教哲學 [Religious philosophy] 宗教の原因・成立・發展等を考察し研究する哲學。

自由競争 [Free competition] 束縛又は制限を受けずして、各自隨意に他と物事の競争をなすこと。

獸劇 [Bestial Comedy] ヲラが本能や性慾のみの人間、殊に下層社會の動物的生活を寫したのを或る者は評して曰く、昔ゲンテは神聖の喜劇 Divine Comedy を書きマルザックは人間の喜劇 Human Comedy を書いたが、ゾラに至つては即ち野獸の喜劇 Bestial Comedy を書いたものである。

自由結婚 [Free marriage] 男女が父母・兄弟等其監督者の承諾を求めず、相互間の合意のみによりてなす結婚。

自由研究 [Free study] 從來の説明又は立言に拘泥せずして、全く自由に自由になす研究。

自由講座 [Free chair] 特に講義すべき學科の部署を定めず、其時々講者が自由なる題目に付てなす講義。

自由詩 [Free poetry] 從來の詩に於ける字

數の制限、例へば七々調とが七五調とかいふものに拘泥せずして、胸より溢れ出でたるまゝの自由なる調子にて歌へる詩をいふ。現今の新しき詩人は多くこの形式によれり。

修辭 [Rhetoric] 文章の配置・結構を考へ、語句を洗練潤色すること。

自由詩 [Vers libres] 内心律の動くがまゝ、形式を作つて行けば可いと云ふのが、自由詩家の繰返す所だが、實はそれでも眞の自由は無い。苟も精神が形式に現はれる時は、言語といふ記號の拘束を受ける。徹底して論ずれば、眞の自由詩は沈黙でなければならぬ。以心傳心で、拈華微笑の域に達しなければならぬ。然し詩人が實際の作品を歌ひ出づる時は、言語といふ填充物の約束に従つて、成るべく少しの讓歩と妥協となし、せめて内心の動くがまゝに律を其儘形式に現さうと試みる。藝術は自己の表現といふ以上、これで正當な筈であるが、この相對の世の中では、何事もさう醇正には行かぬ、藝術は作家の表現であると同時に、作家と他人との合作である。鳴つたばかりでは濟まぬ、共鳴が起らねばならぬ。既に複雑なる習慣上歴史上の因縁が絡まつてゐる一國語の約束に少しも従ふ以上純

乎たる自己内心律の發現だけでは、他人をして直に新形式に新しい律を覺知せしめ、之に共鳴せしめることは出来ない。之に成功しやうには、是非とも、やはり言語其物に潜む律を發見して、此途を便に感情を通はさるべきなるまい。是に於て愈々絕對の自由は缺けて來る、然も眞の交感を生じて、詩は成立するのである。勿論這般の事情は必らずしも詩人の自覺する所では無い、眞の詩人は却つて無意識に歌ふのであるから、會々、眞に自由を得たやうな迷ひを有つこともある、又或時は内心の發動力が強大であつて、無理遣に一種の新形式を詩人に押付け了ふす僥倖もある。而しこの迷ひ、この僥倖より生命ある作品が生れるから不思議だ(上田敏)

十字架 十字架の原意に還れ。社會の下層にあつて上より制肘を受け、ローマ政府の壓迫の下に暗きカタコウムの中に宗祖を追慕せし彼使徒達の心に還れ。然り彼簡單なる十字架の形象をさへ我心の憧憬のしるしとして表すを得ざりし初代基督教徒の悲痛なる精神に還れ——と斯う叫んで見たい。そして此叫びが我基督教界の現狀に對して決して無意義でない事を確信する。神秘的な香の煙にぼかされた十字架の姿、色

子を透して注がる、薄暗い光線を射返して燦爛と輝く十字架の影、乃至は白地に赤々と印された十字架の旗提灯、其等を見慣れた我々は、ともしれば彼十字架を神秘光榮義憤犠牲の象徴であるかの様に思ふ。そして一步過つてお芽出度き境地に入れば唯々傳習的に考へられた神話的な罪の贖の印として只管に崇めまつるに到つて仕舞ふ。

藝術としての十字架の氣分としては兎もあれ、苟も宗教的に十字架の意味を味讀しようとするならば、我々は先づ彼の幻影の十字架、傳習の十字架、禮拜對象としての十字架の姿を姑く我眼前から去らなければならぬ。即ち彼十字架は、眼前に仰げば藝術の對象となり、背後に負へば宗教の對象となると云ふ其一點に深く心に止めなければならぬ。(石田三治)

修辭學 [Rhetoric] 美辭法ともいふ。語の用ひ方を極め美辭の文を作る方法を論ずる學。言語・文法・論理・心理の諸學に連り、根本の原理を美學に仰ぐ。

從想 [Minor thought] 文藝の内容をなせる思想の副なるもの、即ち從なる思想。

自由思想 [Free thought] 自由の範圍を擴張せんとする思想。又、自由の活動を主張する思想。

自由思想家 [Free thinker] 所謂新しい時代の思想が、眞に自由な思想となる爲めには、それは更に新しい時代そのものからも束縛を脱してしまはなければならぬ。眞に自由な思想家は、同時代のあらゆるものから、周圍から最も遠いものからも、最も近いものからも束縛されて居てはならぬ。故高山樗牛氏は流石にうまいことを云つて居た。氏の「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」を少しく修正して「吾人は須らく現代をも超越せざるべからず」とすれば、そのまゝ申分なき自由思想家のモットオになるのである。(生田長江)

蒐集欲 [Hibeleis] 變質者の一特徴にして無用の雜物を集めんとする甚だ強き慾望を有す。之をオニマニア (Onimania) 或は購買狂と名づく。(マクスノルドウ)

自由主義 [Liberalism; Freedom] 通俗には、すべて物事を自由にせんとするの主義。又國民の自由を擴張せんとする政治上の主義。經濟上にては、自由貿易又は自由放任の主義をいふ。

自由信仰宗 [Freireligiosgemeinschaft] 獨逸の宗派で極めて現世的なもの、神とか來世とか云ふものをすこしも考へて居ない。英の Brethren church などともまた此の傾向を持つて居て、舊來の正教を離れて自由説を唱へて居る。

充足原理 [Principle of sufficient reason] 如何なる物事にも、其成立に必ずなかるべからざる理由又は原因。

神變奇異 小泉八雲氏が「小説に顯はれた神變奇異」と題する講演中に曰く「文學でも音楽でも又建築でも、大藝術となると何處か幽靈的なところがある。宗教に關しては信仰があらうが無からうが、近世の科學は、これまで物質である立體であると取扱はれて來たものも、その他の幽霊同様に幽霊物であることを證明した。幽霊に關する舊式の物語や學理を信じないとしても、今日我々は我々自身の幽霊で全く不可能のものであるのだと認めない譯にいかぬ。宇宙の神秘は智識の進めば進むほど、我々の頭上に益重く益恐るべく重量付けられて、如何にも幽霊的神秘と云ふべきである、有らゆる大藝術は兎

に角この宇宙自隱語を想起せしめる、故に私は大藝術は何處か幽霊的なところがあると云ふのである。そして其れが我々の持つて居る無窮の素質に觸れるのである』(野口米二郎)

自由本能 [Instinkt der Macht] と力の慾望 Der Wille zur Macht Nietzscheの説は強烈なる自我を中心とした個人主義である。苟くも健全な人間には意の儘に働きたいといふ「自由の本能」がある。人の根本的衝動は「力の慾望」であるとかういふのがまづ渠の説の基をなして居る。

自由民 [Free people] 正當なる行爲によりて、自己の權利を自由に行使し得る人民。

獸慾主義 [Animalism] 道德・人道等を顧みず、だゞ肉慾とか貪慾とかいふ如き動物的の慾望を恣にせしめる傾向をいふ。

自由戀愛 [Free love] 我等は金の爲めに結婚すべきにあらざるなり。こは何人も道理を解し道德を重んずるものゝ異議を稱へざる所なり。然らば我等は何に依つて結婚すべきか。最も合理的なる答は愛に依つてといふにあり。(マクスノルドウ)

自我 [Self; Ego] 哲學上にては、思惟し經驗

する吾人自身、即ち主観的自己の稱。倫理學上にては、他人の利害如何に關せず、たゞ自己の慾情・願望を遂げんとすること。又、利己、即ち何事も自己の利害より割り出すこと。

主我狂 現代の一特徴として現はれたる心的疾患、教養ある人士も滔々として之に感染するに至る。(マクスノルドウ)

自我主義 [Egotism] 自己を主とする主義。利己主義とは異れり。

主観 [Subject] 知覚し思考し又は感動する心そのものなり(客観の對)。されど自己の意識・欲望等も自我の考察の對照となるときは客観なり。

主観的 [Subjective] 其もの自身にかけて觀察すること。即ち自己以外のものを主とする客観的に對し自己を主とするを主観的といふ。要するに自己に重きを置く意なり。

主観の燃焼 自己の心が或事により 又は或對象に向つて全力的に熱中したるさまをいふ。此の場合には、主観は自己の心といふ程の意。この用語は甚だ不徹底なり。

主義 [Principle] 執りて守る一定の方針。旨

として主張する標準。
術語 [Technical term] 普通一般の使用語に對して、科學又は専門の道に於て特に使用する語をいふ。

宿命 [Fate] 前世より定まりたる運命。
宿命論 [Fatalism] 自由意志論の反對にて、人生の行爲・境遇其他一切の出來事は、凡べて避くべからざるやう豫め宿命によりて定められたるものなれ説、之を避くること能はずといふ説。此説はフイフイ教に於て最も明に現る。

宿命論 [Fatalism] 及び**決定論** [Determinism] 近代的精神は科學を基礎として一切の現象を物質の盲動であると見る。従つて人間は自然の機械的法則に壓迫されて全く動きのとれない者である。彼の自由意志と云ふものゝ如き畢竟これ過去の迷妄に過ぎない、萬物は皆一定の原因あつて其の必然の結果として出來たものである。變化極りなき森羅萬象も要するにこれ一つの Mechanism であると考えらる。従つて世の中の總ての現象は皆 Given fact であつて吾々の力を以てしては到底これに一指をだに染める事は出來ない。既に確固不動の法則あつて此の世

界を支配し、人間は唯々としてそれに盲從して行く外はない。吾人は全々此の境遇の爲めに左右せられ、其の冷酷無性なる不可抗力に對して全く自由を失つたものである。かういふ考へ方を名づけて決定論といひ、又宿命論ともいふ。これを平たく云へば結局「もう定つてゐるのだから騒いだつて仕方が無い」と諦めて仕舞ふ態度を云つたのである。(厨川白村)

朱子學 宋の朱熹の唱へし儒學。宇宙に理及び氣の二元あり、萬物は氣を稟けて形をなし理を稟けて性をなす。人性に本然と氣質との別あり本然は善にて普遍なるも、只氣質の清濁によりて聖・凡分る。故に人は居敬即ち思慮を慎み、精神をして外物の爲に誘惑せらるることなく、窮理即ち學問によりて事物の理義を窮め、以て徳器を成就すべきことを説く。又、程朱學といひ、或は性理學ともいふ。猶、程朱得、性理學の項を参照せよ。

主情主義 [Sentimentalism] 感傷主義に同じ、其項を見よ。

主情的 [Emotional] 情を主とするさまにふ(主意的・主知的の對)。

主人公 小説・脚本等にて主眼となる人物。英辭

の項を参照せよ。

の Hero (男性) Heroine (女性) の譯。

樹精 [Hamadryad] 希臘神話には自分の棲息して居る樹が枯れれば死に、生きれば生命のあるといふ森の神の名になつて居る。——山林の仙女——樹靈とも云ふ。

酒精中毒 多くの天才は又激しく飲酒に耽つた。アレキサンダーはハアキユレスの盃を十數杯呑みほした後で死んだと云はれてゐる。……(ロムプロンカ)

種族進化 [L' Evolution des genres] 文藝の方面にてテイヌ Taine の批評論は詩文發達の歴史を全く人類進化の現象の一部と見なして解釋するものである。ブリュンチェル Brunetière も又之に倣ふて文學の「種族進化」の學説を公にした。

主知的 [Intellectual] 知を主とする(主意的・主情的の對)

酒中眞理 [In Vino Veritas] 詩的にも實際的にも頗る主観派の獨逸思想家エレミツタは、醉へる状態を最も眞なるものとした。

至調 [Leit motif] 主調とは或る音調の連續にして一定の觀念を代表すべく假定せられたるものなり。

出世間【Seclusion】 俗界を出離して僧となること。又、現象界を超越して眞如界に入ること

有異の世間を出離すること。

受動【Passivity】 他のはたらきを受くること、即ち受け身になること。又、所動といふ（能動の對）

受動的【Passive】 能動的即ち働きかけに對する受け身になるさまにいふ語。

ジュノー【Juno】 羅馬神話中の主なる女神。

ジュピターと配して天を司るといふ。希臘のヘラに當る。

手法 手法といふことは、構圖から構成に移つて行くところを指して言ふべきものだらうとは思ふが、あらゆる作家の持つたあらゆる手法を一々細かに研究して考へて見ると、小説を書く上に非常に有益である。ある作者は細描を得意とし、或る作者は疎描を得意とする。ある作者は題材に意を用ゐ、ある作者は心理に意を用ゐる。シーンをあらはすことの巧みな作者もあれば、シーンを餘り多く出さずいつの間にか内容が発展させて行くことの巧みな作者もある。仔細に見て来ると千態萬狀である。（田山花袋）

手法 手法といふことは、構圖から構成に移つて行くところを指して言ふべきものだらうとは思ふが、あらゆる作家の持つたあらゆる手法を一々細かに研究して考へて見ると、小説を書く上に非常に有益である。ある作者は細描を得意とし、或る作者は疎描を得意とする。ある作者は題材に意を用ゐ、ある作者は心理に意を用ゐる。シーンをあらはすことの巧みな作者もあれば、シーンを餘り多く出さずいつの間にか内容が発展させて行くことの巧みな作者もある。仔細に見て来ると千態萬狀である。（田山花袋）

手法 手法といふことは、構圖から構成に移つて行くところを指して言ふべきものだらうとは思ふが、あらゆる作家の持つたあらゆる手法を一々細かに研究して考へて見ると、小説を書く上に非常に有益である。ある作者は細描を得意とし、或る作者は疎描を得意とする。ある作者は題材に意を用ゐ、ある作者は心理に意を用ゐる。シーンをあらはすことの巧みな作者もあれば、シーンを餘り多く出さずいつの間にか内容が発展させて行くことの巧みな作者もある。仔細に見て来ると千態萬狀である。（田山花袋）

手法 手法といふことは、構圖から構成に移つて行くところを指して言ふべきものだらうとは思ふが、あらゆる作家の持つたあらゆる手法を一々細かに研究して考へて見ると、小説を書く上に非常に有益である。ある作者は細描を得意とし、或る作者は疎描を得意とする。ある作者は題材に意を用ゐ、ある作者は心理に意を用ゐる。シーンをあらはすことの巧みな作者もあれば、シーンを餘り多く出さずいつの間にか内容が発展させて行くことの巧みな作者もある。仔細に見て来ると千態萬狀である。（田山花袋）

手法 手法といふことは、構圖から構成に移つて行くところを指して言ふべきものだらうとは思ふが、あらゆる作家の持つたあらゆる手法を一々細かに研究して考へて見ると、小説を書く上に非常に有益である。ある作者は細描を得意とし、或る作者は疎描を得意とする。ある作者は題材に意を用ゐ、ある作者は心理に意を用ゐる。シーンをあらはすことの巧みな作者もあれば、シーンを餘り多く出さずいつの間にか内容が発展させて行くことの巧みな作者もある。仔細に見て来ると千態萬狀である。（田山花袋）

手法 手法といふことは、構圖から構成に移つて行くところを指して言ふべきものだらうとは思ふが、あらゆる作家の持つたあらゆる手法を一々細かに研究して考へて見ると、小説を書く上に非常に有益である。ある作者は細描を得意とし、或る作者は疎描を得意とする。ある作者は題材に意を用ゐ、ある作者は心理に意を用ゐる。シーンをあらはすことの巧みな作者もあれば、シーンを餘り多く出さずいつの間にか内容が発展させて行くことの巧みな作者もある。仔細に見て来ると千態萬狀である。（田山花袋）

手法 手法といふことは、構圖から構成に移つて行くところを指して言ふべきものだらうとは思ふが、あらゆる作家の持つたあらゆる手法を一々細かに研究して考へて見ると、小説を書く上に非常に有益である。ある作者は細描を得意とし、或る作者は疎描を得意とする。ある作者は題材に意を用ゐ、ある作者は心理に意を用ゐる。シーンをあらはすことの巧みな作者もあれば、シーンを餘り多く出さずいつの間にか内容が発展させて行くことの巧みな作者もある。仔細に見て来ると千態萬狀である。（田山花袋）

手法 手法といふことは、構圖から構成に移つて行くところを指して言ふべきものだらうとは思ふが、あらゆる作家の持つたあらゆる手法を一々細かに研究して考へて見ると、小説を書く上に非常に有益である。ある作者は細描を得意とし、或る作者は疎描を得意とする。ある作者は題材に意を用ゐ、ある作者は心理に意を用ゐる。シーンをあらはすことの巧みな作者もあれば、シーンを餘り多く出さずいつの間にか内容が発展させて行くことの巧みな作者もある。仔細に見て来ると千態萬狀である。（田山花袋）

趣味【Taste】 人の感興をひき起すべき状態。あぢはひ。おもむき。

純一生活 純一の生活には上下の差別のある筈がない。私は自然の中にタイラントを認めた事はない。私達は自分の情緒を他に屈從せしめ、若くは他に押へられ、また自分で押へる必要はない。私達は進んで愛するが好い。平等のレヴェルで愛するが好い。私達は友人に對してする伸々しさを感ずる。自然に對して生の呼吸を感ずる。この生の伸々しさと、この呼吸とが、私達の生命の流動でなくて何であらう（吉江孤雁）

順應性【Adaptability】 現時の過度に多忙なる生活状態は現時の人間をして過勞の状態に陥らしめたるも現時の人間中の強健なる人々は此多忙なる生活状態に順應するに至るべし。若し到底人間が順應し得ざるほどに生活状態が多忙となり來るが如きことが續くとせば人間は之に順應せんとはせずして多忙ならしむる生活状態を取り去るに至らん。何れにもせよ自己を境遇に合せしむるか境遇を自己に合せしむるか其生活力が許す度合に於て何等かの途を取ららん。

醇化【Idealisation】 哲學上の語。又、思想

化、想化ともいふ。

(一) 雜駁なる知識を分類して系統を立て、以て不純粹なる分子を除去すること。

(二) 感興ある實體より、作者の思想に従ひて藝術上無用の分子を除去し、成るべく其實體の本性を發揮すること。

循環性【Circularities】 ヴェルレーヌは心中に絶えず二個の相反せる意識を有せり。アナトールフランスは彼を評して曰く「彼は敬虔的なると同時に又耽美的なり、正統派なると同時に懐神派なり」と何故に彼は斯くの如くなりやといふに彼は單に循環狂たるに外ならざればなり。

(マクスノルドウ)

循環論法【Circularis in probando】 一の立言を論證せんが爲めに、其立言と同一なる立言をなすこと。又一の理由によりて斷案を證明し更に其斷案によりて其理由の證明をなすこと。

順生涯【Orthobiosis】 經驗豊かに人生の意義を味識した高齢の人と、思慮淺く感情に烈しい青年と何れが社會にとつて高き位置を占むべきかは自ら明かである。今の社會において事實上老人が萎縮して何等社會の爲めに盡し得ない

のは、人生に與へられた天賦の性より云つて甚しく不順な事である。吾々は完全な人生の過程によつて達せられる高齡の福音を唱導せねばならない、然も年齢の延長によつて生理的生活を完する事は、やがて人生の最も光輝ある歸趣とも云ふべき死の本能を齎して、平和なる自らなる自然死を來すのである。吾々かゝる一生涯を順生涯と呼びたい。即ち此の順生涯を終はる時、人は人生の眞の幸福を味ひ得るのである、吾々人生の奥底には實にかゝる幸福の可能性が深く鑲刻せられてあるのである。（メチニコフ）

純正哲學【Metaphysics】 一切現象の實體原理を研究する哲學。

純正史詩【Epic】 ホーの言に従へば「或力と充實とを保有する」のであつて、「若しその出役者等が人間でないならいづれも何でもない。思想でも寓意でもない。渠等は何か實行するものがなければ談話をして居ることが出来ない。それが人生の要素全體が人膽に叙事詩中に這つて來るのだ。」その出役者の人間といふのは、必ずしも猿から生れて來た進化物には限らない。實際にこれに具備する獸性とを具體化してあれば、大神人でも大天使でも、大サタンでもいふ

のだ。此の程の種中歴史的傳説又は神話を舞臺にして勇者英雄の事蹟を材料に使つたのを「英雄風詩」といふ。希臘詩聖ホメロスの「イリオス物語」並に羅旬詩賢アーツルの「アイネオス物語」である。(泡鳴)

春的 異性に對して漠然たる憧憬や好奇心をもつてゐる處女が偶々その對象として一個の男子を得たとしても、そしてその男子に對して烈しい愛を感じるやうになり、今やその愛の情熱が頂點に達し、己れの全生命を男の前に投げ出してゐるとしても、なほ春的な慾望の伴つてゐない場合が寧ろ多からうと思ひます。これは私の獨斷に過ぎないかも知れませんが、春的なものゝ表れるのは却つて一度高められた性愛の興奮が多少なり降り阪になつてから後ではないでせうか。私一個の經驗を言つても性愛を経験してから所謂慾情と名づけるものゝ自分自身の中に表れてくる迄に五六年もかゝつて居ります。私は第一の戀に於ても、第二の戀に於てもさういふものに就いて全く何も知りませんでした。考へることも出来ない程眞に思ひもよらぬことだつたのです。そして今私は自分の戀愛の中から春的な慾望の生じてきたことを知つてゐます。

併しこれについてはつきりした意識がもてるやうになつたのは極めて最近の經驗に屬してゐます。(平塚明子)

純美 [Purity] 通俗には、まじりものなくして美きこと。哲學上にては、美的形象がたゞ快樂又は苦痛の感情のみを起さしむること。

純文學 [Pure literature] 純粹の文學といふ意味にて、文學に關する諸種の學科、即ち雜文學若くは應用文學に對して、詩歌・文章等に關する方面の稱。

純理說 [Rationalism] 眞理の認識は知覺經驗を離れたるものにして、全く先天的理性の作用なりといふ哲學說。

小宇宙 [Microcosm] 哲學上の語。宇宙の一部にして宇宙の状態若くは意義を顯現するもの即ち人間の稱。

照應 [Contrast] 彼と此と、又は前と後と互に相應じて關係すること。

小我 [Lower self] 差別上の自我。現象界に於ける個性。(大我の對)

唱歌 [Song] これは佛教の和讃と耶蘇教の讚美歌と同様詩とは全く別なものである。詩、歌は音樂がそはなくつても讀まれるが、唱歌は音

樂が附いて居なければならぬ。(泡鳴)

城廓文明 印度詩聖タゴールが西歐文明を批判して云つた言葉であつて、西洋の文明はその昔希臘の城砦から生れた。城にたてこもつて、他のものを奪ひとる文明、即ち所有の文明である。之れに對し、東洋の文明は、森林の文明である。靜かに叡智を以つて自然を體得することが眞の東洋の文明であると説いた。

消極主義 [Negativism] 禁慾主義又は退嬰主義若くは保守主義等の稱。(積極主義の對)

消極義務 或事をなさざる義務、即ち不作爲の義務。(積極義務の對)

消極的意志 自ら自己の慾望を抑制する意志(積極意志の對)

情祝 [Longing] あこがれ。何物にとり知らず心誘はれ、思ひもそよるにあこがれ渡るといふが如き心持。はじめ、憧憬と書きしを高山樗牛姉崎潮風の二氏此字に改めしなり。

小劇場 世界の劇壇に於ける小劇場の意義は、今日、已に推移して來た、若くはその正當の地位が明らかになつて來た、乍併、我國に新しく小劇場が起つたとしたら、所謂革命的の理由と、その存在の正當の理由とが相混雜して、

いろいろな多様な意義を附し來る事と思ふ、即ち抽象論に走らないで、自分はその本來の具體的の意義、若くは使用方法に對する希望を陳べて見たのである。

我が國の小劇場は、藝術の一新様式の創作ともいふ處へ進む前に科學者の試驗室式に、思ひ切つていろいろな試験的演出方法を研究するの用に充てたいと思ふ、それには西洋の脚本を用ゐる事も素より一面の必要であるが、可成は日本の新進劇作家、殊に無名の作者の供給する創意ある脚本を選んで、例へばそれが所謂、非戲曲的のものでも、如何なる程度迄、戲曲的に演出し得らるゝであらうか？ 換言すれば、戲曲の範圍と界限とを如何にして擴張し、改造し得らるかを研究し、同時に新天才の發見に努力する事は、その重要な一意義であると思ふ。(中村吉藏) [Innov. theatre]

尚古主義 [Classicism] 擬古主義に同じ。即ち古代の文物を模範標準とする主義。

常識 [Common sense] 統一ある學理的知識即ち専門的知識に對して、普通の理解力ある人の有する程の知識。又は常規にはづれず時代に

適應したる識見又は思想若くは道義心。

小主観 [Minor Premise] 自己の趣味又は小なき感情に因へられたる思想をいふ。

小説家 眞の大小説家 Really great novelist

といはるる人々は美的な且高雅な事實と實際的事實との兩極端を避くるに妙を得て居る。大家と云はるゝ程の人は小説中の人物を多くの事實の間に處して實際にも觸れず、又全く空想に陥る事もせず、吾人が常に見る實際の男女を現出し而もこれに讀者の注意を集中してその行爲に高尚な感情と廣い人生の興味とを加ふるものである。(ウ井ンチエスタア)

小説四朝

米國のブランドア・マッシュズ Brander Matthews 教授は小説の發達を四期に分けて論じた。即ち第一先づ荒唐無稽な全く Impossible の事を書いた古代に始つて第二は the possible の事を書いた時代。第三が實際ありうべき The Probable を寫す時代、第四は即ち或る事情の必然の結果としてどうしてもさう成らなければならぬといふ性質のこと即ち避く可からざる事物 Inevitable を寫す時代である、第一期第二期は昔話の時代、第三期は實際の文藝史上で云へば先づ浪漫派時代、第四が自然派主義時代。

小前提 [Minor premise] 論理學上の語。三段論法にて第二前提の稱(大前提の對)。三段論法の項を参照せよ。

情操 [Sentiment]

最も複雑なる感情にして、其發作のおもに精神に關するもの、即ち眞理を尙び美を愛するが如き感情をいふ。例へば學理上の疑問解決・道徳的行爲の遂行・藝術の鑑賞・宗教的信仰に伴ひて起る最も複雑なる感情等の如し。而して之を知的情操・倫理的情操・美的情操・宗教的情操とに分つ。

情緒 [Emotion]

身體的變化を伴ひ又其影響を受くる強き感情をいふ。感情には單純なるものと複雑なるものとあり、例へば感覺に伴ふて起る感情は極めて單純なるものにして、芳香を嗅げば爽快を快じ、汚臭に接すれば心持悪きが如きは是れなり、この單純なる感情が知と結びつきて稍や複雑なる感情となる、之を情緒といふ即ち恐怖・憤怒・悲哀・恨怨等の情は利己的、愛情同情は社會的情緒なり。

情緒の葛藤 [Conflict of emotion]

普通の言語の用法に據れば、悲劇的とは大なる幸福と大なる痛苦とが相互に感情上に展開を妨げるやうに相衝突したる場合を云ふのである。幸不幸歎

喜苦痛損失満足が一つになつて解し一つの源源泉より流れ分解し難く有機的に結合せる者と認めればならない場合に於て悲劇的といふ情緒の葛藤が生ずるのである。

象徴 [Symbol]

其の自身が説明を要せずして、直接に或意味を發揮すること。換言すれば比喩の最も進みたるものにして、比喩に於ては喩ふるものと喩へらるるものとの間に未だ多少の隙あれど、象徴は二者の間密合して其關係は常に有機的なり。例へば花を以て美人を、劍を以て武を表はすが如し。又象徴なきものに象を與へて示す場合、例へば純潔といふ觀念を表はすに白色を以てし、死を表はすに墨色を以てする等も亦象徴なり。而して象徴の複雑なるものを高級象徴といひ、普通の言ひ方にて表はし難き気分とか情調とかを、或象を借りて表はすを氣分象徴といふ。

象徴主義 [Symbolism]

象徴と云ふ言葉は今日随分澤山あるが、此の言葉の修辭上の感念は明白でない。此の講義で説く範圍から云へば(イ)平叙(ロ)直喩(ハ)隱喩(ニ)象徴と云ふ四段の作用から説く。修辭上で、(イ)の平叙は一雨が降る。

(ロ)の直喩は一雨が矢の如く降る。

(ハ)の隱喩は一矢と降る。

と云ふのであるが此の隱喩はまだ比喩即ちオレゴリイであつて、或るものをただ隠してその比喩だけ表面に出して居るのである。ところが、(ニ)の象徴となると喩へるもの喩へらるるもの主客の區別がなくなつて渾一して形式だけは再びもとの平叙に歸つて來るが、その内容の意味に作者の主觀的生活が渾然として含まれて出て來る。長谷川二葉亭の譯した「血笑記」はたゞ赤い笑ひと云ふ感味を雲に見、日の光に見、一見小學生徒の書いた様な幼稚な文體であるが、そこに作者の生活が渾然として彰れて出て來る。ペルレーヌの雨の歌なども、たゞ雨が降つて悲しいと云ふだけで、悲しい所以も何も書かないが加之も此の歌に渾然として詩人の悲しい生活が表象されて居る。尙ほこのシムボリズムに就いての文學が最近大に重大な意義のあることは申すまでもない。(加藤朝鳥)

象徴癖 象形文字或は象徴を用ゐて一種錯亂せる線畫を描くこと。狂人藝術の一種である。埃及の古代壁畫、印度日本の繪畫などはみなこの種である。(ロムプロソオ)

焦點又は中心【Focus】 印象には必ず「中心」がある即ち人が或る一つの事象に對した瞬時先づその事象の特徴が目につくが、この特徴こそ即ち印象の中心となるもので、色の調子とか或は形とか特に際立つて目につく點を中心として一個の印象は成立つて居る。印象派の藝術は即ち最もこの中心、この特徴をつかまへてそのもの個性を作品に活躍せしむるのである。

衝動【Impulse】 目的を意識することなく、外界の刺激に應じて行ふ行為をいふ。本能的行為は皆この衝動的の行為なり。例へば寒風吹けば思はず首を縮むるが如きは衝動的行為也。

衝動主義者【Impulivist】 ゲレルレーヌには道徳的精神病の姿を認むることを得ず、彼は抵抗すること能はざる衝動に因つて犯罪者となるなり。彼は一衝動主義者なりアナトールフランス彼を評して曰く「彼は敬虔的なると同時に又耽美的なり正統派なると同時に憤神的なり」と、何故に彼は斯の如くなりやといふに彼は單に循環狂たるに外ならざればなり、即其の興奮の期間は已みごとく衝動となり延びて犯罪的行為となり憤神的言語となつて現れ来る。誠に循環狂者は變質者の最悪なる種類に屬する者と謂ふべし。(マクスノルドウ)

正統派【Orthodox】 學術・宗教等に於て其原の統を正しく受けつぎ來れるもの、俗にいふ本家筋。

少年歌 童男童女の爲めに分り易い感想・寓意・教訓を述べる伽歌で幼年、少年雜誌に多く見うけるものがそれである、小守唄・鞠歌・羽根つき唄なども此の類と云つてもよからう。(泡鳴)

少女小説 在來のお伽噺のやうな作り事を書かず、事實を基として、少女の眼に映じた世態人情を、一般の少女に理解し得る程度にして、小説風に描いた物語りである。従つて、その主人公は少女であり、又は少女の周圍の状態を題材として取扱ふ。(尾島菊子)

尚武詩【Chivalric Poetry】 チョーサーにして、馬琴にして、中世的又は封建的時代の產物であつたから其の材料が武勇譚である。特にあからさまに武勇と懇勵とを目的にした有律物語を尚武詩といふナルタースコットの「湖上の美人」The Lady of the Lake 其の他渠の叙事詩はすべて此の類である。

省筆法【Simplification】 日本畫の特徴として淡彩一抔と云つたやうな粗な筆使ひをして頓

末な點を省略し、しかもよく一幅の活畫圖をなしうる。斯ういふ意味で又和歌や俳句の叙景法も亦此の類の省筆法を極度に用ひた印象的描寫である。僅に五句若くは三句の簡單なる形式の中に確に美の中樞を捉へ、煩冗な描寫を避けて刹那的印象を再現する技倆を現して居る。

小品物【Sketch】 一寸した事柄を書きたる短き文章、即ちただ漫然と自己の心に觸れし自然とか事物とか感想とかを書きしものにて、特別に定まりたる形成等なし。

正本 淨瑠璃本または歌舞伎の臺帳をいふ。

逍遙學派【Peripatetic school】 またペリパテイツク學派ともいふ。希臘の哲學者アリストートルの學派の稱。

情熱の權利【Passion right】 天真爛漫直情逕行はロマンチストの生命とする所であつた。彼は初めより筆を把れば抒情的主とし思ひを凝らせば主觀的を本來とし各自獨得の理想を專一とし自己本位を當然としてゐたのであつたが本然的の感情生活を主義とするやうになつてからは態度が消極から積極的に變り公然になり大膽にもなり單に口に筆に主張するに止ら

すおひく實踐を試むるやうにもなつた。彼等の作や行為が宗教上道徳上の異議を招くやうになつたのも茲に原因するのである英のバイロンの作「ドンジュアン」Don Juan の如き又は獨のシュレーゲルの作「ルシンデ」Lucinde の如きが其の著しき例であらう。かやうに情慾の權利を主張し其極何事につけても大膽に性の赴くまゝに行ふを是とし己れの欲する所に従ふを理想とした結果は勢ひ放埒無法の振舞をも是認せねばならぬやうになり所謂ホヘミヤニズム(放浪生活)に附隨する一切の不徳や弱點やが白晝横行の特權を得たやうにも思はれた。

觸手ある都會【Les Villes Tentaculaires】 白耳義の詩人エルンブレンは、かつて「觸手ある都會」といふ作を公にした。近代における都會の膨脹が漸次田園の清境を穢し、鐵道だの工場だのといふまるで動物の Tentacles のやうな物をそれからそれへと遠慮會釋もなく延ばして、頓りに美しい山野を喰ひ込むでは荒らして行くのを嘆いた。

田園はうらさびて疲れ果てたり。野守守る事なし。田園はうらさびて疲れ果てたり。都會これを食

植物生活 [Plant life]

ふ。觸手ある都會の一節) シュレーゲルやノールアリス等の如きはオイドルネツス(無爲)を人間最高の理想を立て人は主として植物生活の如く受動的になつてこそ眞人間の眞趣に近い云々と云つたり、無爲は少數の傑士の特徴にして特權であると云つたり無爲はインノーセンス、インスピレーション「無邪と神來」とを生活せしむる雰圍氣であると云つたりして全力を傾けて無爲生活の辯護を試みた。(坪内雄藏)

書狂 [Orphomania]

は吾人ハカに説明せる變質者の特徴以外更に數倍の變質的性格を具備せり。彼の精神組織中には迫害狂と誇大狂と神秘主義とが隠れ其本能中には慈善と無政府主義と反逆的慾求とを藏したり。彼の作物中には隨所に書狂的特徴現はれ聯絡なき觀念、馬鹿らしき耽溺の傾向色彩に對する異常なる感動性等が現はれたり。(マクスノルドウ)

叙景詩

——これはまづ初歩の叙情詩であらう單に客觀の景を叙する事は長篇物では出來ないであらう。又短歌や俳句でも同じである。純叙景詩は極く省れて、必ず單純な主觀がはいつて

居る。主觀は如何に貧弱でも之を作者の情と見ていふ。だから初歩の叙情詩といふ。(泡鳴)

叙事詩 [Epic]

この詩體は全く詩人の直接主觀を退けて客觀的事物を材料とし、それに對して詩人の觀た状態・由來・歴史・行動等を説明的・談話的若くは感興的に歌ふのである。支那の白樂天の「長恨歌」「琵琶行」等は有名な叙事詩である。(泡鳴)

抒情詩

英國の所謂リウリ(Lyric)から云つて見ると、これは、主に詩人の直接感情又は主觀を専門に歌つたものを云ふ。古來の短篇ものは大抵この範圍内に數へてもいふ。我が國古代に於ては人麿、赤人、家持、西行、實朝などの短歌はすべて此の類である。(泡鳴)

抒情文 [Lyrical word]

情を抒ぶることを主としたる文章、即ち主觀的の文章。(敘事文の對)

處女作

其人の始めて世に公けにする製作。露國のツルゲネフが五十八歳の時の作である。——ツルゲネフは實に鋭利な、心ゆたかな深甚なる大型を以て處女地たる茫漠たるロシア社會を根柢から耕したる此の作中に現れて

女性中心説

米國の社會學者レスクー・ウカードの新創説で近時有名な學説となつて居る。モルガン其の他の諸學者に依つて新たに發見され、實證された諸事實は既にウカードの先驅をなして居ると雖も諸例を生物界一般にわたつて根本的法則として説いたのはウカードである。男性中心説が無意識に信仰されて居たものが女性中心説を考ふる時は男性中心説の根柢がぐらつくが如く感ぜざるを得ない。女性が通常正則の状態で男性が異常強大に失した變則的狀態に外ならぬ。

女人主義 [Feminism]

極端な個人主義的思想に對して忽ちに矛盾と衝突とを感ずるものは獨り宗教信仰道德問題などの類のみではなく、先づ第一に男女兩性の關係—換言すれば結婚問題婦人問題である。女權を伸張し、婦人の地位を高めやうといふ所謂女人主義の近世的大運動が起つた。そして此の種の問題は、單にイブセ

白姫

ノルマンゲイに棲む仙女の一種、谿間、森、橋、その他狭い路にさまよつて居つて通行の人間に躍れよと迫る。若し躍ればよし。おどらない時は、人間の襟髪を掴むで谿や荆棘のなかにつきおとし、人間に禮儀と云ふことを教へる。(Les dames blanches 又は White Ladies)

シラブル [Syllable]

音節、又は熟音と譯す。即ち一個或は數個集まりて一體をなす音をいふ。

眞 [Truth]

に就き米國の小説家 Hamlin Garland 氏は説いて言ふ「事象の前にして先づ眞か否かを疑へ。多くの人は事象の前に或法則を發見しやうと願つて居る。而してその法則が一層その事象の理解を明確にせしむることが出来るならば、最も明瞭に觀察して、明瞭に認知した事實を書くのが一番よい。その場合に讀者に如

何なる結果が及ぶべきは毫も考へなく、
真と云ふことが第一である。文學の唯一の標準
は真である。」

人為淘汰 [Artificial selection] 自然淘汰に
對して、動物中其良好なる種を選び、之を
保護繁殖せしめ不良なる種を淘汰するをいふ。
一定の標準を豫定して事をなすと、無意識に或
物を保存し他の物を放棄するによりて識らず知
らずの間に行はるゝものとの二種あり。

神彩 文字又は形象の凡ならざるおもむき。

新維納派 [Jung-Wiener] 奧太利の詩人ホ
フマンジュエタル等新維納派は即ち世界は決し
て恒久的存在でなく刹那々々の感覺が次から次
へと連続して出来たものに過ぎない。現代の新
藝術がこれらふ所のは舊文藝で云つたやうな
思想感情ではなくして、この刹那の感覺そのも
のを取扱ふのであるといふのである。

新英雄主義 [Neoheroism] ロマン・ローラ
ンの思想なども之れに數へられる。悲しみに打
ち勝つての後の喜びを求めつゝ新たな現實思
想から生活を愛する爲めに旗幟をたてたるもの
カライルの英雄崇拜論後の英雄崇拜の復活な
り。

進化 [Evolution] 事物の發達に伴ひて逐次に
變化すること。又外界の影響と内部の發展とに
より、世代を経過する間に、もと同一なりし物
が漸次に状態を異にすること。(退化の對) 創造
的進化を見よ。

神歌 希臘の古代にはパイアン乃ち神歌といふ
のがあつた。一個の長言と三個の短言との四音
節を四種に配列した音脚から成り立つて居るの
で、ホメーロスに據るともとはアポロンやサ
ルテミスの神に捧げる感謝歌であつたが、段々
アポロンに向つて歌ふ凱旋歌、軍神アヘレス
に捧げる軍歌となり、又事業や宴會を始める祝
歌となつた。(泡鳴)

心學 一に達學といふ。神・儒・佛の三道を綜合し、
平易の字を用ひ通俗なる譬喩を以て孝・悌・忠・
信の道を説き、道徳を進達するを目的とす。享保
の頃、石田梅巖之を創唱す。

神心 [Theology] 宗教上の神につきて組織的
に研究をなす科學の稱。又特にキリスト教を組
織的に研究する科學をいふ。
人格 [Personality] 通俗には、獨立して思考
し行動し得る個體をいふ。
倫理學上に於ては、精神の統一を持續して意識

的行動をなし、道徳上の責任をも受け得らるゝ
資格ある修體をいふ。

人格化 [Personification] 人類以外の事物
を、人類の如く意思あるものと見做すこと。又
擬人ともいふ。其項を参照せよ。

人格性 [Personal character] 人格の個性。
進化論 [Evolution theory] 凡べての生物は
其状態・習性相異れども、其原始に溯れば各個皆
其根源を一にせるものが、長年月の間に漸々進
化し、遂には全く別種のものとなりしといふ説
西曆一千八百五十八年、英國の博物學者チャ
ルス・ダーウソンの創説にかゝる。

新機軸 [New device] 學界に於ける新機軸
は、其科學上の原則に前人未發の發見をなし、
爲めに學界の局面に影響を及ぼさしむるが如き
をいふ。

信教 [Religious belief] 宗教の教義を信仰す
ること。臣民の信教の自由は憲法に於て保障せ
らる。

新教 [Protestant] キリスト教の一派。十六
世紀中獨逸人ルーテル其他の唱導したる宗教改
革の主旨に遵由するもの、總稱。現今分派多
れども、聖書のみを證據となし信仰によれる救

澤を主張するは共通の特徴なり。(ゼスイット派
及プロテスタント参照)。

神曲 [Divine comedia] ダンテ氏 Dante(伊
太利)一二六五—一三二一が一篇の「神曲」は前
中世紀の産出せる最も最高の文學のみならず或
意味に於ては中世紀の精神的生活を顯はして最
も明瞭を極めたるもの也、中世紀は其末路に臨
み此の一大詩人の口よりも恰も七百年間の懺悔
を聞きたるの趣あり。「神曲」は地獄界、淨罪界
及び天國の三部より成る。要は意を自己の幻影
に托して彼岸の他界を描くにあり。初めの二部
に於ては詩人のビルギリウス氏を導師とし、最
後の一篇に於てはダンテが幼年よりの戀人にし
て天死したる佳人ベアトリツエを先達とす。一
篇の示する所の觀念は罪惡の擺脫と天國の獲得
とにあり。(高山林次郎)

新傾向句 俳句界に於ける自然主義とも稱すべ
きものにして、從來俳味とか俳趣とかいへる一
の趣味に囚へられし俳句を、季又は切れ字若く
は十七字といへる制限を破りて自由なる句形と
なし、人事・自然のあらゆる現象を思ひの儘に吟
ぜんとする一派。明治二十四五年の頃、正岡子
規氏の唱導にかゝる。猶、俳句の項参照。

神経質 [Neurons] 神経過敏の状態、即ち其神経が外界の刺激に感ずること非常に鋭き状態にいふ。

神経描寫 神経的描寫の謂にして、少しの刺激に對しても神経の甚だ鋭く、文字の間に表はれたるが如き描寫をいふ。

神経破壊状態 [Positive neurons disarrangement] 近世の小説家の大部分は病的情熱を有するものであつて多くは神経破壊状態にあるものと云ひ得る。(ウヰンチエスタア)

神経波動 [New-vibration] 自然派文字は實驗——即ち直接の經驗を基として目で見、耳で聞いた感覺をその儘書くものである。ノルダウの説を借りていふと、作家の神経波動を忠實に紙の上に寫すのである。そして印象とは畢竟この目や耳の感覺を受けた刺激から成立つてゐる爲動的消極的性質のものに過ぎないので、之を作者が自分の思想や頭で細工し、按排したものでは無く、又積極的能動的に自分の批判、推理評價概括などの力を之に加えたものでも無い、世に純客觀的寫といふのは即ち此の意味である。

信仰 [Faith] 眞心より信じ敬ふこと。又宗教

上の客體に歸依し其教義を奉行すること。
チンゴイスム [Jingoism] (英) ゴンゴイズムは軍國主義の鼓吹運動である、此の言葉の意味はヒレニー山中のバズリ人の言葉に Jingo (最上の神)といふのがある。それを轉用して一種の誓言的に用ひたに過ぎぬが軍國主義の盛であつた時の記念として今日まで用ひられゴンゴイズムとなりゴンゴイストといふ風に使はれて來た。つまり好戰的政略に附和雷同して徒らに言葉を盛んにするやうな言論及び言論者を意味する。

眞實相 [Verisimilitude] 沙翁が狂人といふ變物を屢々劇中に扱つたのは、人間の實際生活を寫し、眞實相を失はないで、而かもよく神秘幽玄の境地を暗示し得る爲めに、狂亂をうつすのを唯一の便法だと信じたからだ。

人種改良學 [Ethinology] 近代の學者論客は其の問題の何たるに係らず進化論を基礎として生物學的に觀察するのが多い。最近歐洲で八ヶ間しい人種改良論も其の一例である。

人種末 [Fin De Race] 世紀末と稱すれども正しく人種末とも謂ふべきものなり。世紀末を以て一種の生物の如く考へ幼年時より少年壯年

化身させることに置いてゐる。(昇曙夢)
人生觀 [Life view] 人生即ち人類の此世に於ける生存又は行動の價値・目的及び其標準・手段等に關する見解。而して人によりて或は樂天觀となり、また厭世觀となる。

人生倦厭 [Detium Vital] 近頃の文藝の裏面に潜むだかういふ悲哀は固より熱涙を灑いで天地に號泣すると云つたやうな壯烈な悲哀ではない。深い沈痛の色を帯びたる孤獨の寂しさである。鉛のやうな重みに心を壓し付けられたるなやみである。一滴の涙さへ出ないで居て、却つて胸を掻きむしられるやうな思ひが益々深く、益々鋭く喰ひ込むで行く。さう云つた状態である。涙を出さず、嘆きの聲をも發しないだけそれだけ又懊惱は胸の奥に鬱積し、凝滯してそれが一種いふべからざる哀愁となるのである。活動にもものうくなつた人の時々洩らすあの微かな弱々しい嘆息の底にこそ、萬斛の愁思が湛えられてゐるのであらう。勿論いつの世にもこんな悲哀を感じた人はあつた。古代羅馬の Tacitus が「人生の倦厭」と云ひ聖 Christostom が「無氣力」と呼び、或は十二世紀のころに神秘の扉、たく鎖ざしたる僧院の奥から洩れた「メ

老年の時代を經過して遊に死滅に至るが如く考ふるは全く兒童若しくは野蠻人の思想なり。佛蘭西人が自己の老衰を世紀の老衰に歸せんとするに至れるもそれは愚かなる名稱なることは言ふまでもなし。(マクスノルドウ)

心神相関 [Psycho-physio Correspondence] 心理と生理とは、其作用・活動の直關するといふこと。例へば、心に怒を生ずれば身體にもそれに適應したる狀の現るゝが如きはなり。

神人的生活觀 (ソロウイヨフ) ソロウイヨフは十九世紀後半のロシアが生んだ偉大なる哲學者であり造詣深き思想家であり又大神學者であつた。物質を力とし、力る觀念とし、觀念を人格化して愛とし、此の愛なる幾多の實在が有機的に結合統一されてゐるものと信じて居るソロウイヨフは、此の現實界の不完全、不規則、迷誤、不可解——斯うした矛盾を何う説明し、萬物過程の目的を何處に置いたかと言ふと、前の矛盾を他の眞實正當なもの、即ち宗教心の積極的内容たる超自然的神靈界によつて説明し、後の萬物過程の目的を觀念に直當する形式を得ること、即ち完全にして久遠なる有機體を發生すること、尙ほ言ひ換れば、世界に神的觀念を

ランコリア」の聲も皆この類の悲哀に外ならなかつた。

人生哲學 [Anthropological Philosophy]

人生の目的・結果・價值等に就て研究する哲學の稱。

人生の至善 [Summun Ronum] — 八十

歳のテニソンはこまやかなる緑樹の下に戀愛の劇詩を草し老筆れのプラウニングも亦抒情詩で少女の接吻 (In The Kiss of one girl) に人生の至善を歌つて居るではないか。(ウヰンチエスタフ)

人生の斷片

自然派は文藝を以て人間記録なりと見做してゐる。人生の自然現象を有の儘に寫し出して毫も作爲を加へず技巧を弄せざることを第一義として標榜した。従つて此の派の作品は浪漫派以前の戯曲小説と異つて云はゞ人間生存の記録から無雑作に裂き取られた活きた一頁に他ならぬものである。血ある肉ある活きた人生そのものからして、鋭いメスで切りとつた儘の一片に過ぎない。近代文學での通用語を以て云へば是れ即ち「實人生の斷片」である。
人生の爲の藝術 [Art for human's sake]

「藝術の爲の藝術派」が、藝術は夫れ自身獨立せる價值を有す、即ち藝術は「藝術の爲めの藝術」(Art for art's sake)にして人生の爲めにあるものに非ずと云ふ説に對して、藝術は人生の實際生活に役立つもの、即ち人生の爲めにするところなるべからずといふ説。尙ほ藝術至上主義の所を見よ、即ち藝術は飽くまでも人生に有用なもの、人生のためになるもの、人生に於て宗教の役目をすべきものであるといふ意味で、此の説は露の文豪トルストイが力説した點である。トルストイは藝術は、人生の爲めの藝術だといつた。

人生の直視 [Direct vision of life]

概念からの解放を求めんとする努力は既に夙くから哲學の方にも現れてゐると思ひます。手近い例をとれば、近頃流行のベルグソンの哲學の如きも亦其例に洩れますまい。即ちベルグソンの考によれば、インテレクトはライフのプロセス中に生ずる一現象に過ぎない。概念は團體を摸型として構成されたる便宜上の所産に過ぎない。Direct vision of life Lucens を得むと欲する者——端的に生を見むと欲するものは、インテレクトを補充し、之を超越する新らしい立

場を求めなければならぬ。ライフの過程中に生じ來れるインテレクトを唯一の便りにしてライフ其者の全體觀を得むとするは誤謬である。とかういふのであります。(阿部次郎)

人生派 「藝術の爲の藝術派」を藝術派と云ふに對し、「人生の爲の藝術派」を人生派といふ。

新生活 新しき信仰の樹立により心境の一變せる状態。

シンセリティー [Sincerity] 誠實、真面目、又は眞摯など、譯す。

神像 [Image] 過去に於て意識に映じまた更に意識中に現出した像。

新體詩 近時我國に起りたる一歌體。三十一文字の和歌の形式の簡單に過ぐるより、西洋の詩風に擬したるものにして、古來の長歌の體裁と異り長きものは章を分く。外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎三博士の新體詩集は其嚆矢たり。

心的腐敗 [Mental Collapse] 願れば政治上の自由を叫び、社會制度の改善を求めて長い間騒ぎたてたのも後から靜かに考へて見ると思ひの外つまらない。焦りに焦つて求めた理想は毫も實現せられない。所謂骨折損のくたびれ儲けに終つたのだといふ此の失望の感が人心を

挫折せしめてこゝに一般の心的腐敗を生じた、今迄張り詰めた心が俄かに挫けたのであるから其の鬱鬱となり悲觀となり絶望となつて痛ましい嘆きの聲が歐洲に響いた。(エミルライヒ)

新天主教主義 [Neo-catholicism] 象徴主義の傾向は一名「新天主教主義」とも呼ぶことを得べし。或る人の「見よ佛蘭西國民の青春と希望と未來とは今將に斯學より一轉せんとしつゝあり。所謂「解放」は將に破産せんとしつゝあり靈魂の眼は再び宗教に向ひつゝ神聖なる天主教會は文明な人種の教師慰安者指導者として新たに高き位に即きぬ」と云ひしは殊に名言なり。或批評家は「新天主教」の出現を指して信仰に對する自由思想の敗北と言へり。(マクスノルドウ)

人道 [Humanity] 人倫の道徳、即ち人として履行せざるべからざる道義をいふ。國民道徳は一國家の國民として踏み行ふべき特殊の道徳なれど人道はかゝる特殊のものにあらずして、苟くも人類たる以上は如何なる國家の國民たりとも、又如何なる宗教を奉ずるものなりとも皆一様に行はざるべからざる大法なり。孔子が説きし「仁」、基督の唱へし「博愛」は即ち此人道を具體的に示したるものに外ならず。

人道教 [Religion of Humanity] 愛情を其

根本的要義として、人類の幸福を増進するを旨とする一派の宗教。フランス國人コントの唱導にカゝる。

人道主義 [Humanism]

一に人文主義といふ。十五世紀末に歐羅巴に於て、教權の拘束に反對して起りたる主義にして、この主義は中古時代に基督教の厭世主義が人々の心に泌みわたるに、人々は現世を以て來世に天國に行く爲めに先きの世の罪を滅ぼす場所と心得、たゞ教會の奴隸となりて人の本然の性を矯めたる不自然なる其日其日を送り居るに對し、其教會の束縛より脱して自由に人間らしく活動せんことを欲したるものにして、文藝復興運動と伴ふて起り、ギリシヤ・ローマの古代文藝の研究を主としたるものなり。伊太利のエラスムス等が、主唱たり。

侵入者 [Intruse]

「侵入者」といふ一篇には病める人のある家に深夜死の侵入し來ることを描けり。死は足音をたてつゝ庭の中を歩み初めは其の持てる鎌にて城の前の草を三度試みに叩き然る後入口の戸を叩き何人も戸を開き呉れざるが故に無理に侵入して其の犠牲者を携へ行くなり。(マクスノルド)

眞如 [Truth] 佛教の語。平等普遍にして、常

任不變なる萬有一切の眞性をいふ。不変なる萬有一切の眞性をいふ。

神秘 [Mystery]

靈妙不思議にして知るべからざる秘密。即ち吾人の知識によりて説明し又解釋すること能はざる事柄をいふ。俗に不思議と不可思議といふに略同様の意味なるも、不思議とか不可思議とかいふは、多くは知識の足らざるに基くものなれど、神秘はかゝる相對的のものにあらず、絶對的不思議・絶對的不可思議の謂にして、到底人間の知識にては説明し又解釋し若くは理解する能はざる事柄をいふ。又普通の理論・認識の外に超越したる事柄をいふ。

審美學 [Aesthetics]

今日に於てはむしろ美學といふ。美・醜の性質及び法則等を研究する科學なり。其見様に哲學的・科學的の二派あり、前説によれば美其ものゝ研究、後説によれば藝術の心理學的・社會學的研究なり。最近の傾向は後者勢力あり。

神秘狂 [Mystical delirium]

神秘的な宗教信仰に凝り固まる一種の近代變質者の病的特徴である。

神秘主義 [Mysticism]

事物の眞相は尋常の

審美的 [Aesthetic]

美と醜との識別に關していふ語。

神秘的 [Mystic]

普通の理論・認識の外なるにカゝる語。猶、神秘の項を参照せよ。

神秘的強迫眞念 [Mystic obsession]

イブセンは眞面目に科學的に遺傳に關する考へを確め行くが如き一切の努力をなさざりき。彼の劇は實に神秘的傾向に其根柢を有したりしなり。而して彼は遺傳に關するリユカー (Lucar) の書を読み無批判的に信じたるなり、彼が其の有するところの神秘的強迫眞念を科學の装ひに包みたるものを此の書中に見出して喜べり。(マクスノルドウ)

審美的哲學

シェリング (一七七五—一八五四) の哲學は純粹にロマンチズムの哲學と言ひ得やう、彼の哲學は審美的で殆ど全く倫理的な努力や道德的活動を無視してゐる。フイヒテ哲學のやうに、人生全體を道德的進歩とは、觀な

神經的變質者 [The Mystic degenerate]

要するにイブセンは神秘的變質者なり而して又彼は自我狂者なり。彼は總ての現存する事物に對して絶えず反抗し而も何等合理的批評をなさず單に現存の事物を非難し之を破壊せんとする彼の自我狂は斯くして虚無主義の形をとるなり。(マクスノルドウ)

シンフォニー [Symphony]

音樂の一形式。合奏、若くは謠音即ち音と音と相和して調子のととのへること。交響音樂

人文學派 [Civilisation sect]

人道主義の一派にして、教育の目的は高雅優美の情を起さしむるにありとし、希臘・羅馬の文學・歴史等を主として調すること主張する學派の稱。

シンメトリー [Symmetry]

均勢と譯す。上下左右の釣合ひのよくとれてゐること。擬古主義の藝術の最も重んずるところにして、審美學

上に於ては美の要素と見做さる。
神來 [Inspiration] 神の靈を吹きこまれるが如く感ぜらるゝこと、即ち人の精神に與へられたる或靈妙なる力、俗に人間業ゴキヤウとは思はれぬといふ程の言。

新ラマーク説 [Neolamarckism] 凡て生物は外國の状況に適應する様に變化するものにして、其變化は後裔に遺傳し、以て新種を形成し得ると説く一派の學說。

眞理 [Truth] 通俗には眞實の道理、即ちまことのみち。又論理の形式或は法則に一致する吾人の知識。對象の性状、或は事實に一致する吾人の知識等種々の言に用ふ。

心理學 [Psychology] 感覺・感情・欲求等凡べて吾人の認識の現象に就て確究する科學をいふ。而して實驗心理學は心の内部を、生理的心理學は腦及び神經等と心との關係を、社會心理學・民族心理學は社會又は民族の集合意識を研究す。

心身學 [Psychomachy] 又は靈肉争とも云ふ。近頃の物意一如説とは正反對に心と身とは必ず互に相争ふ傾向を持つて居る實相があると説く心理學說である。

心理小説 [Psychological novel] 事件の發展・人物・接移等に重きを置かず、専ら中心人物の内心の心理的經過の解剖細微に力を盡す小説。

心力以上 [Beyond human power] 諸威のビヨルンソンの作で、我國で森嶋外博士の譯されたものである。近代に於ける宗教信仰の衰滅を寓意として歐洲各國到る處にイブセン劇以上の人氣を博したものだ。(厨川白村)

心理描寫 一口にいへば心理を描くことにて、十分其人物を描けぬ場合に、直に其心の中に入り如何に心の働けるかを描くことなり。

侵略主義 [Invasionism] 他國を侵略して領土を擴張することを政策となす主義。

森林生活 米國のヘマソンの學徒に、ヘンレイ・ダビッド・トロオ(一八一七—六二)がある。エマソンをコンコオドの哲人と云へば、是れはワルデンの隱者といつてもいい。ワルデンの森林に隱退して靜かな生活を送つた。其の事を「我が森林生活」と云ふ著に委しく書いてある。

森林の復讐 イブセンはワイルドダック「鴨」の中で「山林を濫伐するのは危険だ。山林といふものは復讐するから」と云つてゐる。ロオ

心靈 [Spirit] 肉體を離れて存在すと考へらるゝ心意の主體、俗にいふ「たましひ」。又、意識の本體、即ち精神の大本といふ程の意味。

新浪漫主義 [Neoromanticism] 自然主義の反動として起りたるものにして、自然主義が理智を重するに對し此主義は感情を主とし、自然主義が研究を旨とするに對し此主義は直覺を旨とし、自然主義が人生を物質的の一面より觀察せんとするに對し此の主義は精神的の一面より觀察せんとす。畢竟、自然主義以前の浪漫主義の精神の再起せるものなれども、其間に自然主義を通過せる結果、舊浪漫主義の如く理想たるものにあらざりて、飽迄も現實の生活に根柢を置くといふ點は自然主義に異ならず。これ新浪漫主義と舊浪漫主義と異なる點なり。象徴主義以下参照。

神話 [Myth] 太古、人類の知識幼稚なりし時代に、宇宙の諸現象を以て神のしわざなりと想像して尊びしより生じたる諸種の説話をいふ。之を自然神話と稱す。其後史上の人物と混和して半神半人の如き古説話をなすこと希臘・印度・日本等皆然り、之をも亦神話といふ。

マの殖民地は一時本國と對抗するほどに繁えた文明を構成した。けれども彼等カルセージ人はその文明力を濫用して彼等の國の背後を繞らしてゐる丘陵上の森林を濫伐したがため遂に南方より徐々として流砂の浸入を受けやがて彼等の文明はその砂の下に埋没せられた。かゝる都市は中央亞細亞あたりには幾つも發掘せられるのである。(中澤臨川)

人類學 [Anthropology] 人類の異同又は起源・發達等に就て研究する學。

人類進歩の可能性 人類は未だ進歩の終末に達せるにあらず。二代三代の間人々が過勞の結果疲勞したればとてあらゆる生活力を人類が失ふ譯にはあらず。實際人類は未だ老衰せるにはあらずなり。まだ若き状態にあるなり。人類は噴火口より噴出する熔岩の如し。外に出で、遠く廣く流れ行く。外に出でたる熔岩は熱を失つて聽て冷かなる石に化すべし。されど中には尙熱き熔岩が流るゝなり。(マクスノルドウ)

人類中心説 [Anthropocentricism] 地球中心説を見よ。

浸禮 [Baptism] キリスト教の信徒となりたる時に行ふ一種の儀式。全身を水に浸して行ふ

神話學 [Mythology] 種々の神話・口碑・傳説等の材料を蒐集比較して、之に科學的系統を立てんとする研究をいふ。

神話系統 [Mythological system] 或民族の原始の宗教的觀念を傳へたる神話・口碑・傳説を一團に纏めたるもの、稱。

神話劇 神話的の劇で、印度詩人カリダーサの「シャクンタラ」ハウプトマンの「沈鐘」シルレルの「井ルヘルムテル」などが此の類ともいふ。

ス

圖案 [Design] 裝飾の目的を以て按出したる圖をいふ。染物・織物等に應用するを工藝圖案・建築・裝飾等に應用するを建築圖案と稱す。

スウィート・ハート [Sweet-heart] 戀人、情人等と譯す。

推敲 詩文の文句を考へ練ること。唐の詩人賈島が僧叡月下門の句を得る前、僧は推すとせんか、僧は敲くとせんかと考へ行く途中、覺えず時の京兆尹韓退之の行列を犯し從者の爲に引致せられ、問はれて其由を告げたるに、退之沈思して僧は敲くの方可ならんといひし故事に出づ。

水想觀 清水の如き潔白なる思想を觀念とすること。

推定 [Pre-umption] 推測假定の義にて、實否の如何未明なれど、反對證據の擧がるまでは之を眞實のものと假定すること。

隨筆 [Miscellany] また漫筆・漫録などいふ。筆のまに、何くれとなく書き記したる文書。國文隨筆の最も古きものは、清少納言の枕の草紙なり。

推理 [Reasoning] 理を推して考ふること、即ち一の事實より其理論をたどりて次の事實を見出すことなす。論理學上にては、或斷定より他の斷定を推知すること、即ち既知の事實より未知の事實を推知することにて、既知の事實を前提とし、未知の實を斷案と云ふ。歸納と演釋との區別あり。各項參照。

推論 [Reasoning] 推して論じ及ぼすこと。命題によりて推理すること。猶、推理を見よ。

推論式 [Syllogism] 又、推理式ともいふ。三段論法に同じ。其項を見よ。

數理學派 [Mathematical sect] 數理の研究方法を以て他の學問の研究方法となす學派。

スカイアグラフィ [Skigraph] X光線で寫した影像。

スクリプチュリスト [Scripturist] 聖書に通ずる人 Scripture とは基督教の聖書なり。聖書の或る箇所特に本文をスクリプチュアと云ふ

スクェア・ダンス [Square Dance] 舞踏の一種。ラウンド・ダンスに對す。通常八人一組となり方形を作りて演ず。カドリール、カレドニヤンス、ランサーズ、コロチン等之に屬す。

スコラステシズム [Scholasticism] 煩瑣哲學と譯す。其項を見よ。

スコプト・ト [Skopos] 女に對するトルストイの態度は健全なる人間の考へを以てして了解すべからざるものなれども醫學より論ずれば容易に了態し得べきなり、神經系統に於ける此病的状態の結果は或は女に對して過度に引附けられ或は女に對して特殊の嫌惡心を惹き起す。されど女に過度に引附けらるゝ變質者に於ても女を嫌惡する變質に於ても女に關する思想が絶えず意識の内に現はるゝことは相似たり是れ兩者孰れも同一の中樞に於ける若干の疾病より來れるが爲めなり。されば斯かる變質者に於ては女が強迫觀念の如き力を有するなり。之が特に

力強くなり當人が之に惱まざるゝこと甚だしく而して自ら此強迫觀念の力より逃れ出づること能はざる時には自ら去勢を行ふものなり露西亞に於ては斯る去勢を行ふ變質者の一派あり即ちスコプトシと呼ぶ。トルストイ著クロイツェルソナタに於ける主人公ボツニシエフは自から意識せざるスコプトシたるなり、而してトルストイが其著作に於て教ふる所の性慾道德は實にスコプトシ宗の性慾的精神病が文學に現はれたるものに外ならざるなり。(マクスノルドウ)

スタチー [Statue] 像、立像、又は彫刻と譯す。

スタイル [Style] 様式。文章上此れは時代と作家との特有の風格によつてさだまる。

スタンチズム [Stundism] 千八百六十年頃露國の農民間におこれる基督教の一派。

スチグマ [Stigma] 聖痕。或る人々の身體に不思議に生ずると稱せられる基督の傷痕に似たる傷痕。烙印。痣。

スチジアン [Stygian] 三途の川のと譯す。

スツールム・ウインド・ドラング [Sturm und Drang] 狂飈勃起、又は颯興勃起等と譯す。西曆一千八百七十年代に、獨逸に起りし文

藝上の浪漫主義運動をいふ。ゲエテ、ハイネ、シルレル等は此運動の中心たりし人物なり。

ステージ [Stage] 舞臺と譯す。

ステージ・マネージャー [Stage manager] 舞臺監督と譯す、其項を見よ。

ステート [State] 有様、光景、状態、位置、又は國、國家等と譯す。

ステート・オブ・コンシャスネス [State of consciousness] 意識状態と譯す。或瞬間に於ける意識の有様の總稱。

ステンド・グラス [Stained glass] 硝子繪。之れには二つの重要な方式がある。硝子繪は昔はモザイククグラスメインチングと呼ばれて居た。それとありては各の色はそれぞれ別な硝子であつて、繪畫的の効果は、それ等の種々の色の硝子を寄せ集めることによりて造られた。此の方は十六世紀頃から用ひられなくなつた。十六世紀頃に代つて現はれたのはエナメル法で、刷毛で硝子の上にエナメル畫同様に色を定着せしめる。

ストイシズム [Stoicism] 克己説と譯す。其項を見よ。

ストイックテツガク (ストイック哲學) [Stoicism] 古代ギリシヤに起りたる哲學上の一派。知識よりも實行を貴び、學理の研究よりも意志の訓練を重んじ、情慾を斷て理性の指示に従ひ繁縛を脱して道德の自由を得ることを主張せり。

ストール [Stall] 基督教寺院内に設備せられた高い寄りかゝりのある木造の腰掛。ストールの例は寺院に於けるコアイヤの周圍に置かれた。ストールは石造又は大理石造であつた。十三世紀から十六世紀にいたるまでのストールは普通木で製られ美しい彫刻を以つて盛んに裝飾された。それ等の彫刻は單に其の様式のみではなく、その題目に於ても往々グロテスクで且つ自由であつた。英國のカセドラルにあるストールには莊麗な彫刻の施され居らぬものは殆んどない。

ストーンウェア [Stoneware] 燒物の一種で不透明で固く、又水を透さない。普通のストーンウェアは粘土と砂と硅酸鹽との混合物を以つて作られる。好いストーンウェアの陶土は好いフェアンスの陶土と殆ど異なる處が見えない。支那及び日本で造られた石燒の器具又

は小像は蒐集家の熱心に索める處である。獨逸にあつては、ストーンウェアは八世紀頃から作られた。又英國のストーンウェアはその素質が大に優れて居る。

ストライキ [Strike] 同盟罷工の義、其項を見よ。又轉じて、雇人・生徒若くは配下のもの等が團結して業を休むこと。又ベースボールにては、投手の投げたる球が本壘を通過し、打手が之を打つに適當なりしに拘らず打たざりし爲め、本壘に立つ權利一點を失ふこと。

ストラゲル [Struggle] 闘争、骨折る等と譯す。

ストレー・シープ [Stray sheep] 迷くる羊と譯す。

ストレンジャー [Stranger] 外國人、又は面識なき人、未知の人と譯す。

ストロツツイイ四殿 [Palazzo Strozzi] 伊太利フロレンスにある宮殿でその建築は一四八九年ベネデット・ダマイアノ及びクロナーカの創むる處で一五五三年迄完成しなかつた。不幸にして仕上がらなかつたが美しい蛇腹と内庭とはクロナーカの作に拘る。

スパイヤ [Spire] 西洋建築に於ける尖つたピラミットの塔であるが、多くは木造で、其上を鉛又は瓦を以つて包む。併し又時には石造のものもある。

スノツプ [Snob] 紳士ぶる俗物。つけあがりもの、上に倣し下に驕るもの。同盟罷工に加はらざる職工。

スバヌモチック派 [Spasmodic] 痙攣派とでも譯さうか、變挺な名である。もとカアライルがバイロンを評するのに用ゐたことばを借りて來、詩人エイタウン Aytoun が嘲弄的に近代詩人の一派の神經過敏な興奮的な點を諷刺したものである。

スピリチュアル [Spiritual] 精神上の、形而上の等と譯す。

スフィンクス [Sphinx] 希臘傳説にシニアス市に現れたりといふ胴は獅子にして翼あり顔は女なる怪物。巖上に踞して通行人を捕へ、朝は四足、晝は二足、夜は三足にて歩み聲は一、足最も多き時最も弱き動物は何との謎を發して之を解かしめ、解き得ざれば之を殺す。エヂボスの之を「人」と解くや巖上より投身して死せりといふ。エヂボスが「人」と解きたるは、朝四足

といふは嬰兒の時手足にて這ふをいひ、夜三足といふは、年老いて後杖に縋るを以て兩脚と杖にて三足となるによつてなり。此傳説は元と埃及より傳はりしものなるべしといふ。但埃及のは足ありて翼なし。ピラミッド附近に現存せる石像は高さ五十六呎、長百七十呎あり(エジプトの項参照)。この傳説より解釋の困難なるものをスフィンクスといふ。

スペクトラム [Spectrum] スペクトラム 三稜を透した光線の七色である。而して各色の境目は殆んど見分け難くばけ合つて居る。

スラブ [Slav] 歐羅巴の北部に住する民族の稱。バルカリア人・ポーランド人・セルヴィア人・ロシア人等之に屬す。而して最もよく此の民族を代表せるはロシア人にして、感情に激しく、而かも沈鬱・厭世的にして何事をなすにも懶(モノ)きやうに見えながら、時には意外なる突飛の事をなす性質を有す。又た體格は多數の歐洲人と異らざれども、觀骨の高きと鼻端のやゝ上に反りたるとは、寧ろ亞細亞の多數のものに似たり。
スラング [Slang] 俗語。偶言。盜賊。無賴漢などの間に行はるる合言葉。符牒語。

セ

精 細小、細密、選擇、專一、熟練、巧妙、銳利、清潔、美好、正善、清明、光輝等の意。又、萬有の心意心。

聖 [Holy] 智徳の最もすぐれたること。通達せざる所なきこと、又は其人(の聖)。其道に最も傑出せる人。

性 [Nature; Character] 生と共に天より受けたるもの、即ち天賦自然。心の本體又は作用(Sex; Gender)男女の別。

聲音學 [Phonetics] 人類の言語の本質たる聲音につき其成立・組織又は變轉の状態を研究する學問をいふ。而して此學は言語學の基礎學たれども、言語學とは其科學の性質を異にし、言語學は精神的科學、後者は自然的科學に屬す。
性格 [Character] 又品性といふ。過去の意志活動の結果、即ち意志活動が度々繰り返されて習慣性をなし生じたるものにして、又次の瞬間に於ける意志活動を決定す。即ち行爲は人格の

發現なり。又單に個人の性質と人格との義に用ふ。
生活意志 [Wille zum Leben] 近代の文藝に屢々あらはれる煩悶苦悶といふやうな現象も、思想上からの原因はあるにせよ。この生活の壓迫といふ事が又有力なる素因をなしてゐる點に注意すべきである。たゞさへ人間には生きたい生きたいといふ根性がある欲望がある。シヨウベンハウエルが所謂非理性的、無意識的、盲目的の生活意志である。

生活機能 [Vital function] 有生物が生活するために機能即ちはたらき。
生活苦惱 人類の慾望が比較的幼稚で現實生活の波瀾も亦比較的單調で随つて其の間に甚だしい矛盾撞着も感ぜられない限りは人心はおのづから平かにして彼の人生の價値如何といふが如き問題は遂に其間に提出される餘地がない。然るに慾望の範圍が次第に擴張され生活の波瀾はますます複雑となり人心は歩一步自覺的に進み随つて其の間に幾多の限りなき撞着不調和が暴露するに及んで人心はおのづから其の平均を失して遂に生の價値如何といふ如き最後の疑問を發する。之れを西歐の思想界に徴するに前世

紀の後半期以前(十九世紀前半)に於ては人生價値の問題の如きは決して眞面目に提出されたこともなく又之を眞面目に研究した蹟もない。獨逸のシュルム、ウント、ドラング期に多少の厭世風は無かつたではないが其の傾向並びに之に類似の傾向は正當に人生の價値を疑ふ厭世主義の脈にあらずして寧ろ一種の生活苦惱を訴へた聲に過ぎなかつた。(金子馬治)

生活の歸れ 自然に歸れといふ提唱には何等の意味もないが「生活に歸れ」といふ提唱には少なからざる意味がある、つまり生活に歸れといふことは過去の生活が創設した學說や教理や制度や習慣を改造するのに適切な標準を現在の生活に發見せよといふことを意味する。生活に歸ることを目的とする自分は必然に二つの條件を遵守せねばならぬ其の一つはどこまでも自己の確信を偽らないといふことであり、もう一つは社會の要求を充たすといふことである。何人といへどもこの二つの條件を無視しては到底自分に取つても社會に取つても現在の生活が要求する優秀なる見方を發見し得るものではない。(田中玉堂)

生活の囚れ 都會の繁激な中から一度自然の

中に開放された時、人は「生活の囚れ」から脱することが出来る。眞のエレメンタル、ライフに入る事が出来る。都會には囚はれたる生活が無数である。(吉江孤雁)

世紀末 [Fin de Siecle]

近代に著しく他の時代と區別されるだけの情調を帯びるに至つたのは、全く衣食住の方面に激變があつたからと思ふ。殊に教育もあり智識もあつて最も深く最も切に近代生活の眞趣を味ひ得る人々、或は現今時代活動の實際の中心となつてゐる中流以下の社會に於て、此の情調は最も著しいわけである。多くの人は此の情調を名づけて「世紀末」といふ。其の意は前世紀の末に於て此の情調の最も著るしつたのを指したのである。然し世紀の區別の如きは固より人間が便宜上拵へたもので、思潮變遷の経路とは全く何の關するところも無い。十九世紀は二十世紀となつても依然として此の情調は現今に於て共通普遍である。唯十九世紀の劈頭佛蘭西革命——カアライネ Carlyle が所謂「腐敗せる權威に對する非法者の公然たる烈しき反抗、又勝利、近世破天荒の現象」たるもの佛蘭西革命にはじまつた。

世紀間の活動が益々紛糾錯綜し、文明は爛熟の極に達した揚句、遂に世紀の末期に至つて一種特別な現象を呈したと見れば此「世紀末」の語にも又深い意味があると考へられる。恰も一世紀がこゝに終を告ぐるといふ大晦日、節季の勘定に帳尻の合はぬといふ大騒ぎの有様を渾沌たる時代民心の特徵なりと見ればそこに「世紀末」の名稱にも一種の趣味があるではないか。(厨川白村)

世紀末的氣分 [The Fin de Siecle mood]

世紀末的氣分は病める人の力なき絶望なり周圍の世界が生々と育ち行く中に自己のみは刻一刻死に近づかざるべからざるを感じつつある衰弱者の感ずる絶望なり若き一組の戀人が人影なき森の隅を求めて歩くを見て富あれども年老いて歡樂を味ふべき力を失ひたるものが懐く羨望の念なり。花の匂ひ咲く自然の中に己のみは明日の來るべき望のなきを感ずる時の心持は世紀末の氣分なり。(マクスノルドウ)

世紀末的恐怖 [Fin de Siecle Exceit]

現代の心的傾向は奇しくも混亂せり。熱病的不安と疲れたる落膽と恐怖に充ちたる豫想と卑怯なる諦めとが錯綜して複合的心理状態を呈しつゝ

あり。其處に瀰漫せる共通の感情は今にも來るべき滅亡の感情なり。世界の滅亡に對する恐怖が人心を襲へるは之を以て初めとするにあら

世紀末的服裝

何等か異様な輪廓、色彩、模様、典型等に依て他人の注意を烈しく引き付けんとし何人も皆強き神經の興奮を惹き起さんと工夫す。自己の自然の姿を現はすに満足せず何等かの標本を求めて其が自己に適すると適せざるとを問ふ所なく唯それを模倣せんとするなり然して同一の見本のみ取ることなくして雜然混然として種々のものを自己の身邊に集むるのみ。されば是等の人々の集まれる處を眺むれば恰も假裝會に列したるが如き感あり。(マクスノルドウ)

清教徒 [Puritan]

西曆一千五百五十八年に、

星至派

星若くは莖等を表識とし、好んで戀愛に關する事柄を詠する新派詩人の稱。

靜劇 [Static theatre]

それは今迄劇の最大要素だと信じられてゐた動作といふものを全く取り除いて情調ばかりで出來た芝居である、物質的要素の極めて乏しい空靈漂渺たる劇である。觀る芝居ではなくつて感ずる芝居である、従つて切つたりはつたりする事を、尋常茶飯の事のやうに舞臺に演ずる昔風の芝居ではなくて、唯だ簡單な日常生活のうちから題目を取つたものである。

政治劇

即ち政治的な劇でシルレルの「井ルヘルムテル」(表面に於て)「フイエスコ」イアセンの「ロスマルスホルム」(一部に於て)等は此の類である。

靜寂教 [Quiesimus]

死人をば官能の有餘の快喜を樂しみ得るものとして讚美するこの神秘主義は實生活に適用される時は一種の靜寂教とならざるを得ない。即ち「ルチンデ」に於て力説されたやうな純植物的生活の尊重とならざる

を得ないのである。ノブリスは言ふ「植物は地の最も直接なる言語である。一々の新葉一々珍らしき花は自己を表現せむとして而も愛と喜びとに充滿せるが爲に動くことも話すことも出来ず已むを得ず沈黙せる静かなる植物となつて顯れたるある深秘である。吾人が静寂の境にかゝる花を發見する時にはその周圍のものが總て淨化されてゐるやうに見えないだらうか、かつ歌ふ小鳥もその近くを最も愛してゐるやうには見えないだらうか、愛人は嬉しさの餘りに泣きたくなる。そして世間から脱離して根を成長せしめむが爲にわれらの手と足とを地中に埋め永久にこの幸福なる親交を續けてゐたくなるのだらう。(ブランデス)

青春 [Youth; Youthfulness] 若き。年若き時代。青年時代。妙齡。

精神 [Spirit; Psyche] 又、心意ともいふ。

(一)意識作用・無意識作用を含む。テーテンスの創めたる知・情・意に分類するは今日一般に行はるれど、是れ唯精神の働き方の主なる面を見たる區分にして、決して孤立して有するものにあらず。(二)純正哲學上の原理として意識過程に類する或もの。其性質は時代と學者とによりて

一ならず、近世は非人格的理性又は無意識的叡智と見る傾きあり。又通俗には、意氣、根本の意義等の義にも用ふ。

精神科學 [Mental science] 精神の作用より生ずる現象を研究の對象となす科學をいふ。

印ち心理學・倫理學・論理學・法律學等の總稱(自然科學の對)

精神生活 [Spiritual life] 精神の活動。又生活の意義がおもに精神上の事にあること。

精神的 [Spiritual] 物質的・肉體的に對して、精神上の事に關し若くは精神上の事を重んずるに用ふる。例へば精神的文明といへば物質的文明に對して内面的文明をいひ、精神的戀愛といへば肉體の慾即ち肉慾をはなれたる戀愛の意となるなり。

精神病的瞑想 [Inan reverie] 心の中に空なる考へを作り出し當てもなき思想の連續を作る。而も長時間何等かの題目に對して注意を集中すること能はざるなり。(マクスノルドウ)

生生化育 萬物をおこしそだて、宇宙を經營すること。

生そのま [Life as it is] 人はもはや過去の生活を寫した作に飽いた。さりとして又夢生

は、すべて生存上に起る競争の稱。又、進化論にては、生物の棲息する場所及び其攝取する食物は有限なるが故に、各生物は各自己の住所・食物を得るため他の生物と競争せざるべからざるに至り、其中の優勝者のみ生存し劣敗のものは死滅する状態をいふ。

語のやうな未來の生活も知り度くない。Life as it used to be & Life as it is going to be 或は又Life as it ought to be などはすべて皆吾人に用のないものである。たとひ面白くなくともいいから Life as it is を寫した作がほしい。つまりさういふ要求から「人生の斷片」であり「面白くなす」自然主義文學が勢力を占むるに至つたのである。

生存 [Existence] 本在 (Being Essence)

現代の純粹思想界を窺はうとする者は一方にベルグソンの生命の哲學を置くと共に他の一方には劍橋大學の若き二人の哲學者ムーア及びラッセルの新運動をも忘れることは出来ない。此の二つの哲學は何れの方面から見ても鮮やかな對照をなしてゐる而も二つともが古來の哲學界の因襲を破つて新しい天地を開拓してゐるのである。前者は生存の世界を力説するに反して後者は本在の世界を樹立しようとする。前者は流轉または持續の實在を對象とし後者は不變永久の實在を對象とする。前者の世界をば時間が支配し後者の世界をば空間が支配する。(中澤臨川)

生存競争 [Struggle for existence] 新俗に

生存の熱望 [Aviditas vitae] 人間には昔羅馬の Seneca (サネカ) が云つた生存の熱望が隨き纏つて居る。

聖體盒 聖體盒は基督教のミサの儀式に用ゐる容器である。ポアドレエルの詩に

闇の涅賜に痛ましく惱まされたる優心。
光の過去のあとをたを尋れて集むる憐れさよ。
日や落ち入りて溺るゝは、凝るゆふべの血潮雲
君が名残のたゞ在るは、ひかり輝く聖體盒。
「肉に惱まされた心は、今顧りみて、光の過去を尋れてゐる。その光の過去をたづねて集めやうとして居る。日は暮れ、そこには血潮のやうな雲があるばかりである。さうして、光の過去、尋れる君には、ひかり輝く聖體盒が名残となつて残つて居る」といふ意味を以て聖體盒を知るべし。

世代交番 [Alternation of Generation] 生

物體の生殖作用の一現象、即ち無性世代と有性世代と交番に現れ、親と子とは常に相似ざるをいふ。

世態變化 [Metamorphosis] 生物が外界の狀態に應じ自己の生態を變化すること。

聖地失ふ [Jerusalem Delivered] 伊太利の大詩人タッソの一大叙事詩にて二十卷より成る。

精緻細密 [Detailschilderung] 自然主義などの科學的製作法から當然來る特色として描寫の精緻細密といふ事である。佛蘭西のゾラでもフロオベルでも、又ゴッック兄弟でもその描寫は實に驚くべきほどの精密なもので到底常人には心づかないほどのものがある。

生長の原理 寫生の意を抜き來たりて模様の中に繪畫の味を點加するなり。而して唐草模様は多くは又此の原理をも適度に包含す。其は謂ふところ、成長の原理を加へたることは是れなり。植物が根より長じ行くの姿を攝取したることと是れなり。植物に象りたる殆ど凡ての巻曲線圖には如何なる形に於いて、其の根を標すべき區劃線を加へて、之れより上騰し行くといふ成長の意を明にするを例とす。(島村抱月)

新らしき一大問題として兩性の争闘なる題目を文學に齎した。此詩人の思想では、男女はどうしても融和する事の出來ぬ仇敵で、男は女なる惡魔の犠牲に過ぎずとなし、彼は婦人に對して壓えられぬ嫉妬の情を抱いてゐた。彼は婦人を無視し、婦人を罵倒し、婦人を呪詛した。

性の争闘 [Camp der Geschlecht]

オウグストストリントベルク (August Strindberg) は

聖杯グラーレ

王傳戲曲の第三「ランツェロット」(Lancelot) (九〇八一)の中にある——聖杯グラーレを護れるモンサルベツシユの城の王マンフォルダスは病み、又聖杯の光も衰へて輝かない。豫言によれば之は彼の一族のものが純潔なる者と結婚することに依つてのみ救はる。王女エレーンはアーサーの圓卓の騎士ランツェロットを見て戀に陥て、我が緑の袖を紀念として彼に贈る。騎士は緑の袖を兜の飾につけ、數多の仕合の場に出て、多くの敵手を破て名譽を博する。然れ共彼は再び歸つて來て彼女を求めない、彼が戦に負傷せるを聞てエレーンは城に赴て心づくしの看護をする。今や先の豫言は將に實現せられんとするに及んで、騎士ランツェロットは既に純

性的中樞 [The Sexual centres]

脊髓及び腦髓に於ける性的中樞は變質者に於て屢々病的狀態に陥り居れり。普通人の心には何等性的印象を與へざる言語香ひ等に依つて女性を聯想し性的感情を惹起す。色情狂者の如きは性的中樞に異色ある者なり。(マクスノルドウ)

青踏 [Blue stocking] 西曆千七百五十年英京ロンドンに開催せる文學者・美術家の會合に、或女流文學者の一人が青色の靴下を穿ちしより此會員の中殊に女流文學者連をブリーユ・ストツキングと綽名せしより出づ。近時我國にも青踏社と稱する女流文學者の會合起れり。

青銅器時代 [Bronze age] 石器時代より人智進歩し、青銅にて諸種の器具を造れる時代。略して銅器時代ともいふ。歐洲には此時代ありし證あれど、我國には其事なし。この時代より進歩して鐵器時代となる。

生の衝動 エラン、ビタルベルグソンの所謂全實在の奥に隠れて之を鼓舞し之を激勵する或る力、傾向、乃至は慾望で生存意志に似通つたものである。盲目的宿命的燃焼的ではなくベルグソンの生の衝動は撰擇的自由的創造的である。(中澤臨川)

潔でなきが故に能はない。彼は遂に長くアーサー王の美しき皇后キノイバーの腕に道ならぬ快

樂に耽つたが、今や純潔と自由とに憧れてエレーンが清淨無垢の愛に由て罪惡より救はれんと欲する。併しエレーンの力は彼を救ふには餘りに弱くして、彼は再び皇后の腕に歸つて王を欺くと共に、エレーンをして失望死に至らしむるランツェロットはカメロットの下を流るる川にエレーンの屍が花もて包まれたる小舟に載せられて啞の老人に漕がれて下り來ると見て、彼は遂に彼女が純潔の愛に由て皇后の誘惑より救はれて深き罪障を償はんが爲めに巡禮に出かける。エレーンは生きて能はざりしものを死して始めて成し就げたのである。(山岸光宣)

生物 [Living thing] 無生物即ち礦物に對して生活するもの即ち動物・植物の總稱。

生物學 [Biology] 生物即ち動物植物の構造・發達・機能・生活・狀態・相互の關係及び分布等に就きて研究する科學。

生物偶發 [Abiogenesis] 生活なき無機物より新に生物を生ずること。されど現時に於ては生物は凡べて其母體より生れ來るものにして、無機物より偶發するを認むる能はず。

政府的思想 [Governmental idea] 所謂政府

的思想とは何ぞやと云へばこれをテイキンソン自身に據つて、『極く簡単に且つ飾り氣なく』云ひ現はせば、即ち斯うである。『世界は幾多の國家に分れてゐる。是等の國家は其國に屬してゐる男や女や子供とは別に離れた、一種抽象的實在である。國家と國家とは常に相衝突する。しかも其衝突は避く可からざるものである。時として國家と國家とは同盟を結ぶ事はあるが、それは他の國家若しくは他の同盟に對抗する一時的必要の爲めにするに過ぎない。蓋し本來國家は、他國を侵害して無限に膨脹す可き約束を持つてゐるからである。國家と國家とは生れながらの敵である。過去に於て然り、將來も亦然るであらう。此間の關係を決するものは只だ武力あるのみである。従つて戦争は永久の必要である。』

生命の進歩

此の誤れる國家觀、即ち政府的思想若しくは政府的學說を抱いてゐるからである。尤も此の思想を抱いてゐるものは政府者のみには限らない。歴史家、新聞記者の多くは此の説を信じ、且つ一般の民衆も亦極めて此の説に侵され易い素質を持つてゐる。しかし此の思想は、政府者若しくは支配者階級に於て、最も其の勢力が顯著であり、且つ最も其の弊を逞しうする。(大杉榮)

生命の道は進歩そのものである。それは無限の精神三角形の斜面に沿つて、前方にまた上方に確實な歩みを探りつゝある。この事は正に事實であり、また人間の心の奥底から来る堅い信念である。何物もこの信念を犯すことができない。宗教も眞理も愛も藝術も皆なこの信念を土臺として立てられてゐる。否な、進歩を信じない生命その物は在りえないのである。『進化』は生命の別名である。

人間は自ら墮落して生命の道をふさぐことがあるであらう。或る時代の濁つた空氣によつて青年の若い血の枯らされることがあるであらう。國民は戦争によつて互に傷けるであらう。自然は無情冷酷な斧を振ふであらう。一時は惡と虚

偽とがこの世に蔓こるであらう。死が常に人類を喝かすであらう。『一九一五年』が幾度か繰返されるであらう。然かし、前方に向けられた生命の面と足先とは決して向き直らない。進化の大道に於て、惡と死とは決して永久に通行を阻止しえない。何んな悲惨がこの社會を苦しめ、何んな罪惡が人道を潰がさうとも、我等の完全を慕ふ潜勢力は、あらゆる矛盾と勞苦とを踏破するに充分である。況んや、生命の本性は樂天的である。それは虚偽をも、不幸をも、罪惡をも笑つて凌駕しうる、征服しうる。全體としての生命は死を重大視しない。『生命は笑ひ、踊り、戯れる。それは死の面前に於て築き、貯へ、そして愛する。』されば我等は決して失望しないでもよい(中澤臨川)

性欲 [Instinctive desire] 生物としての本然の慾望、即ち本性の慾をいふ。「性慾」よりも其義廣し。

性欲 [Sexual desire] 性、即ちセックス (Sex) の慾、俗にいふ肉慾即ち男女間の慾。

性欲藝術 性慾精力が藝術に變形するとしての興味ある例は巴里の博物館にある野蠻人が獸角に試みた彫刻であつて、女性の生殖器の色々の

形が彫られて居る。此れは狩獵に出掛け一夜を森林中に明した場合、性の衝動を漏らす方法なき爲、焚火の傍ら仕方なしに斯様の彫刻を試みたものである。種々の高尚なる藝術は、其發達餘りに顯著なる爲め、其等が性慾精力の變形なる事を理解すべく困難なる場合がある。恰かも轟々天空を摩す大木が、一粒の種子より發生したるものなる事を理解すべく困難なると同様の理由である。此藝術が顯著なる發達を爲し得た原因は何かといふと、思考である。人類が動物に異なり、文明人が野蠻人に異なる點は言ふ迄もなく思考力である。而して思考といふ事は言葉の組立てに過ぎないので、人類が言葉を有するといふ事は、人類が此の驚くべき文明を建設した源泉である。

プロッホが『現代性慾論』中に於て、『動物にありては嗅覺が主なる性的衝動の原因をなして居るが、人類に於ては嗅覺は大いに衰へ、其代りに言葉が生じて來た。即ち動物時代の嗅覺に占められて居た脳の部分が、人類にありては言葉の記憶さるゝ脳の部分となつた』といふやうな事を述べて居るが、此れは非常に面白い事である。(岡松里)

性慾不調和(メチニコフ氏説) 生物の生活には性慾紛亂から来る Sexual disorder 不調和がある。ユーパーの言によると若し雄蟻の數に對して雌蟻の數が少ない場合には彼等は其の性慾を満足させる爲めに労働蟻を強姦する。労働蟻は生殖作用の器官が不完全であるから、之が爲めに死を遂げるのである。哺乳動物中に往々見られる手姪の如きも性慾上の不調和な現象と見ればならぬ。以上の如き性慾は死を導くことは稀であらうが、中には更に恐る可きものがある。夏の宵に燈火を募つてくる蟲が自らの身を火に投じて死を招く事は、吾々の常に目撃する所である。かゝる昆蟲は主として夕暮に出る蟲で農夫等はその習性を利用して、夜間火を田畑にもして多くの害蟲を殺す手段にさへしてゐる。抑も彼等は何故に火に入つて己れの身を焼く程の不調和をするのであらうか、夕暮に飛び廻る蟲は主として雄で、雌は概ね草や木の間に止つてゐる、此の事は火に入つて死ぬ蟲を調べても分ることで、百姓が往々澤山な蟲を篝火で殺しても死ぬるのは雄が多い爲に依然として害蟲の繁殖に苦むことがある。此の事實から推測すると火が彼等の性慾を喚發するので、彼等はそ

火の中に雌の居ることを信じて集つて來るのである、即ち火を認めると性慾の本能が働いて、輝く光に惹きつけられて愚な死を遂げるのである。此の事實は或種の昆蟲の雌が雄を呼ぶ爲めに自ら光を放つものがあるのを見ても分るのである。かく自然から與へられた本能の爲めに死を招く事は最も痛ましい不調和の一例と見ればならない。然しかゝる不調和の本能が、いつか消える事のあるは明らかなきこと云つてもいい、例へば子孫を殺す事を意としない動物があればいつかその種は絶滅する。故にかゝる自然界に存する不調和は今後漸次失せて、不用器官の衰頹と共に有用な部分が益々發するのである。(柳宗悦)

生理學 [Physiology] 人身の構造を研究する學問。

性理學 朱子學に同じ宋及び明の儒者が人性の原理及び人心と天理との關係を論じたる説。其間多少一致せざる所あれど、要するに人の性命は天の命する所にして、心は衆理を具し其本然は善なりと説けり。(猶、朱子學の項を照せよ)

生理的 [Physiognomical] 肉體的と云はん程の意味なり。

生理的美人 骨格遅く筋肉よく發達せる婦人をいふ。

生理的分業 [Division of function] 生物學の各機能が夫れ／＼特有の機能を有し、活動を營みて其生物體の生活を存續すること。

精力 [Energy] 身心の元氣又は能力。

精力主義 [Energism] 普通には、凡べて身心の能力を發達完成せしむることを旨となす主義をいひ、倫理上には、道德の標準たる至善を以て社會の安寧にありとし、之を實現する爲めに、人生の能力を圓滿に發達せしめむとする主義をいふ。

精力保存 [Conservation of energy] 宇宙間にある諸物質の有するエネルギーは、種々其態を變じ、或は一體より他體に移り行くといへども、其總量は常に一定するといふこと。

精靈 [Soul] 普通には死者の魂。哲學上にては、自ら宇宙に存在する精神もしくは物質の本源、即ち靈魂をいふ。

精靈説 [Animism] 精魂獨立論、靈魂自存論、萬象有總論、非常物有生論、宇宙精神主義 (World soul) なるものありて宇宙一切の事物を

生ぜしむとの論) 精神本源論(心靈が生活的行動の原動力なりとの説) 心主體從論、一原始時代の民が自己の經驗を出發點として、一切の他のものに自己と等しき性質を有すると見たのが宗教の起源である即ち原始的宗教思想は精靈説 (Animism) で一切の萬有が個々に精靈を有すとの信仰は通く彼等の信じた處である。従つて死を終焉と見ずして單に一變化と見、それを永遠の滅亡と見ずしてそこに生を認め歸の存する事を信じて居る。(メチニコフ)

ゼウス [Zeus] 希臘神話に、希臘諸神の主宰者の名。オリンパス山上に座を据ふ、宇宙の森羅萬象心の儘ならざるはなく、殊に雷電・風雨・四季・晝夜の變轉交代、國家人類一切の統治權、人類各自の安寧福祉等は特に手づから治むる所なりと傳ふ。羅馬にてはジュピター (Jupiter) と稱す。ジュピターとは光明の父の義なりといふ。

セークル・デ・テナブ [Siccles des ténèbres] 佛蘭西にて暗黒時代。

セークルドル [Siccle dor] 佛蘭西にて黃金時代。

世界 [World] 時間の流轉と空間の延長とによ

りて現出せらるゝ全區域、即ち吾人の客觀的現象の全範圍、宇宙をいふ。又、地球、萬國、若くは世の中、範圍等の義にも用ふ。

世界觀 [View of the universe] 宇宙觀、又は人生觀。

世界主義 [Cosmopolitanism] 世界の平和・發達若くは世界の關係・交渉等を標準とし、一方・一國土に偏せざる主義。

世界的 [International] 一國土又は一地方に限らずして、四海萬邦に關係を有するにいふ語。

世界的文學 [Weltliterature] 獨逸人にて無國境の文學を唱へたることあり。

世界の醜化 [Verhässlichung de Welt] 自然主義派が、何でも人生の醜を描かんとした其特色を、獨乙のフォルケルは「世界の醜化」と名づけた。

赤裸々の眞 [Nuda Veritas] イブセン Ibsen とか ショウ Shaw とか云ふ人はすべて皆臭いものに蓋をし、安むすべからざるに安むじ、見えて見ぬ振りをするやうなことの斷じて出来ない人々である。歐羅巴近代の文豪は皆すべて日本あたりの道學先生を驚殺するほどまでに、深刻

に熱烈に又切實に、此の時代を其作品に描いた。忌憚なき筆を揮ふて、古詩人が所謂赤裸々の眞を發き、之を見よとばかりに私共の眼の前に投げ出したのである。

セノンド・バンド [Second hand] 舊る手と譯す。一旦人の手に渡り次に自己の手に來りしといふ意味。

セノンド・バンド・ナフ [Second hand knowledge] 第二の知識と譯す。自己の獨創にあらざる知識、即ち他人より受けし知識の意。

セシウス [Thesens] 希臘神話の英雄の名。アゼンヌ王イシウスの子。犠牲の中に交りてクリート島の怪物ミタノウルの迷宮に赴き、島王マイノスの女アリアドネの助けによりて怪物を退治し、歸りてアゼンヌの王となる。後、娘を族アマゾンの國を侵して其女王ヒッポリダを奪ひ還りしに、アマゾン族復讐軍を興してアゼンヌの市街に激戦し復た破らる。此の戦は古代彫刻家の好題目なり。かくて分立せる小市を統一してアゼンヌ市を建て、始めて憲法を布けりと傳ふ。セシウスの一生は半ば傳説的なれど、半ばは歴史的に根據を有すといふ。(アマゾンの項参照)

セスイット派 [Jesuit] ルーテル等の宗教改革に對し舊教主義の反動として西曆千五百三十四年イグナチエフ、ロヨラの創設せる教團の稱。法王無過説教、會神權説を執り爾後歐洲に勢力あり。日本に傳はりしものは天主教と呼ばる。天主教及び新教の項を参照せよ。

ゼスチア [Gesture] 身振り、手まね又演藝・演説等の場合に於けるしぐさ。

石器時代 [Stoneage] 人智尙幼稚にして金屬を使用することを知らず、石を材として刃物其他の器具・器械を製造したる時代。即ち青銅器時代の前にあたる。

積極 [Positive] 消極に對して、進む・改む・動く・續く若くは表・陽・正號・肯定等を表はす語。

積極義務 [Positive obligation] 或事をなすべし義務即ち作爲の義務。(消極義務の對)

積極主義 [Positivism] 向上主義、又は精力主義若くは進歩主義の稱。(消極主義の對)

積極的科學的價值 [Positive Scientific value] ソラ一派の自然主義作家は小説は人生の經驗として積極的科學的價值を生ずるものであると主張して居る。米の批評家ウヰンチエスター之れを評して曰く『ソラ等の此の主張は科

學と文藝とは一の作物中に對立することの出来ないものであることを忘れた説である。事實を一つの誤謬もなく明確に記載するのは之れ科學である。決して之れを小説と呼ぶことは出来な

いかくの如き文學的思想は何等の價值もなく、又情緒の如き少しも認められて居ないのである。之れに反して若し事實の存在してゐる上に其の人物其の動機その行爲を想像したならば、忽ち小説を得べきであるが、此の時は已に科學たる價值を失うて居るのである。科學は想像上の事實に基礎を有しない事は云ふまでもない云々』

積極的意志 [Positive will] 或物事を遂行せんとする意志。(消極的意志の對)

絶對 [Absolute] 何等の條件も附隨せざること。何ものにも制約せられず又何ものにもよらざる。他に對立するものなきこと。一切の現象差別に超越せる獨立的實在をいふ。即ち相對に對する稱。又、名詞としては絶對又は絶對者は宇宙の終極の原理。スピノザは無限の「實體」、フイヒテは「絶對我」、セリンガは自然と精神の「同一」又は「無差別」、ヘーゲルは「思想」、シヨトペンハウエルは「意志」、ハルトマンは「無意

識」として之を寫象せり。
絶對藝術觀 [Artistic absolutism] ロマン

チシストが詩歌藝術を無上視したる結果竟に藝術をして超然世務の外に立たしめ前に例無き絶對の自由を與へ善惡撥無の特權を有さしめて道徳圏外に棲ましめやうとする一種の理論さへ成立たうとするに至つた Artistic Absolutism 絶對藝術觀、藝術の爲めの藝術 Art for art といふことは此の意味である。ニイチエの藝術觀なども畢竟するに此の種の説の餘波たるに過ぎない。(坪内雄藏)

絶對眞理 [Absolute truth] 絶對唯一の眞理。他に比較又は對立するものなき眞實の道理

絶對美 [Beaute absolue] 擬古絶義に於ては絶對美の標準といふものがあつた。昔から傳來して居る藝術的法則を重んじて猥に其の埒外に飛び出す事が許されなかつた。

折衷 [Compromise] 彼此の説を取捨して適當なる所を取る事。互に反對せる意見の中をとりて組織すること。
折衷説 [Electicism] 反對せる意見を折衷して組織したる中間説。

刹那 [Moment] 極めて短小なる時間。一彈指の間。

刹那主義 [Momentalism] 其の刹那々々(極めて短小なる時間)に、全力を擧げて靈肉(精神と肉體)を一致せしめて其事に當る、即ち實行も觀照も一に見るといふ文藝上の一主張。近時若野泡鳴氏によりて唱導せらる。

説明學 研究の對象たるもの、眞理・法則等を説明する學。物理學・化學・動物學・植物學等に屬す。(規範學の對)

セギリアの理髮師 [Barbiere di Siviglia] ロシニの諸作中彼の名を不朽ならしむるものは「ギユヨーム、テル」と「セギリアの理髮師」とである。モツアルトの「フィガロ」と共に長く滑稽歌劇の最も傑作として傳へられてゐる。

セミラムス [Semiramis] 傳説に所謂アッシクヤの女王。初めニパヌの創立者ナイナスの部下に嫁せしが、後ナイナスに慕はれて其妻となり、ナイナス死後、王位をつぎ、バビロン及其他各所の市街を創設し、又宏大なる宮殿を築く。後位を子ニニヤスに譲り鳩に化して昇天せりと傳ふ。

セルフ [Self] 自我、又は自己と譯す。其項を

見よ。
セルフイッシュ [Selfish] 貪慾、主我的、自己中心的、又は氣儘と譯す。

セレクション [Selection] 選擇、選抜、淘汰
取捨、拔萃等と譯す。

小夜樂 [Serenade] セレネ Serene とは夕暮における戸外と云ふ意味。夕暮に戸外に演奏する音樂。伊太利の水都ベニス Gondola の上で之れを歌ふの風情は屢々海外旅行者によつてなつかしがられて居る。

言語狂言 [Domestic drama] 世俗又は當時の出來事を仕組みたる芝居狂言。(時代狂言の對)

禪 [Dhyana] 梵語の禪那の略言。靜慮と譯す。虚を靜め心を明かにして理に達すること。專心專念にして一を守り心を散ぜざること。念慮を靜かにして世の俗縁を離れ心の繫縛を絶つこと。世間禪は吾人の日常事物を思慮する類。出世間禪は佛道を修行する者の自己の本性を靜慮すること。又、禪宗或は坐禪の略言。
全我 全力的の自我、即ち總べての力を擧げし自我。

先決問題 [Previous question] 當の問題の前に決定せられたる問題。又は決定し置くべき問題。

潜在 [To Subsist] 我等は茲に時間の影響を受ける物のみを指して生存 (To exist) する物と稱ふことが便宜である。然る時に思想や感情や即ち我等の心やまた物質や皆生存するが普遍はこの意味では生存しない。彼等は寧ろ潜在するとか或は本在を待つとか謂へる。但しこゝに言ふ本在とは時間を超越するといふ意味で生存に對峙する詞である。されば普通の世界は取りも直さず本在の世界である。(中澤臨川)

センシティブ [Sensitive] 覺性ある、感じ易き、神經質なる等と譯す。

センシブル [Sensible] 感じのよき、物解りのよき等と譯す。

漸次變化 [Transformation] 生物の新種が漸次の變化によりて形成せらるゝとの學説。ダールウイン之を主唱す。

センシユアル [Sensual] 感覺的、又は肉體的、肉感的と譯す。
潜勢力 [Potential energy] 内にひそみて外にあらはれざる勢力。

漸層 [Climax] 小より大に、低きより高きに弱きより強きに、浅きより深きに次第に調子を高めて行くもの、例へば「一人奮死せば以て十に對すべし、十以て百に對すべし、百以て千に對すべし、千以て萬に對すべし、萬以て天下に冠たるべし」といふ類なり。

漸層法 [Climax]

修辭學上の語。同じやうなる語法を重ね行きて次第に文意を強め行く法。例へば「一家之を非とすれども力め行ひて惑はざるものは少し、一國一州之を非とすれども力め行ひて惑はざるものに至りては蓋し天下一人のみ、若し世を擧げて之を非とすれども、力め行ひて惑はざるものに至りては、即ち千百年にして一人のみ」の如き類。

ゼンダ・アベスタ [Zenda-Avesta]

ゾロアスター教文集。アベスタとは「活きたる言葉」の義。B. C. 480 にゼンダ語にて書かれたるもの。ザラサスツラの著なり。今日残るもの、ヤクナセスペレド、エンゲダド、コルダの四篇とす。

全體感

全體としての感じ、即ち其ものハ全體が與ふる感じをいふ。部分々々に對する離れ／＼の印象・感銘と異なる。

全智全能 [Omniscience and omnipotence]

完全無缺なる智能。絶對唯一なる神の智能。

センチメンタリズム [Sentimentalism]

感傷主義。

センチメンタル [Sentimental]

感傷的、又は情に脆き、情に激する等と譯す。感傷的を見よ。

センチユリー [Century]

世紀と譯す。

先天的批評 [Prior Criticism] (英)

作物を批評するに、客觀的批評と、主觀的批評とある。客觀批評は作が出来てからでなければ出来ぬ方法であるが、客觀批評と云ふのは、作物を見ない、又出来て居ない先から、一足の標準が置いてあるので批評學の方では、これを先天的批評といふ。此の先天的批評は、一々標準に照らし合はして批評する故に様式が極めて形式的なものになる。

先天論 [Apriorism]

(一)吾人の知識中の一定の部分が總ての人の精神に本具せられ、且つ總べての人に一樣なりとの説。(二)特に空間の觀念の心理的起原を悉く生後の經驗によつて證明せんとする經驗論に對して、感機機關及び中樞の生得の性質によりて説明せんとする説、即ちすべての物事の存在又は根原が先天的なりとの説。

中央集權

自然科學の進歩に伴ふて種々の機械が發明された結果として商工業は著しく盛になり、農業の方は漸次勢力を失ふに至つた。即ち製造機械や交通機關の發達の爲め、人は多く田舎を去つて、都會に集るといふ有様である、殊に田舎者の中でも教育者、活動力ある者が自由な發展と享樂を望むて都會に出て來るから都會は益々繁盛する、のみならず近代は各國皆「中央集權」を重んずる爲めに首府は益々繁華となり、他の小都市も漸次重要な位置に立つやうになつた。(Centralization)

全否定 [Le néant]

西洋の中世基督教とか、ヘーゲルの哲學、或は又日本の昔の武士道儒教といふやうな一代民心を統率し權威を以て之に臨むだけの思想の存在した時代には個人的生活の方は殆んど頭を擡げる餘地がなく、従つて人々の精神生活は極めて平凡であり安靜である。之に反して近代の如く科學的精神のために、權威若くは標準が全くその力を失つた時代には、勢ひこの個人的生活の方が勢を得て各人銘々に其の好むところを主張して、勝手な方へのみ行

全部と一部

トルストイは「人生の全部」を毎日根氣よく凝視した。そして民衆に向つて斯う働くと頭と手を以て指圖した。しかも彼れ自身どの位働けたか、ほんとうに分らずに死んでしまつた。ドストイフスキーは「人生の一部」に深く探求の歩を進めた。そして民衆の中に交つて居た。彼れが指圖をする時には、何時も彼自身働いてゐないことはなかつた。

千里眼 [Clair voyance]

または Second

sight などと云ふ——歐洲最近の科學社會で著しい現象は人間の神秘不可思議な精神現象を研究しやうといふ所謂 Psychological research の流行である。先づ例の千里眼をはじめ Automatism, Thaumaturgy, Ghost-hunting, Telepathy, Spiritualism (マヤ) Magnetism などの Levitation だのといふ現象)といふやうな在來の科學說では何とも解釋のつきかぬ事柄を調べ、その揚句、今では五感以外の感覺の存在を認めたり、或は Sub-consciousness を説くやうにもなつたのだ。

リ

想化 [Idealization] 思想化、又は醇化とも云ふ。

造化 [Creation] 天地間に於ける萬物が、生死現満しつゝ無窮に傳はること。又、宇宙を經營する神、即ち造物主。

總格 [Summary] 普通には、個々別々のものを一つにくむる。又、個々別々に共通したる要點を一つにまとむるの義に用ふ。

論理學上にては、概念の外延を擴充すること、即ち個々別々の概念を抽象又は聯合し之を一の種族又部屬等に包括すること。教育學上にては生徒をして教授したる個々別々の要點をくむりて一の概念を構成せしむること。

總覺 吾人の體內の好惡兩種の感覺の稱にして、外物に關係なく特種の性狀を有するもの、疼痛・餓餓・眩暈等は是れなり。

造形藝術 藝術の一。繪畫・彫刻・建築等専ら視官に關はる藝術、所謂、美術の義。

象牙の塔 生れつき詩的精神の豊かな人は、近代の物質文明がつくり出した此索漠たる乾燥無味な巧利的生活に堪えられないこれに對し絶えず不満である。そこでおのづから現代生活を厭離し逃避するやうになり、世の中はどうでもよい自分一個だけは別天地に獨り寂しい詩美の郷——所謂「象牙の塔」の中に隠れて現代生活を免れやうとする。Ivory tower

總綜合 [Synthesis] 普通には、個々別々のものを集め合はすこと。論理學上にては、個々別々の概念を集めて、一系に組織すること。

總合斷定 [Synthetic judgment] 論理學上の語。主辭の中に毫も含まれざる概念を賓辭と

なしたる斷定の稱。

相互作用 [Reciprocal action] 相互に作用を及ぼし合ふこと。

操觚者 [Writer] 操觚とは筆を執ること、又文を作ることをいふより、新聞・雜誌記者又は文學者等、文筆にたづさはる人を操觚者といふ。因に觚は方形の木にて、支那の古代には之を用ひ文字を書きたるよりていふ。

相互扶助論 實驗室や博物館の中ばかりではなく、更に森や野や草原や山岳に入つて動物を研究すれば、直ちに吾々は次ぎの如き事實を見るのである。即ち無數の鬭争と殺戮とが動物の種々なる種の間殊に種々なる綱の間に行はれつゝあると共に、同様に若しくはそれ以上に、相互支持、相互扶助、相互防護が同一種の或は少なくとも同一社會の動物間に行はれてゐる。社交的精神は相互鬭争と等しく自然の一法則である。勿論此の二つの事實の比較價值を、よし粗雑にもせよ、數字的に決定するのは、極めて困難な事であらう。けれども若し吾々が直接經驗に徴して、「絶えず互に鬭争するものと、互に扶助するものとの何れが、最適者なりや」と云ふ問を自然に向つて發するならば、吾々は直ちに

相互扶助の習慣を有する動物が正しく最適者である事を知るのである。其等の動物は、生き残るべきより多くの機會を有し、且つ其の綱の中で、最もよく知力と體力との發達を遂げてゐる分此の見解を立證するに足る無數の事實を考察の中に入れれば、吾々は安全に次ぎの如く斷言する事が出来る。即ち相互扶助は相互鬭争と等しく自然の一法則ではあるが、進化の要素として恐らくは更に大なる價值を有し、種の存続と發展とを保證すべき習慣と特質との發達を促し、同時に又各個體に最小の努力を以て最大量の幸福と享樂とを得しめるものである。Darwin の科學的承繼者の中で、自然の一法則としての又進化の主要素としての相互扶助の本當の價值を認めた最初の人は、私の知る限りでは、有名な露西亞の動物學者、聖彼得堡大學總長故 Professor 教授であつた。(大杉榮)

崇嚴なる私想 [Sublime Selfishness]

文明の食傷又は自意識病の爲めに神經の甚だしく衰弱したる病人ならぬ病人が年々歳々に増加する傾きあることは事實らしく彼等は或は父母祖父母が蕩逸懦弱なる生活の業因により或は自身自身の不養生によつていつしか身心を病的に持

ち崩しヒステリーとなり瘋癲的となり浮世のこと一切面白なく無意義無趣味に感じながら尙命のみは何となく惜しく、かゝる青年は時代の文藝に従事する連中に多し。中には極端より極端に走つて突然宗教信者となるもあり。宗教家はかゝる場合を發見する毎に狂喜して宗教復活の前兆などいへどロマンチスト等の發心はともすれば感情上の道樂、ほんの崇嚴なる私慾に過ぎず。(坪内逍遙)

創作 [Creation]

はじめ作る、作り出すといふ意。批評に對して小説・小品文・叙事文・抒情文等のすべてを創作といふ。又、翻譯にあらざるものとの意もあり。

草冊子

草子の字音が、冊子の字音が明かならず、枕草紙・徒然草等の如き隨筆・漫筆をいひ或はお伽草子・假名草紙・浮世草紙・草雙紙等の小説をもいひ、新編本をもいふ。

憎新癖

新世界を創造する人々は時々普通の人如く新奇なる事物に對して敵となることがある。彼等は他人の發見を極力排斥する。それは彼等の頭腦が自己の思想にのみ充ち満ちてどんな新しいものをも受け入れることが出来ない様になつて居るか、さもなられば、自己の思想に

のみ過敏な特別な感覺を有し、他人の思想に對しては全く無感覺になるのであらう、かくの如くして哲學上の偉大なる反逆者シロツベルウェルは政治界の革命に對して僅少な憐憫と侮蔑の言葉の他は何物をも持つてゐなかつた。(ロムプロソオ)

想像 [Imagination]

過去の經驗又は既知の事實・觀念を材料として、新事實又は新觀念をつくる心の働きをいふ。一、過去に對する觀念を再現すること、二、之を其要素に分析すること三、分析せる要素に綜合することの三過程より成る。其文學上に必要なるは勿論、科學の原理の如きも想像作用によりて發見せらる。

總想念

佛教の語。身・受・心・法の四種を一念に具備すること。即ち身の不淨を觀すれば、身も受も心も法も不淨なりと觀するが如し。

創造 [Creation]

新しきものを造り出すの意にて、創作といふよりも意廣く且つ強し。

相對 [Relativeness]

相互に關係を有すること。其物以外に存立するものあること。或條件の附隨してあること。又他と比較しての言なること。即ち二以上のものが互に對照され比較されて存在を明かに

する其關係を相對といふ。例へば美に對して醜善に對して惡、利に對して害あるが如し。(絕對の對)

相對的 [Relative]

絕對的に對していふ。即ち物事の相對なる場合にいふ語。(猶、相對、及び絕對的の項を見よ)

造物主 [Creator]

造物主ともいふ、天地萬有を經營支配する神、即ち造化の神。上帝。天帝

俗象 [Bourgeois]

佛蘭西の自然主義文學者フロオベエルは自ら稱して人生の「傍觀者」であると言つた。超然として世の中の「俗衆」を冷視して其の生活を嘲るのが渠の Mental attitudeであつた。

屬身特權

其人の身分に屬する特權。

俗文體

時代物の小説にはきはめて不便。——平易にして音に解しやすきの徳あるのみかは別に活動の力あるから所謂華文に必要な簡易の品格明哲の品格はいへばさらなり峻拔雄健なる勢力あり追懷愛慕の想念をも惹起しつべき品格あり加之も時としては文字の音調氣韻と共に頗る情趣に適應してよく心底の感情をば表しだすに妙なることあり……當世の物語を此の文體

もて綴りなせば情文双ながら相適ひてさぶる精妙なるべけれどそれだに幾分か斟酌して折衷せざれば叶ひがたし。……嗚呼我黨の才子誰が此法を發揮すらんおのれは今より頭を長うして新俗文の世にいづる日をまつものなり。(坪内逍遙)

側面觀 [Side-view]

側面よりの觀察。

組織的 [Systematic]

個々のものが、一定の秩序關係を保ちて一體をなす。即ち一の理法により整然と組立てられたるにいふ語。系統的、體系的といふも同じ。

組織學 [Histology]

動物或は植物の組織を顯微鏡によりて研究する科學の稱。

組織神學 [System theology]

神に關することを組織的に研究する學問。

祖先教 [Ancestor worship]

祖先の靈を崇拜して祭祀する宗教。

塑像 [Clay figure]

塑土・油土或は蠟を型にあて、つくりたる像。

即興詩 [Extempore]

即坐の詩興を即坐に歌ふといふ意、自然派情熱派に多く此の種の詩を見る。其の情熱が物に觸れてほとばしつて居る

度合がさながら其の時の状態を浮ばす様な風のをこれと見れば、その情熱が詩人の胸底に籠つて居るので其の薄ぎぬなる作を通過して讀者は初めてそこに達する事が出来る様なものを「冥想詩」と云へる。(泡鳴)

俗曲 俗間に行はるゝ歌曲の義にて、三絃或は笛・太鼓・鼓・月琴等に合はする歌曲の總稱。古くは隆達・弄齋等より今日の流行唄に至る迄其種類甚だ多し。

ソナタ [Sonata] 音楽上にて、獨奏樂の曲をいふ。

ソナムソルベル [Zonnu solverel] ラテン語にて處女の帯をゆるめると云ふこと。

ソフトな文體 我近年の文體が官能主義・印象主義象徴主義と三段の洗禮をうけた後、非常に文章がソフトになつて來た。ソフトとは柔かといふ意味だが、彼の王朝時代の女流の文章のやうに柔弱なものではない。感情が極く細かな屈曲した處まで出る様になつた。これをソフトな文體といつた。(Sat style)

ソプラノ [Soprano] 音楽上の語にて、高音部、最高音、高調子等と譯す。

ゾムナムグリスム [Sonnambulism] 夢遊病、離魂病、眠は睡即遊行と譯す。夢遊病の項参照。

ゾライスム [Zolaism] 十九世紀中頃から後の歐洲文壇に勢力を得た自然主義、即ち唯だ Realism と云へば眼前の世態人情を如實に寫すといふ一般の廣い意味、それから自然主義といへば特に科學的物質觀に根ざしたるゾラ一流の近代的寫實派を意味する。

ソロ [Solo] 獨奏、獨唱、獨奏曲と譯する伊太利語。

短作 [Sonnet] ロセチ曰く「短曲は刹那をとめる碑文」此の詩體は一種の叙情詩で、しかも十四行に緊縮されて居るので、人によるとこの種を作る義をソネチヤ(短曲作者)と呼んで長篇物を作れぬかのやうに冷笑するのがあるが然し魔力あるもので、以太利ではダンテやペトルカ、英吉利ではシェクスピア、ミルトン、ブラウニング夫人、ロセチ、佛蘭西ではボードレイ、エルレイン、マラルメ等が有名である。

タ

他愛主義 [Altruism] 愛他主義に同じ、其項を見よ。

他愛的 [Altruistic] 愛他ともいふ。自己の利益・幸福を犠牲として、他人の利益・幸福の爲に盡すこと。

ダーク・エイジ [Dark age] 暗黒時代と譯す、其項を見よ。

ターニング・ポイント [Turning point] 變り目、即ち其處より方向を變ずる點。

太(泰) [Absolute being] 萬有の分出、發現せる唯一絶對の根源。又、天地の元氣。

第一印象 [First impression] 第一の印象、即ち一番始めに其物より得たる感じの意。

第一義 [First principle] 無上深甚の妙理。聖智の自覺。又、根本的といふ程の意。凡べて人間の營みを、第一義のものと第二義のものとに分つことを得。例へば、人が此世に在る以上は先づ以て其生命を持續すべく、本能的生活即ち飲食といふ事を必要とす此本能的の生活は第一義の生活なり。されど各個人が本能のままに

生活するのみにては、社會的に生活すること能はず、此が爲に道德なるものを生ず。此社會的の生活は、第一義の生活に對して第二義の生活といふことを得べく、第二義の生活を調へる爲に存する道德は第二義のものといふを得べし。

第一義 [The First cause] 最初未だ科學萬能の迷夢の醒めなかつた頃には宗教や哲學は自然科學と全く相反目して居つた。即ち舊來の信仰も哲學體係も皆自然科學の爲めに打破せられて其の根柢をすらも危くされた觀があつたがそれから此の科學全盛の風潮が漸く衰へて來る頃になつては、歐洲一部の學者間に早くも既に科學に對して愛想をつかさ聲が聞え出した。即ち科學がいくら萬能だと云つたとて宇宙の第一義はとも分るまいといふやうな絶望の聲を出す者が澤山生じた。

對應 向ひあふこと。相手のなす所に斷じてなすこと。相等しきこと。

退化 [Degeneration] 生的體の或單官の構造若くは作用等が、次第に單純となり若くは喪失すること、例へば男子の乳房の如し。又、進歩せざる以前の狀態となること。(進化の對)

對價 [Value] 代價。又、一方の或行爲に對し

て、他の一方より行爲の利益に代へて給附すべき價格。

大我 [Higher self] 宇宙の唯一絶體なる實體の稱。(小我の對)

對外硬 [Strong foreign policy] 外部又は外國に對して強硬手段を執ること(對外軟の對)

對外軟 [Weak foreign Policy] 外部又は外國に對して強硬手段を執らざること。(對外硬の對)

大學才人 [University wit] 沙翁は三百年の昔既にハムレットのやうな人物を描いた。懐疑の苦悶に陥り、暗愁に鎖されたハムレットの心持こそは確に近代的なる一面を具へて居たらう。或は又佛蘭西の古詩人フランソワ・ピロン Francois Villon の如き今を去る殆ど五百年の遠い昔に於て、彼の態度と生活とは明かに「近代的」であつた。慣習に反抗し、權威に屈せず鋭く個性を發揮して憚るところなく又其の人生に對する熱烈なる愛慕の情に於て或は感覺の世界に、樂欲を貪り、やがて又深い絶望悲哀の淵に陥るところなど彼は全く「近代的」の人であつたと云へる。又處女王朝の英文學に沙翁の先驅として縱横の詩才を發揮した、所謂「大學才人」

の一派、殊にクリイ Green マテロウ marlowe などの不羈奔放の生活も見かたに依つては矢張此の類のものであつた。(厨川白村)

對偶 [Parallelism, Antithesis] (英) 調子の反覆法とも稱すべきものにて、調子の似よつたる文句を列べて並行の美對立の美を成すものなり。例へば「好事門を出でず巨る事千里を走る」の如し。

對偶法 對偶法は對句法とも云ひて、英語のアンテセシス (Antithesis) とコントラスト (Contrast) との二語の意味を含む。アンテセシスは意味の似たるを對せしめ、コントラストの方は、意味の相ひ反せし言葉を對せしむ。これ即ち對偶法と名づく。花は霞の如く、人は雲に似たり」といふはアンテセシス「熱する時は火の如く、冷やかなる時は氷の知し」と云へばコントラストなり。此の二語は一つの文中に混合して用ひらる。即ち二つのことを對比させ對照させる方法が對偶法なり。

ダイクロイスム [Dichroism] 見る方向に従つて種々様々の色を現はす性質、或は溶解物の濃淡の度によつて色々の性を呈する性質。

ダイクロマチスム [Dichromatism] 兩

色増。
體系 [System] 個々別々のものを統一せる組織。系統。

體系的 [Systematic] 組織的に同じ、其項を見よ。

隊伍を整へよ [In Reih und Glied] 新獨逸國を主宰せる觀念は一の全體に併列すべしとの觀念である。この觀念は實生活にも文學にも瀟灑してゐる(隊語を整へよ)(シユピルハーゲンの小説の題)といふ言葉は普汎的の標語と考へられてゐる。この國の目的とする處は撒布せられたるものを集收して餘りに少數者の所有であつた人文を普及せしめやうといふのである。この國は一大國家と一大社會との建設して全體の勢力の爲めには個人の犠牲をば要求するのである。全體の勢力! この觀念は今日の獨逸に於けるいかなる著しき現象に於ても跡つけられる。

大悟徹底 悟りを開て何等の煩惱をも懐かざること。根本の眞理を洞見して少しの疑惑も存せざること。

醍醐味 佛教の極致、即ち大涅槃・常住の眞理などの意に用ふ。

牛乳より酪・生酥・熟酥を経て醍醐の上味を生ずるが如く、方便權教より一乘眞實教に進むをいふ。

第三帝國 「皇帝とガリレア人」はイアセンの最愛の思想の一なる「第三帝國」を根本の觀念としてゐるけれども、この觀念は主張としてよりも寧ろ批評として現はれてゐる。アリアンはマキシモスが宣傳した第三帝國を建設せんと企て、熱烈な努力を以てその實現に従事したが、希臘主義の美と基督教の眞とを結合し調和すべき手段を誤り、基督教の世界に、希臘の肉體的快樂を返し與へんとした結果は、たゞ陋劣なる獸慾を解放するに過ぎなかつた。彼は時代の推移を見るの明なく青年期に入つた時代と小兒期の昔に返さうと努めた結果容赦なく轉じて行く時代の車輪に轢かれ、彼れと共に第三帝國そのものと粉碎されてしまつた。(片山孤村)

第四の壁 [The Forth wall] 近代劇は四壁の室内のうち一つの壁をとりさつた心持ちと云ふことを云ふ。即ち第四の壁とは近代劇の觀衆を云ふのである。

第四の廣がり [The Forth Dimension] 前ユークリッドの數學によれば萬物は皆上下

後、左右の三つの廣がりのうちにふくまるものだ。しかるに神秘家は更に第四の廣がりがあると云ふ。あだかも普通の生理學では人體には五官しかないが、神秘家には第六官があると云ふが如きである。

第三者 [Third person] 當事者即ち直接關係以外の者をいふ。例へば甲・乙の二人相争ふを、丙・丁其他の者が傍聴せりとせんに、甲と乙とは當事者にして、丙丁其他の者は第三者なり。此語は常に當事者に對する關係語なり。

大自在 毫も束縛又は障礙なき自在。おほいなる自在。

對照 [Contrast] 例へば、黒と白・明と暗・大と小・上と下・表と裏・京と西等の如く、價值・狀態・性質・分量等の相隔たり若くは相反するもの相對して存在し、爲に彼此の比較上一方若くは雙方の特質が殊に分明なること。即ち黒に對して白はいよ／＼白く、黒はますます黒く見え、大に對して小はますます小く、大はいよ／＼大に感ぜしむるが如し。對照はまた對比ともいふ。一に對境ともいふ。國民的意識が明瞭になると同時

第二生殖性

ゲルテに於て特に著しい事實は彼の八十有餘歳の一生が殆ど戀愛の生涯であることである。文學界に彼の名を重からしめた其の力は彼の戀に見ればならない。誘ふものはかくて彼の道徳心を罵り、辨ずるものはそれが純粹なる藝術的發露に外ならないのを唱へて居る。然し彼等二つ乍らに正しい見解ではない、抑も一切の種類の天才が戀愛の力に密な關係を有して居る事は注意すべき事實である。吾々は藝術的傾向を第二生殖性と認めざるを得ない。かの古代において強壯なる體格を有し、遊戯に秀で、辨舌に巧みなる事が如何ばかり異性の力を引いたかは明かである。音楽や詩歌も所詮は女性に對する衝動によつて生れたものである。特に藝術的天才が戀愛と密接な關係を有するものも之れが爲めである。(メチニコフ)

大脳障害 [Cerebral lesion] 色彩聽覺の部参照。

タイプ [Type] 典型、儀型、模範、標式、印記號、様子、徴候、手本、又は活字と譯す。典型の項を見よ。

タイラント [Tyrant] 暴君、或は壓制者と譯す。

に帝國主義、日本主義といふが如き團體的自覺の氣運が熟する。また個人意識が明瞭なれば個人的覺醒となる。

タイタン [Titans] 希臘神話にある巨人の一族。オリンパス諸神の前に宇宙を統治せり。天ツラナス、地ゲエの諸子にして、クロナス、アマアナス、ハイビオリン、レア等の十三神あり一同父を斥け、其首長クロナスはレアを妻として天を統治せしが、子ゼウス等父に反きオリンパス山に據りて遂に悉くタイタン族を亡ぼし、代りて宇内を治む。尙別にタイタン族の子孫にプロメシウス、ラトナ、セレナ等あり。オリンパスの諸神と對抗し、又タイタン族と稱せらる。體得 十分に會得すること。全我を以て會得する事。身を以て夫を具現する迄に十分に知り十分に了解すること。

大なる悲 露西亞の文學者、マクシム、ゴルキイの名は本名ではなく號で、即ち「大なる悲」といふ意味である。

第二次色 [Complementary colour] 三原色中の二色を混ぜて得る色、即ち赤と黄とを混ぜ得る橙黄緑、青と黄とにて得る綠色、赤と青にて得る紫色の三色をいふ。

隋圓曲線説

英のドレッサー氏が楕圓曲線の説に以爲へらく、楕圓線が正圓線より美なるは正圓線が一中心點に發するに反して、楕圓線は二個の中心點を有するがためなり。言ひかふれば一個の中心點を有する曲線より、二個の中心點を有する曲線が、之れを考察する時、意義複雜なるの現なればなり。従つて楕圓線は更に三個の中心點を有する卵形曲線の複雑なるに如かずと、是れ又曲線美の説明に於いて注目すべき思想の一たるべし。(抱月) [Elliptical Beauty]

多元説 [Pluralism] 現世に存せる多數の生物は、同一祖先より降下せるものにあらず、若干の祖先より降下し來れるものなりといふ學説(單元説の對)

多元論 [Pluralism] 宇宙の諸現象には各自獨立の存在ありとし、宇宙の本源を多數の實在に歸する哲學説。(一元論・二元論の對)

多情多恨 [Plethoric; Sensible] 物事に感じ易くして恨み多かりと。

多神教 [Polytheism] 自然教に同じ、其信仰する神の數多きよりいふ。

惰性 [Inertia] 慣性又は習慣性ともいふ。ニュートンの運動則の第一にして、物體が外より力

の作用を受けざる間は静止若しくは運動の状態を變ぜざるをいふ。而して静止せる物體が運動を始め、或は運動する物體が其方向を變じ若くは其速さを變ずるは、必ず外力の作用による。又通俗には、在來のくせ又は勢ひの義に用ふ。

疊句 [Refrains] 元來疊句なるものは一個の強き感情に動かされつゝある心的状態を示すに誠に適切なる手段たるべし。戀人を思ひ憧るゝ人にとつては様々なる考の起るが中に繰り返し、其の戀人に就ての考へが起り來るは自然なり然れどロセツテイが用ふる疊句は斯の如き自然なる繰り返しにはあらざるなり、一言にして之を云へば彼の疊句は強迫觀念の現れなり。(マクスノルドウ)

達觀

一局部に偏せず廣く觀察すること。又、わたがまりなき心にて觀察すること。

だ調とです調

徳川時代の言文一致にはおぢやつたと結んだり、明治の初年にはとさで結んだのであつたが、明治二十年頃になつては、二葉亭は、だで結ぶことを主張した。だは元來上の者が下に向つて云ふ敬意のない言葉であるが、二葉亭は坪内博士と相談の上、先づ兎も角も敬語なしでやつて見る氣で、言文一致を書き

始めたのであつた。二葉亭の言文一致には餘程圓朝の影響があつたのであつて、たゞ圓朝の「私は……でございます」のでございます調だけは文字にすることが出来なかつたが、他に多く圓朝の語調をとり入れた跡がある。山田美妙も始めは「だ」をつかつた。彼は明治十九年に「風琴調一節」と云ふ言文一致の處女作をした。その時の文章の語尾は「だ」で「……がそれだ」「何々したのだ」と云ふ調子であつたが、その時世間は「俗」だと罵り、「下品」だと譏つたがために「です調」をとるやうになつた。二葉亭が大體の調を圓朝に借りたのに思ひ較べると、美妙は文の大體の調を外國文直譯流に至極ハイカラな新造語などを多く用ゐようとした。

「この隅田堤を、一散に驅來る車輪が二あります乗つて居るのは女です。夜目にはしかと見えませんが、年の頃二十一、二、色は白く鬚は島田です。車夫は汗を拭き、橋袵のシミの材料を我知らず造つて居ます。車屋提灯をつけんか、巡査は叱りました。ハイ只今、車夫は答へました。蠟燭がないの？ 女は問ひました。提灯を點けてから速力は前に倍しました。恰も韋駄天の如くです。が酒代の有無は知りません。三圓前迄來た時、横合から出た一人の男、突然女の頭の

ダナエ [Danae]

希臘神話に、アルコス王アクリシウスの女の名。アクリシウスが其孫の手に死すべき神託あるや、恐れてダナエを眞鍮の塔内に幽閉し男子に接せしめず、ゼウス黄金の雨となりて塔内に入り、ダナエと通じてヘルシウスを生む。アクリシウス後果して誤りてヘルシウスの手に死せり。ヘルシウス参照。

ダマスカスの劍 [Damsacus blade]

ダマスクス鋼鐵で出來た劍で、剛鐵の精良と刀身に波紋あるのを以て知らる。

他律

自己本來の意志に基かず、他の束縛・支配によりて動くこと。例へば教權若くは習慣に左右せられて或行爲をなすが如し、又、其規定より以外の規定をいふ。

斷案 [Decision]

判斷すること。斷定すること。論理學上には三段論法の第三の命題、即ち前提によりて引き來る決論(前提の對)をいふ。三段論法の項を参照せよ。

探險小説 [Adventurous story]

探檢の事

單元論 [Monadism]

を扱へるシヤロツクホルムスの如き小説。説にて、多元説に反し、生物の種類は皆同一祖先より降化し來れりとの説。

單行本 [separate volume]

他の冊子の中に編入せず單獨に出版せられたる書籍。

單純化 [Simplify]

複雑なるものを單純にする。

單純なる信仰 [Simple faith]

「我が懺悔」に於て曰く「人は其等の人々の如くに生活する爲めには此等の人々が有する單純なる信仰に歸らざるべからざるを知れり」と然れども彼の此結論は又神秘的思想の現れに外ならず。世間多數の人々が安じて生活するは彼等が單純なる信仰を有するが爲めにあらずして彼等が健全なるが爲めなり。單純なる信仰の如きは唯此自然的樂天者の心のうちに現はるゝ偶然なる伴生的現象に外ならず。(マクスノルドウ)

單純生活 [Simple life]

奢侈を避け極めて質素に生活すること。

男女同權 [Equality of the Sexes]

男子と女子と其權利に甲乙の差別なしといふこと。男尊女卑に對していふ。

ダンス [Dance] 舞踏の項を見よ。
弾性 [Elasticity] 外より力を加へて物體の形状・體積を變ぜんとする時、其物體の原状態を維持せんとする性質。

男政治 [Androcracy] 男性中心の制度習慣の一切を名づくべきものであらう、男性を主位に置き専ら男性の利害を目安として割出された社會政策である。所謂男政治は一般の爲めにも女性の爲めにもさうした方が却つて有益であるといふ立派な結論が生じないとも限らぬが女子問題のやかましくなつた最近世に至るまでは曾て男性中心説に對して有力な異議を唱へたものゝなかつたのみならず今尙男女の同遇を不當のことのやうに考へてゐる人の少くないのは不思議である。併し女子參政權問題や女子兵役義務問題の如きも餘り一足飛に過ぐる要求であるとして姑く之を別問題と見做すべきであらう。(坪内逍遙)

男性中心説 [Androcentricism] 専ら男性の利害を目安として割出された説。
タンタチルの死 [La mort de tintagiles] メーテルリンクの初期の作、其の中心思想は要

するに皆「死」或は「運命」といふ問題である。(厨川白村)

タンタライズ [Tantalize] 近代の科學と物質的進歩とは一面に於て人間をして主我的なる個性を熾ならしめたと共に、他面に於て又此束縛制限を極めて痛切に感ぜしめてゐる。つまり人間を一種のデイレンマ Dilemma に陥れたわけであつた。此のデイレンマの矛盾にこそ近代悲哀のいふべがらざる痛ましきがある。近代文明は此の點に於てまるで昔の神話にある、Tantalus の話のやうに一方に個人の慾望を誘ふておきながら、他方にはその滅足を制限して人間をタンタライズしたものであるとも謂へやう。(厨川白村)

單調 [Monotony] 單一なる調子又はおもむき、即ち變化なき態状をいふ。

断定 [Decision] 或物事に對し、其理路を考へて判断し定むることと斷案に同じ。

探偵小説 [Detective novel] コナン・ドイルの如く犯罪事件の探偵上の苦心を脚色としたる小説。
耽溺 [Indulgence] 酒色に耽り溺るゝこと。又、惑溺。

耽美主義 [Aestheticism] 英國に於ける耽美派の代表はオスカー・ワイルドである。彼は語つて曰く「美は倫理より高尚なりそはより精神的圏内に從屬する物の美を明らかにすることは吾人の到達し得べき最も美しき點なり。色彩の觀すら善惡の觀念より個人の發達にとりて更に重要なり」斯くして耽美主義の教理はかの高踏派と等しく藝術がそれ自身の目的なり。(マクスノルドウ)

耽美派 [Art for art's sake school] 唯美主義、又は美至上主義の人々をいふ。藝術至上主義の項を参照せよ。

短篇 [Sketch, short story paragraph] 長篇に對して、量の短き文章等の稱。

タンホイゼル [Tannhäuser] ロマンチックオペラの名を冠して一八四五年始めてドレスデンで演奏された。此の曲は一八四二年の春マクネルがパリよりドイツに歸りドレスデンへ赴く途次チューリッゲン谿谷のウルトブルヒの古城を訪ひタンホイゼルの民謡を聞いて深く感じ、十三世紀頃ナルトブルヒ城に行はれた戀愛詩人と騎士詩人の歌争ひの傳説を之を綜合して爰にタンホイゼルの曲をなすに至つた。本曲一

篇の結構は即ち一度肉の誘惑に敗けてこの魔窟に墮落した詩人タンホイゼルが幸に純潔な處女エリザベットの靈的な愛の力によつて地獄の苦を救はれ悔悟成道した終始の物語で、人間心靈上の善惡の争ひといふ事が象徴的に現はれて一篇の中心思想になつてゐる。マクネルの作

段落 [End of paragraph] 一文章中の大なる切目、即ち段又、くぎり。

智育 [Intellectual instruction] 知識を豊富にして思考を發達せしめ理性を修養し技能を鍊磨する等、すべて智能を啓發する爲めに、心理學・論理學等の指示する所により具案的に行ふ教育。諸學校に於ける諸學科の教授は多く此方便なり。(體育・徳育の對)

智慧 [Wisdom] 物事を分別し知曉し、或は計畫し處置する心の作用をいふ。

知慧の人 [Homo sapiens] 製作の人 (Homo faber) 人類が地上に現はれた時期はいつ頃であるかといふに之に對しては武器や家具が造り初められた時期と答へざるを得ない。それほど人

間と製作といふことは密接な關係がある。人間の理智は本來機械的發明を目的として發達して來たに違ひない。人類を「知慧の人」と呼ぶよりも「製作の人」と呼んだ方が當を得てゐるだらう。(中澤臨川)

聽覺 [Auditory sense] 耳にて外界の音響を感識する作用。

知覺 [Sense] 對象を辨別する感覺の認識作用。即ち當面の感覺と過去の經驗とによりて起るもの。例へば、色・香・觸等の個々の感覺のみにては何とも知るを得ざれども、過去の經驗加はりて始めて花なるを知覺するが如し。

知覺精神 [Sense] 物事を正當に辨別する意識の作用。

地球中心説 [Geocentricism] 世の文明が進んで人間が其の理性を待みいろ／＼學説を立てるやうになつてから随分種々の妄説や謬信が社會を支配したのであるが中に最も長い間社會人心に不當の勢力を有してゐたものが二種あつた。第一は地球中心説第二は人類中心説である而して第一は彼の文藝復興時代にコパルニコスの大體説によつて破られ第二は十九世紀に入つて主としてダウソンの進化論によつて破られた

と云つてよい。さうして其の結果は總體に有益であつて文明は著しく進んだのである。ところで若し此の過去の二中心説に更に一つの謬つた中心説を加へることが出来ると思へばそれは男性中心説とでも名づくべき物であらうと思ふ。

逐字譯 [Literal translation] 翻譯を見よ。

智識 [Intellect] 知ること。

智識欲 [Intellectual desire] 知慾ともいふ。夫から天れと物事を知らんと欲する慾望、即ち研究心、學者癖なり。(物質慾の對)

知性 [Intellectuality] 事物を認識する性能。

智識同感 理智が空間の智識であるに反し直觀は時間の知識である。なぜなら「凡そ生物の存する所には必ず何處にか「時」の記入さるべき帳簿の存しないことはない」のであるから。直觀の大切な特質はそれが時間的に連續滲透する事物を個々に切り離して見ないことである。それは實在の複雑な多數性の中に之を統一する物的單一性を觀取する。理智加量の方面を照すに引代へ之は質の方面に喰ひ入る。直觀とは關係または分析の智識でなくて物の絶對性または直接性に合しようとする「智識同感」とも「智識聽

診』とも謂はれる。(中澤臨川)

智的浮浪人 現代スカンデイナビアで世界的名聲を誇つてゐるクヌット・ハムズン Knut Hamsun の作中の主人公はその時々々の境遇に應じたハムズン自身である。彼は絶す何物かを求めながら實世間と調和のできない反逆者である。彼の作中の主人公は皆「智的浮浪人である」(中澤臨川) Intellectual Vagabond

地平線 [Horizon] 海上又は平野に立て四方を觀望すれば、吾人は一大圓盤面の中心にあるが如く思はる、この大圓盤面即ち地平面と天空との相接するが如く見ゆる所を地平線といふ。又、普通一般の範圍の事にも用ふ。

地方色 [Local colour] 地方々々、部分々々により風俗・習慣自ら相違し、其相違は、夫々特殊なる趣・感じを漲らせり。之を地方色といふ。一言にいへば、其土地の有する箇性なり。部分色と云ふ場合もあり。

チャーチ [Church] 會堂、教會、禮拜堂、寺院又は教派等と譯す。

チャーム [Charm] 魅すると譯す、心を迷はす、又は心を迷はすものといふほどの意。

太陽の兒 露國のゴルキ一の戯曲であるこれは

單に作者の小説を戯曲化したやうなもので、リザの神經過敏と、沈鬱な調子が灰色から次第と眞暗な姿にうつり變り行く様を活現し得て居る。

自然兒 チャイルドオプナーチユア これは露國の作家オストロウスキーの戯曲である。要するに一場の喜劇であるが露國國民生活がかなりよく描かれて居る。背景の中にアレキサンダーといふ元氣な、しかも世間摺れた老少年と、グアリーの如き自然の一片を削り來つたやうな郡部の少女を點出して巧に一編を彩つて居る。

チャペル [Chapel] 禮拜堂と譯す。

チャンス [Chance] 偶然、不意、機運、機會又は僥倖、偶然の事等と譯す。

チャンピオン [Champion] 勇士、戰士、選手、優者等と譯す。

注意 [Attention] 精神の勢力を或事物に集注すること。其外界の刺激を受けたる爲めに起りたるものを所動的又は無意注意といひ、自己の意志によりて自ら求めてなすものを能動的又は有意注意といふ。此作用によりて事物は分明となる。されど其範圍と強度とは反比例をなし、

また其強度も同一律に繼續せらるることなく、時として或は強く或は弱し。

中景 [Middle ground] 繪畫中の遠景と前景との中間に位する部分。

中古主義 [Medievalism] 浪漫主義の項を見よ。

抽象 [Abstraction] 具象の對。個々殊別の具象的想念より共通せる屬性を抽出し、之を統合して精神界の現界となす心の作用。即ち或事實の中より概念を抽き來ることにて、例へば、日本人・支那人・西洋人・亞弗利加人等より其特異の點を去り、共通の點を抽出し、人なる抽象觀念を得るの類。即ち具象は箇性にして、抽性は概念的なり。

抽象的 [Abstract] 共通なる屬性を抽出して之を綜合したるに、ふ語。(具象的の對)

抽象美 [Abstract beauty] 種族に對する美(具象美の對)

中心義 [Central principle] 中心の意義。

中心思想 [Central thought] 多くの思想の中心をなす思想の義。例へば自然主義中に含める思想は種々あれど、其中にて中心をなすものは現實的といふ思想なり、即ち現實的といふこ

とは、自然主義の中心思想なるが如し。

中樞 [Centre] 主要、樞軸といふが如く、凡ての働きの源泉となる所をいふ、例へば脳髓は神經の中樞なるが如し。(末梢の對)

中性 [Neutral gender] 文法上、男にもつかず女にもつかざる中間の性質。

中正 [Impartiality] 過不及なく偏頗なきこと。

中世主義 [Medievalism] 中古主義に同じ、其項を見よ。

中毒 [Poisoning] 變質の偉大なる研究者モレルは變質の主なる原因を中毒と看做せり。アルコホル性の飲料、煙草、阿片、ハツシユ其他魔粹劑興奮劑を常用する民族又は有毒なる食物例へば悪しき穀物を以て作れる麵麩の如きものを常用する人々又は梅毒結核其他種々なる病毒を吸收する人々は變質を産出す。(マクスノルドウ)

注入主義 [Instilment principle] 教育上、開發主義と共に三大主義をなす、即ち注入を以て教育法の本旨となすもの。

中年 [Middle age] 三四十歳頃、或は其年頃の人。

調 [Note] 音律の調子をいふ。(Tone)字句の調子即ち句調。詩賦又は歌謠。韻致。

超越 [Transcendent] 超越に同じ其項を見よ。

長歌 和歌の一節、五・七を一句とし長く連れたるものにして句數に定まりなく、末の一句は必ず七音を二つ重ねるものとす。(短歌の對)

直覺 [Intuition] 又、直觀といふ、推理或は經驗等によらずして直接に事物を知覺識別すること。(一)目前に事物を知覺すること即ち感覺直覺。(二)直接に絶對真理を看取すること即ちセリンゲの哲學にいふ知覺直覺。(三)吾人の精神が受動的に神靈に接し其啓示を受くること即ち神祕論者の謂ふ神祕直覺。

彫刻 [Sculpture] 造形美術の一。硬き物質に物體形相の全面又は一面を鑿を以て刻し現はす技術をいふ。而して塑造は彫刻なる字義には當らざれども、彫刻なる語は今は塑造術をも含みて用ふ。

彫子 [Pitch] 音樂にては、拍子なき不可測的の曲、即ち音律の高低をさふ。(Tone)繪畫にては、濃淡・明暗の度、即ち暗き調子・明るき調子深き調子の類。或は畫面全體の根調、即ち強き

調子・弱き調子・赤の調子・暖き調子・寒き調子の類をさふ。

超自然 [Supernatural] 自然に超越してあること。自然の外に存在すること。神變奇異を見よ。

超自然の壓迫 [Oppression du surnaturel] 全生命を托するに足るべき宗教と道德と藝術とを求めんがためにはてしなく苦み悶くこと、ピエル・ロチの「郷愁」は此の壓迫の悲哀を歌つたものとされて居る。

超人 [Superman] 普通人類を超越したる能力、又は行爲あることをさふ。

超越性 [Transcendence] 人格を超越して、之に人格の有限なる屬性を附與すれば其性質を喪失するもの、例へば神または絶對者などの如し。

超絶 [Transcendent] 認識或は經驗の外に脱出すること。

超善論 [Transcendentalism] (一)カントの意識に於ける超越的原理、即ち先天認識の形式を考究する科學。(二)經驗主義・倫理主義を排して直觀的・心靈的・超感性的要素を重んずる宗教主義。獨斷的主理主義に對する反動として新

英蘭に起れり、主動者はエマーソン氏。
超善惡 [Beyond good and evil] 『知的に自由なる人間は善と惡とを超越せざるべからず。善惡を以て人間を拘束することなく人間をして自由に行く處に進ましむるとき我等は其處に超人を見出すべし』之れニーチエの道德哲學なり。(マクスノルドウ)

超自然說 [Supernaturalism] 或る事實に關係せず、其外に地位を占めて事を行ふ主義。
彫塑 [Sculpture] 彫刻と塑造とをいふ。猶、其項を見よ。

挑發 [Enticement] 事件をかゝり起すこと。事端をいとも起すこと。そゝりたてること。
挑發的 [Enticible; Stimulative] 事件・事端を機發するさまにいふ語。

調和 [Harmony] 矛盾又は衝突することなく程よく相合し又は相合せしむること。
絶對命令 [Absolute demand] 倫理學に於て、絶對無條件に服従を命令する道德法。

直接經驗 [Immediate experience] 昔の小説や劇曲にはちやんとした一条みだれざる前後の脈絡もあり照應もあつて首尾一貫したところがある。そして結末へ行くと大抵人物や事件

が皆おさまりが附いてゐて尻切蜂のやうになつたのは先づ妙い。だけそれ丈けに又實生活に遠く不自然な感じがする。然るに自然派の作物に至つては日常生活に於ける作者の直接經驗を書いたのだから詰の始も終もない斷片的なものが多し。人生一片を引きちぎつて之を讀者の眼前に投げ出したまでの極て無造作なものである。
直譯 [Literal translation] 翻譯の一法、其の項を見よ。
直譯體 文章の體裁が直譯風なるもの。
直喩 [Simile] (英) 喩へる物と喩へられる物とを別けて比較する方法で「譬へば」「恰も」「如し」「似たり」等の較人言葉の附くのが普通になつて居る。例へば「人生朝露の如し」「富貴浮雲に似たり」等の如し。

著作權 [Copyright] 著作物を複製又は翻譯し若くは之を興行する權利。
直覺說 [Intuitionism] また直觀說といふ。吾人は先天的に道德的意識を具有し一切の善惡を直覺するといふ倫理說。今日の心理學は斯かる能力の存在を認めず。又、哲學上にては、直覺によりて絶對の認識に到達し得べしといふ認識說。

チリアスム [Chiliasm] 二千年黄金世界說、世界末日前基督再來して聖徒を率ゐる一千年間世界を治むるとの説。

沈鐘 [Die gesunkene Glocke] 獨逸ハプルトマンの戯曲。山上の生活は自由と戀愛と藝術との天地である。山麓の生活は基督教的なる因襲的拘束の世界でそこには主人公 Heinrich の妻も子もある。彼は山上と山麓との生活の間に彷徨して調和すべからざる此二つのものゝ間に苦悶しその揚句が最後の破滅となつた(厨川白村)

ツ

ツアイオニズム [Zionism] 猶太民族主義
 一猶太人が殆んど世界到處に排斥せらるゝより同民族一致協力して其の状態を改良しその利益を増進することを目的とする人動的運動。

ツアイトガイスト [Zeit geist] 獨逸語にて時代精神と云ふこと。
追求 [Pursuance] 何處までも追ひ求むること。

對句 [Antithesis] 語格及び意義の適應した

る句を相對せしめたるもの。詩・賦・文章に用ふ例へば「滿は損を招き、謙は益を受く、一國破れて山河在り、城、春にして草色青し」の類。
ツウインゲル [Zwinger] パロツク式建築の代表作ドレスデンにある。建築家ペルマンによりて設計せられ、一七五一年に出來た。
通俗性 [Popularity] 通俗即ち世間一般的なるさまにいふ語。
通有性 [Universality] 一般のものゝ具有せる性質。
ツララル [Zalal] ^{パラダイス} 樂園に流れる清き河にて此の河の水は水晶の如く澄み、神酒(花の蜜)よりも尚ほ甘い。人間はその河を浴してはじめて正義の心を完全に裏書きせられるのである。

通論 [Generalia. Introduction] 能く普通の道理に通じたる議論。一般に互りたる議論。
ツオイリスム [Zoilism] 酷烈な批評をすること。意地惡の批評をすること。惡神ツオイロスの名に因むてかく云ふのである。

ツオイロスの劍 [The Sword of Zoilos] 批評の筆のことを云ふ。ツオイロスと云ふ神は筆を架するの神で詩聖ホーマーも此の神に鼓舞

月並調

せられて史詩を書いたのだと云ふ。批評鬼とも云ふべし。主に天明以後の俳風を守り、舊式に拘泥して新思想を歌ふことを知らざる舊派の句。月々定會を開くより名づく。轉じて踏襲平凡の作物等に用ふ。

冷い技巧

【Tey artificiality】 岩野泡鳴氏は之れを譯して「氷の如き人工性」と云つた。シモンズがピアズリーの藝術に對して加へた評語である。ヨネ・ノグチ氏曰く「ピアズリーは最初思ひ付いた着想其の儘を嫌つて藝術化する。酵母のまゝに木地では承知が出来ず、氷の様に冷い技工を重ねたといふことなんです。之はピアズリーが自分が持つて居ると信じて居た藝術の誇り自身がインスピレーションを輕視せしめたので、又シモンズの文字を借ると『確信あるエゴイズムと沈靜鋭敏な着眼に富んだウヰンシカルな獨斷主義』から發した嫌ひと見ることも出来る。然し經驗を持たぬピアズリーだ、エゴイズムと云ひ、獨斷主義と云つても別に深い根柢の上に築かれたものと思はれぬ。水島爾保布氏の繪はピアズリーの共鳴だと稱されて居る。

つやあぶら

【Pictuse Varnish】 乳

香、樟腦及びヴェニス・テレピン油よりなる一種のヴァーニッシュである。樟腦油はコーパルの溶液即ちコーパルヴァーニッシュも亦繪畫用ヴァーニッシュとして使用せらる。

強い計畫

【Strongly marked plot】 人生の究竟は成功か失敗かであるが、之れを文學化せんとする場合にはその方法と方向とを指示して始めて物語説話となる。小説の大作にして強い計畫の描かれて居らぬものはない。これがなかつたならば作中に顯はれる人物に生氣のないのは道理である。近世の小説にして吾人の感興を惹かず失敗に終つた作は、その作中に何事も起らず、又讀者が何ものか起らんとする所を認むる事が出来なかつたものに相違ない。(ウヰンチエスター)

強き女

【Les Virges Fortes】 イブセンの如く婦人問題に對する新舊思想の衝突を最も力強く描いた人にマルセルプレゾオ Marcel Prevost といふ人がある。此の「強き女」は同氏の作で上下二巻になつて居る。最も傑作と云はれたもので、現代婦人問題に對する見解を最も大膽に表白してあるので有名である。

釣合

【Balance】 美學上形式法則の一つで、建

築・彫刻・繪畫のコムポジションをする最も重要な條件の一つである。左右を同様にすれば無論釣合は好みにきまつて居るが、それはシムメトリで、バランスは左右が不同の時によく釣合のためつを云ふのである。

ツルース

【Truth】 眞實、眞正、誠實、正直、眞理等と譯す。

ツワイライト

【Twilight】 うすあかり、黄昏タツ曙アケ薄光と譯す。

テ

ディオニス型

【Dionoische】 「悲劇の發生」を見よ。

低回趣味

ゆとりのある趣といふ意、即ち餘裕ある心持を以て人生に對せんとするをいふ。自然主義文學の盛なる頃、反動的に高濱虚子氏夏目漱石氏などによりて唱導せられたり。

定期刊行物

【Periodical publication】 一定の時期に出版刊行せらるゝ文書・圖畫などの稱。一に定時刊行物ともいふ。

低級藝術

趣味・理想の低き藝術をいふ。例へ

ば、女や子供に面白がるゝ事を旨としたる藝術の如し。【Popular Art】

定言

【Premise】 論理學上の語。命題が何等の條件もなき斷定なるにいふ。例へば、雪は白く鳥は黒しの如し。

帝國主義

【Imperialism】 機會の許す限り國力の許す限り、成るべく其國の領土を擴張し、若しくは其國の權力の範圍を擴張せんことを目的とする主義。

程子學

宋の儒者、程明道・程伊川二子の學說。人の性は天の理にして道心、仁又善なり、然るに氣あり才あり即ち人心ありて不善を生じ易し、故に敬以て其性を保ち義以て其行を理むべしとなす。後、朱子之を大成せり、或は併せて程朱學ともいふ。(朱子學參照)

定住

其の處に居住を定むるの義より、定まり住まる即ち變らぬ事の意に用ふ。

程未學

程子學、及び朱子學を見よ。

提唱

意義をときあかすこと。又、或主義・意見を唱へ出すこと。

定道論

【Determinism】 窮命論ともいふ。吾人の意思動作乃至運命等は神若しくは自然によりて豫め規定せられ、吾人は毫も自由を有せず

といふ説。又、吾人の意思作用は内外の事情の必然的結果なりといふ説。

程度問題 [Question of degree] 程度の如何が議論のもととなる問題。

低能 [Low ability] 能力が普通人より劣りてあること。

底度狂 テイブツメニヤ 色情狂、酒精狂などいふものは官能的生活が極度に達して或る程度を越へると生ずる病氣である。

ディメンション [Dimension] ユークリッドの幾何学上の三「ディメンション」の世界は便宜の爲めに我等の知覚が採入れた空間であつて必ずしも先天的論理から必然に來た世界ではない。數學者はユークリッドの定理の行はれない世界を想像しながら今日我等の住む空間とは或る程度まで異つた諸空間の可能を闡明することによつて常識の僻見を破つた。殊に之等の空間は距離の測定などに於てはユークリッド式空間と殆ど大差ないので我等の住む實在の空間が果してユークリッド式のそれか、それとも他の何れかの空間であるかを觀察に出つて決めるわけにゆかない。(中澤臨川)

は猛惡なる犯罪者の言葉に耳を傾けて之を傳へんとし狂氣に近き固定觀念が生み出す奇異なる幻想に耳傾けて之を表はさんとする所の藝術なり。一は總ての事を言ひ現はし極端にまで押し詰められたる言葉といふもの、最後の努力なり。ポードレル曰く『羅典終末期の言葉は近代の詩人に依つて理解せられ感ぜらるゝ情熱を最も能く托するに足る言語なりと思はる』(マクスノルドウ)

適者生存 [The Fittest survives] 生物が其生存する周囲の境遇に最も能く適當して、其生活に都合よきものは能く繁榮し、之に反して適當せざるものは終に絶滅に歸する現象をいふ。

デザイン [Design] 圖案、意匠、模様、設計、圖形等と譯す。

癡狂派 デカダン派のこと。 一般人の呼吸する空氣と藝術家のそれとを截然區別して「社會的感情の崩壊」乃至「非社會性への復歸」を主張してばかり居るもの。

デゼネレーション [Degeneration] 退化、退歩、墮落、廢頽、陸沈等と譯す。又、惡くなるの意に用ふ。

哲學 [Philosophy] 自然人生及び知識の實現

定理 [Theorem] 已に眞なりとして知られたる理論によりて、證明せられたる一定の理論。

ディレクタントイム [Dilettantism] 道樂的に藝術を好み愛すること。

ディレンマ [Dilemma] 兩刀論法と譯す、其項を見よ。

適應性 [Adaptability] 生物が其所在の周囲の境遇に應じて、生存に適應するやう變化する機能。

デカダン [Decadent] 此の語はゴージェー及びポードレルの詩風を評する爲め佛蘭西の批評家が廢頽期の羅馬帝國史より藉り來れるなり、ゴージェー曰く『デカダンの詩風は既に老衰しつつある現時の文明に依つて生み出されたる成熟の絶頂に到達する藝術を意味するに外ならず。知識に富み複雑にして博き知識を有し微細なる意義の差別に富み絶えず本來の意義を押し擴げ、あらゆるパレット (Palettes) より色を藉り來りあらゆる鍵盤より音を藉り來り最も消し難き所のものを思想に於て表はさんと努め最も漠然たる最も捉へ難き形を輪廓に於て表はさんとし精神病者の解し難き言葉に耳傾けて之を翻譯せんとし或は憤怒の人の言葉に耳傾けて之

並に理想に關する根本的原理を研究する學問、即ち宇宙全體を通じて其根本的原理を研究する學問をいふ。哲學は人生の凡べての方面の要求より出づれど、知的形式を取る點に於て想像又は信仰に立脚せる詩歌・宗教と異り、萬有全般を對象とする點に於て其一部を對象とする科學と異り、一方科學で結果を材料とし他方科學に基礎を學ぶ。萬有全般の攻究は、一、認識の形式二、實在の和質、三、行爲の問題に要約することを得。哲學の三部門、即ち認識論・形而上學・倫理學は、此の各に應ずるために分類せるものなり。

哲學獸 [Fete philosophique] 人間と云ふ意味——ちやうど獸が苦痛に堪へられなくなるを獨りで暗い穴にかくれてしまふやうに人間と云ふ Fete philosophique もまた寂しい暗い孤獨の境にかくれがを見出さうとするのである。

哲學的 [Philosophical] 根本的原理を追求するに用ふる。科學的といふ語に對して用ふる。

哲學堂 文學博士井上圓了が東京府下豊多摩郡野方字相田山に建てたる哲學的遊園地にて大正四年より公開す。なかに神秘洞、絶對城、唯物

園など哲學的名辭を因みてつけたる設備七十餘に及び後に東京近郊の名所となすを得べし。(朝鳥)

鐵器時代 [Iron age] 青銅器時代よりも人智更に進歩し、鐵を用ゐて諸種の器具・器械を製造する時代の稱。古代希臘の詩人ヘシオッド既に此語を用ふ。此名は主として古物遺蹟の分類に關して用ゐらるれども、嚴密にいへば、開明國現在の有様も斯く稱して可なるべし。

鐵血政略 [Blood and iron policy] 兵備を擴張し兵力によりて國權を伸縮せんとする政略又は主義をいふ。猶、前項參照。

デッサン [Dessin] 圖案、圖象、繪畫の寫形と譯す。善きデッサンとは寫形の實物に近きをいふ。又、畫稿をいふ。

哲人主義 我が國體の特徴は昔より哲人主義の精神の上に立つて來た所にあると信ずる。哲人主義の可能は必然に二つの要素の併立と協同とを假定する一つは少數の者は如何なる事業を計畫するにしても決して多數の者の希望を本位に置くことを忘れないといふことである。今一つは多數の者は少數の者の計畫する事業には時として彼等の智力では理解出來ないことがあつて

店せざれば休まざらんとする自然主義である。**哲理** [Philosophy] 哲學上の道理。又、玄妙なる理義。

デテイル [Detail] 細部、又は小部分。全體の意に對して云ふ。——ユウハマとした描寫——

ゴンクールの小説には無數の小事項が並べてあつて、しかも其小事項の何れもが平等の地位を占めて居る。そしてフロオベールの場合のやうに、其小事項を統一するものがない。アアサアシモンズ)又それに就いて英の文豪スチブソン Robert Louis Stevenson 曰く『作者は性格にまれ情熱にまれ先づ動機を選べ……説話の進行中不必要な問題外の細部描寫は決して會話の進行中にいはれてはならぬ。』

テノルドラム [Tenordrum] サイドドラムに似て稍や大なる洋樂器。響絃なし。

デメテル [Demeter] 希臘神話にいふ大地の精にして、其像は龍車に乗り麥穗の花冠を著け松明を携ふ。羅馬にてはセレスといふ。セウス神の姉にして稼穡の事を司る。其女ヘルセフォネが冥界の王プルトーに奪ひ去らるゝや、怒りて地上の草木に果實を生ぜしめず。後ヘルセフォネを取り還すことを得たりしが、既に冥界の

も常に少數の者の賢明に信頼して行くといふことである。政治も法律も宗教も道徳も科學も藝術も盡く凡俗の慾求を基礎として之れが統一と醇化となつとめる哲人の努力より出來ると見る之れ哲人主義の主張である。(田中王堂)

徹底 [Absurise] 底までつらぬきとほる、即ち十分に於て餘す所なく行く所まで行くの意。蘊奥に達すること。

徹底自然主義 [Ultra-naturalism] 獨逸に起りし自然主義文學の一派の稱。自然主義の客觀的描寫を飽く迄徹底せしめん爲め、一切の説明を避け外面に現はれしことのみを描くを旨とせるもの。

徹底的自然主義 [Konsequente Naturalismus] 獨逸に起れる自然主義にて一八八七年頃から抒情詩人ホルツ(Arno Holz)等が首唱してハウプトマンの劇『日の出前』に實行せられたと稱するも、獨逸の批評家バーテルス(A. Barthelemy)の言を假りて言へば此の主義はゾラ等の報告的自然主義 Reporter-Naturalismus に對して態覺界すなはち外物の印銘及びそれから生ずる情趣上の印銘を兩つながら併せて著音機的に再現せんとする印象派的自然主義である。内外徹

果物を食ひしより全く冥界と斷離すること能はず、一年の三分の一は冥界に止まれりと傳ふ。**デモクラティック** [Democratic] 民主的、民政主義、又は民主政體等と譯す。

テラ・コッタ [Terra-cotta] 燒きたる土の意。普通素燒サヤに彫刻裝飾せるをいふ。例へば陶製人形の如し。

デリカシー [Delicacy] 繊細、微妙又は敏感等と譯す。

デリケート [Delicate] 繊細なる、微妙なる、又は敏感なると譯す。

テルフニコ [Terpsichore] ミューズの女神の一にして歌舞を司る。其像は七絃琴を携ふ。

テレマコス [Telemachos] 希臘傳説に、其父ユリシス王漂遊二十年に及ぶも歸らざりしかば、之を尋ねて諸國を遍歴し、歸れば父既に故國に戻れり。乃ち助けて共に母ペネローペの許に至り、母を妻とし此國を横領せんとする者あるを退治し、後ユリシスの王位を紹ぐ。佛國の詩人フエネロン、其遍歴を題材とせる長詩の作あり。

田園詩 田園詩又は牧歌 Pastoral song といふ陶